聖書の人ルター

小池辰雄著作集

第七巻

⑦ルター
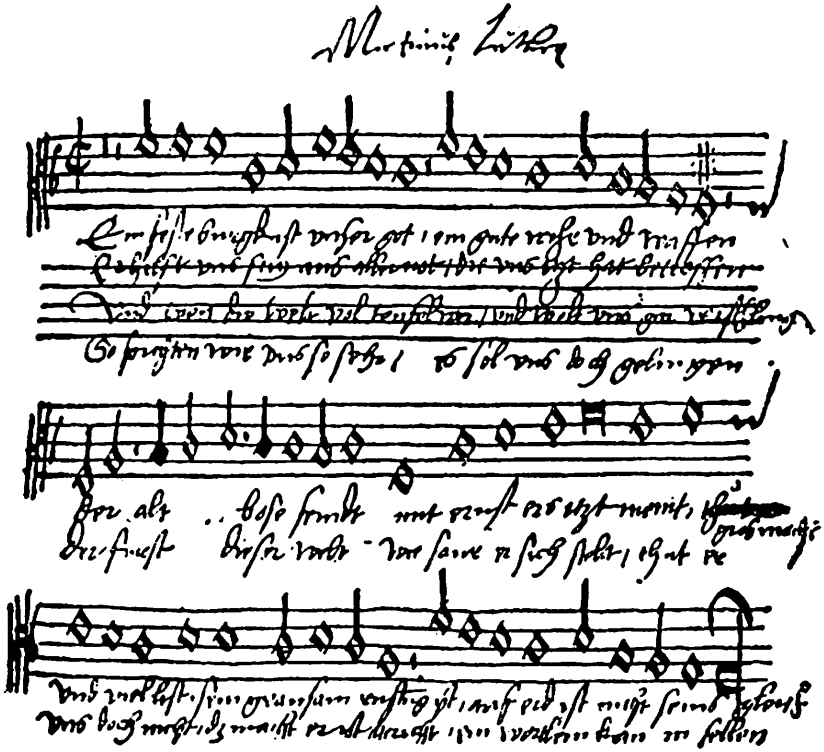
聖書の人ルター

小池辰雄著作集

第七巻

この『聖書の人ルター』を
旧制水戸高等学校時代に
その講演を以て著者に
ルターに対する関心を喚び起こして下さった
わが国ルター研究の権威
天界の佐藤繁彦先生に捧げる

ルター生誕五百年を記念して
一九八三年晩秋——小池辰雄



„Ein' feste Burg ist unser Gott"

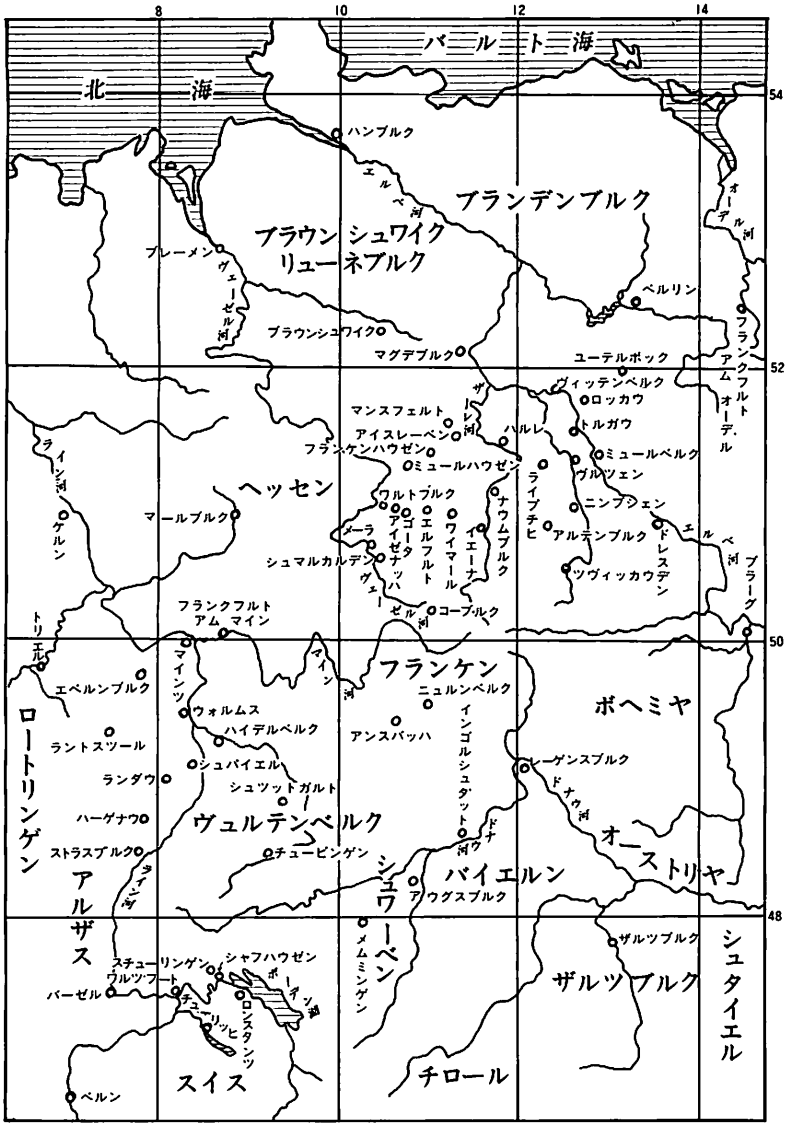
これはルターの最も有名な讃美歌：
「我らの神は堅き城なり」
„Ein' feste Burg ist unser Gott"
の楽譜と第1節及び第3節の原歌である。
第1節は第1，第2，第5，第7行。第3節は第3，第4，第6，第8行である。
現行ドイツ語讃美歌の綴りとは大分ちがう。
(本書「ルターの讃美歌」の項参照)



明日　この世界が没落すると知ったとしても、
今日のうちにリンゴの若木を　私は植えるよ。
ルター（私訳）



ラウテ琴を弾きながら自作の讃美歌を子供たちと歌うルター，左後はメランヒトン。


8
10
12
14
54
52
50
48
バルト三海
北海
ハンブルク
エルベ河
ブランデンブルク
オーデル河
ブラウンシュワイク
リューネブルク
ブレーメン
ヴェーゼル河
ベルリン
フランクフルト
アム オーデル
ブラウンシュワイク
マグデブルク
ユーテルボック
ヴィッテンベルク
ロッカウ
ザーレ河
マンスフェルト
ハレ
トルガウ
アイスレーベン
フランケンハウゼン
ミュールハウゼン
ミュールベルク
ヴルツェン
ライン河
ヘッセン
ヴルトブルク
ライプチヒ
ニンブシェン
マールブルク
ケルン
エルフルト
ワイマール
アルテンブルク
エルベ河
ドレスデン
ゴータ
アイゼナハ
シュマルカルデン
ヴェーゼル河
コーブルク
ツヴィッカウ
ブラーグ
フランクフルト
アム
マイン
トリエル
マインツ
フランケン
エベルンブルク
ニュルンベルク
ボヘミヤ
ウォルムス
インゴルシュタット
ハイデルベルク
アンスバッハ
ラントスツール
ローゲンスブルク
シュパイエル
ランダウ
ドナウ河
シュツットガルト
ハーゲナウ
ヴュルテンベルク
オーストリヤ
ストラスブルク
チュービンゲン
ドナウ河
ライン河
アルザス
シュワーベン
バイエルン
アウグスブルク
メムミンゲン
ザルツブルク
シュタイエル
スチューリンゲン
シャフハウゼン
ウルツフート
ボーデン湖
バーゼル
ロンスタンツ
ザルツブルク
チューリッヒ
スイス
チロール
ベルン

ルター関係図

まえがき

この第七巻『聖書の人ルター』は、今年（一九八三年）の十一月十日がマルティン・ルターの生誕五百年に当るので、それを記念して出版することにした。

ルターに対する関心は本書第三部の「ルターとゲーテ」に記したように、わが国のルター研究の創始者であり権威である今は天界の佐藤繁彦先生に由った。私の本当の領域は詩の世界にあるので、ルター研究を本格的にしたわけではない。ルターが聖書を何ものより愛した Sola scriptum「聖書のみ」のたましいであったことは、私が聖書を身読する一つのよすがとなった。

本書第一部「ルターの劇的生涯」の序説「宗教改革への道」はかつて河出書房出版、日本独文学会編の『ドイツ文学辞典』のため書いたもの。本文は『キリスト教常識』誌上（塚本虎二・斎藤茂編輯）に、この約三分の二ほどを連載したものが土台になっているが、文体や仮名遣いのみでなく、内容的にも訂正増補を自由に施した。史実の単なる客観的叙述ではなく、ルターのたま

しいを内観する気持と新しき宗教改革への念願をこめての筆である。

第二部「ルターの言」本項は四項目から成っている。第一項「ルターの讃美歌」は、もっと訳詩を載せたくもあったが、ここに選出した四つの讃美歌が代表的なもので、彼の信仰がハッキリひびき出ているから、これだけにとどめた。解説しておいたように彼の讃美歌は旧約聖書の詩篇を源泉としているのが多い。この「ルターの讃美歌」はかつて『活かすキリスト』誌上（今橋淳主筆）に載せたことがある。

第二項「詩篇序文」及び第三項「ロマ書序文」、この二つの序文の独乙語原文をテクストとして南江堂から『ロマ書序文』という書名で出版した。それにはルターの最も有名な讃美歌「我らの神は堅き城なり」の原詩もテクストとして所載してある。これらのテクストには詳しい註が附けてあるから、是非参考にしていただきたい（因みに南江堂の電話番号は〇三―八一一―七二三四）。

ルターは旧新約両聖書への総括的な二序文の他には主として預言書と新約の大半に序文を書いている。これらの中最も顕著なのが、ここに訳出した「詩篇序文」と「ロマ書序文」である。特に「ロマ書序文」におけるルター自身の施した「律法」、「罪」、「恩恵と賜物」、「信仰」、「義」、「肉と霊」等の聖書神学的解説は極めて重要なところであるから注目していただきたい。

第四項「ルターの卓上談話から」――神の言

これは彼の厖大な「卓上談話」の中の「神の言」について語っているものの中から撰出した。

これも紙面の関係があるので分量を制限した。ざっくばらんに語っている談話はルターの面目躍如たるもので面白い。本巻が『聖書の人ルター』であるので、特に「神の言」について語っているところだけにしたわけである。

第三部「論説三篇」

第一項「親鸞とルター」――『歎異鈔』と『キリスト者の自由』

信仰のたちから申して、親鸞の他力本願的信仰とルターのプロテスタント信仰は相似的である。そして両者の代表的珠玉篇が『歎異鈔』と『キリスト者の自由』であるのを思うとき、ある意味で仏教とキリスト教の東西の二珠玉篇と言うことができよう。

この論説は十年前（一九七三年）の晩秋に京大法学部奥田昌道教授主催の京都大学での講演会で語ったものである。これは京大法学部卒の土屋文昭君が激務の中、寸暇を惜しんで録音筆写をしたものを土台としてこの度私自身が添削整備したものである。

第二項「ルターとシラー」――自由をめぐりて

これは一九六六年秋、北海道大学で開催された日本独文学会でその概略を発表した原稿を基にして、一九六七年七月十五日発行の「独協大学ドイツ語研究」（紀要）第一号巻頭論文として載せられた全文である。但しその論文中のドイツ文はここでは和訳したり、和訳を附記したりして解り易くした。

ルターの宗教的自由とシラーの美学的乃至社会的自由の問題である。日本の歪んだ民主主義のため既にさまざまな教育上乃至社会的欠陥を招来している現状を思うとき、特に日本の若い人たちは古典をじっくり学ぶ必要があろう。

第三項「ルターとゲーテ」、これは本年（一九八三年）初夏、京都会館で語った講演の要旨である。

ルターの倫理的宗教的自由が霊感的必然であるように、ゲーテの神・自然との融合の境地は情感的必然である。ルターと親鸞が人間的な型としては意志的と情感とのちがいがあるように、ルターとゲーテも人間的な型としては三角形と円形の如くちがう。

しかし偉大なたましいは、あるやむにやまれぬ必然、自然、霊然で生きていた。そしてキリストは神然で永遠に生きて活かす実存、在りて在らしむる実存である。

一九八三年晩秋

キリストの無者　小池辰雄

目次

まえがき

第一部　ルターの劇的生涯　9

序説　宗教改革への道　11

一　ルターの幼少年時代　20

二　ルターの内的苦闘　27

三　聖書の人ルター　33

四　免罪符　39

五　ルターと免罪符　45
六　九十五箇条提題　51
七　九十五箇条の精神　58
八　破門への道　66
九　ライプツィヒ論戦　71
一〇　破門　77
一一　ヴォルムスへ　84
一二　ヴォルムス国会　91
一三　ワルトブルク城　97
一四　籠城のルター　105
一五　独乙人への聖書　113
一六　独乙語新約聖書　119
一七　城から町へ　126
一八　旅館の一室　133

一九　連続八日の伝道　139
二〇　改革と変動　155
二一　農民戦争　163
二二　ルターの結婚　172
二三　ルターの家庭生活　183
二四　ルターとエラスムス　196
二五　シュパイエル国会　202
二六　ルターとツヴィングリ　205
二七　コーブルク城・アウグスブルク国会　213
二八　シュマルカルデン同盟・ニュルンベルク和議　223
二九　ルターの晩年　226
三〇　ルターの凱旋死　233

第二部　ルターの言　239

一　ルターの讃美歌　241

二　詩篇序文　260
三　ロマ書序文　268
四　ルターの卓上談話から―「神の言」　293
第三部　論説三篇　313
一　親鸞とルター　315
『歎異鈔』と『キリスト者の自由』
二　ルターとシラー　375
自由をめぐりて
三　ルターとゲーテ　448

第一部　ルターの劇的生涯

序説　宗教改革への道

イスラエルの宗教が、その聖なる霊的生命を経とし、義と愛の倫理性を緯とする預言者的実存の宗教より、神殿中心の祭儀と誡律の祭司的律法の宗教に移行し、内的生命の硬化を来たし、ユダヤ教末期において「偽善なる学者・パリサイ人」（マタイ伝二三章参照）の宗教となったとき、大改革者イエスが現われて「旧約」の宗教をその根底からつかみ、おのが罪なき実存と、十字架による贖罪と、復活による永遠の生命の実証と、聖霊の降臨をもってする霊のバプテスマ（洗礼）をもって、「旧約」宗教の果し得ざりし一切を完全に成就し、内的には「神の国」を到来せしめ、かくて正に福音を体現して、さらに歴史の「終末」（マルコ伝一三章参照）に、キリストの再臨とともに到来すべき「新天新地」（イザヤ書三五章、六五章、黙示録二一章、二二章参照）の神の国への「新約」（新しき契約 Η ΚΑΙΝΗ ΔΙΑΘΗΚΗ ヘー・カイネー・ディアテーケー）の宗教を出現せしめ

た。これがキリスト教である。

使徒たちによって展開された原始キリスト教――その書き遺したものが編まれて新約聖書となった――における霊的生命とその信仰的実存は、あくまでも霊的な、しかも一たび地上にイエスとして受肉したキリストへの、個人の魂の直結的な在り方と霊的な愛による実存共同体たる教会（エクレシア ecclesia「召されたる者の団体」の意）においてあった。「ペテロの座」を伝承すると称する（その根拠をマタイ伝一六・一八に置く）教皇（または「法皇」Papa）に大なる権能をゆるす――その極盛時代はインノケンティウス三世（Innocentius III., 1198―1216）、「教皇不可謬」の教義を決議したのがヴァチカン会議（一八六九―一八七〇）――ローマ・カトリック（〈καθολικός＝allgemein〉「公同」教会の如き制度化された宗教組織体となり、千数百年の歴史を経るにつれて、ユダヤ教末期の場合と同じく、中世末期の宗教的中枢部は硬化と俗化を招来し、教皇庁は往昔のイエルサレム神殿の如く「両替屋と鳩を売る者」（マタイ二一、マルコ一一、ルカ一九章参照）の市場、体のよき「強盗の巣」（同上）と化しつつあった。

そのような中世の教権宗教の硬化・俗化ならびにその封建性に対する浄化作用、生命力の注入、解放運動などの胎動的現象が教会の内部および外界において見られはじめ、やがてそれが近世への突破展開となった。

「パンの代りに石を、魚の代りに蛇を与える」（マタイ七・九）教会に民衆はいつまでも屈服して

はいない。真理はかえって「異端」と呼ばれる人々に存し、一方また教会内にも敬虔な流れは存し、ついに「時満ちて」大いなる宗教改革へと展開した。かかる先駆者たちの産みの苦しみを忘れて改革者のみを見るならば、宗教改革史の生命を観念化することになろう。すなわち改革前史のある面を簡単に一瞥しなければならないゆえんである。

ローマ帝国末葉に南欧に拡がっていたマニ教（Manichäismus）は一旦衰退ののち、十一世紀にカタリ派（Katharer＝die Reinen）、厳格な禁慾主義の「清浄者」において再燃し、イタリアにおいてはガッツァーリ（Gazzari＝Ketzer）と呼ばれ、フランスにおいてはアルビジョア派（Albigenser）と称せられ十三世紀にはローマ教会もこれを無視し得ない勢力となった。教会の不当の富と権勢に対する実践的批判の現われであった。これと並行的に十二世紀にカトリック教会内より起った反教会派の一つにヴァルデンス派（Waldenser）がある。創始者ヴァルドゥス（Waldun, Valdez, Valdo）はリヨン（Lyon）の富裕な商人であったが、禁欲的な素人伝道者（Laienprediger）の団体を組織し、キリストと使徒に倣って貧困と旅説教（Wanderprediget）を生活とした。聖職僧（Klerus）階級との紛争は結局ヴァルデンス派の除名をもって終った（一一八四年）。しかし彼らはカタリ派に倣って「隠れたる教団」（Geheimkirche）としておのが道をたどり、南フランス、北イタリア、ドイツ、ベーメン、ハンガリア、ポーランドにまで拡がったが、十三世紀に宗教裁判（Inquisition）のため大多数迫害を蒙った。しかしなお残党はベーメンの

フス派（Hussiten）と融合した。ヴァルデンス派はこんにちもなお欧米に命脈を保っている。彼らには原始キリスト教的な愛の交りが生きているからである。宗教改革に彼らはプロテスタント（Protestanten）に左袒して勇敢に迫害に抗した。

ローマ教会はむしろこれらの異端的運動に刺戟されて敬虔と禁欲の実践に意をもちいるにいたった。十三世紀の有名な「乞食僧団」（Bettelorden, Ordines mendicantes）がそれである。すなわち「フランチェスコ教団」（Franziskanerorden）または「小兄弟団」（Minoritenorden, Ordo fratrum minorum）と「ドミニコ教団」（Dominikanerorden）又は「説教者兄弟団」（Predigerorden, Ordo fratrum praedictorum）といわれる二教団である。前者はイタリアのアッシジのフランチェスコ（Francesco, Franz von Assisi, 1182—1226）のまったく個人的な「キリストの模倣」の実践に感化されておのずから生じた団体である。後者はスペインのカロラガの名門の出ドミニコ（Domingo, Dominikus）の創設にかかる。アルビジョア派などの異端の教化を実行した。両団は相互に連絡はなかったが、共に「兄弟団」のほかに「姉妹団」もあった。さらに「第三兄弟団」が形成されたがこれは、一般市民としての世俗的生活を真面目に営みつつ修道士的敬虔に生きんとする市民の団体で、フランチェスコの人格と生活と説教の影響力は教会教派を超越した本格的永遠的なもので、この「第三兄弟団」のごときは本質的に、宗教改革が実現せんとした内容と相通ずるものであった。

ドミニコ教団より出た天才にマイスター・エックハルトがある。「無」とか「否定」の場における神と霊魂の合一の境地を求めた。ヨーハン・タウラーは彼の高弟で師よりも汎神論的傾向少なく、異端視されず、ルターへの影響大きく「宗教改革前の改革者」とさえ称せられている。民衆説教者として極めて優れていた。同じ道を往く者にハインリヒ・ゾイゼがある。彼ははじめ難行道を行じたが悟るところあって愛の実践に移った。これらの神秘家(Mystiker)の影響を受けて「神の友」(Gottesfreunde ヨハネ一五・一四、一五)という僧俗男女の敬虔な群が出来た。この群に属する無名者の筆に成る名著「ドイツ神学」(*Germania Theologicae* 一名 *Frankfurter*, 十四世紀)はルターに極めて重要な影響を与えた特筆すべき書である。非常に福音的な、しかも神秘的内面性豊かな書である。

これに応じて更に北方オランダの神秘家にロイスブルック(Johannes von Ruysbroek, 1293—1331)があり、同じくライン河下流地方に出た神秘家トーアス・フォン・ケンペン(ア・ケンピス)がある。彼の「キリストのまねび」(*Die Nachfolge Christi, De imitatio Christi*)は中世屈指のキリスト教の名作である。このような秀れた神秘家たちは、福音の内面性の擁護者として、宗教改革への隠れたる担当者、保持者と見なされるべきである。

一方マルシリウス(Marsilius von Padua, ? 1290—1342)はその著「平和の擁護者」(*Defensor pacis*, 1324)において、国家社会の権威の根底は民衆にあり、国家においては市民に立法権あり、

教会においては平信徒に僧職叙任の権あり、さればまた宗教会議にこそ教会の至上権ありとなし、民主主義的な意見を表明して教会および国家の諸機能における民権擁護の烽火をあげた。

さて十四世紀のイギリスに「宗教改革の暁星」が現われた。ジョン・ウィクリフ（John Wiclif, 1324—1384）がその人である。彼は一三七六年に論文「民事支配権について」（*On civil Lordship*）を書いて、教会の不当の富と教皇の権勢に対する反対の狼煙はここにもあがった。ひきつづき彼は聖書に根拠をおいて教会制や教理に対して鋭き批判をなし、ラテン語訳聖書「ヴルガタ」（*Vulgata*＝広く流布したテキストの意）から雄渾にして光彩ある英訳を試みた。ルターの独訳聖書に先鞭をつけたものといい得る。一方また使徒的伝道の実践として「貧僧」の派遣を行った。オクスフォード大学におけるウィクリフの熱烈なる講義は留学生に多大の影響をおよぼし、その一つの火はプラーク大学に燃え移り、そこに現われたのがベーメンのヨハネス・フスで、聖書に権威を置いた彼の熱烈なる説教は多くの民衆の心をとらえた。彼は実に勇敢に教会改革運動と愛国的民族運動の指導者として活躍した。一四一三年に「教会論」（*De Ecclesia*）を著わし、教皇権、枢機官の非を原始キリスト教にもとづいて論じ、免罪符を批判するなど、ルターに先だつこと有に一世紀、すでにローマ・カトリックの存在を揺がす論説を吐いたので、一四一五年コンスタンツの宗教会議ののち、直ちに投獄された。断乎として福音の真理と信ずるところを枉げなかったので、同年七月六日焚刑に処せられた。

以上のごとき先駆者の内的展開、外的活躍にもかかわらず、時未だ満たずして悲劇の数々があったが、しかしそれはやがて爆発すべき大改革の前兆であり、犠牲的準備であった。

さて古典ギリシャ・ローマのルネサンスの華がイタリアに咲き、キリスト教との融合調和の相においてアルプスの南では展開した。この人文主義的精神、人間を自律的に肯定する精神はゲルマンの世界においては、教養ある階級によく滲透したが、人間実存の真の回復・展開には、人文主義の直接肯定をゆるさぬ消息があることをルターは気づきはじめた。北方の人文主義者にヨハネス・ロイヒリーンとエラスムスの二雄が現われた。前者は特にギリシャおよびヘブライの古典に精しく、後者は特にギリシャおよびラテンの古典に通じ、前者はすなわちヘブライ語旧約聖書原典の語学的研究に、後者はギリシャ語新約聖書の出版まで企て、両者ともやがてルターの聖書翻訳に重要な下準備をしてくれたわけであった。

以上のごとく教会の内外における革新的動向と人間性の回復の機運に加えて、コロンブス（一四四六―一五〇六）のアメリカ大陸の発見や、やがてコペルニクス（一四七三―一五四三）の地動説が生れ来たるごとき機運を孕んでいる科学的展開、さらには政治的封建制からの解放、宗教的教権制からの地方教会（Landeskirche）の独立、自主的な在り方への動向など、いよいよ新しき近代世界への発展の期は満ちた。

かかる時代の状勢下にあって、時代の回転のため唯一つのものが欠けていた。それはやはり、

一個人の魂の世界においての断然たる変革という導火線の必要であった。一修道僧マルティン・ルターが、全く個人の魂のなやみから発して原始福音の事態を新たに把握したことが、時代を動かす原動力となり、ローマ・カトリック教皇庁の指令による免罪符販売が論戦への導火線となってルターみずからの期せざりし宗教改革という炬火が世界に拡がることとなった。

ルネサンスも人文主義的人間性の肯定も、学問の進展も、科学的実験の発展も、政治的・民族的自覚も、経済機構の市民的伸張も、もろもろの文化現象が、その生命的有機的中枢とすべきものは何か。個人の魂。その個人の魂は、原始キリスト教――聖書――が示す福音の場においてこそ生きかつ自由であるゆえんが明らかにされた。ここに近代社会を展開し得る源泉を見た。ここに宗教改革時代のプロテスタント――新教徒――の世界史的役割があった。

宗教改革は決して単なる宗教改革ではなく、個人・社会・国家・世界の在り方の近代的展開に不可欠の原動力を与える事態であった。ルターに応じてツヴィングリおよびカルヴァン（Jean Calvin, 1509―1564）がスイスに改革者として起った。ルター派は主としてドイツ中部以北、北欧に向って拡まり、カルヴァン派は主としてイギリスおよびアメリカ大陸に向って大きな展開をなした。組織神学者としてのカルヴァンの主著「キリスト教綱要」（*Institutio christianae religionis*）は、カトリック神学の巨頭トマス・アクィナス（Thomas Aquinas）の「神学大全」（*Summa theologiae*）以来の大著であり、その後のプロテスタント神学の基礎石のごときものである。し

かしルターの「ロマ書」（*Römervorlesung*）が中世より近世への精神史における文字通り画期的な大文字であることを人は忘れてはならない。

ウィクリフおよびフス両革命児の殉教的先駆者のあとを受けて、原始キリスト教の使徒的把握を新たになすことによって、真に歴史の進展を期せずして企て得たことは、「福音の力」がこれをなしたので、ルターもカルヴァンも「神の業」にこれを帰した。

一　ルターの幼少年時代

アイスレーベン

ドイツが生んだ偉大な人物の中で第一に指を屈しなければならないのはルター（Luther）である。この人は永遠にドイツ精神の根幹であると思う。不朽の教理史を書いたハルナック（Harnack）は言う、「第十六世紀の宗教改革がドイツを救ったように、宗教的改革は常にドイツの最も強い本来の力であり、絶えず力を及ぼす原理であり、最高の目的である」と。

ルターは近世への曙を告げる鳥の声がドイツの森の此処彼処の梢に聞こえ初めた第十五世紀の末葉、ドイツ中部の一寒村アイスレーベン（Eisleben）に素朴な鉱夫の子として生れた。時に一四八三年十一月十日であった。その日の守護聖者の名に因んでマルティン（Martin）と名づけられた。その頃の父の姓はルダー（Luder）と呼ばれていたが、父の名はハンス（Hans）で、彼は

元来農夫で、アイゼナハ（Eisenach）の近くにあるメーラ（Möhra）の出身で、ルターが卓上談話で「私の祖父も、父も善良な農夫であった」といっているように、元来農夫であったが、アイスレーベンに移住して、そこの銅山の採掘に従事する鉱夫となったのであった。

さてドイツ（deutsch）とはもと「民衆的」の意で、ドイツ民衆の根幹は農夫であって、かかる農民から福音の撰びの器ルターが出たことは偶然ではない。

マンスフェルト

父ハンスはルター誕生後一年にして更に鉱山業の中心地たるマンスフェルト（Mansfeld）に移転した。これは生活上の問題の為であった。父の気質は剛健で実務的で勤勉な人であった。母はルターの親友メランヒトン（Melanchton）が証言している如く、「婦徳の典型」の如き婦人で、神秘的な宗教性と詩人的な情熱をもっていた。讃美歌を唱い、聖句を心に留めている祈りの深い婦人であった。ルターには父と母の両面が充分遺伝しているが、わけても母親の資質が決定的な要素となっていた。

偉人の母は殆ど例外なく優れた素質をもった女性であったことは、歴史の証明するところである。ルターの揺籃時代の身辺には、勤勉な父の勤労と、讃美歌が子守歌であった母の愛とが祈りとなって漂い、彼を護り育んだのであった。両親の勤勉と敬虔とは彼のからだの中に先天的にも

後天的にも伝わり彼の魂をつくった。これを思うと、躾けとか教育とかいうものは勿論大切なことではあるが、第一義的なものは両親の素質と生活態度、実存そのものである。

ルターはマンスフェルトで、このような両親の膝下で幼少年時代を暮した。父は、真の神奉仕は平民生活の中にあるとなし、僧侶を「虚心と偽善の塊」として嫌った。厳かな神を拝し、真実を愛した両親の教育は厳格であったので、少年ルターには、神は義の神として畏れられていた。そればかりではない、キリストも、悪いことをしたら罰するキリストとして畏れられていた。そして当時の一般の信仰というものが、善行と表裏一体のもので、信仰そのものよりも善行如何が問題で、神、キリストの審判を招来するものとして、「善き行為なき信仰は空しい」というヤコブ的角度が、信仰の判断の規準であったといって可かろう。

マグデブルク

満十三歳にしてルターは父母の膝下を離れて北上、遍歴書生としてマグデブルク（Magdeburg）のラテン語学校に入る。学ぶこと僅か一年であったが、此処で見た二つのものが彼の魂に問題を投じた。その一つは、ある若き王族が、おのが魂の救いのために、すべてを棄てて乞食僧となって難行苦行している姿。その二つは、礼拝堂に掲げてあった絵画であるが、そこには天国を指して進み往く船が描かれ、舳に教皇とカーヂナル（枢機卿）とビショップ（司教）、舷に櫂を

握る司祭、舵を執る僧侶が乗っているだけで、平民どもはみな水中を泳いでおり、中には溺れかかって憐みの網にとりすがっている者もある。そして聖霊は教皇の頭上に徘徊している。これらの二つが投じた問題は、少年ルターには未だ信仰問題とならなかったであろうが、宗教的内面的世界へ魂を引き入れるある力として彼に作用したと思われる。彼が後に修道院に入ったことに対する或る無意識的な誘導力の一部がこの二つの経験の中にあったと思う。

アイゼナハ

年は明けて一四九八年、彼は南下して母の故里であるアイゼナハ（Eisenach）の聖ゲオルク（St. Georg）高等学校に入った。この町は山間の谷あいに在る美しい森の町で、ワルトブルク城（Wartburg）を望み見ることができた。後日このワルトブルグ城が彼の歴史的な城になろうとは少年ルターの夢想だもなし得ぬことであった。

ルターは彼自身も言う如く、街から街を歌い歩きながら学資の一部を稼ぐ「貧乏書生」であった。時にはソーセージを食べさせてくれるおばさんもあったという。その歌声に心を止め、ルターを引き入れてくれた教養あるコッタ夫人（Cotta）の家庭の一員となって、その美しい愛に浴したことは、今まで厳格に過ぎた家庭と学校教育とに対してコントラストをなしていたので、後日彼の信仰問題解決への或る一つの伏線をなしたものと思われる。彼は幼い時、隣家の胡桃の果

を一つ取ったというだけで、血が滲むほど叩かれたことがあった。またラテン語学校で、ラテン語の語尾変化をまちがえたというので、鞭でしたたか打たれたということもあった。

この町の聖ゲオルクの会堂の祭壇の聖女エリザベト（Elisabeth）の画像が、彼女の宗教的善行物語と共に、多感にして冥想的なルターの心を深く捉えたことも、彼の魂をしていよいよ内面的問題に向わしめた一つの拍車であったと思われる。

エルフルト

一五〇一年夏、十八歳のルターは、当時中欧第一と謳われていたエルフルト大学（Erfurt）に入学した。ルターの父は彼を立派な法律家にさせたく今日まで苦闘して来たのであるから、非常な歓びと希望を以て彼の大学生活を支援した。彼は善く祈り、善く学び、善く考えた。「真理を学ぶ法律家を私に見せて貰いたい。法律家は皆、名誉や財産のために研究しているではないか」ルターのこの言は、およそ学問の態度への警告としてつねに新たに顧らるべきものである。

修道院入り

一五〇五年、彼は学士の資格を得、さていよいよ法律の専門研究へ進む期となり、父の多年の嘱望がその果を結ぶ時も近き将来のこととなった。ところがその年の初夏、七月二日のことであ

る。ルターはマンスフェルトの両親をたづねての帰るさに、エルフルトに程遠からぬシュトッテルンハイム（Stottelnheim）という村の辺で、烈しい雷雨に襲われた。それは彼にとって詩篇第二十九に詠われている如き威力として感じられた。そのうち突如彼の数米の地点に落雷した。彼は二、三米爆風にすっとばされた。彼は怖ろしさのあまり、「聖アンナよ、助けて下さい。私は修道僧になります！」と誓った。聖アンナ（Anna）とは、彼の少年時代からその幼な心に植えつけられていた鉱夫仲間の守護聖女のことである。輝しき出世の道を棄てて、誰よりも父の期待を裏切って彼は修道院入りを決意した。しかし彼はそれを何びとにも語らず、七月十六日の晩、知友男女と音楽の夕を催した。彼は誰よりも快活に且つ歌い且つ琵琶を奏でた。そして会の終りに当って、実は自分は明朝修道院入りをするので、君たちと「再会を期して」アウフ・ヴィダー・ゼーエン（ドイツ語の「サヨナラ」）というわけにゆかない、長期のお別れというわけでこの会を催したのだといって一同を驚きと悲しみに包んだ。

その翌朝七月十七日、――一五〇五年――、数名の親友に見送られつつ、彼はアウグスティヌス派（Augustiner-Kloster）の「黒い修道院」の門の中に姿を消した。時に二一歳の青年であった。後年彼は父に告白して言った、「天の恐喝〔雷鳴電光〕によって私は召されたのです。自由意思から、内的欲求から修道僧になったのではありません。況んや腹〔安易な生活〕のためではありません。私は恐怖に陥り、突然の死を憂いて、強制的な、危急に余儀なくされた誓約をして

しまったのです」。父への弁解はそうであっても、しかしこの突然の誓いが、深い内的必然――即ち彼が今までの生活と勉学において祈り、且つ考えた魂の問題と真理の探求、スコラ哲学や古典の読書において彼が問題として来たものの重圧――に駆られた踏み切りであったことは、ルター自身の意識を越えた真相であると思う。誓いそのものは、ある意味では父の憂いた「悪魔の誑(たぶら)かし」によったのでもあろうが、雷雨とこの誓約とその履行の奥には、神の摂理がいみじくも働いている。

二　ルターの内的苦闘

見習僧

「わが子よ、汝は何を求めるか」、修道院院長は新参の魂に対してこう訊ねた。すると言下にルターは応えて言った、「私は神のあわれみと貴下の友情を求めます」と。それは正直な告白であった。彼の魂は孤独だったのである。もし神に見棄てられ、修道院に見離されたなら、彼は何処へ往って慰めを得よう。父母の恩愛に眼を閉じ、師友の嘱望に背を向けた彼である。

見習僧としての生活が始まった。厳格な規約、煩瑣な戒律、粛然たる儀式、それらに対して彼は一挙手一投足もおろそかにすまじく、一語一笑をも気ままに発すまじく、服従した。彼は祈禱も聖歌も、断食もミサも善く実践した。しかもこれら一切を内的に良心的に満たさんと努力した。それは何故であるか。神に対して義しく在らんがためであった。彼にとっての最大問題は、

彼が如何にして神の前に義しくあり得るかであったから、彼は一日一日を全く真剣勝負で暮した。彼にとって律法遵守の問題は、対人的な道徳問題ではなく、神に対する信仰問題であった。そこに彼の魂の態度の正しさがある。禍なる哉、現代青年の魂に何のなやみがあり、不満があっても、唯だこの厳粛な苦しみがない。相手は人ではない。神である。

「義」の苦闘

彼は神を相手にして良心のどん底で苦しんだ。神の前に律法を心から実践すると告白することは出来なかった。律法に逆らうものがわが裏にある。彼は苦しい。どうしたら神の前に義しい人になれるのか。彼はもだえた。これは正にパウロがローマ書第七章で訴えている苦しみと同質のものであった。彼はあるとき三日三晩飲まず、食わず、祈りまたおのれを鞭打った。彼はついに僧房に悶倒した。噫、ルター。汝の苦しみを想うて私の筆は折れようとする。神もキリストも彼にとっては義を以て審く者として現われ、彼は地獄の苦しみに落ちたのである。

彼は後日告白して言った、「私は一人の人を識っている。その人はしばしば、全く短時間のことではあるが、如何なる舌も語り得ず、如何なる筆も描き得ず、何人も自己の経験なしには信じ得ないほどの大いなる、また地獄的な苦痛を味わった人である。従って、その苦痛が半時間でも、否僅か数分間でも続いたならば、彼は全く失われ、彼のすべての骨は灰とならねばならなか

ったであろう」。

ルターの真剣な生活振りは、模範僧の名を得るに充分であった。しかしそんなことは、彼にとって何であるか。「もしも修道僧が、その修道院生活で天国を獲得し得るとすれば、自分は天国へ入っていたはずだ」と彼は後日語っている。善行も苦行も、戒律への絶対服従も、彼の良心を苦しめるのみであった。彼を救うはずであった修道院的敬虔は却て彼を苦しめるのであった。

ラテン語の聖書

このような苦しみの日に、彼は院内の図書室で鎖に繋がれている赤革の大きな本にぶつかった。ラテン語の聖書ヴルガータ（Vulgata）であった。最初に開いた箇所は旧約のサムエル前書で、幼きサムエルが母ハンナの許を離れて祭司エリに事える物語のくだりであった。思わず彼は母マルガレーテが少年の自分をマグデブルクに旅立たせた昔を偲んだ。それが母のかくれた祈りであったのだろう。彼は聖書を熱心に読み始めた。しかし聖書が語る神の義とその審判の前に自分をどうすることも出来ない。

ある時、この哀れなルターを一人の老僧が訪ねて言った、「君はダビデやペテロの、またあの十字架上の盗賊などの罪の赦しを信ずるだろう。だが君自身に対する罪の赦しを君は信じていないではないか。聖ベルナルドの言うように、聖書は『汝の罪、汝に赦さる』と君自身の魂にむか

って告げているのだ！」ルターは一時慰めを得た。しかし彼は再び自分の姿を神の義の鏡に写して失望した。

シュタウピッツ（Staupitz）

その後ある時、教団管区副長シュタウピッツがこのエルフルトの修道院を訪れた。彼は蒼白痩軀の若僧ルターを見た。その心の苦悩をつぶさに聴いた揚句、彼は慰めて言った、「イエスの傷を見給え、君のために流された血潮を見給え。あそこに神の憐みが見えるではないか。贖主の腕に君自身を投げかけ給え。彼の美しい生涯とその犠牲の死とに信頼するがいい。彼が先ず君を愛したのだ。だから君も彼を愛するがいい。そして君の難行苦行をすっかり棄ててしまい給え。……キリストは威嚇する人ではなく、慰めて下さる人なのだ。」これはルターにとって闇夜の光となった。彼は聖書を研究しつづけた。シュタウピッツの勧告に基づいて、アウグスティヌスと特にパウロの書簡の精読に力を注いだ。そしてキリストが何であるかを明らかにしようと求めた。審判の義ではなく、福音の義が彼の心を完全に占領するまでには、なお三年の月日を要したが、彼はロマ書の「神の義はその福音の中に現われたり」（ロマ書一・一七）に光を見たとき、魂のよみがえるのを感じた。「ロマ書は私にとってパラダイスの門となった」と後日彼は述懐している。

恩寵の義

義を追い求めた永い苦闘！　彼はその後、人間の側に義がないばかりか、人間が神を真に求め得ないこと、人間が神を慕うときも、そこに自己を追求しているという深い体験をした。かかる我執的な、自己追求的な、自我意志、自己感情に彼は原罪的な罪の本質を見た。彼の罪意識はアウグスティヌスを越えてパウロに迫った。彼は義に絶望した。自己を嫌悪した。おのれ自身を律法の敵とみた。そういう闇のただ中に劃然として臨んで来た光は、キリストの義を与えんとし給う神の恩寵で、その実態は、キリストの十字架！　十字架は贖罪の義であり、贖罪の愛であった。ロマ書三章のパウロの「神の義」が読めて来た。神の義がキリストに現われ、自らを与える義であることを知った。これを受け、これに信頼しないで、自己を何ものかと考えようとすること、自ら義を行ぜんとすることが恐るべき傲慢であり、大なる誤謬であることを知った。彼は「律法によって律法に死にたり」というパウロと同じ体験に達した。修道院的謙遜が謙遜ではなく、キリストの義を衣て生きる福音的信頼に本当の生活があることを知った。「愛する父よ、あなたは遂に正しかったのです」。ルターは後日、正直に頭をさげた。修道院に福音がなかったことにおいて父は正しかったけれども、福音を発見するためには修道院を突破しなければならなかったルター自身の路は決して間違っていなかった。天的必然、深い摂理がはたらいていたのであ

る。ルターは本当の親孝行者であったことを実証したのである。福音は相対的他者との決裂を通して相対的他者を救いあげる力をもっている。その他者が、親であろうと、兄弟姉妹であろうと、師友であろうと。全世界とも替えられない「福音の義」をルターはついに握んだ。これがルターの内的な大ドラマであった。そこに宗教改革への火が点火されたわけである。

三　聖書の人ルター

福音の根本命題

エルフルトの修道院における内的苦闘中、ルターが最も親んだのはラテン語の聖書ヴルガータであった。聖霊の燈火を油するに祈りを以てしつつ、研究と体験の両眼を以て聖書をよく神学した。彼においては神学は信仰から遊離した智的なものではあり得なかった。研究も体験も彼にとっては真理を生きんとすることの外何ものでもなかった。律法と福音、審判と恩恵、恩恵と信仰、信仰と行為、義人と罪びと、罪の赦しと悔改め、それらの問題が深い解決を得るまでには、なお歳月を要したけれども、神の義が福音において顕われたという根本命題に彼が気がついたことはエルフルトにおける最重要事であった。

ヴィッテンベルク（Wittenberg）大学

ザクセン（Sachsen）の選帝侯フリードリヒ（Friedrich）が自領内たるヴィッテンベルクに大学を創設したのは一五〇二年であったが、修道院内で深い宗教体験と充分な学識をかち得たルターは大学教授たる実力を具有していたので、シュタウピッツの推薦により、ヴィッテンベルク大学の哲学教授として赴任することになった。時に一五〇八年十一月であった。一五〇九年の春からは神学の講座も担当することになった。これこそ彼の面目の現わるべき壇上であった。

ローマへの旅

一五一一年の秋、ルターはローマに使した。彼は北イタリヤの自然を歎称した。ローマを遙かにうちながめたとき、彼は「大地に跪き」、双手を挙げて「おお、汝聖なるローマよ！」と叫んだ。そのように彼は忠実なローマン・カトリック修道僧の心をもっていた。このローマ滞留中の一挿話によれば、彼がスカラ・サンタの二十八階段を膝行して登りつつあったとき、突如として預言者ハバククの言を引用したパウロのローマ書の言「義人は信仰によって生くべし」が彼の心身に鳴り響いたので、つと立ちあがって段を降りてしまったという。事実の真偽はともかく、彼が現実のローマの宗教界を見て全く幻滅の経験を嘗めさせられ、「世の中にもし地獄があるなら、

ローマはその上に建っている」というイタリヤの俚諺を認めざるを得なかったことから推しても、この挿話は彼のローマに対する真理の戦の内的閃光の反映と見ることができよう。

塔の体験

「義人は信仰に由りて生くべし」(„Der Gerechte wird seines Glaubens leben.“)、即ち神の義がキリスト・イエスに体現された、そのキリストの義を――即ち神意体現の事態――を罪の身このまま、贖罪の十字架において信受することに由って生きるのである。我らの罪を贖ったという贖罪義・即贖罪愛を罪の身このまま絶対恩恵として体受すること――信受することが信仰で、そのような信仰者が義人であるということである。このような福音の根本義を深く体験し把握したのがいわゆる「塔の体験」(Turmerlebnis)で、これは一五一二年前後のこと、ヴィッテンベルクのアウグスティヌス派の修道院の塔の一室における彼の研究と思索と祈りの中における極めて重大な事件であった。

ルターと聖書

一五一二年の秋、ルターは神学の正教授に任ぜられた。その祝いが催されたとき、彼は短い演説をなして、「私は福音の真理を堅く擁護せんことを誓う」と宣言した。預言者的洞察と使徒的

信仰が彼の実存の二つの焦点となって来た。カルル・ホルが彼の信仰を「良心宗教」(Gewissens-religion)と呼んだように、ドイツ的内面性の最も健全なものをルターは具有していた。その精神は哲学的にはカントの実践理性の面によく継がれている。預言と福音の二焦点がキリストの中に一つとなっていることをルターはよく洞察した。そこに聖書の中心を見ることいよいよ深きを加えて来た。全聖書がキリストを語るばかりでなく、キリストが主体であることをルターほど内的に把握した者は教会史上にないであろう。これは全く使徒パウロの線である。ルターにとっては、聖書は宗教史的な文献学的な研究の対象ではなく、「啓示」の書であり、「現実」の書であった。

神は聖書を通して、律法と歴史と預言と福音とを語り給う。われは信仰を以てこれを聴き、神学的にこれを考え、体験をもってそこに生きるという根源的態度が彼の聖書の読み方であった。

聖書の講義

彼の聖書講義が本格的に始まった。最初の講義には彼自ら「小聖書」と呼んだ詩篇が撰ばれた。ルターほど詩篇を自分の祈りとした人間は稀れであろう。詩篇の次には彼の信仰の土台を築いてくれたローマ書が取りあげられた。第三にはガラテヤ書が講ぜられた。ルターの聖書講義は学生の魂を揺り動かした。

聖書の言はルターの口を通してその本来の響きを回復するようであった。特にパウロ的福音の真理が千余年の暗雲を破って輝き始めた。

ルターと神学

ルターは神学を以て聖書の真理内容に肉迫してゆく死ぬか生きるかの学問と考えた。「神学は胡桃の核、小麦の心、骨の髄を究明する学問である」とも言った。本質的なもの、原理的なもの、根源的なものを追求してやまぬドイツ魂はルターにおいて遺憾なく発揮された。

ルターの説教

彼はまたヴィッテンベルクの教会では町の大衆を相手に、深い真理を平易に語った。その方法は全くイエスに学んだ。彼は民間の物語や俚諺などを自由に応用した。親しみのあるしかも力強い母国語を自由に駆使した。今まで坊主くさい宗教の書であった聖書は、ルターによって民衆の親しみ得る書、炉辺で読まるべき家庭の書となって来た。しかしドイツ語の聖書は？　民衆のためのドイツ語の聖書が新しく生れねばならぬことは必然の要求となって来た。ルターこそこの要求に応え得る唯一の人であった。しかしそれはどのようにして果されるのか。その日まで彼はなお多くの思いがけぬ戦と苦難を経ねばならなかった。しかしそれらの道を通って聖書の翻訳を神

から命ぜられるまでのすべてに於て一貫していたものは何であったか。それは彼が全生活をただ聖書一点張りで突き進んだという一事である。

聖書の真理に反する世の濁流が彼にぶつかって来たときにそこに大きな水沫が飛び散り、大きな波紋を生じたまでであって、遂にはからずも宗教改革という果を結んだのである。忠実なパリサイ人たらんとしたパウロの魂を打ったものはキリストの十字架であった。忠実な修道僧たらんとしたルターの良心を苦しめたものは罪の問題であった。パウロは十字架を以て世界をひっくりかえし、ルターもまた十字架を掲げてカトリックの敵とならざるを得なくなって来た。それはローマ教皇の免罪符を売る行商人、僧テッツェルが偽りの十字架を押し立てて、ものものしく行列をなしてヴィッテンベルクの真理の牙城に迫って来たことにその端を発した。

四　免罪符

僧テッツェル（Tetzel）の行列

聖書の人ルターがヴィッテンベルク大学で、神の福音を講じていたとき、紅十字架を押し立てた奇怪な行列がこの町に向って来た。金ピカの布に免罪宣言の令書が載っている。僧テッツェルがこの一行の立役者である。これに続くは司祭、僧侶、議員、教師、学生、その他さまざまな男女。彼らは旗と蠟燭とを持って歌いながら街道を練りゆく。この行列に応じて寺院の鐘は諸所より鳴りひびきオルガンが伴奏をする。行列はめぼしい教会堂に立ち寄る。堂の中央に紅十字架が立てられ、燐然たる教皇旗が翻る。その令書に曰く、「すべて免罪符を購う者は、あらゆる罪と罰とより免れ得る」と。僧テッツェルは之に註して毒舌を振う、「凡そ神の賜物のなかで最も高貴なものは免罪符である。いかに大いなる罪でもこれによって蔽われないものは一つもない。

……実にこの紅十字にはキリストの十字架にひとしい力がある。ただに生きている者のためばかりではない、死んだ者のためにも即刻救いが得られる。金が箱の中でチリンと鳴るや否や霊魂は煉獄から跳び出る。貴顕、紳士、商人諸賢、人妻、処女、青年諸君！　貴君等の両親や愛する人々の魂は今下界の深みからこう叫んでいる――我らの苦しみを見よ、我らを救うには僅かの喜捨で足りる。然るに君らはそれを吝むか――なお心鈍く酷き人よ、かくも豊かに供せられる恩恵を享けぬとは！……この大いなる救を無視する者にはどんな罰が臨むかわからない、……さあ買いなさい。」この驚くに堪えない御利益に愚衆の眼は昏み、老若男女が先を争って買った。二、三日すると僧テッツェルは商売根性たっぷりの口調でいう、「そろそろ残りも少なくなったから、間もなく紅十字架を取りおろして、天国の扉を閉めねばならない。もしもこの機を外して、この特権を買いそこなったら、或る種の罪は永久に赦されぬであろう。残る数日間は、特に値段を割引するから、誰れ彼れと言わず、今直ぐ買いなさい、買いなさい。」

ここにいうある種の罪とは何か。教皇を殺害せんとする罪、高僧に対する暴行の罪、（教皇の財源の一つたる）明礬を異邦から輸入する罪、というのであって、この悪令にとってさもあるべき例外の罪業ではある。

免罪符とは何か

免罪符とは、もともと教会の法規を犯した罪に対する刑罰を免れしむるお符であって、第十一世紀頃から設けられたものである。しかしその主旨は夙に不純なものを孕み悪用され、教皇の資金獲得の都合よき機関と化した。時の教皇レオ十世はすなわちサン・ピエトロ寺院新築の費に借名して、大々的に免罪符を発行し、私腹を肥さんとした。しかも政治的独立国家を成していないドイツは、教皇のこの種の財源地であった。ドイツ教区は実に教皇庁にとって「金の出る泉」であったのである。ドイツ一般民衆はそのため、つねに態よき搾取に遭っていた。この度の免罪符は正に見るに美しく、食うに味の好かるべき好餌であった。この霊的な餌を請負ったのがマインツの選挙侯、ドイツ教区の最高委員司教アルブレヒト（Albrecht）であり、これがお先棒となって小売をひき受けたのが悪僧テッツェルであったわけである。

ルターの義憤

ヴィッテンベルクの良民がこれに誘われて、おのが魂を売り、まことの悔改めもなくこのいまわしいお符を買って、罪のゆるしの証明をルターに求めるに及んで、ルターの良心は嘆きと憤りを感じ、福音の真理擁護のため立たざるを得なくなったのである。ルターは卓上説話の中で言っている、「テッツェルが余りにも暴戻な事をいうので、われらは彼を撃たざるを得なかった。例えば彼は教皇の免罪符は神と人との間の和解であるというようなことを書き且つ教えた。また人

が悔恨も痛心も有たず、懺悔をしなくても、免罪符は同様に有力有効であると教えた。……免罪の十字架はもし教皇がそれを建てるならば、キリストの十字架と斉しく、同じ効力を有っているという。……この種の暴戻が私をして蹶起して抗議を書かしめたわけである。ただし、テッツェル一人のためにでもなく、また金銭のためにでもない。」

御利益宗教

このような馬鹿げた免罪符の売買の事実は、教皇とカトリック教会の堕落と中世人の理性なさの故のみであろうか。二十世紀の自由人はこれを一笑に附する資格ある者であろうか。我々日本人がこの免罪符売買的な功利打算にかつて毒されていなかったであろうか。そして今日いろいろな相でそのような毒素に蝕まれていないであろうか。

霊のことにせよ、肉のことにせよ、安易に幸福を求めるのは、人間性の根深い衝動である。これが即ち自己を求めることであり、パウロの言う「肉」であり、神中心でなく自己中心であるが故に、罪と呼ばれるわけのものである。免罪符は神のゆるしを無視し、信仰の問題を御利益的金銭問題に俗化せしめ、且つ人間の自己追求を安易に宗教化するという二重のあやまちを犯している。キリスト・イエスがエルサレム入城に際して、先ず撃ち給うた敵は、かかる種のものであった。即ち宮の中なるすべての売買する者どもを逐い出だし、両替する者の台、鴿を売る者の腰掛

をひっくりかえして言い給うた、「わが家は祈りの家と言わるべきだと書いてあるのに、おまえ達は之を強盗の巣となしている」（マタイ二一・一二―一三）と。

現代の忘罪符

ユダヤ教の硬化、形式化、堕落に対してイエスは根本的な宗教改革をなし給うた。否改革どころか突破して大包摂をなし給うた。ペテロの衣鉢を有つというカトリック教の逸脱と堕落に聖書の言を以て警告を発したルターは期せずして宗教改革をしなければならなくなった。忠実なカトリック教徒が自らのたましいの内的変革を来たしたら、それが発火点となって爆発せざるを得ないことになった。内的なドラマーティシュ（劇的）な変革が、外的な劇的な風波を起さざるを得なくなった。全存在的な真理探求の情熱を有った大学教授は、ヨーロッパ精神史に近世の暁鐘を鳴らす預言者となり開拓者となった。

文化文明を謳歌する二十世紀は、ルターの宗教改革の根本精神を忘れ、またはそれから逸脱した科学万能的文化文明という忘罪符の故に第一次大戦、第二次大戦を爆発させてしまった。この世界から果して第二の宗教改革が起こり得るや。一体今後の世界において何が第三次大戦を喰い止め得るのか。世界は全く終末的様相を呈して来た。今や霊的大人物の出現を待つべきか。天界でパウロが呻き嘆き悲んでいる！　黙示録の「羔の怒」を招来せしめては世は終末となる。超イ

デオロギーの人間愛が各国民の間に湧き出でて互に隣国と握手するのでなければ、世界は破滅する。そのためにはキリストの僕婢が、おのが十字架を負い、聖霊の力ある愛を体現し、強烈な霊波をもった霊禱に生きなければならない。そのような遣れる神の民は今やいずこに労しつつ、祈りつつあるか。

五　ルターと免罪符

免罪符の歴史

免罪符の由来はどのようなものであったかをここに簡単に述べておく必要があろう。宗教戦争に於て、マホメット教徒は戦死と共に天国に入ることを約束されていたが、キリスト教徒にはそう簡単に天国の門は開かなかった。然るに教皇レオ四世は第九世紀の半、宗教戦争に出で征く戦士に戦死の場合は天国で大いなる報いが得られることを確約した。また次の教皇ヨハンネス八世は八七七年に更に具体的に戦死の場合は教会法規に対する犯罪の赦免を保証した。即ち宗教戦争に参戦して生命を賭することは、一種の殉教的行為であり、罪の賠償をなすものと認められ、そこに無形の免罪符が、天国の門を通過する資格として戦士に与えられたと考えることができる。謂わば免罪符以前の教会的免罪の観念であった。実際の免罪符の起源は不詳であるが、教皇レオ

九世が一〇五二年にノルマン軍征討の際に、教会徴罰の赦免を募兵の手段に用いた如きは最も古い例の一つであろう。一〇九五年、教皇ウルバン二世が十字軍に対して発布した十字軍免罪符は有名である。その後教皇ボニファチウス八世が一三〇〇年に教皇庁の財政を謀り、全キリスト教国に対して、ローマの聖ピエトロ寺院、聖パウロ寺院に参詣する者の罪の赦免を宣言した。これが世に言うユビレウム免罪符の始めである。

免罪符は、教会の法規を破った罪に対して教会が課する宗規的な刑罪、すなわち難行苦行を、その罪過を悔改めた者に対して軽減し、または赦免する保証の符であるというところにその一般的な意味があった。それ故に大切な点は、罪過を心から悔改めるということにあった。免罪符を買い得る資格は金があるということではなく、心が悔改めているということである。しかし免罪符を売る側において直ちに陥り易い弊害は功利的観念である。ユビレウム免罪符が既にその動機において打算的であったように、これがローマ教皇と教皇庁の堕落の一大要因となったことは周知の事実である。各地方にその委員が派遣され、この「神聖なる販売」がなされた。そしてドイツがその最大の顧客であったことは、ドイツの社会的政治的状勢に因った。免罪符は次第に商品化して、無智な民衆は金さえ出せば罪が赦されるという安価な誤見に陥り、地獄、煉獄の沙汰も金次第となって来た。売る教皇側もこれにいろいろな御利益を盛って金にしようという恐るべき宗教の堕落を招来しつつあった。しかし煉獄に居る近親の者の魂を贖う力が免罪符にあるという

ような不敵な御利益は十五世紀の半までは認められていなかった。

ルターの批判精神

ルターはすでに一五一四年の頃から、教会の宗教的な行事万般に対して批判を行い始めている。免罪符のことも講壇で折に触れては論じていた。彼が健全な批判精神を有していたことに我々は注目しなければならない。そしてこれがドイツ精神の重要な一特質である。批判とは主観的な批評のことではない。真理を愛し、真理を求め、真理に拠って、在るものを観、在るべきものに即かんとする精神である。ルターが魂の苦悩を深くなやんだのも、自己批判が真実であり、深刻であったからに外ならない。批判精神はこのように真理に即せんとして自他の問題をつねに新たに問う精神である。この精神の亡びないところに神学や哲学を始め、およそドイツの学問一般の根強い生命がある。権力政治がこの批判を沈黙させたとき、ドイツ国の崩壊は来たのである。しかしドイツがこの精神を失わない限り、宗教改革を以て始まるドイツ文化は厳として世界に重要な役割を果しつづけるであろう。この批判精神が哲学史上で最も顕著に現われたのは、言うまでもなくカント哲学で、かの『純粋理性批判』『実践理性批判』『判断力批判』の三大名著はドイツ精神の典型というべきものである。

ルターの関心は、それが外的現象に対するときでも、つねにその内面に存するものに向けられ

ていた。であるから、彼の耳目に触れる大学や教会の諸般の問題も、彼にとっては神学的な問題としてとりあげられ、考えられていた。当時威を揮っていたスコラ神学に抗して、問題を根源に溯らしめ、聖書に基づき、そこから惨み出てくる聖書神学に彼の立場が置かれたのは、彼の本質上必然の事であった。

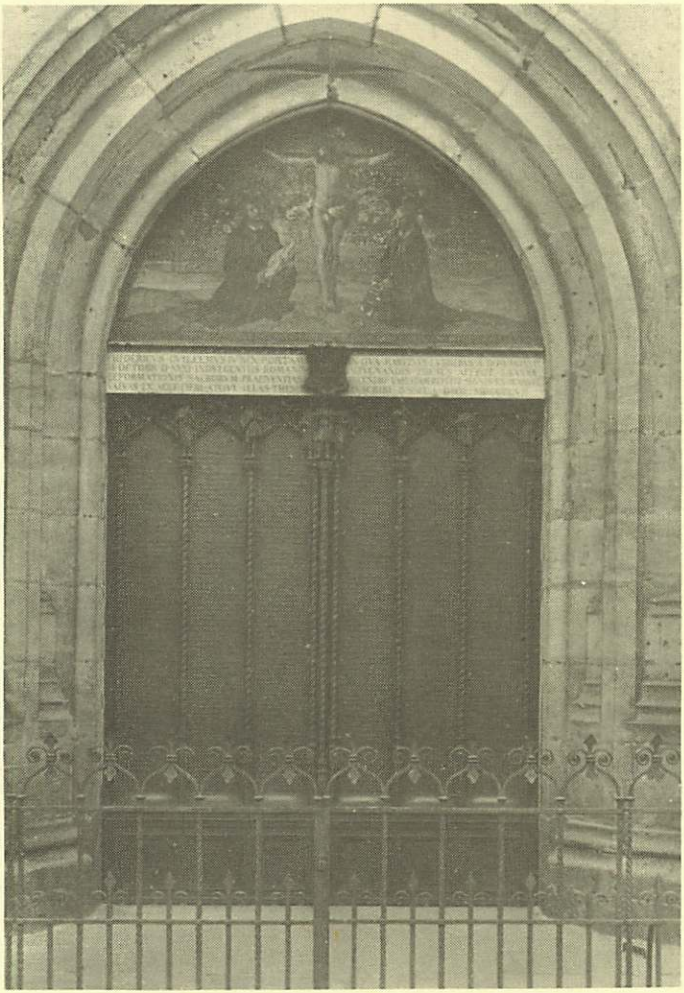
学的な問題として、彼は一五一七年九月四日に、スコラ哲学に対する論駁九十七提題を以て論戦を始めている。しかしこれに対しては博士エック（Eck）も何ら反響を与えていない。哲学者と哲人とが違うように、即ち、哲学者は哲学の研究家であるに対して哲人は哲学してゆく創造的精神の人である、という趣きの相異があるように、スコラ神学者は、分析総合のいとなみをなす神学者であるが、ルターは神学人とでもいうべき存在で、飽くまでも聖書の霊的真理の神学的追求者であって、そこにはガイスティヒ（霊的）な掘り下げの精神、預言者や詩人や使徒たちのガイスト（霊）と同質な次元への追求とそこにおける神学的追求をする神学人であった。真理を愛し、真理を追求し、真理に殉ぜんとする者が真の学者であり、学人であり、学徒であると申したい。文学の世界となると、文学者と創作家、詩人との差異にはもっと判然としたものがある。

ともあれ、真理に即せんとして真理追求の批判精神を以て生きていたルターがテッツェルの免罪符宣伝や愚民の軽信妄動を見て黙って居れなくなったのは当然であった。

一五一七年の早春、テッツェルはユーターボックで免罪符の宣伝をやっていたが、その不法な

内容と、これに釣られて「ものぐるほしくも馳せゆくヴィッテンベルクの市民」を見てルターは慨嘆し、ここに問題の所在を瞭かにすべく決意するに至り、免罪符に関する文献をたずね、その濫用の程度、免罪符の本質とその限界等について一夏を考え抜いたのである。教皇に忠実な僧としてルターは免罪符そのものを非なりとは毛頭考えていなかった。免罪符は如何なるものであるべきか、その最も正しい相においてこれを瞭かにすべく彼は願ったのである。

現行免罪符の非に対する烈々たる義憤と免罪符そのものに対する厳正なる批判精神、そこにルターの面目があった。彼はただ独りこれを考え、これに当った。穏かに真理が認められ誤謬が改められんことを念じて。



95箇条提題を掲げたヴィッテンベルク城教会門扉

六　九十五箇条提題

免罪符に対する学問的公開状

一五一七年十月三十一日の太陽が中天にさしかかった頃、ヴィッテンベルク城教会の門扉に一葉の大紙片が貼り出された。見るとそれはラテン語で書かれた論題で二十五箇条のものが三つに、二十箇条のものが一つ、合せて九十五箇条にわたる提題である。見出しにはこう書いてある、「真理に対する愛と真理を明かにしようとする意志に由り、以下の諸条目がヴィッテンベルクで論議されんことを願う。主宰者は学芸と聖なる神学の博士にして同地の同学正教授たる司祭マルティヌス・ルターである。故に彼は懇請する、出席し口頭を以て我らと討議し得ない諸賢は、欠席のまま書面を以てこれを行われんことを。我らの主イエス・キリストの名において、アーメン。」

すなわち彼はこの論争を「免罪符の効力を明かにするための論争」となして、現行免罪符に対する学問的批判を公開状の形式を以て行ったわけである。ローマ教皇の免罪符は教皇自身の課した罰を免じ得るに過ぎないものであるのに、越ゆべからざる限界を超えて一般に罪の免しを僭称するものであるので、これは明かに聖書の真理を犯すものである。これ正に（筆者が傍点を施したように）真理に対する愛と意志に燃ゆるルターをして黙す能わざらしめたわけである。ルターの態度は真理擁護という公明なものであって、敢てローマ教皇の教会行政に干渉するものでなかったから、免罪符そのものの全面的否定を意図したのではない。しかしルターの真理擁護は、且つは内面的に真理に背いている教皇の精神を衝くこととともなり、且つは免罪符そのものの中に人を信仰から堕落させる毒素のあることを指摘することともなり、やがてルター対教皇の全面的対立へと展開せざるを得ぬ必然性を有っていたのである。

ウィッテンベルク城教会の門扉の大貼紙

彼がこの日を選んだのは、翌る十一月一日が諸聖徒祭の日に当っており、しかもこの祝日に教会創立記念祭が催されるので学内にも市民にも公表するには好都合であったからである。彼が城教会の門扉に論題を掲げたのは、この扉が大学創立以来、重要な公文書の掲示板として用いられていたからである。しかし我々が見遁してはならぬ内的事実は、彼がこの九十五箇条を草するに

当って深く心を砕いたことであり、また彼がこれをいよいよ公表するに当ってその決意を真理の主体たる神の力に迫られてなしたことである。また彼は累を他に及ぼすまいとの心備えをなし、一切を自己一身に引受けんとした。しかもそれは一切をキリストが負って下さるという深いキリスト主体的信頼に支えられていた。およそルターが事をなすにあたっては此の如き内面的消息があったこと、それ故にこそ人間ルターの動揺はいかにもあれ、全ルターを貫いて神がそのわざを進め、神が勝ち給いしことを観るべきである。

九十五条の内容

然らばその九十箇条の提題とは如何なるものであったか。これを構成する特色ある条目を撰んで全体の輪廓と内容に触れ、然る後全提題の根本精神をたずねてみたいと思う。〔　〕内は筆者の注記。

一　我らの主にして師なるイエス・キリストが「汝ら悔改めをなせ……」と言い給うとき、彼は信徒の全生涯が悔改めであるべきことを欲し給うた。〔マタイ四・一七参照〕

二　我らはこの言葉を秘蹟的な悔改め（サクラメント　ペニテンチア）（司祭の務めによって執り行われる懺悔と罪償（コンフェシオ　サティスファクチオ）との悔改め）と解してはならぬ。

三　しかもこの〔イエスの〕言葉は内的な〔悔改めの〕ことを意味するばかりではない。

否、外的に肉のさまざまなはたらきを殺さない内的な悔改めというものはあり得ない。

四　自己嫌悪（これが本当の内的な悔改めである）が正に天国の門に至るまで存続する限り、罰も存続する。

五　教皇は自己の判定により、或いは教規の判定によって課した罰以外には如何なる罰をも赦そうともしない、また赦し得ない。

八　悔改めの教規は、生存者にのみ課せられるもので死者には課し得ない。

一〇　死者に対して教規の悔改めを煉獄にまで留保する司祭等の行為は無知であり悪である。

二一　教皇の免罪符によって人がすべての罰から解放され祝福されることを説くところの免罪符説教者は誤っている。

二七　貨幣が賽銭箱に落ちて鳴るや否や、魂が直ちに煉獄から躍り出ると説く者らは人間的なことを宣教している。

三二　免罪の文書によって自分の救いが確実であると信ずる者は、その宣教者と共に永遠に断罪される。

三三　人間が神に対しその罪を贖われるかの測り難き神の恩寵が教皇の免罪符に在ると説く人々を極力警戒せよ。

三六　如何なる基督者も例外なく、真に悔改めを真に体感している者は罰と罪からの完全な赦

免を有つ。この赦免は免罪符なくとも彼に与えられたものである。

三七　真の基督者は何人と雖も、生者にせよ死者にせよ、キリスト及び教会のすべての霊財（たから）にあづかる。この関与は免罪符なくとも神から授かったものである。

四〇　真の悔改めは罰を求め、罰を愛する。これに反して寛大な免罪符は罰を軽減し罰を嫌わしめる。少なくともそうした機会を提供する。

四三　キリスト者はかく諭さるべきである、「貧しき者に与え、窮（くる）しむ者に貸すは免罪符を買うより美し」と。

四四　そは愛のわざによって愛は成長し、その人はより善く成るが、免罪(符)によって人はより善く成らず、ただ罰から解放されるに過ぎないからである。

四五　キリスト者はかく諭さるべきである、「貧窮の者を見ながらこれを無視して免罪符のために金銭を出す者は、教皇の免罪符を手に入れるのではなく、神の怒を手に入れているのだ」と。〔ヨハネ第一書三・一七参照〕

四九　キリスト者はかく知るべきである、「教皇の免罪(符)は人々がそれを信頼しなければ有益であるが、もしそれによって神を畏れる心を失うならば極めて有害なものである」と。

五〇　キリスト者はかく知るべきである、「教皇がもし免罪(符)説教者どもの強制不正の営業

を知るならば、彼は聖ペテロ寺院が彼の羊達〔信徒〕の皮と肉と骨によって建てられるよりも、むしろ灰燼に帰する方を欲するのであろう」と。

五三　免罪(符)説教のため、他の教会において神の言を全く沈黙させる者は、キリストの敵であり、教皇の敵である。

五五　教皇の意向は必ずやこうである、免罪(符)（その価値は極めて小なるもの）が一つの鏡と一つの行列と一つの儀式とによって執り行われるものである以上、福音は（その価値は極めて大なるもの）百の鏡と百の行列と百の儀式によって宣教され讃美されねばならぬということ。

六二　教会の真の宝は、神の栄光と恩恵たる最も聖なる福音である。

六三　しかしながらこれ〔この宝〕は、最初の者を最後の者となすから、最も嫌悪されるのも当然である。〔マタイ二〇・一六参照〕

六五　それ故、福音という宝は、むかし富の人々を漁った網である。〔マタイ四・一九参照〕

六六　免罪符という宝は、いま人々の富を漁る網である。〔コリント教書一二・一四参照〕

六八　しかし免罪符は、神の恵みと十字架の憐みとに較べると実際極めてつまらぬものである。

七六　これに反して我らはいう、教皇の免罪符は、些末な罪の中で極めて些細なものでも、そ

れが罪である限り、それを除去し得ないことを。

七九 教皇の紋章を付して人目につくように建てられた十字架がキリストの十字架と同じ価値を有つというは冒瀆である。

九二 それ故に、キリストの民に、「平安（やすし）、平安」と呼ぶすべての預言者よ、去れ！　しかもそこには平安がない。〔エレミヤ六・一四参照〕

九三 キリストの民に、「十字架、十字架」と語るすべての預言者に祝福あれ！　しかもそこには十字架が無い。

九四 キリスト者はこう諭さるべきである、彼らは罰と死と地獄を通って首領（かしら）たるキリストに従い行かんと努むべきである、と。

九五 このようにしてキリスト者は、〔いつわりの〕平安の保証によるよりも、むしろ多くの試煉を通って天国に入ることに信頼をおくべきである。

以上撰び出した三十二条目（**すなわち全提題の三分の一**）はほぼ全体の輪廓と内容と精神を伝えるに足るものである。

七　九十五箇条の精神

免罪符の神学的批判

ルターの提題九十五箇条の精神は如何に把握されるべきであろうか。免罪符を売る教皇とその諸々の手先はまことに怪しからぬもので、「教皇の羊達である信徒の皮と肉と骨」を削って自ら太らんとする者であることをルターは皮肉に辛辣に攻撃している（第五〇条―以下条目を数字のみで表わす）。また免罪符を買う信徒たちが「免罪符によって自己の救いが確実であると信ずる」ことの如何に大なる誤謬であるかを指摘し（三二）、免罪符はただ「教皇及び教会法規の定めた罰を赦し得る」に過ぎないのであって（五、二一）、このような罰を受くべき罪に対する悔改めの心を前提として初めて自発的に免罪符を買う資格があると言えるのである。そのようにして初めてその法規的な罰から免れることが出来る。そこに免罪符否むしろ免罰符の意味がある。そこで

問題は罪に対する悔改めの心があるか否かに懸ってくる。しかも「悔改めを真に体感している者は罪と罰からの完全な赦免を有つ」（三六）というルターの断然たる主張は、自明的に免罪符の本質的解消を宣告するものである。しかも「真の悔改めは罰を求め、罰を愛する」（四〇）ほどに旧き自己を神の前に曝けだした真剣なものである。罰を恐れて罰の免ぜられることを求める心は、罪をおそれぬ悔改めなき心であって、免罪符はむしろこのような誤った観念を誘発させる（四〇）。このようにして免罪符なるものの存在の意味は極めて些少なものであること（五五、五八）、むしろ有害であること（四九）を説き、ルターの主張は免罪符否定論を蔵している。法規的な罪や罰を問題としている信徒の生活態度、信仰の在り方を百八十度転回させる要求を彼はこの論旨の中に有っている。教皇の免罪符の本質的無力について、それが極小の罪も、罪が罪である限り、すなわち神の前における信仰問題である限り、教皇も人間もこれを如何ともなし得ぬものであること、これを赦し得るのはキリストのみであることを彼は明言している（六八、七六）。

提題第一条

このようにしてルターは免罪符問題が本質的には悔改め（〔ラテン〕Penitentia,〔ギリシャ〕metanoia「回心」と訳してよい）を中心とする信仰問題であることを自覚していた。この根本問題を措いて何の免罪符ぞや、またこの根本問題に生くる信仰に何の免罪符ぞや、という真理に在る者の

気魄を示している。

それゆえ本提題冒頭の第一条があたかも交響楽の最初の力強い響きの如く厳かに宣する。「我らの主にして師なるイエス・キリストが『汝ら悔改めをなせ……』と言い給うとき、彼は信徒の全生涯が悔改めであるべきことを欲し給う」

1. Dominus et magister noster Iesus Christus dicendo: Penitentiam agite etc. omnem vitam fidelium penitentiam esse voluit.(原文)

1. Unser Herr und Meister Jesus Christus hat mit seinem Wort „tut Buße" usw. gewollt, daß das ganze Leben der Gläubigen nichts als Buße sein soll.(独訳)

これが全論題の根本命題であることは今や明かである。この「(汝ら)悔改めをなせ」はマタイ四・一七のギリシャ語原文では「メタノエイテ」、ヘブライ語では「シューブー」、ラテン語では transmentamini で、肉の心即ち地的な自己中心の心を、霊の心即ち天的な神中心の心に方向転換をせよ、心を飜せよ、心を回らせよ、という意である。日本語の回心、転心が原義を表わす。ドイツ語の「ブーセ」という語は「改善」という原義をもつ言葉で、本来はあまり適切な語ではない。ただルターは「ブーセ」を勿論、回心の意味で用いたわけであるが。日本語の「悔改め」は聖書に伝統的に用いられているので、私も一応「悔改め」という訳にしておいたが、「回心」の方が前向きの積極性があって、適切な言葉だと思う。否、更に全存在的に「回帰せよ」神

へ、キリストの中へ！　である。ヘブライ語の「シューブ」は正に「立ち帰る」意である。

宗教改革の焦点

ルター自身が「九十五箇条」のために一五一八年にものした「解明」において明かにしている。それはまたロマ書一二・二の「心を更えて新たにせよ」reformamini と相照応するもの、ルターの宗教的改革の第一声が、このように、イエスの「悔改め」「回心」「回帰」の警告を以て発せられたことの意味は不滅である。と同時にルターのこの第一声は、信徒の全生涯に該当するのみでなく、実に人類の全時代において、歴史の終末に至るまで、現在的な警告としてつねに新たに顧みられるべき命題であることを思う。しかも現代こそ実にその自覚を深刻ならしむべき危機である。人類の各国民が霊的絶対者たる神に向って転心、回心、回帰しないならば、どういうカタストローフが来るか。ルターの宗教的改革の導火線となった九十五箇条の第一言は現代に対する預言的警告となっている！

全提題の真義

キリスト・イエスの要求される「回帰」は教会のサクラメント的な、すなわち教皇や僧侶という人間的な制度的ないかなる媒介も必要としない回帰である（二）。それは神の前に裸身の一人

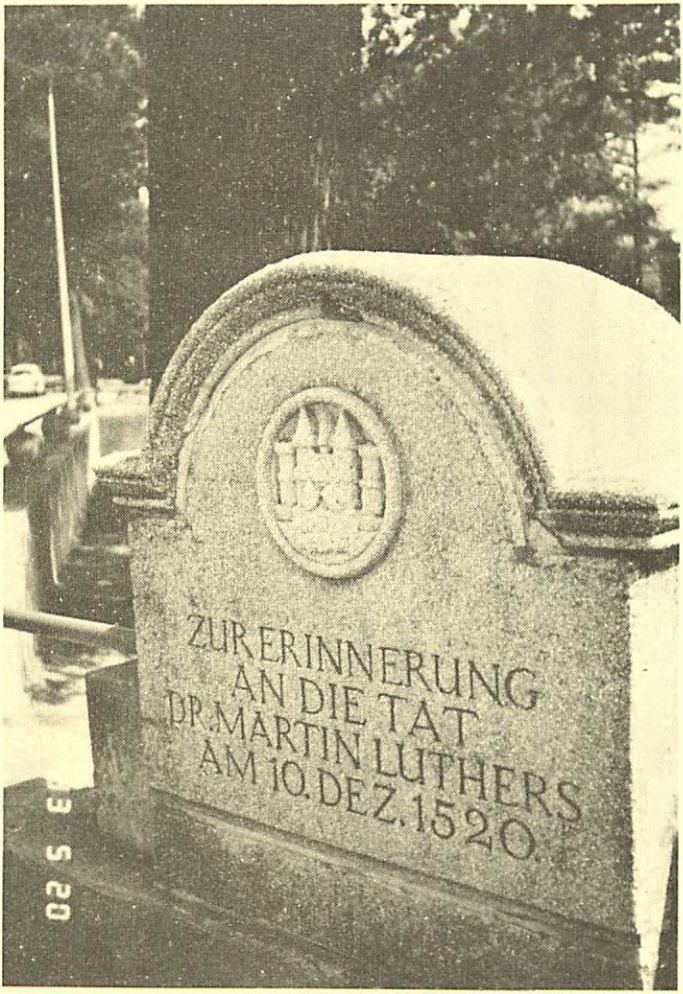
の人間の最も内面的な心が、神の前に無条件に砕かれることを意味する。このような砕かれた心は「自己を嫌悪する」。これが「本当の内的な悔改め」であるとルターは道破した（四）。そして悔改めが本ものであるなら、その内面性は必然外的に作用して「肉のさまざまなはたらきを殺す」（三）ものであるとはルターの体験の声である。これに加えて、それは必然「愛のわざ」として人にはたらきかけるものである（四三、四四、四五）。信仰のみを主張したルターが「善きわざ」を必然もたらさぬ信仰は本ものでないといったのと同然である。真に悔改めに生きるということ、不断に我に死しキリストに生きるということが信仰であって、信と行との分離がそこにはない。信に生きるという真実のみが信仰で、実は行の善悪をとりたてて問題にする分裂がない。ルターの言う「悔改め」の生涯もかかる意味で不断の自己否定であり、自己嫌悪であって、自己を「罰と死と地獄」に置いた立場である（九四）。個々の言行などを反省して悔いて改めるというような分裂的な断片的な非全人的律法的な態度が「悔改め」ではない。いかなる些少なことが「悔改め」の契機となろうとも、悔改めの主体と客体とは常に新たにこの全我であり、地の我を天の我がぶちこわしつつ前進してやまないのが「悔改め」である。であるから、先にも述べたように、転向、転心、回心、転進回帰である。換言するなら、「悔改め」は消極的な後悔、懺悔ではなく、積極的な改心、転向、転進、キリストへの回帰である。聖前に平伏し、過去と現在を乗り超えて将来に向って進出することである。「悔いなき悔改めが救い」であるというのはこの間

の消息である（コリント後書七・一〇）。

九十五箇条の歴史的意義と使命

然らばこの「悔改め」をして真に「悔改め」たらしむる力と内実とは何であるか。それは「教会の真の宝」（カトリック教会には沢山の宝物があるからルターはこう言った）であるところの「神の栄光と恩恵たる最も聖なる福音である」（六二）。ルターが従来の教会的なものに対して、真の教会的なものこそ福音であると主張した。この精神に彼の改革精神があった。この場合福音が主体であること論を俟たない。教会は福音あるときにのみ教会であって、福音は毫も教会によって支えられるを要しない。福音はそれ自体の力でおのずから真の教会（エクレシヤ）を生む。神の言をいい加減にしていた教会の一切の執り行いはルターの眼に禍いとして映じた（七九）。免罪符はその最も著しい現象であった（六六）。そして福音の中心は言うまでもなく十字架である（六八）。かくして十字架の贖いの信仰に、真の悔改めの積極的な内容があることを知る。免罪符の如きは到底問題にもならぬはなしなのである（五五、六八）。それにも拘らず人は安易を求めて、この世の価値を転倒させる十字架の福音を嫌う（六三）。十字架による罪の赦しなき「平安」を叫ぶ偽預言者（エレミヤ六・一四）は禍いである。免罪符を売る者、免罪符を遊説する者はすべてこの類である（三三、九二）。これに反して「十字架は語られることを要する」（九三）。しかし語

られるのみでは足りないのである。キリスト者の「悔改めの生涯」（一）は、「罰と死と地獄」（九四）を歩いて「多くの試練を通る」（九五）ものであるべきである。ルターもまたダンテと共に「地獄を通って天国に入る路」に「信頼をおく」（九五）。何となれば、地獄の路の一歩前をヴィルギリウスならぬキリストが歩いて下さり、負いかねている罰と死（十字架）をキリストが一緒に、しかも代って負って下さるから。このように読み来たるとき、劈頭の第一条と終末の第九十五条とがいみじくも相照応して天地を貫くキリスト者の生活原理を説き、第四条と第九十四条とが同じく相応えて戦闘的な生き方を明示している。この四箇条はあたかも全箇条を貫く吊橋の鉄条の如き観を呈している。人もしこの九十五箇条の吊橋を実践するならば、この橋がすなわち天から地に架けられた真の吊橋であることを知るであろう。免罪符を論じつつ、その根本問題を衝くルターの魂は「福音」を中心として動き、「悔改め」の生涯はすなわちおのが十字架を負う苦闘と信頼の生涯であるべきことを論破している。「免罪符の効力」の如き実はルターの眼中になかった。彼の論は穏健な学的な一面があると共に、他面灼熱せる真理愛を以て怒濤の如く寄せては返す迫力をもって畳みかけてくる。整然たる組織的論理ではなく、脈動の如く迫りくる生命の論理である。このようにして九十五箇条は預言者的、使徒的な宣言であり、宗教改革への最初の戦闘歌であったのである。「人もし我に従い来らんと思わば、己れを棄て、己が十字架を負いて我に従え！」とのイエス・キリストの言はこの歴史的戦闘歌の隠れた標題であると思う。



教皇の破門状を焚いた記念の場所

八　破門への道

一路宗教改革へ

九十五箇条提題はルター自身の手によってドイツ語に翻訳され、印刷の機に織られて四方に散った。それは二週間を出でずして殆ど全独乙に拡まり、四週間後には全欧のあちこちに羽を伸ばした。かくも速やかに伝えられたのは、その内容が時代の良心の何とはなしに要求していたものに触れていたからであり、また同時に時代の欠陥が暗黙のうちに懼れていたものを指摘したからである。しかしルターの真理愛に応えて動く学者や僧侶のいなかったこと、彼らがむしろ彼の大胆にして一見倨傲なる仕打ちを快く思わなかったことは、ルターを痛憤せしめた。「偽善なる学者パリサイ人」が預言者と共に真理を愛し、真理に即して戦うことをしないのはいつの世でも同じである。

彼はエルフルトの修道院長ランクに宛てた書簡の末尾にこう書いている。「これが神の聖業であるならば、誰が妨げることが出来よう。また是れが人のわざであるならば誰が進め得ることが出来るか。おお聖なる神よ！　私の意志でもなく、彼らの意志でもなく、貴神の聖意が成らんことを！　マルティヌス・自由の人。」

何びとが神に即けるこのルターの魂を奪うことが出来よう。ルターに応えた者は卒直な独乙民衆であった。また独乙的自覚を有っていた神聖羅馬独乙皇帝マクシミリアンとザクセン選帝侯フリードリヒの二存在を忘れることは出来ない。前者は後者に対して「僧侶ルターに注意せよ。彼を要する時が来るであろう」と書き送った。これに反して憤激したのは、言うまでもなくマインツの大司教アルブレヒトと悪僧テッツェルである。後者はルターの宣言書を焼き棄てた。ヴィッテンベルクの大学生は、これに対して悪僧の反対宣言書を押収して焼却した。学生の熱誠は愛すべし、しかしその行動に対してはルターから誡しむることがあった。

ハイデルベルク総会

翌一八年の春、ルターはハイデルベルクで催されたアウグスティヌス教団の恒例の総会に列席する義務があった。ローマ側から過激と思われていたルターが、遙々ハイデルベルクくんだりまで出かけるのは危険でもあったが、「彼らが狂えば狂うほど私は進んで往く」といって友人の諫

止を斥けた。総会の神学討論会において、彼は免罪符問題には触れず、堂々と信仰の根本問題を論じた。しかしそれは九十五箇の精神と相通じ、パウロの精神を充分強調するものであった。若き修道僧の中には彼の論説に感動共鳴する者が少なくなかった。ブレンツ、シュネップス、ピリカヌス、ブッツアー等は正にその輩であった。

ハイデルベルクから帰ると、彼は誤れるローマ側に対する自己の所信を民衆に披瀝した。「真の教会は見えるものではなく、目えざるものである。この教会からは教皇の破門状も人を追放することが出来ない。人を教会から破門し得るものは罪だけである」。果せる哉、ルターの予感通り、教皇の命を受けてプリエリアスというドミニクス教団の僧が異端審問官として九十五箇条に対する反駁書を草した。しかし、その内容はルターにとって笑止の沙汰であった。これに対してルターは辛辣な返答を書き送った。その後、かの『解明書』(《Resolutiones》)を以て「決定」的な応酬をした。時に一五一八年八月であった。その中にはこんな一句がある、「教皇の意に適うが適うまいが、私はそんなことでいささかも動じない。教皇も他の人も同じく一個の人間に過ぎない」。そしてこの書を「私は取消し得ない」(revocare non possum)という句で結んでいる。

召喚状

同じ月、彼は教皇からの召喚状に接した。異端の嫌疑に対する答弁のため六十日以内にローマ

へ出頭せよというのである。教皇に対して「鳩の如く従順で蛇の如く賢く」あった彼は、スパラティンの執成しにより、ザクセンの賢侯フリードリヒの後援を得て、ローマゆきを変えて当時開催中のアウグスブルクの国会行きとなし、その席上で教皇の使節カイエタヌスという当代一流の神学者の「父的訊問」を受けることになった。けれども人々はアウグスブルクに赴くことも危険千万であるといって諫止した。しかしルターは徒歩で南への旅にのぼった。「アウグスブルクにおいてさえ、然り敵の真っただ中においてさえ、キリストは統べ給うのだ。キリストが生きて在まし給うなら、マルティヌスは死んでいい。人の前で詛われるか、神の前で詛われるか、人は孰れかを撰ばねばならぬ。」と彼はヴィッテンベルクへ書き送っている。

アウグスブルク論争

一五一八年十月のアウグスブルクにおけるカイェタヌス対ルターの問答は、要するに教皇の権威と教会の功徳に対する聖霊の権威と聖書の真理の戦、約言すれば教皇対聖書であって、本質的には問題にならぬ審問で、主客顛倒というべきものであった。カイエタヌスの最後の切り符は「取り消せ！」という論理も真理もない教皇の命令である。ルターが聖書の真理に反し、良心に反する「取り消し」に応ずることが出来なかったことは言うまでもない。カイエタヌスはルターを目して「深い眼をした不思議な思想を頭に有っている野獣だ」などと評した。その間ルターの

身辺が危険になって来た。友人達の忠告によって、彼は十月二十日の未明ひそかにこの町を去った。ルターが去った二日後に教皇の召喚がアウグスブルクの大寺院に告知された。ヴィッテンベルクは彼を待っていた。

しかし破門の日は次第に近づく。彼は自己の運命について語った、「私は何処へ往くかを知らない。否、むしろ何処へ往くかを全く確かに知っている。神は何処にも在まし給うからである」と。このようにルターは不安や艱難の中で、つねに神に帰り、聖書に帰り、キリストに帰る魂であった。

九　ライプツィヒ論戦

聖書に拠る歴史的三大信条

真理が教権に抑圧され歪められることは、ルターの真理愛と良心にとって忍び得ないところであった。それ故彼はアウグスブルクを去るに先だって、教皇使節の主張に対する抗議文を草し、更に世界宗教会議に対する上訴を書いて自説が公議に問われんことを要求したのである。これより半歳あまり前パリー大学が教皇に異端として責められた時、同大学の神学者等がこのような独断的決定はフランス教会の自由を侵すものであるとなし、世界会議に上告した事例があった。ルターはヴィッテンベルクにおいて更に使徒信経、ニカヤ信条、及アタナシウス信条の三大信条をドイツ語に翻訳し、これを自己の信仰告白として公表した。世人はこれによって始めて正統信条の何たるかを瞭かに認識することが出来た。これによって正統の公同教会信徒の規範が示された

ことは当時の信徒にとって一大光明であったといわねばならない。聖書に唯一の規範を置き、聖霊に唯一の権威を観る真正のエクレシヤの日までは、教会史はなお幾変転を経なければならぬかを想う。否、終末の日まで、教会史はエクレシヤの苦難史であろう。

ミルティッツ

アウグスブルク論争の結果、ルターは「ローマ教皇庁に本当の非キリストが支配している」ことを推論せざるを得なくなった。また教皇に対して彼が抱いていた純なる信頼感は遺憾ながら教皇自身の本質曝露のために害われ始めた。一方カイエタヌスで失敗を喫したローマ側では、時あたかも皇帝選挙の期が迫り、自己に有利な皇帝を選ぶためには最も有力な選挙侯フリードリヒの援助を必要とするところから、ザクセン出身のドイツ貴族カルル・フォン・ミルティッツなる外交家はだの人物をフリードリヒ侯に特派し、「黄金の薔薇」の贈物や鄭重な親書を以て之を懐柔せんとした。その成功のあかつきにはルターを捕えんとの計らいであって、ミルティッツの鞄の中にはルターの破門状すら匿されてあった。

けれども神の人、キリストの僕、聖書の人ルターの存在自身が今やフリードリヒをしていよいよ彼の支援者たらしめ、ドイツ民衆はおのずから彼の城壁となっていたのである。ローマ側の高圧手段も懐柔策もただおのれの愚劣さを自認するに過ぎない。「一人のルターをローマに拉致す

るには二万五千の精兵があっても駄目である」とこの大酒飲で法螺吹のミルティッツが嘆じたという。そこで彼はやむなくアルテンブルクなるスパラティンの自宅で翌一九年一月の初旬、ルター自身と会見することにとり定めた。彼は言説を弄して、免罪符問題のため如何に教皇側が苦しんでいるか。涙ながらに語り、ルターの同情心をかりたてて終に彼を言いくるめてしまった。すなわちルターは免罪符問題を「教会の平和のために」これ以上論争せず、これをトリエルの大監督とヴュルツブルクの監督の審議に委ねることを約束した。ルターがこの「ユダの接吻と鰐の涙」に欺かれたことは彼の純情を物語ると共にサタンの「平和」に一指を委ねた失敗であった。

しかしこのサタンの使者が齎らしてくれた「平和」のひと時をルターは徒らに送りはしなかった。彼はその本業たるヴィッテンベルク大学における講義に没頭した。ますます多くの学生が彼を慕って集って来た。その時一人の少壮学者がこの大学に招かれた。その青年は即ちフィリップ・メランヒトンであった。彼は当代のギリシヤ語の大家であった。ルターは喜んで彼に学び、いくばくもなくして原典によって聖書の講義ができるようになった。メランヒトンはルターの信仰に動かされ、彼を深く尊敬し、終生ルターの無二の友、忠実なる協力者となって宗教改革の戦を進めた。

ヨハン・エック

やがてこの「平和」の約束はローマ側からの挑戦によって余儀なく、然り、まことにそれはサタンを自由に活動せしめて自由にこれを用い給う神の手によって破棄されたのである。当時九十五箇条を中心論題としてルターの反対側に立っていた有力な学者にインゴルシュタット大学教授ヨハン・エックがあった。これに対して就中ヴィッテンベルク大学のカールシュタットと呼ばれるアンドレアス・ボーデンシュタイン教授が前者と互に反駁文を以て論争していたが、エックのカールシュタット及びルターに対する論鋒が烈しく向けられるに及んで、茲に両大学の対立となり、表看板エック対カールシュタット論争はエック対ルター論争に展開し、華々しきライプツィヒ論戦が演ぜられることとなった。

一五一九年六月二十四日、ルター、カールシュタット、メランヒトンその他数名の教授団一行は田舎馬車に分乗して、二百名の学生団は槍と戟とを携えてこれを護りつつヴィッテンベルクを出発した。討論会場はザクセン公ゲオルクのプライセンブルク城内の大広間であった。六月二十七日、論戦の幕は荘厳に開かれた。四日間に亙るカールシュタット対エックの論争は、主として自由意志に就てであったが、エックが優勢であった。その後を受けて七月四日にルターは壇上に立った。彼は「中背で痩せ型、心労と研究のため憔悴し、皮膚の上から骨が数えられる程」であった。しかし彼の音声は明朗透徹、その気風は温厚鄭重であった。敵の恐喝冷嘲に対してもおのれを失わず、すべての瞬間に良く処し得る人であったことは充分敵味方の尊敬に価した。これひ

とえに彼が神とキリストにおいて在った人であったからである。これに対してエックの風貌は「角張った逞しい」野郎な兵卒か屠殺者を思わせるもので、声は荒々しく大きく放胆な気持の男であった。

五日間に亙った両雄の論戦は公同教会における教皇至上権の問題を中心とした。ルターは周到な準備をしていたからその論証を歴史的事実に訴えて進めた。すなわち原始キリスト教時代に至上権があったのはエルサレムである。アウグスティヌスの時代ですらローマに至上権はなかった。エックが主張する如く、キリストはペテロとそのすべての後継者に至上権を与えると言ったのではない、とはルターの所信であった。

七月五日に至って、ルターがローマ教会の支配権に対する信仰は祝福に必要とは限らないと言明したとき、エックは、それはコンスタンツ会議で誤謬としてフスやウィクリフが弾劾されたところである、といって突っ込み、ルターの主張が結局フスに酷似するものであることをエックは追及論断してゆく。ルターは竟に「フスやボヘミヤの信徒の言説はしばしば非常にキリスト的であり、福音的であった！」と叫んだ。エックはこれを捉えて言った、「フスの言説を是認することは『最も神聖なコンスタンツ会議』の権威を侵害するものである」と。するとルターは言葉を改めて厳かに言い放った、「神の言の外何ものも誤りなきを得ない、宗教会議ですら然りである！」これは真に教会史上特筆すべき、エクレシヤの隅の首石を指摘道破した名言と言わねばな

らない。サタンの智恵と論理に追いつめられたルターは自ら期せずして、神の絶対的な立場に立たしめられた。

ライプツィヒ論戦はここにその絶頂に達した。教会の権威か神の権威か。神と個人の魂の間に押し立てられていた教会の壁は押し過ぎた教会人の手によって崩れ落ちた。ルター自身、この時拠るべきは「聖書のみ」、立つべきは「信仰のみ」の意味を新たに深く発見したにちがいない。

ライプツィヒ論戦は、人間の打ち建てる一切の宗教的なものに——それが教皇権であろうと、教会組織であろうと——福音の本質はないことを明かにした。ただ神の霊言においてのみ人は生くべきことをルターをして告白せしめたことになった。聖書を城とするルターを通して神の言が自らの力で勝った論戦であった。

一〇　破門

封建制と教権宗教

自我を主張しようとするのではなく、良心の声を正直に聴かんとし、勝敗を問題としようとするのではなく、真理の所在を明かにせんとしたルターは、論戦に表面上敗れたことによって却って真理を明確に把み、うち萎れた感情の底から新たに力を得て立ちあがったのである。今や教皇と教会と宗教会議の権威、要之、教権は彼にとっては公然の敵となった。「真理を擁護せん」との素志における真理内容はいよいよ豊かなものとなり、その志は更に堅うされるに至った。

ドイツの大学も民衆も、宗教的にのみならず、政治的にまた経済的に、ローマの圧迫を蒙ることを快しとしていなかったから、すなわち、彼らは良心に反した教権宗教を非となし、その重税による窮乏を不当な運命と感じ、英仏諸国の如き国家的独立性を欠く封建制度を非となし、その

重税による窮乏を不当な運命と感じ、英仏諸国の如き国家的独立性を欠く封建政治に慊らなかったから、ルターがローマに対して正面衝突の形勢になってきたのをむしろ欣んだのである。真理のために火刑に処せられたフスの同郷ボヘミヤ人が、ここに勇敢なる後継者を発見して歓んだのは当然であった。ルターは新たにフスのものを読み、肝胆相照すもの多きにおどろいた。星は星に応える如く、真理は孤にして孤ならずである。彼はヴィッテンベルクに帰ると直ちに研究を続け、講義と説教をつづけ、新たに言論戦を開始した。

印刷術と言論戦

グーテンベルクが一四五〇年に印刷術を発明したことは、この宗教改革にあたりルターに図らずもこよなき武器を提供してくれることになった。すなわちこの一五一九年に彼が出版したパンフレットは五〇種に達し、同年のドイツ出版総数一一一種の約半数を彼が占めている。

翌一五二〇年は特に彼の言論戦の旺んな年で著作数二〇八種中一三三種がルターのものである。ルターのものが出版されようとすると、群衆は印刷所の戸口に押しかけた。これを買った者は家に帰り着くまでに読まざるを得ない気持であったし、群衆も本を買い得た幸運者に迫って、其処此処の辻で高らかに朗読してもらわねば承知しない有様であったという。メランヒトンの感想に言う、「何びともルターに比べられない。全国民の心は事実彼に信頼している。誰が彼のよ

うに信仰に満ちた貴い言葉で全ドイツの心を動かす者があろうか。貴族も農民も諸侯も、婦人から子供に至るまで、彼の言葉に動かされている。」

教敵エック

一方エックはミルティッツ等が徒らに策を弄するのみで、断乎たる処断に出ないローマに迫り、破門状を自ら起草して、教権によってルターを無き者にせんとの運動を進めた。これに反して、ドイツ側には側面的な支持者がルターの味方として現われた。人文学者のエラスムス及ピルクハイマー、同じく人文派の騎士ウルリヒ・フォン・フッテン及びフランツ・フォン・ジッキンゲン等がそれである。しかし彼らはローマに対する共同の敵であっても、本当の福音の立場でないことが後になってルターに迷惑を及ぼすこととなる。しかしまた悲しむべき現象があらわれた。それは彼の恩師シュタウピッツが竟に教皇側を離れず、真理を認識しつつも真理に立ち得ず、ルターと訣れた一事である。誤れる謙遜に対するキリストの怒りを以てルターは忠告を発したのであるが、温和なシュタウピッツには烈火の如き真理が耐えられなかったのであろう。

破門状

一五二〇年六月十五日という日に、ローマ教皇の令書、すなわちルターに対する破門状が発布

された。破門状を落手してから六十日以内に令書の示す条項に従って自説を翻さぬ場合は破門の効力は発生して、その結果がどうなるかは自明のことであった。ルターはかねてより覚悟のことであったから驚かなかった。むしろ彼は愈々熱烈な言論戦を展開した。

宗教改革の三大著

ルターは現実が波だってきても現実に脚をさらわれることがなかった。そこに信仰の人たる彼の面目が実証されてゆく。彼はこのような状勢の中で何を以てローマに応えたか。彼は宗教運動も起さず、政治運動も考えず、ただ「真理の擁護」と熱心な啓蒙のため著述に没頭した。すなわち二〇年の夏から晩秋にかけて、『善きわざについて』、『ローマ教皇庁について』、『キリスト者の地位の革新についてドイツ国民のキリスト教貴族に与うる書』、『教会のバビロン捕囚について』、『キリスト者の自由について』等の五書を矢継ぎばやに発表している。就中後の三著は宗教改革の三大論述として有名である。彼は現実の問題と取っ組むに当って、それをその根本原理の相においてとらえ、そこで熱戦を戦わせる。彼の論が時代の特殊相を問題としながら永遠的価値を有する所以である。彼がもしこの時、諸侯や騎士等と結託して政治運動、宗教運動を起して国民的英雄として立とうとすれば可能であったであろう。しかし彼は飽くまでも真理の戦士、福音の信徒として魂の世界の改革を念とし、この一線を貫こうとした。パウロ、アウグスティヌス

と共に彼もまたキリストの弟子らしく戦わんとしたのである。

ルターの諸著書が焼かれる

その間ルターの著書は、ローマ側では目に触れ次第悉く焼き棄てるという乱暴が行われ始めた。にも拘らず、国内におけるルターの信望は高まり、フリードリヒ賢侯の如きは彼を護ろうと堅く決意するに至った。九月下旬、マイスネル教会の扉に破門状がエックによって掲げられ、ローマの特使ミルティッツはフリードリヒ侯にルターの身柄引渡しと著書の焼棄てを要求する。しかし同侯がこれを拒否したことは言うまでもない。彼の著書はなおも諸所で焼かれる。破門状掲示によりヴィッテンベルク大学の学問の権威は侮辱される。令書を見てルターの義憤は燃える。彼は破門状に就てスパラティンに書いた、「ここではキリスト自身が罪に呪われている」と。隠忍していたルターもいよいよ一つの激越な行動に出でざるを得なくなった。天的自由と必然に迫られて発する言葉、為す行為は、パウロも告白している如く、「やむを得ざるなり」であって、この天的なやまれぬ言動が本ものの、それ自体が活きた真理、真の実存で、無的実存というものである。「我は道なり、真理なり、生命なり」と自己を告白したイエスこそその最たる者であった。彼は神絶対に在って言動していたからである。「天を相手とせよ」といってその気魄で生きていた南洲が、止むを得ざるに出る言動を「至誠」といっていた消息がこれに通ずる。

ルター破門状を焚く

一五二〇年十二月十日早朝、令書落手後六十日の満期と共に、彼は破門状焼き払いの告白を大学の掲示板に掲げた。告示の如く、この朝九時にヴィッテンベルクの大学教授、学生、市民等はエステル門前の広場に集った。寒空の下に異常な焚火の用意がされてあった。合図と共に火が点ぜられる。ルターは燃えあがる火中にまず教令書を投げ入れた。やがて彼はラテン語で「汝神の聖徒を苦しむる如く、今や尽きざる火汝を苦しめん」と叫びながら破門状を炎に投じた。ルターはその燃え尽したのを見て大学へ引きあげた。が、学生は更に教皇側のエックその他の著書を荷車に満載して市中を練り廻り、再びエステル門前に来て、焚火の余燼の中にこれを転ばしめ、残らず焼き払ってしまった。彼らは再び讃美歌をうたって解散した。

中世世界の最大の権勢者教皇の令書を一介の僧侶が焼き棄てたという行為は、当時の人には狂気か暴挙である。しかしいずれでもなく、神における深き決意に出でたもの、死を賭して真理のため戦わんとの自覚に基づいたものであった。ルターの胸中をしずかに思うことなしにこの一挙を徒らに英雄的行為として痛快に思うことはゆるされない。

何を以て人が人を破門し得る。それは出来るとしても、信仰は破られも焼かれもしない。権威は神に在る。真理も神のものである。このことを主張せんがために、彼の戦はこの焚書の一挙と

共に本格的段階に踏み入った。時に彼は三十七歳の壮年であった。真理の貴さよ、個人の魂の厳かさよ！　真理そのものなる神とキリストにこそ栄光はあれ。

一一　ヴォルムスへ

独乙帝カルル五世

ライプツィヒ論戦の闘われた一五一九年に独乙政界は一変動を招来していた。すなわちその年の一月にドイツ老帝マクシミリアンが歿したため、かの七選帝侯（ライン河畔のマインツ、トリエル、ケルンの三大司教とプファルツ伯、エルベ流域のザクセン侯、ブランデンブルク侯とボヘミヤ王）の間で二大候補者カルル（マクシミリアンの孫）とフランシス一世（仏王）に関して選定の問題が起きていた。この両者間には数ヶ月に亙り烈しい競争が行われたのであるが、カルルは若冠で且つスペインの血を多分に引いている混血であり、フランシスは仏王であるため、新しい時代を迎えようとしているドイツ国民の世論は孰れにも賛意を表し難く、むしろ独乙諸侯間に勢力があり信望の最も厚いフリードリヒ賢侯が選ばれる状勢となった。しかし、彼は自らの高齢

と領地財源の大ならざるを理由として帝位を固辞し、自らマクシミリアンの遺志を支持してカルルを推したので、カルル五世は遂に六月独乙皇帝に当選するに至った。しかしこのスペイン王カルルが立つに至った背後には教皇レオ十世の力がはたらいていたことは言うまでもない。

カトリック的教育を受け、しかもラテン系のスペイン、ネザーランド、オーストリヤに領土を有つ運命の寵児カルルがこの度ドイツ皇帝となったことは、「ルター的異端」の精神に漲りつつあるゲルマン独乙にとっては確かに矛盾撞着の現象であって、フリードリヒが敢て帝位に立たなかったことは、少なくとも政治的には「再び捉え難い運命の好意——世界史的瞬間——を逸した」と言い得よう。教皇及びこれと結託して中世に逆流せんとするカルル的なものに対してルターは必然戦わざるを得なかったのである。

破門から国会へ

破門から国会への中間時もルターは多忙であったが、画家のルカス・クラナッハとの協作で「キリストと非キリストの受難」というような、通信本の出版もやった。この絵本では聖句に教会法の文句を対称させ、キリストの生き方と教皇の生活を——例えば弟子の足を洗うキリストに対して、足の指に接吻させている教皇。神の宮から両替屋を叩き出しているキリストに対して、教会を免罪符の市場としている教皇。十字架を負うイエスに対して、人に担がれて反っくり返っ

ている教皇。という具合に——対比させて、民衆の眼と心に直接訴えた。

破門は極刑の宣告を意味する。しかしルターは今や単なる個人ではなかった。最大の選帝侯フリードリヒを始め、貴族、騎士、僧侶、そして民衆の間にルターの支援者たちは隠然たる大勢力をなしていたというも過言でなかった。それ故カルル五世と雖も教皇に応じて直ちに彼を捕えるが如きことはなし得なかった。ルターは一応国会で審議されるを要した。そこにはフリードリヒの好意ある正当な勧告や、ローマ側の特使アレアンデルの奸策や、カルル帝の政略などが錯綜していたとするも、サタン的勢力や術策を越えたところに、偉大な神的必然が大きく動いている。ヴォルムスの国会は来らざるを得ない。中世はここにその好むとこのまざるとに拘らず、自己審判を余儀なくされたのである。

一五二〇年の暮、親友スパラティンに宛ててルターはヴォルムス召喚の件につき、こう書いている。

「若し私が召喚されるならば、私は力の限りを尽して往こう。健康上往けないときは、病状のまま運ばれたい。皇帝が私を召喚しても、神が私を召し出だし給うのだということを信じて疑わない。彼らは私から教えを受けるために招くのでないから、恐らく暴力沙汰に出ようけれども、一切を神にゆだねまつるの外はない。バビロン王の炉の中で三人の青年を護り給うた者は、今もなお生きて統べ給う。たとい神が私を護り給う意志なしとすると、私の首の如きは、是れを大いな

る辱めを受け、あらゆるいまわしさと多くの滅びを刈りとって殺されたキリストに較べれば問題にもならぬ小さなものだ。ここに問題とすべきは、身の危険や幸福ではなく、我々が一旦とりかかった福音を不虔者のあざけりにしたり、悪魔たちの乗ずるところとしないことだ。……何でも私から期待して可い。ただ逃避と撤回だけは駄目だ。私は逃げない、況や取り消しなどはしない。主イエスが私を強めて下さろう！」

ヴォルムスへの旅

越えて一五二一年の春三月二十六日のことである。四月十六日までにヴォルムスに出頭すべき旨を記した召喚状と故紙にもひとしい旅行保護券がルターに交附された。これより二日前、彼はある友人に書いて言った、「彼らは私が多くの命題を取り消すべきを主張している。けれども私の取り消しはこうだ、曾て私は教皇がキリストの代理だと言ったが、今はそれを取り消して教皇はキリストの敵で悪魔の使徒だと言おう。キリストをあきらかに呪っているあの不埒なあつかましい不虔が私にどうしてもそう言わせるのだ。」

彼はヴォルムスへの旅にのぼる前日、四月一日に友人リンクにこう書いた、「私の確かに知っていることは、我らの主イエス・キリストが生きて在まし、支配して在り給うことだ。私はこのことを知り且つ信ずるゆえに、教皇が幾千あるとも怖れない。我らの中に在ます彼は世に在る者

より大であるからだ」。

明くれば四月の二日、いよいよ出発の日である。刎頸の交り永きメランヒトンは離別を惜しんだ。ルターは彼に言った、「親愛なる兄弟よ、仮令(たとい)僕が不帰の客となろうとも、たとい敵が僕を殺しても、君は真理を教え、真理を護って前進してくれ給え。君が生きている限り、僕の死は何でもない」。真理！　これはルターを支配していたガイストであり、ロゴスであり、パトスであり、エートスであった。真理はルターの感激の泉であり、平安の根拠であった。

小さな幌馬車が用意されていた。これに乗り込んだのはルターと三人の同道者（ライプツィヒ論戦にも同伴したアムスドルク教授、ポムメルン出の青年貴族なる学生シャーフェン、及びアウグスティン派の修道僧ペーツェンシュタイネル）であった。伝令官は双頭黒鷲の国章を附けた黄色の方旗を翻し、ラッパを吹き鳴らしながら先駆した。ヴィッテンベルク市民は悲壮な想いで彼れを見送った。

この異端者は沿道の市邑で敬意を以て迎えられた。ライプツィヒ、ナウムブルクを過ぎてヴァイマールに来たとき、ルターはおのが著書の没収という勅令発布を知った。しかし彼の心は毫も挫けなかった。送迎の民衆のため、見栄えもない幌馬車はしばしば宛然凱旋将軍の行列と化した。エルフルトの歓迎は非常なものであった。そこに昔なじみの修道院では福音を説いた。今もなお遺っている有名な説教であった。

送迎相継ぐ旅路の疲れに彼はアイゼナハで病んだ。フランクフルトに到着した頃はかなり衰弱の色が濃かった。しかし彼は意気軒昂、主に支えられていた。教皇配下の者たちはルターの信望当るべからざるものあるを見て恐れた。

フリードリヒに随伴してヴォルムスに滞在しているスパラティンの親切な警告に対してルターは四月十四日、フランクフルトから書き送って曰った、「わがスパラティンよ、サタンは一再ならず病を以て私を阻もうとしているが、我らは往く。アイゼナハから此処までの全道程は難儀であった。そして曾て識らなかった患難に今も苦しんでいる。皇帝カルルの勅令は私を威嚇するためだと承知している。しかしキリストは生きて在まし給う。地獄のあらゆる門が開かれ、空中に蔓る悪霊どもが阻むとも（エペソ二・二）、我らはヴォルムスへ入って往く！」



ウォルムス国会に於けるルターの記念像
HIER STEHE ICH,
ICH KANN NIGHT ANDERS,
GOTT HELFE MIR AMEN!

一二　ヴォルムス国会

ルターのヴォルムス入り

ヴォルムス北方二十五粁オッペンハイムに着いたとき、ルターはドミニカヌス派の僧ブッチェルに出迎えられる。この僧はカルル帝の聴悔僧グラピオにルターがジッキンゲンの居城で会見すべき用件を齎らしたのであるが、ルターはその招待を辞り、御用とあらばヴォルムスにてと言って行を進めた。

一五二一年四月十六日の朝十時、ヴォルムスの市民が朝食を認めていた頃、彼は市に乗り込んだ。彼の来着を報ずるラッパが教会の望楼から鳴り響いた。もの見高い市民は飛び出した。城市の門まではジッキンゲンが遣わした百騎の騎士が同道した。市中を八騎に警護されて進んで来た彼の幌馬車は「聖ヨハネ騎士館」の前で止った。長途の旅路であった。彼はすべてに打ち勝って

来た。雨露に、病苦に、歓迎に、妨害に、奸策に。彼は車から降り立ったとき、爛々たる眼光をもって群衆を見廻しつつ言った、「神は私と皆に居て下さろう！」

大事を前にし身辺繁忙の際であったが、翌朝彼は一人の貴族をその病床に見舞った。所望の達せられたこの病者は、ルターから慰めを与えられ、深く感謝した。想うにルターのルターたりしところは、彼が死に至るまで魂の友として、キリストに在って生きたことにあろう。

ヴォルムス国会の情景

同じ朝、一方では例のアレアンデルが首班となって教皇党や皇帝一派と種々その日の対ルターの議事を練り画策を凝らしていた。その日の午后四時ルターは議場に出頭すべき命を受けた。群衆のために大通りを避けねばならなかった。皇帝の宿所であり、司教館である議事堂に彼が着いた時、老騎士フルンツベルクはこの「憐れなる僧」を激励したが、彼は「神の聖名のゆえに」戦うと応えた。やがて彼は議場に案内される。そこには皇帝カルル、その兄弟、諸侯伯、貴族、教皇の使節及び司教達、諸州及び自由市の代表者、外国使臣等が煌星の如く居列んでいた。すべての視線がルターに注がれた。彼は破門された異端者であるが、その態度には犯すべからざるものがあった。彼はやがて被告の席に着く。机上には彼の著書が堆く積まれてある。

皇帝の命を受けてトリエルの大司教エックが訊問にとりかかる。訊問は、彼の眼前の著書が悉

く彼のものであるか、若しそうならばその内容を固執するか、或はその一部又は全部を取り消すか、というのであった。彼は読み揚げられる書名に対して逐一「然り」と答え、更にこれ以上書いた旨を告げた。訊問の後の部分に対しては、それが「信仰及び心霊上の重大問題」であり、「天地間の最重要事」であるから、予め熟慮したき旨を述べ、「神の言」に対して彼がいかに良心的であるかの態度を明かにした。しかしその応答が声低く聴きとり難い程であったので、彼が怯えていたのではないかと想像する者が少なくなかったようだが、それはルターの心事のとりそこないである。彼にはこの時「我と我が言とを恥づる者をば、人の子もまた……栄光をもて来らんときに恥づべし」（ルカ九・二六）の句を引用して応えたほどの自覚があった。彼は人間的確信や勇気の英雄ではなく、聖霊の前に謙虚であるからこそ、神の真理においては聖霊の力にあずかって強い人であったから、天下の心魂の帰趨に関わる大事に対して、飽くまで重大なる責任をとるべく、自己に対して良心的に無力となったのである。ルターの正直なこの弱さにこそ、真の彼が現われていたのである。ところで並み居る者ら、敵味方の心は異様に波立ち、ルターのこの真の面目は見損なわれた。

歴史的な一五二一年四月十八日

ルターは二十四時間の猶予を与えられて、宿舎に戻った。その晩彼はウィーンの一友人に短信

を認めて斯う結んでいる、「だが私は一点も取り消さぬつもりだ。それはキリストの恵みによるのだ。」相継ぐ知友の訪問や準備のためその夜は竟に徹夜をしたが、真理に即しての熟慮とキリストの中への祈りとにより、応答の道はあきらかに示され、天来の力が全身に満ちた。

四月十八日の夕が来た。群衆のためにすべての参集が遅れ、国会の開かれる頃は陽が既に傾き、議場は篝火に照らされるを要した。連年のあらゆる労苦のため極度に痩せている彼の相貌、蒼白に近いその顔色が燈の下に映し出された。ただ眼光だけが深く光り、敵の眼には無気味に見えた。その意すでに決せる彼の態度も音声もおのずから昨日とは別人の観があった。

彼はおのが著書を三種に分ち、第一は信仰問題に関するもの、第二は教皇庁の現実を攻撃したもの、第三は教皇党との個人的論戦に関するものとなした。第一を取り消すは、真理に背き、万人の魂を危くするものなるがゆえに、絶対になし得ぬところ。第二を取り消せば、教皇の暴政をゆるすことになり、これまた真理に反することなるがゆえに、能わぬところ。第三には個人的過激の論なきに非ずと雖も取り消すを要せず。しかしながら何びとでも自分の誤謬を指摘してくれるならば欣んで聴く旨を答え、更にキリストの「わが語りし言、もし悪しくば、その悪しき故を証せよ」（ヨハネ一八・二三）を引用して、こう結んだ、「高き人も低き人も、誰であろうと反証を挙げて私の誤謬を論証し、預言的〔旧約聖書〕或は福音的文書〔新約聖書〕によって私を説服して戴きたい。私がもしその点において教示されるならば、欣んでどんな誤謬でも撤回し、私は自

分の著作を火中に投ずる最初の人となるであろう。」

皇帝カルルがドイツ語を解さないので、彼の弁明はドイツ語とラテン語で二重に行われ、二時間も要した。皇帝はしかしルターの神学的論法が解らず、腹立たしくなり、彼の著書の中で宗教会議を否定する主旨のものに対してその取り消しを迫った。簡明な即答を迫られたのでルターも簡潔に応えた。

ルターの偉大な「否（ナイン）！」

「皇帝陛下が簡明な答をお要めになりまするので、愚僧は角もなく牙もなき答を申述べます。私は聖書の証言によって或は明瞭な道理によって説破されない限り取り消しません。何となれば教皇も宗教会議も簡単に信ずるわけに参りませんから。というのはこれら両者はあまりにもしばしば誤謬を犯し、自家撞着の論をなしたこと瞭かでありまするから。私は、すでに引用しましたる聖書に打ち勝たれた者であり、私の良心は神の言に捕えられております。それゆえに私は何ごとも取り消し得ませんし、取り消そうとも欲（おも）いません。良心に反して行動するは苦しく、不安であり、危険でありますから。私はここに立っている、私はかく〔告白〕するほかはない、神私を助け給わんことを、アーメン！（Hier stehe ich, ich kann nicht anders! Gott helfe mir, amen!）」

聖書の人ルターの勝利

エックは言下にルターの「良心」を呪った。皇帝は更に宗教会議に誤謬があり得るかを質した。ルターは不動であった。篝火が揺ぎ出した。大事は決した。皇帝の閉会宣告は蛇足の感であった。スペイン人等はルターを罵った。ルターの味方は彼を囲んだ。外に出ると群衆が黒山のようである。火刑か投獄か。ルターの運命を気づかって群衆はわめき立った。ルターは自分が護られているのだと群衆に叫び、ようやく宿舎に帰った。そこにはスパラティンを始め多くの知友が待ちあぐんでいた。ルターは彼らに迎えられるや双手を揚げて「やったぞ、やったぞ！」(Ich bin hindurch! Ich bin hindurch!) と叫んだ。

ルターはよくぞ突破した！　彼は本当に棄身であった。ルターは何によって勝ったのか。選帝侯や貴族や騎士の援護によってか。彼の学問と勇気によってか。彼の良心と信仰の力によってか。しかし単なる良心でも信仰でも危い。彼の良心と信仰が聖霊に確っかりつかまえられて聖霊の力にあづかっていたからである。聖霊に在る一個の人間 (ein Mensch im heiligen Geist) が、真理に立って如何に自由であり、強くあるかを、「基督者の自由」を彼自ら実証した。

噫、一五二一年四月十八日の夕、ヴォルムスのルターによって中世はその幕をおろされ、近世はその自由の星を点ぜられたのである。

一三　ワルトブルク城

雷霆は已むを得ざるに震う

「教父マルティヌス博士は皇帝、諸侯、国会議員の前で、ラテン語でもドイツ語でも、善く弁じた。が彼はあまりにも大胆すぎるように思えた！」とはその夕、老選帝侯フリードリヒがシュパラティンに洩らした所見であった。「あまりにも大胆」、然り神の真理は時あってか雷鳴電閃の如く世の暗雲を突き破って確然と顕われんことを欲する。そのことのために神に捕えられた者は「あまりにも大胆」ならざるを得ないのである。「雲烟は已むを得ざるに聚まり、風雨は已むを得ざるに洩れ、雷霆は已むを得ざるに震う。斯に以て至誠の作用を観るべし」（『言志録』）という。神の偉大なる必然によって動いたルターのヴォルムスにおける言動は正に此の如きものであった。それゆえに、かの有名な「私は此処に立っている、私はかく〔告白〕するほかはない、神私

を助け給わんことを、アーメン」は、果してルターが弁舌の終りに発言したかの歴史性を疑問にするむきもあるが、国会における彼の全言動がこの一言に凝結され得ることを思えば、これをもって彼の根源告白と称うことができよう。

天的必然即自由

神の必然の動くところ、そこに自由がある。魂の自由、良心の尊厳、個人の解放、万人の平安、真理の顕現のために戦ったルターが、断じて神抜きの自由も良心も個人も万人も真理も主張したのでないことを現代人はよく銘記しなければならない。神と神の言の権威に服し、聖霊における自由を以て立ったヴォルムスのルターを新たに把握することを要する。ルターは夢にも人間をそれ自体主張したのではない。我々が民主を唱うべくば、万人は神の前に、神の下に斉しくただ人間に過ぎないという大前提のもとでなければならない。このことはつねに新たに厳かに念とすべきことである、特にわが日本において！

偶像破壊

まことにカーライルが喝破したように、「如何なる預言者にも劣らず、偶像の破壊者であった」ルターのヴォルムスにおける意義は、この偶像多き国においてどれほど強調されてもなお足りな

い。啓示の神か、人間の偶像か。そして偶像の中、最たるものは焉んぞ知らん自己自身である。偶像は欲望の対象ではある。それはどんなに高尚であっても、欲望の主体以上ではない。しかも欲望の主体は「偉大にして惨めなる」この自我である。然るに啓示の神は自らを現わしつつ、この「自我」なる我々を審き且つ砕かんとし給う。この神の粉砕を身親しく体験せずして我々はこの神を知ることは出来ない。この神は実に審くことにおいてのみ、恵まんとする神である。この驚くべき、畏るべき神、神と呼ばるべき唯一者に、キリストにおいて出会った絶対恩寵の体験を告白してやまぬのがルターであった。

真乎の預言者

国会後一週間ルターはヴォルムスに滞留して、皇帝及教皇党との折衝に応ぜしめられたが、彼は妥協に応ぜず、教権主義の頑冥なローマに対して今や大異端者たることを自ら憚らなかった。最早「教会の平和」のためを顧うことは出来ない。彼もまたキリストに倣って「剣を投ぜんために」遣わされた者であった。問題は信仰問題、神学問題、実に福音の本質問題であって、一個の教皇が堕落しているとか、教会が腐敗しているとかいう相対的現実の批判ではない。人間の現実にはどこにでも欠陥や誤謬はある。そんなことを問題としているルターではない。この点においてルターの味方と思われる者の中にもルターを誤解、誤認している向きが少なくなかった。真乎

の預言者はつねに細き路を歩かせられる。モーセもエリヤも、ホセアもイザヤもエレミヤも、パウロもヨハネも単独的存在であった。況んやイエスは天涯孤独であった。

ルカス・クラナッハへの手紙

調停一週間はルターの不動のために遂に決裂となった。彼を待つものは逮捕と処刑のみ。四月二十六日、有効二旬日の旅行保護券を懐にして彼は同じ幌馬車でヴォルムスを出立した。その翌々日、ヴィッテンベルクにいる画家ルカス・クラナッハにフランクフルトから書信を送って曰く、「貴下に神の御祝福を祈る。私は幽閉されることを承知した。何処であるか、自分は未だ知らない。だがむしろ暴虐の君主らによって、特に憤怒しているザクセンのゲオルク大公の手に罹って死にたい。けれどもその時の来るまで、厚意ある人達の計らいを蔑ろにしてはならないと思う。暫らく黙して耐えねばならない。『しばらくせば汝ら我を見ず、またしばらくして我を見るべし』とキリストは言われた（ヨハネ一六・一六）。この度もそんな具合にゆけば可いと希んでいる。しかし、最善なるもの、すなわち神の意志がこの事においても成らんことを祈る、天に於ても地に於ても。アーメン。」

ヴォルムスからの帰途

彼は道中説教をしたり、論説を書いたりすることを禁ぜられた。しかし彼は言った、「私は皇帝の欲することをすべて履行しようと思う。けれども、神の言を束縛するわけにはゆかない。」同じ四月二十八日に彼は皇帝や諸侯に書翰を送っている。それを読むと、彼が如何に神と神の言をのみ念としているか、これを主張して已まぬが瞭かに観られる。彼の祖国に対する愛も唯だ神中心、福音中心の一点からのみ発していることを知る。

旅はフランクフルトからテューリンゲン地方に向う。五月一日の夕に慕しいアイゼナハに着いた。その翌朝は大方の友人と別れて、唯二人の同伴者と共にテューリンゲンの森の彼方のメーラに、彼の叔父に当るハインツを訪ねた。四日の午后メーラを辞してシュヴィナの方向に馬車を駆った。それは軍道に出て、ゴータやエルフルトを過ぎてヴィッテンベルクに還る道順であった。馬車は夕暮近く、シュヴィナを過ぎ、アルテンシュタイン城の傍を通って、やがてはグラースバッハ草原に開ける林間の隘路にさしかかった。

奇襲

するとその時突然森の懐から四名の騎士が立ち現われた。飛箭一矢、馭者の頭を掠めた。馬車は立往生となる。かの同伴者ペッツェンシュタイネルはルターに警告されて走り去った。荒武者らは大声叱呼してルターを襲い、馬車から引きずり出して騎馬に乗せてしまった。もう一人の同行

者アムスドルフ教授はこの暴挙に悲鳴を挙げつつ馭者と共に難を避けた。ルターを奪った騎士の一隊は追跡者を予想し、森林を九十九折れに登って跡を晦ました。夜更けて十一時頃、山賊の一行は貴重な獲物と共にやっと山頂に着く。桔橋が卸された。一行は深夜にそこの城の中に黒い姿を消した。ワルトブルク城は何事もなかった如くテューリンゲンの夜空に黙々としてそそり立っていた。五月四日のこの極秘裏の失踪事件の中で、真に驚き嘆いたのは馭者一人であった。他の者たちは神の御はからいに感謝した。

ワルトブルク城

ワルトブルク城！　二十年前、その山麓アイゼナッハの町で聖ゲオルク学校時代をかれは送ったのである。そのかみを静かに回想してすずろに感慨深きものがあったであろう。朝に夕に望み見ていた慕しのワルトブルク城に今こうして幽閉の身となろうとは。この町でコッタ婦人の愛に浴したことは忘れられない。後年彼は「誰か美徳の婦人を与えられん、その貴さは真珠より遙かに優る」（箴言三一・一〇）と訳した聖句に註して「この世にて婦人の愛にも優って甘美しきものはなく、誰かこれを得ん！」と書いた。聖女エリザベッに関わる薔薇籠の伝説も、中世独乙詩人たちの「歌合戦」の華やかなりし物語もワルトブルクときり離すことのできないものである。しかしルターは此処で何をなすべく捕えられたのか。彼はこの場合もまた人に捕えられたのではな

く、神に捕えられたのであった！

一方ルターが失踪したことは、噂が噂を呼んでドイツ全土に伝わった。そのデマの内容をここに書きつらねる必要はない。画壇の巨匠アルブレヒト・デューラーはその旅日記にこの「聖霊に輝ける人」の喪失を嘆き、「ルターは本当に死んだのか。誰が彼のごとく静かに聖なる福音を説いてくれよう！　彼をしてなお十年二十年の歳月を筆執らしめたならば！」と誌した。同じ噂が敵側の或る者をしてこう書かしめた、「ルターは我々の欲う通りに失踪した。しかし国民がこうも騒ぎ立てては、我々の生命が至極危険だ。我々は蠟燭を灯して隈なく彼を捜し求めて呼び還さねばならない」。

世の嘆きと呪い、騒ぎと跟えを凝っと瞰下してワルトブルク城は立っていた。



西南から見たワルトブルク城

一四　籠城のルター

騎士イェルク

ザクセン老侯の義俠心がルターを籠城させたことを知る者が、彼の失踪後二ヶ月あまりも、居なかったことはむしろ不思議なほどである。事情余儀なくルターは僧衣を脱いで、長剣を腰に佩し、頭髪鬚髯は伸びるにまかせた。かくて博士（ドクトル）ルターは騎士（ユンケル）イェルク（Junker Jörg）と化した。時折城門を出て森林を騎（の）り廻したり、更にはアイゼナハを始め、その他附近の市邑にまで大胆にも姿を現わし、市場や田舎旅館で平民達と快談を交えたりした。が何びともこの髭の騎士が福音の使者であることに気づかなかった。

八月のある折に、彼は二日間の狩猟に参加した。その時の感懐をスパラティンに書き送って言う、

「……われらは野兎二匹と鵠鴣若干を獲た。閑人には恰好の稼業だ。網や猟犬の間に居ても、私は神学を考えていた。……私は狩猟を悪魔の業に比べてみた。悪魔が不虔の勢子や猟犬すなわち、司教や神学者らを伴れて無辜の小さな動物を悪賢くも駆りたて捕えるといった意味より外に譬えようがあるだろうか。単純な信徒たちの魂のことをこんな風に考えて憐憫の情遣る瀬なきものがあった。おまけにもう一つ、もっと恐ろしいことがあった。私が骨折って殺さずに捕えた小兎があったが、私はそれを上衣の袖の下に隠して一寸道を外した。ところが犬の奴らがこの可憐な兎を嗅ぎつけ、上衣を通して後脚に嚙みつき、喉元に喰いついて殺してしまった。本当にこんな具合に教皇も悪魔も、既に救われた魂を阻害して私の骨折を無にしてしまうのだ。……」彼はこの経験の揚句、狩猟の如き遊びを悪んだ。

「パトモス」

彼は親しい友人にはしばしば手紙を書き送った。「広野から」(aus der Wüste) とか、「パトモスの島から」(von der Insel Patmos) などと記して、或は旧約の預言者の魂を想い、或は新約の使徒ヨハネの境地に自らをなぞらえた。彼はある時書いた、「私は不思議な捕囚人だ。というのは半ば私の意志に従い、半ば私の意志に反して此処にいる。私の意志に従ってというのは、主がこの事を欲し給うからであり、私の意志に反してというのは、聖言のためには私はむしろ民

の中に居たいから。」彼はまた「肉の刺」のために苦しんだことがあったが、メランヒトンに書いて、「神様が私をこんなに苦しめ給うのは、おそらく私をこの幽所から民衆の中にひっ張り出そうとしておられるからだろう」と言った。

インク壺

歴史と伝説と神秘に包まれたテューリンゲンの城中でルターが悪霊と戦ったことは事実である。インク壺を壁に投げつけたことはおそらく事実だ。彼がキリストの名を呼んでサタンに打ち勝ったことがしばしばあったのは、彼の告白によっても瞭かである。彼が聖書に記されてある超自然的現象を信じたことは我々よりも遙かに強く現実的であったから、サタンとの戦も単なる内心の出来事ではなかったはずである。「今や私は全くの隠者となった。けれども寂しくはない。沢山の奸悪な悪魔が私を取り囲んでいるからだ。でも彼らは私の時間を奪う。しかも性悪く。貴君！　どうか祈ってくれ！　キリストが終局に私を見棄て給わぬように！」とスパラティンに宛てて書いた彼の心境が肯ける。

新約原典熟読

使命が彼に要求した真理の戦のため、彼は劇的な外的生涯を続けて来たけれども、彼の勤勉は

独乙的なねばり強さを以て死に至るまで貫かれていたことを決して見のがしてはならない。「私は此処で途方もなく閑暇なので勉強している。ヘブライ語とギリシャ語を学び、間断なく書いている。」実際彼がワルトブルクに来たときは殆ど書籍がなかった。彼の如き勤勉家にとってそれは辛いことであったが、彼は彼の旅嚢に蔵めてあった宝ともいうべきヘブライ語の詩篇とギリシャ語の新約聖書とを実に籠城のはじめの十ヶ月を通して休みなく熟読翫味したのであった。

執筆や書籍

ヴィッテンベルクの友人たちとの連絡がつくようになるや、彼は直ちに書籍の注文をした。彼が城中でまず書いた著作は「マグニフィカート」（ルカ一・四六―五五）と称われる『マリヤの讃歌』の解説であった。すでに詩篇第二十篇まで進められた詩篇詳解（ラテン文）に第二十二篇の注目すべき詳解を加えた。その他『懺悔に就て』の論、『僧侶の誓約』に関する論、僧侶の結婚問題等々、小論説を書いたり、書信によって論じたりしている。しかし彼は城外の同志たちが著々改革の歩を進め、実を揚げつつあるを知って、自分が外的運動の圏外に立たしめられていること、自分の外的役割が無くなってゆくようになることをありがたいと思い、悦んでいた。真理に対する彼の気持が如何に純粋なものであったかは、彼のこの淡々たる心根によってもよく解る。友人アムスドルフに彼はこう書いている、

「私は諸君の尽力が周到であることを聞き及んで悦びに堪えない。私は充分安んじて君たちに事態を託することができる。君たちは私を必要としない。むしろ私が君たちを要するのだ。」優れてはいるが、やや積極性に乏しいメランヒトンへはこう書いた、「貴下に出来ないことは一つもない。私が居なくとも貴下はすべてを処理し得よう。貴下がなぜ私の帰来を所望し、またなぜ私の働きを必要とされるか、私には解らない……貴下と共に居たいのは私の意ではあるが、……むしろ私はエルフルトなり、ケルンなり、その他何処なりとも、主が私のために門戸を開いて福音を説かしめ給う処へ行くことは辞さない。収穫は到る処に多いのだが、刈り入れる人が寡ない。貴君らは皆刈り入れる人々である。我らは銘々の事を考えないで、処々方々に散在している兄弟姉妹のことを考えなければならない。万一にも我々が自分のために生活するなら、取りも直さずそれは悪魔のために生きることで、キリストのために生きることではない。」注目すべき言葉である。天来の福音の泉水を唯だ心の池に淀ませて置けば腐ってしまう。これは溢れて地を潤さねばならない。このような天来の力に由る内的必然に駆られて動くところにおのずから伝道がある。ルターにとって信仰は観念でも心情でもなく、正しく実存的であった。それは預言者たちがエホバにおいて、使徒たちがキリストにおいて真に在り、生き且つ動いていたように。

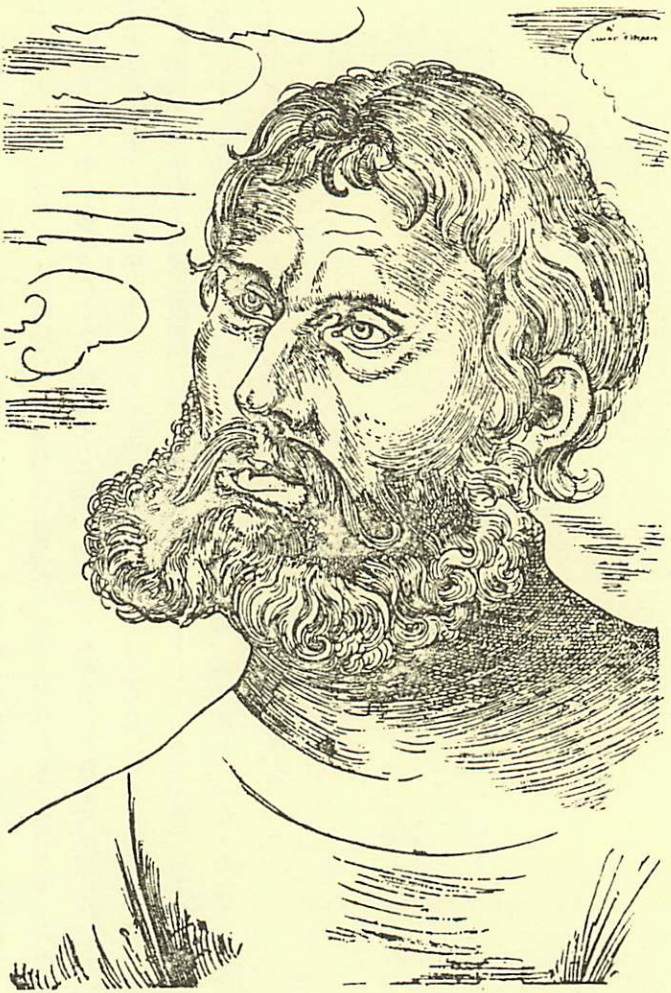
『騒動に対する警告』

我々は城中で彼がものした『騒動に対する警告』という小冊子中の左の一節を真にルター的なもの、然りキリストの精神を生きた一平信徒の言葉として読まねばならない。「私は私の名が沈黙の中に看過されることを願う。また人々がルター派と言わず、単にキリスト者と呼ぶように切望する。そもそもルターが何者であるか、私の教えは私のものではない。私は何人のためにも十字架にかけられはしない。パウロもキリスト者がパウロの徒とか、ペテロの徒とかいう名を称えることを許さず、ただキリストの名を称えることをのみ許した。もしこの惨めな悪臭粉々たる屍の私が、キリストの徒をして私の聖ならざる名を称えしむることが起ったらどうであるか。親愛なる友らよ、断じて此の如きことをあらしめてはならない。我らは党派を一切やめて、唯だキリスト者（クリステン―独乙語、基督者の複数）と呼ぼう。われらが唱えるのはキリストの福音だからである。」

ハルレの偶像

籠城中の出来事で特にルターの憤怒を買ったのは、「ハルレの偶像」事件である。例のマインツの大司教アルブレヒトは、ルターの失踪に勇気をとりもどし、ハルレで免罪符の販売を新たに始めようとした。しかも彼は沢山のいかがわしい霊宝を集め、是をも利用して大衆を惑わそうとした。これを聞いたルターは直ちに「ハルレの偶像を反駁す」という激烈な文を草した。スパラ

ティンもフリードリヒ侯も有罪の宣告を受けたルターが大司教と事を構えることに反対した。しかしルターはスパラティンに激越の書信を送って言った、「……私はむしろ貴君や侯から絶交され、有ゆる人々から絶交されよう。私はすでにアルブレヒトを任命した教皇に反対した以上、何でその任命を蒙った者を恐れよう。社会の平和が攪乱されてはならないと君は言うが、神の永遠の平和が滅亡の子の不敬虔と瀆神的行為に由って破られようとしているのを許し得るのか。スパラティンよ、是は断じて不可だ。侯よ、是は断じて非である。キリストの羊たちのため、私は全力を尽して此の最も恐るべき狼に反抗し、以て天下に問わねばならない。……」。



ルカス・クラナハ画：騎士イェルクとしてのルター．（1522年）

一五　独乙人への聖書

アルブレヒトへの書

それから数週を経た一五二一年十二月一日に、ルターはアルブレヒトに書を寄せ、馬鹿げた偶像の陳列と免罪符販売の中止を迫り、改めない限り世に彼の罪過を質さんと責め立てた。すなわち曰く、「……選帝侯閣下はハルレに再たもや偶像を建てて憐むべき正直なキリスト者の財も魂も害わんとさるるや。……閣下は私が既に舞台を去ったので、私から安全であり、皇帝陛下の権威によって克く圧迫し得んと惟って居られるであろう。それは結構ですが、閣下は、私が地獄の門扉には頓着なく、キリストの愛が要求するところを行わんとしていることを御承知ありたい。地獄を恐れない私に、教皇、大司教、司教の如き無学の輩はすでに眼中にござらぬ。……私は辞を卑うして閣下が可憐なる民衆を惑わさず、奪わず、以て閣下が司祭たる実を示し豺狼の如く振

舞わざらんことを願う。免罪符が詐欺瞞着であることは今や瞭かである。われらは須らくキリストのみを民衆に説くべきである。これ閣下が無智を口実として遁れることの出来ない点である。閣下願わくは事の起源に溯って御一考あれよ。全世界が平隠無事であると思い、一介の乞食僧が教皇に対しては無き者に等しく、その企図は不可能に見えたにも拘らず、如何に畏るべき火が小さき一片の火花から爆発せしかを顧い見よ。……もしなおも偶像が廃棄されぬならば、私はこれを火急的不可避の原因となして、神の教理とキリスト教の福祉のため、教皇と同様に閣下をも公然攻撃し、……全世界に司祭と豺狼の相違を示さねばならない。……私は二週間以内に閣下より同意の御速答あらんことを期待する。もし二週間にして然るべき応答に接しない場合は、私の小著『ハルレの偶像を反駁す』が公布されるでしょう。」

アルブレヒトは三週間目に返答を与えて、無条件的にルターの攻撃に服した。籠城中のルターが如何に静中に動を有していたかはこの一事を見てもわかるが、まことに彼の信仰は福音の力をうちに宿しているものであった。

説教集

彼はすでに五月頃からドイツ語の『説教集』を教会の教育のために作製し始めた。これは彼がワルトブルクで書いた著作の中で重要なものに属するのみでなく、彼自身会心の作とみなしてい

るものである。彼によれば、福音を説くということは、キリストを我らに来たらしめることであり、我らをキリストに齎らすことであって、キリストの教えがわかるということではない。

新約聖書の翻訳

その間、とかく急進的になって来た一部民衆の騒動を気づかってルターはしばしば忠告を発した。やがて彼は一つの新しい仕事にとりかかっていた。それは彼が独乙国民に果すべき最大の義務であり、神から命ぜられた特別の使命であった。これすなわち先ず新約聖書原典の翻訳である。彼自身は是までそのことを思わず、況んや彼自身がその適任者であるとは考えていなかった。彼はすでに七ヵ月を説教集のために費し、今や翻訳に専念するに至ったのであるが、驚くべきことは、彼がなお天下の形勢を看過ごすに忍びず、絶えずそのためにも労していたことである。さきに彼がヴィッテンベルクを秘かに訪ねた際に、諸友に会ったとき、特にメランヒトンがルターに聖書の翻訳のことを勧めたことは事実と見て可い。

しかしながら彼は自分が独乙人に対して永久的価値ある翻訳を成就し得るとはつゆ思っていなかった。十二月十八日に彼はエルフルトの友人ラングに宛てて、「復活祭まで私は此処に匿されていよう。私は説教集を作製し、新約聖書を民衆の言（Volkssprache）に翻訳してみよう。それは我々同志の者がのぞんでいる。聞けば君も翻訳にとりかかっているとのこと。始めたことなの

だから、進めてくれたまえ。どの市も自分の翻訳者を有ちたいものだ。聖書だけは万人の唇に、万人の手に、万人の眼に、万人の耳に、そして万人の心に在りたいものだ！」

ルター以前の翻訳

当時すでに聖書の部分訳は企てられていたし、ルター以前に少なくとも十四種の訳があったという。そもそも独乙語で書かれた最古の文献は実に聖書であった。民族の栄枯を流して易らざるドナウの流が黒海に注ぐ処にゲルマンの一支族西ゴート族がいたのは紀元四世紀頃のことであった。彼らは当時所謂異邦人、異教徒であったが、青年ウルフィラス（Ulfilas）はコンスタンティノープルで改心し、洗礼を受け、三四一年には終に司祭にまで成った。彼は聖書をおのが民に伝えるべくゴート語に訳した。彼は旧約の部分を七十人訳聖書（ギリシャ語聖書）から訳したのであるが、サムエル書と列王紀略が民族の戦争精神を鼓吹せんことを虞れて、これらを故意に訳さなかったことは面白い。独乙系聖書の劈頭に立つこのウルフィラス聖書はルター訳に次ぐ傑作であると謂われている。そして驚くべきことには、彼がゴート語の聖書を書くに際しては、実に彼自ら自国語のアルファベット字母を創作しなければならなかったのであった。

かくも素晴らしいゴート語聖書が民衆のものとなり得なかったのは何故であるか。それはローマが教会語として、神聖な言葉として、ラテン語の外何ものをも赦さなかったことに由る。是れ

実に教権の禍であった。万人のための啓示の書は、宗教的特権階級の壟断に封ぜられ、十幾世紀は徒らに流れた。これまことに神への大なる冒瀆であった。

ルターの出る一世紀半ほど前に、ある無名の翻訳があったが、これは僅かに写本によって増した程度で到底民衆の間に拡まり得なかった。「全能の神が独乙に聖言を降さんとするや、神は彼らに先づ秀れた印刷術を与え給うた。」といった或る年代記者の言葉はやはり摂理を言い表わしている。その後の十幾つかの翻訳といっても、それは結局かの無名の訳本の改作の域を脱しないものであった。しかもこの無名訳本の原典はヴルガタ（ラテン訳聖書）が台本になっていたこと、及び、そのドイツ語それ自体が感心出来ないものであったし、誤訳も相当見出されるという。このようにルター以前の独乙語聖書は努力と数量にも拘らず、数うるに足らぬものであった。しかも一四八六年にマインツの大司教ベルトルドの如きが聖書翻訳の禁令を発しているのを見ても、如何に聖書が民衆の友となるには困難な状態にあったかを知る。

ルターが『教会説教集第一巻』の末尾に述べている言葉は、どれほど彼が聖書そのもの、神の言葉そのものを重んじ、各人が聖霊のまにまに単純に、自由に、その本質を把握すべきかを語ると同時に、また彼自身がどうしてもその聖書を独乙人に与えなければならない立場に置かれていたことを、彼自身の意識を越えて示すものであろう。彼はすなわち言う。

聖書尊重への祈り

「おお神よ、願わくは私とすべての教師たちの解説が没し去って、キリスト者の各人が自分で聖書のみを取りあげ、まじり気のない神の言を自分でつかまえるように！　汝は知り給う、私のこの饒舌により、神の言が如何にすべての人間の言と比較にもならぬものであるか。また如何に何ぴとと雖も神の一言を充分に底までつかみ、如何に言を尽してみても充分に説き得ないかを。神の一言は無限の言である。それはおちついた精霊を以て把握され、省祭されねばならない。詩篇第八四に斯う告げられてあるように、『神自身が私の衷に語り給うことを私は聴こうと思う。』……註解なしにこれが出来るようになれば、その人は我々人間の解説は要らないのみか、妨げとさえなる。だから聖書に親しめ、親しめ、愛するキリスト者よ！　そうすれば私や他のすべての教師の解説は本建築の足場に過ぎない。こうして我々は混り気のない神の言をいつまでも自分で摑み、自分で味わえるようになるだろう。神のみが在まし給うところ、其処がシオンであるからだ。アーメン。」

一六　独乙語新約聖書

新約聖書原典を母語に！

窓辺を掠める凩の風、中空を渡る雲の影、ここテューリンゲンの森に聳え立つワルトブルク城の一室で、一五二一年のクリスマスも旬日に迫る頃から猛然とルターは仕事にとりかかった。台本は二年ほど前に出版されたエラスムス編纂のギリシヤ語新約聖書原典である。エルフルトの修道院時代から取っ組んで苦しみ抜いた聖書、そのアルファーからオメガまで、始めはラテン訳で後には原典で——少なからぬ部分を暗誦し得るまで——親んできた聖書である。学的側面の不備にも拘らず、良心的にまた論理的に、そして最も根源的な信仰的霊的把握を以て研究し、解説して、その本質をよく掘り下げた聖書である。これを彼は今や彼の母語（Muttersprache）に映し出だすべくペンを執ったのである。母語に！　然り、言葉の最も深い意味における母語に、独乙

人のハートの鼓動の感ぜられる、揺籃の子守唄の響を底に有っている母の言葉（Mutter-Sprache）に。彼は啓示の書たる聖書を真に神の言としてつかんだ。彼のつかんだ神の言はギリシヤ語そのものではない。ギリシヤ語という衣の奥に動く神の言そのものである。聖霊によってのみ聴き得る万国語の原語である。丁度七彩の虹の光源たる白光の如き根源語、霊言、である。

神の根源語の把握

このような根源語たる神の言がヘブライ語とギリシヤ語を通して啓示されたのであった。それ故にルターがこのギリシヤ語新約聖書を飜訳する精神は、ギリシヤ語の奥の根源語をギリシヤ語を媒介として、直ちに母語たるドイツ語に映し出すにあった。神の言という光をギリシヤ語というスクリーンを通してドイツ人のハートというレンズに、然りルターというレンズに直射せしめてそこに現じたものが即ちルターによる独乙語の聖書となった。この見解はあまりにも大胆なように聞えるかも知れないが、ルターの聖書飜訳の精神であり、角度であったにちがいない。そして真の聖書飜訳の精神は斯くあるべきものと思う。

真剣な魂が聖書と取っ組んで、竟に神の言に圧倒され、神の言から生命を与えられた。これが言語の天才をして真にドイツ的なドイツ語を縦横に駆使し、創作させる原動力となった事は疑いを容れない。ルターの全人格的信仰と全生命的言語とが一体となって熟知せる愛読書、聖書をド

イツ語で書くという段取りになった事は全く神の摂理、歴史的使命というべきである。宜べなる哉、彼が決河の勢で僅々三ヶ月を出でずして、はやくも一五二二年早春には書き終えてしまったことは。

九月聖書（ゼプテンバー・ビーベル）（September-Bibel）

このようにして新約聖書を訳了の後、さらにメランヒトンの援助も得て推敲を重ねた。その初版が世に出たのは実に一五二二年九月二十一日であった。時にルターは三十八歳。しかしそこには"Das Newe Testament Deutzsch, Vuittenberg."『独乙語新約聖書ヴィッテンベルク』との み銘打たれて訳者ルターの名が記されていない。何故であるか。彼自ら曰く、「この本が何等序文も筆者名も要らず、ただ固有の原作者名と詞書さえあらば足りるのは自明のことと思う」。神語りまた行い給う。キリストが聖書の主人公である。これがルターの確然たる意識であった。聖書が歴史的な地盤において書かれた書であることは誰よりも明確に意識して居た。その相対的歴史的事実が、啓示の光の下では、終末的現実であり、審判と恩恵の交錯している劇的なものであるとの強き意識を彼はもっていたと思う。神とサタンの実在を身近かに彼は体感していた魂であったから。ルターにとって聖書こそは最も現実的な神の書である。それゆえに神自身が原著者であって、神の聖名のゆえに、自己は問題とならなかった。一五二二年の九月に出たから、世にこ

れを『九月聖書』(September=Bibel) と呼んでいる。

ルター聖書 (Luther=Bibel)

これはしかし紛れもなくルターの聖書である。彼自身の多年の研究と身読を土台として、祈りつつ、聖書の劇的現実に身をおきながら書いた訳書なるがゆえに。しかもそのルターは独乙人中の独乙人であるので、この聖書は正にドイツ人の聖書である。十一月一日に友人ゲルベルに書いて、「ドイツ人のために私は生れたのだ、ドイツ人に奉仕するよ」といっているように、彼はどこまでも福音の線上においてドイツを愛したからである。"Evangelisch bis zum Sterben, Deutsch bis in den Tod hinein"「死ぬまで福音的に、死に至るまでドイツ的に」と彼は言った。世界的な福音であるからこそ、ドイツ人がこれを身につければ、ドイツ的な花を咲かせる。日本人がこれを身につければ日本的な香りを放つ。福音がルターを通してドイツ的な花を咲かせたように、同じ福音が内村鑑三を通して極めて日本的な果を結んだ。

もっと突っこんで言えば、福音の火でドイツ的なものが焼かれつつ最もドイツ的となったところに彼の聖書の本領があるというべきであろう。何となればルターはおのれに死んでキリストに生きていたからである。そのことはすでに見て来たようにキリストの十字架の恩恵の力によった。

ルターの独乙語

ルターの聖書の訳文について少しく言及するならば、現代の学問的探究がようやく到達した結論的なものをルターは既に表現していたことは『ルター聖書』にしばしばうかがわれるところである。リーツマンの如き新約学者も「ルターは驚くべき正確さを以て原意難解の箇処を把握している」と歎称している。けだしルターの真理真相に対する洞察力は原典の言葉や歴史的背景に関する知識以上の場合が少なくなかったからである。訳語上の言語についても彼はドイツ平民の言語とその心をよくつかむことに不断の努力を払い、腐心した。

さてルターがドイツ語の聖書を書くに当ってその筆端から選った独乙語はどんなものであったか。彼の生地ザクセン地方は中部独乙で、所謂高地独乙語の範囲に属している。広くもないドイツであるが、方言の差異が相当強いため、諸侯間の公用語が必要であった。彼は文書言語（Schriftsprache）としてこの公用語に或る基準を見出し、ザクセン侯の官庁用語（Kanzleisprache）を土台に用いた。そしてこれは同時にハプスブルク王朝を中心とする公用語でもあったわけである。それは共通独乙語（Gemeines Deutsch）として公用及び学問上の共通語を形成しつつあった。ルターはその公用語の品格の一面をとらえ、形式の面をぶち破り、平民の血の通った生命の溢れた俗語の本質をとらえ来って渾然たる言語及文格を創作した。そこにさきにも触れた如く、

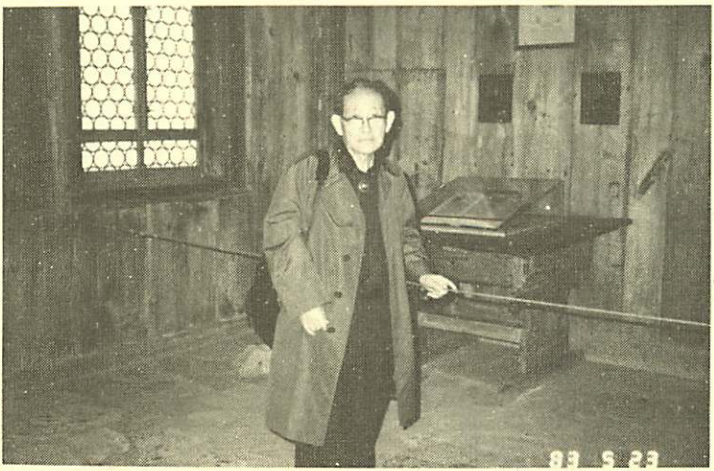
ギリシヤ語原典の脚光があびせられ、神の根源語の魂が息吹きかけられて、ドイツ語は新しい生命と力と豊かさと形態とをかち得るに至った。ルターという人間はあらゆる意味において新高ドイツ語（Neuhochdeutsch=nhd）すなわち現代までのドイツ語鋳造への熔鉱炉となったのである。

更に立ち入って附言するなら、彼は官用語の言語形式、すなわち正字法や語形や文章構造は相当強く採用しているが、素材言語としては彼の郷土語たるマイセン方言（Meißnisch）を中心としている。そしてこのマイセン語がドイツの南方の高地と北方の低地の両諸地方言の中間に位して両者への通融性を有っていたことはドイツ語統一上、極めて有利な事柄であった。しかも彼はマイセン語をも乗り越えたのである。全ドイツ人の聖書が与えられるために摂理は深く動き、創造の霊は彼を奇しく導いた。本来詩才楽才の恵まれているルターであるから、『ルター聖書』そのものの散文も力強い詩的な内的リズムをもっている。況んや預言書や詩篇やその他の詩文は、名訳と言わざるを得ない。

一五三〇年に彼の親友の一人リンクに宛てて書いた『飜訳に就ての書信』（Sendbrief vom Dolmetschen）の中で彼はこんなことを言っている、「ああ、実に飜訳は誰にでも出来る仕事ではない。ところがある狂気な聖者たちは出来ると思っている。これをなすには真に敬虔で、信実で、勤勉で、恭謙で、キリスト者らしく、学識があり、経験に富み、練達な心が必要です。だから、偽りのキリスト者や教派的な輩（Rottengeist）は忠しく飜訳し得ないと思う」。

ルターをひどくけなしたデリンゲルというカトリックの学者すら、こう言っている、「ルターは独乙語に、また独乙精神に、彼の魂を不滅に刻印した人間である。彼を指して国民をひどく謬らせ迷はせた教師となして心の底から嫌うドイツ人も、彼の言語を以て語り、彼の思想を以て考えざるを得ないのである」。刺ある鞭を蹴るは難い。ルターの聖書は神の力で貫かれているからである。実にルターは言葉の最も深い意味で、聖書の人である。

新約聖書が完成すると彼は直ちに旧約聖書の飜訳にとりかかった。そしてなお十二年間の劇的な生活の中にありながら、エネルギッシュに飜訳をつづけ、一五三四年に旧新約全書の初版を出版した。



ルターが新約聖書を翻訳したワルトブルク城の部屋にて（著者）.

一七　城から町へ

父への手紙

ルターの籠城中に、外界では改革運動が具体的に進みつつあった。しかしそれはルターの精神をしばしばあまりにも過激な行動に現わす傾向をもっていた。そのような急進派の先頭に立ったのは彼れの同輩カルルシュタットで、この者はすなわち僧侶の独身制度だけでなく、修道僧の独身誓約をも攻撃する一書を公にした。その公表は一五二一年の夏のことであったが、すでに春の頃から僧侶の結婚が一部において行われていた。その後ヴィッテンベルクの修道僧の一団が修道院主義を棄てて殻の中から出た時、ルターは一文を草し、彼らのために弁明した。ところでこの文書の巻頭に、彼は父への献納の辞を載せ、嘗て父の意に反して世を棄てて修道院に入ったことを謝すると共に、この誤った道を通して実は神が最も深く彼を導き給うことを感じつつ彼は忌憚

なく言う、

「……父上は今日もなお、私を修道院から引き出そうと欲せられますか。どの道、父上はもう誇るわけに参りません。主は父上よりも先きに私を導き出し給うたからです。私が剃髪したり、頭巾をかぶったりするかどうかは、寔につまらない問題です。剃髪と頭巾が修道僧を作るのではないでしょう。パウロは申します、『すべてのものは汝のものである。けれども汝はキリストのものである』と。私が僧衣の属でしょうか。否、僧衣は私の属ではありませんか。私の良心は自由になりました。この自由は最も完全な自由です。それゆえ私は修道僧でもあるし、修道僧でもないのです。私は新たに造られた者です。教皇にではなく、キリストに造られた者であります。」

神の言を重んずるルター

さてカルルシュタットよりも更に過激な者が現われた。それはアウグスティヌス派の修道僧ツウィリンクで、彼はミサや画像の無用をも唱え、暴民がこれに和して教会に乱入、狼藉をはたらくに至った。これらの事をすでに城中で聞き及んでいたルターは、十二月の上旬、外界の形勢を探知せんがため城を出て、ヴィッテンベルクまで身を挺した。彼はその後パンフレットの中で、騒動はどんな場合でも悪であること、改革事業は唯神の言に拠る言論によってのみ成就さるべきを力説した。

我々はルターの精神を Gottes Wort über alles!「神の言はすべてに勝る！」の一語を以て言い表わすことができよう。活ける神の活ける言、その客観的根拠たる聖書の聖句の衣をつねに新たに破りつつ現実に語りかけ、つかみかかる主体的な神の言！　神の活言は活現する。活ける神言は活かしてやまぬ霊言である。ルターは実にこのような神の言の現実の中で活かされていた男である。それが彼の全生命であり、力の根拠であった。このルターの精神がいつしか、"Deutschland über alles!"「ドイツは世界に冠たり！」を以て置き換えられるに至り、独乙は竟に神の鉄槌を蒙り、今日の現実を刈りとってしまった。独乙よ！　汝のルターと共に再び Gottes Wort über alles! に還らずや。噫、そしてわが日本よ！　いつまで神の言を無視し、傍若無神の民主主義に胡床をかいているのか。二十世紀はいよいよ世紀末的様相を呈して来た。

偽預言者たち

一五二一年も暮れる頃、ヴィッテンベルクに奇矯な似而非なる預言者どもが現われた。それはザクセンの小市ツウィッカウから来た徒輩である。彼らは神霊の告示者を以て自ら任じた代物であったが、民衆の間に多数の信奉者を見出したのみでなく、知識人の間にも少なからぬ動揺を来たらせた。この偽預言者らは、人格の平等と社会秩序とを混同し、信仰が学問を排斥するとなしたので、ヴィッテンベルク市の人心の動揺、社会秩序の混乱、文化的崩解を招来しつつあった。

彼らは悪意ある人々ではなかったが、確かにルターの改革精神の本質を誤った徒輩であった。

選帝侯フリードリヒへの手紙

選帝侯フリードリヒの心痛深きを聞き及んだルターは一五二二年二月二十日に書を寄せて曰く、

「選帝侯閣下はすでに多年各地より霊宝を蒐集されました。神は今や閣下の願いを聴き容れて、費もかからず労も要らずして、釘・鎗・鞭の附いた全き十字架を閣下に贈り給うたのです。私は閣下が此の如き霊宝を新たに得られた事を祝します。閣下よ、怖れ給わず、安心して双腕を伸べ、釘を深く肉に喰い入らしめ、感謝して喜び給えかし。神言を有とうとする者は皆かく在らざるを得ず、また在らねばならぬのです。現実には啻にアンナスやカヤバが跋扈するばかりでなく、ユダも使徒らの中に混じ、サタンも神の子らの中に交っています。閣下、願わくは賢明に処せられたし。事物の本質を外見によって判断し給う勿れ。落胆し給う勿れ。サタンの欲する如く事態は運んで居りませぬ故、愚鈍なれども私を少しく信じ給え。私はサタンのこの類いの仕打ちを了解しています。私は彼を懼れず、彼はそれを口惜しく思うでしょう。すべては未だ緒です。世をして叫ばしめよ、審かしめよ。倒れる者は倒れしめよ。聖ペテロも、その他の使徒らも倒れて可なりです。キリストが復活し給うとき、彼らも三日目に還り来るでしょう。我らにおいてこ

の度の事は成就されねばなりません。この擾乱に我らは神の子らたるの実を示しましょう（コリント後書六・四―五）。閣下、願わくは私の意を諒とせられよ。倉皇の間にこの筆を走らせました、時刻は迫っています。神の意志により私は速かに彼処〔ヴィッテンベルク〕に自ら往こうとしています。閣下、愚生のことを何らお案じ下さるまじくお願い致します。」

われらはこの手紙においてもルターの面目躍如たるものあるを見る。辛辣な皮肉を通して神の鞭の真意を語るあたり、玉石混交の現実を洞察しキリストに在る己が立場を堅持してサタンと戦わんとする彼の態度。ルターの「人間」はキリストに在っての真実で貫かれていた。偽預言者らの熱心や敬虔がルターの精神を誤ったのは、そこに福音的、神学的自覚が欠け、人間的真実や主観的敬虔が主位を占めたからである。

禁令を負わされているルターは今やヴィッテンベルク指して進みつつあった。ルターを獲ろうとする老侯の恩愛は謝すべし。しかしルターは「キリスト」を「人」に譲ってはならぬのであった。

再び侯への手紙

一五二二年三月五日、ライプツィヒから程遠からざるボルナの泊りにおいて侯に宛てて認めた書翰がある。これは、かの『キリスト者の自由』が「ルターの著作中の真珠」と言われるに対

し、「ルターの書翰中の真珠」と呼ばれているものである。これは最も注目すべきものの一つである。

「……選帝侯閣下の御存じの如く、或は御存じなくば、申し上げますが、私が福音を受けたのは人よりに非ず、唯だ天より、すなわち我らの主イエス・キリストよりであります。それゆえ、私はキリストの僕であり、福音使徒であることを誇り且つ言明いたします。今後も変らずそう言明いたします。私が今日まで自説を述べて、世の訊問や審判にゆだねたのは、真理に疑念があったからではなく、他人の賛同を得んとする過度の謙遜からでありました。今やしかし私の過度の謙遜が福音の侮辱を招き、私が悪魔に一手をゆるしさえすれば悪魔がこの地歩を全く占領してしまう虞れのあるを認めたので、私の良心の已むに已まれぬ要求により、私の行動を一変せざるを得ないのであります。

私はこの年、選帝侯閣下のために、すでに充分譲歩致しました。それが何ら恐怖に基づいたものでないことは、悪魔が熟知しているところであります。私がヴォルムスに入って往ったとき、悪魔は私の心根をよく看破しました。縦い屋根の甍の数にも如く悪魔が私に立ち向って来ることを予知しようとも、欣然として悪魔どものただ中に躍り込んだであろう私の決意を！……私が斯く申述べましたのは、選帝侯よりも遙かに高き護り手の下でヴィッテンベルクに赴こうとすることを知って戴きたいためであります。この事件に剣は無用であります。神は人間の如何なる心労

も援助もなく、唯独りで行動し給うに違いないのです。それ故最も多く信頼する者は、最も多く神に護られましょう。……神は閣下及び私の心配や努力を要し給わず、また容し給いません。……閣下願わくはこの意を諒して行動し給わんことを。……」

一八　旅館の一室

エルベの支流ザーレ河畔のイェーナに着いたルターが「黒熊」（„Zum schwarzen Bären“）という旅館に投宿したのは一五二二年三月三〇日のことであった。その時あたかも謝肉祭の騒ぎのため何処の旅館も満員の盛況で、門払いを喰って困りあぐんでいた二人の青年があったが、この旅館に余席を見出して喜んだのである。彼らはスイスからヴィッテンベルクへ遊学にのぼる途上の神学研究生であった。二人はすなわち旅館の入口の広い客間に入って来たが、その時そこに居合わせた騎士と計らずも閑談を交えたのであった。その青年の一人はヨハネス・ケスラー（Johannes Kessler）と称い、後に著書の中でこの時の模様を一幅の画の如く書き表わしている。我々もここで筆の腰をおろして、その騎士のプロフィールを見よう。否、その人間と語りたいと思う。この学生に案内されて彼の前に出よう。

「入ってみると、そこに独りぼっちで机に向っている人があった。その机の上には小さな本が置いてあった。その人は我々に親しげに挨拶して机のところへ来るように手招いた。そして葡萄酒を我々に、我々が辞退できないほどに勧めた。彼が親切で愛想が好いので、我々は彼の言うなりに席を進め、彼の好意に酬ゆるつもりで一杯注文した。彼は一見騎士としか思われなかった。彼は国の風習に従って、赤い帽子を被り、腰間に剣を佩けていた。……間もなく彼は、我々が何処の出身であるかを問い始めたが、自ら答えて、『君たちはスイス人でしょう』と言った。……『察するところ、君たちはヴィッテンベルクへ行くのでしょう。あそこには、君たちの同国人のヒエロニムス・シュルフ博士とその兄弟アウグスティヌスが居ますよ』と続けて言った。そこで我々は、実は彼らへ紹介状をもっているのだと答えた。

更に我々は彼に問うた、『マルティン・ルターは今ヴィッテンベルクに居るでしょうか、それとも何処に彼は居るのでしょう』と。彼は答えた、『私は、彼がヴィッテンベルクに居ないという確報には接しています。でも、間もなくそこに着くはずですが。』彼はそれからメランヒトンを讃め、世の学生間に驚嘆の的となっているエラスムスのことを訊ねた。終りに彼は問うた、『スイスではルターのことをどう言っていますか』と。

『それは、何処でも同じように、色々な意見がありますよ。或る者たちは彼を称揚しきれないでいます。そして神が神の真理を彼によって顕わし、誤謬を彼によって発き給うたことを感謝して

います。また或る者は彼を容し難い異端者として詛っています。就中僧侶たちがそうです。』

『御尤もなことです、それは僧侶たちでしょう』と彼。

こんなことを語り合っているうちに、気持がどうも隠密になって来たので、私の相棒は彼の前に置いてあったその小さな本を取りあげて開いてみた。するとそれはヘブライ語の詩篇であった。彼はそれを間もなく下に置いた。すると騎士はそれを手に執った。彼が一体何者だろうかという疑問が我々に募って来た。相棒は彼に、

『その言語が解れば、手の指一本失ってもいいですね……』と言った。彼は応えて、『君が勉強すれば、きっと解るようになりますよ。私ももっと学び知りたいと欲って毎日練習しているんです』と言った。

しばらくあって、宿屋の主人が私を戸口へ呼んだ。何か失礼なことでもしたのかと思って驚いた。ところが主人はこう言った、『私は貴方がたがルターに会って彼の談話を聞きたいと思って居られるのだとお察しします。今貴方がたと並んで座って居られるあの人が実はルターなのですよ！』。私は冗談だと思ったので、こう主人に言った、『いや御主人、貴方は僕らを馬鹿にして、ルターの幽霊で僕らの好奇心を満足させようとするんですね』。

……私は主人の言を信じなかったが、敢て争いもせずに置いた。それを私から聞いた相棒も信用しなかった。彼は多分主人が『フッテン』と言ったのを私が聞き間違えたのだろうと判断し

た。騎士の装束と態度とが、修道僧たるルターよりも騎士フッテンに相応しいように思われたから私も友人の説に同意した。……我々はそのつもりで残る時間を語り続けた。すると二人の商人が入って来た。外套を脱ぎ、拍車を外してから、その一人が卓上に仮綴の本を一冊置いた。騎士は何の本かと訊ねた。商人は言った、『これは福音書と使徒の書翰の或る部分のルター博士の解説で、最近印刷され、出版になったばかりのものです。貴方がたはまだ御覧にならないでしょうね。』騎士は言った、『そのうち見るつもりです。』

さて主人は我ら一同を晩餐の席に呼んだ。我々両人は別に何か食べさせて呉れるように頼んだところ、かの騎士が、『来給え、食事は私が引き受けたから』と言った。食事中、騎士は多くの信仰的なしかも肩の凝らない有益な話をしてくれたので、商人達も我々もおのずから黙り込み、御馳走よりも彼の言に聴きほれてしまった。種々の談話の中で、とりわけ彼が歎息して語ったのは、丁度その頃、独乙国民の懸案中の事件・難問を、神の言の側から、〔すなわち信仰的立場から〕議するために、諸侯と貴族らがニュルンベルクに参集している有様に就いてであった。何よりも神に対する信頼と熱誠なる祈禱を要する場合であるのに、彼らは費用のかかる騎士の仕合、橇の遊戯、遊宴、豪奢、淫楽のために、貴重な時間を浪費するだけで、何ごとも進捗しない態たらくであったから。……『これがキリスト教徒だという我らの諸侯連の現状ですよ！』と愁歎した。

その後商人の年長者が言った、『私は簡単なずぶの素人(ライエ)で、商売のことは別に知らないんです。ところで私はこう思うんですがね。どうも事態を見ていると、あのルターっていう人は天の使か、そうでなけりゃあ地獄の悪魔に違いないですなあ。彼が私の懺悔を聴いてくれれば、十グルデンも惜しまないですがね。というのは、彼は私の良心(こころ)によく教えてくれると思うからなんです。』

晩餐後、……我々は彼に款待された名誉と、その上食事にあずかった厚意に対して深く礼を述べた。……主人がその室に来たとき、彼は主人に語った、『今晩は私も貴族になったよ。このスイスの青年諸君が、私をウルリヒ・フォン・フッテンだと思っているからね。』〔フォンは貴族の称号〕主人は答えた、『旦那はあの方(かた)ではありません。マルティン・ルターでしょう!。』騎士は呵々と笑いながら、『この人達は私をフッテンと間違えるし、君は私をルターと取り違える。私はやがてマルコルフス〔仮作譚の王、「烏有先生」という類いであろう〕になるだろう』と大声で叫んだ。かくて彼は国の習慣に従って、ビールの大杯を挙げながら、『スイスの諸君よ、我らは一層親密な祝杯を傾けよう』と言った。私がその祝杯を受けようとすると、彼は、『君たちはビールになれていないから、葡萄酒(ワイン)をやりたまえ』と言いながら、新たに葡萄酒(ワイン)を命じた。離別の祝杯がすむと、彼は立ち上って外套を肩にかけ握手を求めながら、『では、さよなら』……『君たちがヴィッテンベルクに着いたら、ヒエロニムス・シュルフ博士によろしく伝えて下さい。』

我々は言った、『ええ、承知いたしました。でも先生がお解りになるためには、貴方のお名前は何と申し上げたら宜しいでしょう。』彼は言った、『追っ附け来る者が、宜しくと言っていたとだけ伝えて下さい。それで先方は解りますから。』このようにして彼は我々と訣れ、夜の休みへと立ち去った。

次の土曜日、我らは紹介状を持ってシュルフ博士を訪ねた。室に案内されると、あの騎士に出会った。……彼と共にメランヒトン、アムスドルフ、アウグスティヌス・シュルフ……等も居た。彼らは……ヴィッテンベルクに起った出来事を彼に話していた。彼は笑って我らに挨拶した。メランヒトンを指しながら、『これが君たちにお話して置いたフィリップ・メランヒトン君です』と言った。」

時にルターは四十一歳。姿勢は真直ぐで、顔は概して天に向っており、黒味を帯びた茶褐色の双眼は常に炯々として輝き、神に在って、キリストの十字架で一度びひっくりかえった人らしい誠実と快活と親切とが人を快くひきつけたのであった。

一九　連続八日の伝道

道中道伴れとなった僅かの騎士を従えて、ヴィッテンベルクに乗り込んだのは一五二二年三月六日、木曜日の夕暮の頃であった。彼はアウグスティヌス修道院の古なじみの室に入り、騎士の衣を脱ぎすてて僧衣に着替え、髭を剃りおとした。

彼は福音が間違った方向へ走り過ぎている現状を次の二日の間によく洞察したので、直ちにこれを是正すべく活動を開始した。それはすなわち九日の日曜日から次の日曜日に至る八日間の伝道として先ず現われたのであった。我々はここに暫らくルターの宣教に耳を傾けよう。左にその要旨を記すこととする。

第一日（一五二二年三月九日）。我らはみな死に定められた者で、誰も他人に代って死ぬわけにゆかない。各人が自分の人格を自覚して自分自身のために心の武装をして悪魔や死と戦わねばなら

ない（ヘブル書九・二七）。まづ第一に我々が知らねばならないことは、我々はみな神の「怒の子」（Kind des Zornes）であるということである。何となれば我らの行いも考えも想いも罪で、神の前には無だからである。それゆえにそれがどんなに立派に美しく見えても我らは自分の行いや考えや想いを携えて神の前に出ることは出来ないのである（エペソ二・三「我らもみな前には彼らの中にをり、肉の欲に従いて日をおくり肉と心との欲するままをなし、他の者の如く生れながら怒の子なりき」）。

第二に我らの知るべきは、神が全き恩恵の意志を以てその独子をこの世に遣り給うたのであるから、我らは独子を信受し且つ信頼すべきである。従って彼を信ずる者は誰であろうとも、罪から解放された自由人で、神はその人を「神の子」（Kind Gottes）と認め給うということである（ヨハネ一・一二、三・一六―一八、三五）。（「されどこれ［キリスト］を受けし者、すなわちその名を信ぜし者には、神の子となる権を与えたまえり」ヨハネ一・一二）。

この二つの事柄において私は諸君が欠けても誤っても居ないと思う。否、私よりよく知っていると言って可いであろう。さて次に「大きなしかし」„das große Aber“がある。

第三に我らはどうしても愛（Liebe）がなければならない。神が我らを愛し給うたように、我らも互に愛すべきである。もしこの愛がなければ信仰は無だ。そのことはパウロがコリント人に言っているではないか（コリント前書一三・一―三）。

親愛なる諸君、この点においてこの市には非常な欠陥がある。どの人を見ても愛があるとは思

えない。また神がかくも短年月の中に与え給うた多くの恩恵に対して諸君が感謝していないと思われる。それ故、ヴィッテンベルクがカペルナウムにならない様に気を付けようではないか（マタイ一一・二三）。

諸君よ、神の国は説話や言葉にあるのではない。神の国は力と行によって立つ（コリント前書四・二〇）。神は単に聴く者や教を伝える者（Nachreder）のみでなく、彼に従って歩く者（Nachfolger）と実行者（ヤコブ一・二二）を要め給う。愛なき信仰は何ら価値がないのみか、そういう信仰は信仰の仮象（Schein）に過ぎない。それは丁度鏡面の顔が本当の顔ではなく顔の影に過ぎないのと同じである。

第四に我々に必要なものは忍耐（Geduld）である。神に信頼し隣人を愛して日々そこに生きんとする者は迫害なしには在り得ない（テモテ後書三・一一）。というのは悪魔は眠りも休みもしないで人間をわずらわすから。しかし忍耐は希望を齎し（ロマ書五・四）、希望は自由を与え、神に引き揚げてくれるから恥らうことはない。

第二日（三月一日）。諸君、昨日はキリスト者の生活と本質がどういうものであるかを聞いた。即ち信ずることと愛することにあることを。

ところで我々はキリスト者の生活と本質をあらゆる方途を以て人々に伝えねばならない。しかし我らは信仰を人々に強いることは出来ないし、してはならない。陶人が陶土を自分の思うよう

にとりあつかったり、神があらゆる人間の心を聖手の中に有ってこれを改心させたり頑なにし給うようには（エレミヤ一八・六、ロマ九・二一）、人の心を我々の手には有っていないからである。我々は福音の言を人の耳まで入れることは出来るが、心の中に信仰を植えつけることは出来ない。それが出来るのは神のみである。我々には発言権（Jus verbi）はあるけれども執行権（executionem）はない。我々は伝道しなければならないが、結果は神にゆだねまつるべきである。如何に真理であっても、暴力を以てこれを強行してはならない。良心は強いられるべきものではなく、自由を有ったものである。心のないところには信仰も愛もない。

第三日（三月十一日）。ミサの問題、修道僧修道尼の還俗問題、同じく結婚問題、画像問題、肉食問題、等々あるけれども、テモテ前書第四章の始がそれへの態度をよく教えているではないか。良心の呵責なしに誠律的なことができるならやるが宜かろうけれども、神の禁じ給わざるものを拒むのは虚偽の敬虔となる。また神の欲し給わざることをなすのも同じである。信仰は聖書の明白な太い強い文字に基礎を置かねばならない。君たち自身がそういうところに堅っかり立っていないと、まことしやかなサタンに足をさらわれてしまう。丁度枯葉が風に吹き飛ばされるように。だから、私に言わせれば、神の聖旨ならば、そして僧侶も修道尼も良心があるなら、みんな修道院から脱走するのが本当だと思う。それが私の心からの願いである。神が自由にまかせ給うたことは自由にしておかなければならない。しかし誤解してはいけない、修道院に止まるも出

づるも、みな神と自分の良心の問題で、外から一律にすることは出来ない。

それゆえ結論はこうである。神が自由にまかせ置き給うたあらゆる条項は、公然たる命令でも禁令でもない。これらの条項に関しては各人が隣人を躓かせないこと、また自己の信仰と良心とに反して行動しないことが肝要である。

第四日（三月十二日）。我らは以上をもって、キリスト者として在らねばならない本質問題と、どうでも好い誡律上の問題とに触れたわけである。が画像のことを少しくとりあげてみれば、画像を掲げて神に奉仕をしているなど思うのは明らかに誤用である。偶像崇拝である。これは画像徹去に充分の根拠を与えるものである。けれども例えば十字架の画を掲げてこれを拝するのではなく、キリストの十字架を想う一つの象徴とするのなら、むげに徹去の要はない。ところが世には金銀の十字架を争って飾る王侯僧侶が居るので、勿ち偶像教となる。誤用があるからといってそれをすべてぶち毀すのが能ではなく、悪魔に乗ぜられぬ様に用途目的を明確に自覚することが大切である。

太陽や月や星を拝む人々が居るからといって、それらを空から払い落してしまうわけにはいかない。酒と女が苦悩の種子であるからといって、酒をみんなぶち撒き女を無きものにしてしまうわけにはいかない。金銀財産が世の罪禍の種子であるといって棄て去ることも出来ない。我々にとって最大の有害な敵は実に我々自身の心である。預言者エレミヤが「心は万物よりも偽る者に

して甚だ悪し、誰がこれを知るを得んや」（エレミヤ一七・九）と言っている通りである。

問題は結局我々の心にあるのだから、結論はこうだ。画像はそれ自身善くも悪くもない。画像を掲げるも掲げざるも自由である。唯だこれをもって神奉仕をせざることのみ。

ルターの説教はこれより遙かに長文のものであるが、前半四回の要旨は概略以上の如きものであった。ルターの精神をむしろ外面的な行為無視と形式破棄の方向に採った連中を真の内面的な霊的な福音的実存に還らしめんとしたルターの心を捉むべきである。

第五日（三月十三日）。さて我らは貴重な秘蹟（サクラメント）である聖餐（マタイ二六・二六―二九、マルコ一四・二二―二五、ルカ二二・一五―二三）をどのようにすべきかを考えてみよう。この秘蹟に対する教皇の馬鹿気（げ）た規則に私がしばしば反対して来たことは諸君が耳にしたことと思う。聖餅の布の洗濯がどうであるとか、平信徒が聖杯を素手で持ったらその指は斬り落さねばならぬとかいう類（たぐ）いの愚かな規則がいくらでもある。その他街（まち）の子らにも知れわたっている瀆神的なことがあるが、さすがにローマ教徒も気がとがめている。

けれども、諸君が聖餐の法式を余りにも乱暴にふみ破り、この宝をあまりに粗雑にとり扱うならば、神の罰が降っても不思議はなかろう。諸君よ、私の敵も随分私にひどいことをしたけれども、諸君の仕打ちはそれより酷（ひど）い。聖餐をそんなに粗雑に取扱うことをもって善きキリスト者たるを誇り得るとすれば、キリストの体を乱暴にあしらったヘロデやピラトがむしろ最善のキリス

ト者と言わるべきだろう。否！　諸君、神の国はそんな触れたり摑んだりするような外的なことに在るのではない。神の国は信仰と力とに在るのだ。

それゆえに、諸君、悪魔の屁理窟に惑わされぬよう、確っかりしなくては駄目だ。君たちがキリストの体たる聖餅を素手で摑んだとて罪というわけではない。がそんなことをして全世界を躓かせるのは少しも善いことではない。聖餐の法式としては司祭の手から受け取るのが基督教界の習わしである。君たちは何故信仰の弱い人たちを躓かせないようにしないのか。聖破りなことをしてもそれで敬虔であるということにもならないし、乱暴をしなくても苦しいことはないではないか。

それ故に福音に拠って予め徹底的に宣教され且つ実行され、またよく把握され信じられたことではない限り、伝承の称むべき習慣に対して新奇なことをやるのは謹しまねばならない。諸君、聖餐は神に関わる事柄であるから、慎重に賢明に行動しようではないか。神の言を単純に信じて、主たる神の嘉し給うようにしよう。だから新奇な誤用はやめ給え。私はかく忠言し、且つ願わざるを得ない。

ところで私はマタイ、マルコ、ルカの三人の福音書記者と聖パウロが明記しているように、我らの主キリストの命じ給うたところによってキリストの体と血の貴重な聖餐に与かることが必要であると思うけれどもこれを直ちに一般の制度として強制すべきものではないと思う。そこにも

宣教と訓練がなければ、信仰弱き者を躓かせることになる。宣教と訓練のあとは神にゆだねるべきで、外的な業が強いられるところには偽善が生ずる。

諸君、ともかくあまり性急であってはならない。君たちが従うべきことに正しく従ってゆけば、神はすべてを最善に導き給うであろう。

第六日（三月十四日）。昨日は聖餐のことに少しく触れてみたが、今日は更に突っ込んで考えてみたい。まず第一に大切なことは、君たちが心と良心を聡くして、聖餐に外的にあずかることと、内的に即ち霊的にあずかることとの間に大なる識別がなければならないことである。

外的な肉体的な参与は聖餅と聖杯を口にすることで、これは信仰も愛もなしで誰にでも出来るが、こんな参与はキリスト者をつくらない。しかし内的な霊的な正しい参与は、これと全く異った事柄である。それはキリストの体と血とを肉体的に受けるばかりでなく、同時に訓練と成果が生じなければならない信仰的な参与である。我々キリスト者が他の人々と区別される外的な徴は聖餐と洗礼を措いて他にはないのである。しかし信仰なしにはこれらのサクラメントを外的に享受しても無である。信仰がどうしてもなければならない。かくて初めて外的参与が訓練されねばならない。キリスト教界が存立する所以のものは信仰にある。そしてこの信仰は何ら外的な行為に制約されるものではなく、また制約されることを欲しない。聖餐というサクラメントを意義あらしめるものは唯だ信仰のみであって、その信仰の内容は神の独子イエス・キリストが我らの罪

のために十字架に懸り、そしてつねに我らのために執成していて下さるという恩恵である。独子が命じ給うたこのサクラメントを享受することが同時にまた信仰を強めることにならねばならない。

信仰ある者のみがキリストの体と血であるこのサクラメントを享けるに相応しい。信仰に堅く立つ者を罪も死も地獄も悪魔も害うことはできない。というのは神がキリストにおいて我らをそれらすべてから護って下さるからである。

聖餐はキリストの測るべからざる恩恵を意味する驚くべき宝である。人間の言も心もこれを充分につかみ得ない。唯信仰のみがこれを把握し得るのである。それゆえにこのサクラメントを一般的な制度にすべきではない。サクラメントを享けない者は云々というような罰則を設けたりする教皇の規則は愚かなことである。年に一度、復活節のときにこのサクラメントを享けろと強制するが如きは瀆神のわざである。

誘惑、迫害、困難の中にある人々こそこの宝にあづかるに相応しい。悪魔に苦しめられて、心おののき、失望落胆している者、衷に想い乱れ魂のうなだれている者、そういう人達よ、神は君たちと共に住み給う。イザヤがこう書いている、「神はただ苦しみまた心を痛め、わが言を畏れおののく者を顧るなり」（イザヤ六六・二）と。またダビデもこう言っている、「神のもとめ給う祭物は砕けたる霊魂なり。神よ、汝は砕けたる悔いし心をかろしめ給うまじ」（詩・五一・一七）と。

実にこういう人は既にこの宝（聖餐）を有っているのだ！

だから罪のなやみなく、悪魔の試みなき人は、聖餐に価しないのである。日々罪との戦をなす渇ける魂、飢えたる人がこの食物（聖餐）を要する。このような戦なき人は聖餐をやめた方がよい。心の満ち足りている者、眠れる魂はこの食物の方でお断りだ。そういう人がこの食物を食べると、食物が恥を蒙る。

そこで結局、罪や死や悪魔に苦しめられ、是らと戦う人々が聖餐に最も相応しいのだと言わねばならない。彼らは聖餐を最も有効に且つ正しく享けることが出来、是らの敵が彼らを害い得ないという信仰に立ち得るであろう。

キリストがこのサクラメントを言い渡されたとき、弟子たちの心はおののいていた。彼らの間にキリストを売る反逆者が居ると示されたからである。最後の晩餐に与った弟子たちの心が異常な不安に波立った時、これに真の平安を与えようとして、イエスがおのが体おのが血として頒ち給うたのが、あのパンであり、あの葡萄酒であった。

聖餐は実に、苦しめる、なやめる、気落ちした良心のための聖餐なのだ。それは悲しめる者への慰め、病める者への薬、死に瀕せる者への生命、飢えたる者への食物、乏しき者への豊かな宝である。

以上がルターの「聖餐」に関する説教の骨子であるが、ルターの聖餐論はやはり霊的な体験に

もとづいたもので、彼が如何に聖書を水割りせずに飲み且つ食っているかは充分注目に価する。しかも彼は文字に抱泥しているのではない。彼の聖餐論は本質的なものだと思う。ルターはイエスのあの最後の晩餐の現実に身を置いて、あの現実をおのが現実として戦慄し、聖餐にあずからなければ死する魂として自らを告白している。

第七日（三月十五日）。さて今日こそはこの聖餐というサクラメントの果に就て考えてみよう。それは他でもない愛である。聖餐がキリストを通しての神の愛であったのだから、我らも隣人をそのように愛すべきである。

実に我らは神から無償で愛を受けた。神がその独子を天から降し、これを肉に投じ（受肉のこと）、我らを罪と死と悪魔と地獄から贖い給うことは、言を越えた絶大な愛ではないか。独子は聖旨のままに、その体と血とをわれらのために捧げ給うた。これ測り難き大なる愛ではないか。罪と死と悪魔と地獄に対する我らの主イエス・キリストの勝利と凱旋はわれらに宣教されて与えられた宝である。私はこの勝利と凱旋とを私自身の有として誇って可いのである。これ法外なる大愛ではないか。キリストは実にわれらの智恵と義と聖と救贖とであり（コリント前書一・三〇）、絶えず父なる神の前に我らのために執り成し、われらの代言者となっていて下さる。

如何なる人間の心も想いも摑み得ないこの言い難き愛に迫られてわれら動くとき、隣人を愛するに至る。われらはそうならねばならない。ところがこういう愛を私は此処に未だ見ないのであ

る。――伝道はすでに久しいのに。人々は愛に非ざる他のどうでも可い事柄のためには忙しく馳せまわっているけれども。

訣別に臨んでイエスは弟子どもに言い給うた、「われ新しき誡命を汝らに与う、汝ら相愛すべし。わが汝らを愛せし如く、汝らも相愛すべし」（ヨハネ一三・三四）。ところがヴィッテンベルクで神の恩恵にかくも浴しながら、福音について瞭かな認識を与えられながら、愛だけは何処へも持ち出そうとしない。かくも恩恵を受けながら、恩恵を他人に頒とうとしない。誰も他人に手を貸したり、況んや世話を見ようとはしない。皆がただ自分のことだけを考えている。事はなるがままにまかせ、人はやるがままにして知らん顔である。弱者貧者を助け得るのに助けようともしない。私は君たちにこんなに永い間伝道をしたのに、また書物の上でも信仰と愛の外何も説かなかったのに、君たちの中に愛の跡を見出し得ないとはあまりにも情ない話ではないか。

私は君たちにハッキリ言う、若し君たちが愛を示さないならば、神は大いなる患難を君たちに降し給うであろう。何となれば、神は聖言を徒らに宣教し啓示することを欲し給わないからである。神は聖言が侮られることを欲したまわない。君たちの遣り方は神に対してあまりにも無礼である。友らよ！　聞く耳あらば聴け！

諸君！　今より少し前に、これらの言がわれらの先輩たちに宣べ伝えられたなら、彼らは君たちのようなことはしなかったであろう。君たちは成程聞いて語りはしよう。しかし実践（実存）

を以て宣教に従おうとはしないのである。私は祈る、言のみでなく、力強いわざに突破せんことを！

第八日（三月十六日）。今日は懺悔（Beichte）に就いて考えてみよう。

第一に、聖書に根拠のあるものとしては、或る人が公然と罪を犯して人々に知れた場合その人は大衆の前で公然と訴えられる。しかし彼がその罪悪から離脱したなら、人々は彼のために神に願い彼の救済に助力する。そういう懺悔についてキリストは言い給う、「もし汝の兄弟罪を犯さば、往きてただ彼とのみ相対して諫めよ。もし聴かばその兄弟を得たるなり。もし聴かずば、一人・二人を伴い往け、これ二三の証人の口に由りて凡ての事の徴められんためなり。もし彼らにも聴かずば教会に告げよ……」（マタイ一八・一五―六）。しかしこういう懺悔は教会では行われていない。

諸君、この懺悔を再た実現させてはどうか。もし君たちの誰かが、奸商、盗賊、姦通者、情夫、酔漢といった類いを見たなら、まず私かに往ってその人を誡め……というようにして見給え。

第二の懺悔の道は、神に我らの罪を単独で訴え、神自身に懺悔することである。即ち神の御前におのが罪過を残りなく打ち明けるのである。然り、この懺悔は我々に極めて必要である。我々はこの懺悔を時々刻々に、いつ如何なる瞬間にもなすべきであり、なすべく誡命されている。こ

の懺悔に就いてダビデは詩篇第三十二で告白している、「斯くて我れ汝の御前にわが罪をあらわしわが不義を蔽わざりき……斯かる時しも汝わが罪の邪曲を赦し給えり」。

第三の懺悔はこうである。それはある人が他の人に懺悔する場合であって、その人はこの他なる人を私かなる場所に伴い、おのが事情と苦衷とを告げる。かくしてその人は慰めを受けて、良心が鎮められるのである。かかる懺悔を教皇は厳格に命じている。しかし強制に対しては私は反対せざるを得ない。教皇と雖も私に懺悔を強いるべきものではないからである。しかしこの私かなる懺悔の自由は何びとからも奪ってはならないと思う。しかも私はこの懺悔を全世界の宝を以てしても譲るまじと思う。何となれば、私は是れがどれほど大いなる力と慰めとを私に与えてくれたかを体験しているからである。悪魔との戦いをしばしば必要としない人にはこの私かなる懺悔の力がわからない。〔ルターのこの体験は特に修道僧時代のものである〕。

君がもし友から慰めを受けたなら、その慰めを心から受けとり、それが君に神御自身から言われたものとしてその友を信じ給え。キリストが斯う言い給うたではないか、「もし汝らのうち二人、何にても求むることにつき、地にて心を一つにせば、天に在ます我が父は之を成し給うべし。二三人わが名に在って集るところには、我もその中に在るなり」（マタイ一八・一九―二〇）。

けれども神に対して聖き強き信仰をも有っていて、おのが罪の赦しに対して確かな人は、この懺悔はしなくて支障ない。その人は唯だ神にのみ懺悔すれば足りる。けれども幾人がそういう信

仰を有っているだろう。各人が自分というものをよく知って誘惑に陥らないようにすることが大切である。だから私はこの懺悔を留めて置きたいのである。しかし各人はこれに就ても勿論自由である。私は強制はしない。神は豊かに赦し給う。福音はすべての罪の赦しを伝えている。

われらが罪の赦しに確かであるべきことに就て、キリストはサクラメントを我らに遺し給うた。即ち洗礼と聖餐とである。これらの二つはどうでも可いとさるべきではないと思う。何となれば洗礼において私は神の恩恵の憐憫に対して確かとなり、私は彼の有となり、彼は私の有となって、彼と一つになり、彼に受け入れられる。次には聖餐――キリストの体と血――を受ける。この際に、私は私の罪が赦されていることに確かとなる。その徴とその確かさのため、私は私のために与えられた彼の体を食い、私の罪のために流された彼の血を飲むのである。かくて私は絶望から救われ、恩恵と憐憫の父なる神を有つのである。

悪魔と死と罪と地獄とに対して戦わねばならないわれらは、多くの慰めを有たねば立ちゆかないのである。私は悪魔がどんな奴であるかをよく知っている。君たちが私と同様に知っているとしたら、私かなる懺悔を馬耳東風的に軽くあつかいはしなかったであろう。

話はこれくらいにするが、私は、我々が正しい軌道から脱線しないように神に恩恵を祈る。

以上をもって八日間に亘ったルターの宣教の要旨は終る。当時のカトリック的世界を背景とし

て見るとき、ルターが洗礼と聖餐の二つのサクラメントだけを認め、しかも彼らしい新しい把握の仕方をしていること、その自由の精神はよくわかる。しかし、彼が聖霊のことにまで言及していないのがどうも残念に思われる。み霊に在ってキリストの中へとバプテスマし、み霊に在ってキリストを喰い且つ飲むこと、イエス自身ヨハネ福音書の中で語っておられるからである。

洗礼は特に十字架の恵みに関わり、聖餐は特に聖霊の恵みに関わる。かくて復活の霊生に我らはあずかる。そしてこの霊生は愛の泉として、愛の火として隣人に頒たれざるを得ないものである。そういう洗礼、聖餐が、式としてではなく、日常生活の中で自由に霊的具体性以て体験体現されるとき、キリストは嘉し給う。

二〇　改革と変動

福音の根本問題たる「神の義」の信仰的把握に関する限りルターは一歩も譲らないのであったが、教会の伝統と伝承に対しては相当保守的であって、外部的形式的な面を急激に打破せんとして進行しつつあった急進派の改革運動に対しては、かの連続八日の伝道にも見られるように、むしろ之に反対し阻止する態度を表わした。しかし急進派の礼拝様式がそれゆえに単に行き過ぎばかりであったと難ずることも出来ないと思う。むしろルターは時代がまだそこまで来ていないということを認識していたでもあろうし、根本問題をどこまでも深く徹底して置くことが急務であり、枝葉たる形式的なことはやがて自然に脱落してゆくものと洞察したのでもあろう。しかしまた形式打破に案外重要な要素がふくまれていなかったとは言えないのである。信仰が愛へと展開しようとするように、生命ある礼拝はおのずから弾力性ある形式、無形式の形態であろうとする

からである。具体的なものは形態を有つ。しかしその形態は常に新たに自ら破れてゆく形態でなければならない。それはつねに新たに自らを越えてゆく形態であって、最も烈しい形態であり、ただ生命態とのみ称ばれ得るものであろう。

ルター時代の急進派がこれだけの自覚をもっていたら、ルターの改革精神における保守性をもう一つ乗り越えて宗教改革を更に徹底したものに推し進めることが出来たのではないかと思う。聖書が平民の爐辺で繙かれたように、教会組織も動的な生命協同体としての聖書集会にまで突き抜けるべきであった！　教会（エクレシヤ）は制度的組織体ではなく、有機体的霊的協同体であるべきで、このような福音的自覚の欠如のために新教教会はカトリックからの蟬脱を截然と果し得なかったのであって、爾後四百年の新教教会史に禍根をとどめていると言わねばならない。

ルター的プロテスタントの中から、自らに対してプロテストしたものとして内村鑑三の無教会主義が現われたのはこれがためである。しかしこの無教会主義も常に新たに自己を乗り越えてゆく動的存在であるべきで、おのが「無」に執し、自己に対して無批判的であるならば、それはまた一つの独善主義であり、パリサイ主義となる。福音は決して一つのイズム（主義）に限定されるべきものではない。それゆえ、無教会はイエスの世界的エクレシヤに最も具体的形態をもって参与する烈しいエクレシヤの一つでなければならない。その具体性の極限はイエスの言「二、三人わが名に在って集るところに我も在るなり」がいみじくも表わしている動的形態である。活け

る神の言の現実の下において、――そは勿論聖書を媒介とするが――聖霊のはたらく場において、つねに動的に実存する信仰者たちの現実形態が無教会的形態であらねばならない。それを私は「幕屋」という聖書的歴史性をもった表現をもって告白している。勿論単なる旧約的レビ的な幕屋ではない。ヘブル書及黙示録に表現されている霊的人格的協同体を意味する。実にこの「幕屋」は旧新約聖書全巻がつたえている神の歴史における旅路的霊的実存協同体の相である。霊的とは、キリストのみ霊のプレローマ（充満）が在る意である。詳しいことはここに語るべきではなかろう。（第三巻『無の神学』参照）

ルター時代の急進派の中に隠されていたであろう新芽が、ある意味でルター自身によって阻止されたことは歴史的悲劇であり、皮肉である。ルターの急進派阻止は大体において正しかったけれども、なお一面の理解と洞察と操縦において欠けたところのあったことは否めないであろう。ダンテがあれほど峻厳な批判的精神でありながら教権主義の圏内に在った如く、ルターもこれほど徹底した福音的精神でありながら教会主義を乗り超えることが出来なかった。しかし私は更に思う。ダンテもルターもその時代精神の圏内に在りながら、彼らの魂それ自体は彼らの自覚と制約以上に真理の中核を志向していたのであると。真剣な魂も罪のゆがみのために現実とかかるくいちがいを生ずる。そこに人間の悲しさがある。この点においてもその時代の圏内に在りながら、同時にこれを完全に乗り超えていたのは唯一人イエスのみであった。我々は歪める歴史的空

間における歪める判断者である。それがどんなに信仰的判断であろうとも。これに反して、イエスは歪める歴史的空間に切り込んで来た義しき審判者であった。彼の批判は真に終末的現実をそこに顕示しつつの批判であったが故に、全く次元の異なるものであったから、現実圏の平面的な打破ではなく、これを異次元的に乗り超えているのである。それはある時は保守的に見え、ある時は過激に見えるが、根源の相、終末面においては常に新たに形態を砕きつつあるものである。

ともあれ、ルターの改革精神はカトリック教会の権威に対して、福音の権威に拠って立つ新しい教会形態を基礎づけた。東プロイセンは率先して福音主義の旗を掲げた。ヴィッテンベルクが新教主義の中心地となったことは言うまでもない。かくて保守派と急進派とが跛行しつつ改革運動は進みつつあった。

さてこのような宗教的変革の波動に誘発されて、別な波動が政治的、社会的、経済的な原因の下に起って来た。その一が「自由貴族の乱」であり、その二が「農民戦争」である。

中世の封建組織が平民の生活を脅かしてその極点に来ていたことは、同時に社会経済改革への胎動を促していたわけであった。また火器の発明と共に中世騎士の華であった自由貴族はその存在価値を失いつつあった。経済力を有たない彼らのある者は一夜の中に強盗団に化し、都市貿易の隊商を襲う者となった。

更に彼らのある者は、圧迫を被っている農民の胸中に勃々として興りつつあった反抗意志と同

様に、大諸侯の権勢を挫いて小貴族の自由を主張せんと蹶起した。このような自由貴族の騎士同盟首魁として自由の戦を宣したのは「ドイツ騎士道の最後の華」と謳われたフランツ・フォン・ジッキンゲンであった。彼は一五一七年以来、マクシミリアン一世及びカルル五世の傭兵隊長を勤めていたが、旗を挙げたのは一五二二年の初秋であった。

彼はすでにルターの『ドイツ貴族に与うる書』に深く感じ、自らウルリヒ・フォン・フッテンとエベルンブルク城でルターの著作を熱心に読み且つ談じ合ったほどの帰依者であった。敬虔な彼の妻はこの城の華であった。

彼らの敵はトリエルの選帝侯兼大司教である。この中央集権的大勢力を覆し得ば自由の天地が拓かれるものと彼らは夢想した。彼らの志には同情すべきものがあったが、近世が与えようとする社会的自由はこのような形態の闘争を以てすべきでなかった。

トリエルは包囲された。しかし包囲軍は旬日ならずして囲みを解いて引き揚げねばならぬほど装備の点で時代おくれの軍隊であった。翌春には反対に、トリエル選帝侯、ライン帝領伯、ヘッセン方伯の三侯伯のためジッキンゲンはランドスツールの城をかこまれた。砲撃を受けてさしもの城砦はもろくも破れた。

落城してみれば重傷を負ったジッキンゲンが死の床に横たわっていた。勝利者の訊問に対してこの騎士は応えた、「私はより大なる主に対して答える。」また牧師が懺悔の執り成しをしよう

とした時、彼は言った、「私はもう心の中で神に懺悔した」と。この帝国騎士同盟の盟主が斃れた後は苦もなく、この政治的変動への企図は瓦解し、平定されてしまった。そのため政治形態としてはドイツは混乱を一應脱した。

ルターは人間的にはジッキンゲンに同情を有ったと思われるが、彼の行動に対しては賛意を表することが出来なかった。武力行動が福音と結びつくことはルターにとって明かに邪道であったからである。

近世の黎明と共に世界は地球的に拡大し、貿易も興隆の一途を辿り、都市は発達し、資本家階級の増大となり、自給経済の放棄と共に領主の農民階級に対する搾取圧制はいよいよその度を加えて来た。ルターが『独乙貴族に与うる書』において鋭く警告した時弊は俄にその破局を招こうとするに至った。諸侯・豪族などの支配階級、豪商などの資本家階級と農民・鉱夫などの労働階級との貧富の隔絶、特に農民の困窮はその極点に迫るに至った。

信仰の自由、個人の魂の解放、神の前における人格の平等、隣人愛を基底とした社会の人格的共同体の理念等、ルターの改革精神が力強くその反響を呼び起していた農民階級において、今やこの改革精神が単に信仰の領域のみでなく、生活全般に亘って、特にその社会制度の面において改革を要求する運動へと移行し始めたのは社会的に不当な地位に置かれた彼らとしては無理からぬところであった。そこには原理的な踏み誤り、次元的錯誤があったわけであるが。

このような農民の気勢に乗じて社会改革への急先鋒となった者は、ツヴィッカウ（Zwickau）の牧師ミュンツァー（Münzer）やカールシュタット（Karlstadt）の輩で、これらの徒輩はやがてルターに「殺人預言者」（Mordpropheten）と呼ばれるに至った人々である。彼らの説くところは過激で、特にミュンツァーはその最たる者であった。即ち信仰なき者は死刑に価すること、神の国は共産社会であるが故に、貴族・支配者等は殺害さるべしとの激越な言説を吐いた。

さきに教会問題において、急進過激分子の中に、或る重要な問題が歴史の必然性をさきがけて蔵されていたことを指摘したように、ここにも社会問題における或る重要性が胚種の形で現われていることを指摘せざるを得ない。しかもそれは宗教問題との連関において現われて来たことに特に注目すべき点がある。

事実農民は不当の税を課せられ、不当の賦役に服し、不当にも人権を蹂躙されていた。これはあるべからざる政治であり、経済機構であった。ミュンツァーに確乎たる経済理論はなかったけれども、財の不当なる私有、権力の不当なる壟断に対するプロテストを彼は瞭かに主張している。社会主義と民主主義への指向はここに既に現われたのである。それが過激にもせよ、とにかく福音的地盤に裏づけられているところに、二十世紀の今日、世界的問題として極めて深重なる考慮と解決を期すべく課せられている問題の原型が見られるのである。

ミュンツァー一派は福音に由る宗教的自由を、直ちに社会的自由に、直線的に、連続的に、同

次元的に移行せんとして行動に移した。しかも、暴力的手段に訴えた。そこには大なる誤謬があった。ルターは信仰の自由はどこまでも魂の問題であって、社会問題、政治問題は然るべき理性の原理に従うべきものとなし、しかも現実の政治的経済的機構に対しては消極主義を持した。ミュンツァーの過激とルターの態度との乖離のために、農民戦争という悲劇への必然性があったのである。

二一　農民戦争

ここに農民戦争の顛末を一瞥することにする。

暴動の発端はつまらぬ事柄であった。すなわちライン上流スイスとの国境に近いシャフハウゼン近隣の一領主夫人が或る休日に農僕を使って野苺や蝸牛を採集させたという不当の労役が原因であったという。南隣りには自由の天地にスイスの農民の暢(のび)やかな姿が見える。しかしつまらぬ事が動因となるには、深いゆきつまりがなければならない。もしこの領主夫人が仮令休日であろうともその労役に対して充分の賃銀を支払ったならば、そしてそれよりも大切なことは夫人が日頃愛を以て農僕を使っていたならば、決してこのことが暴動への口火とはならなかったに相違ない。使用者側、支配階級が精神的にも物質的にも雇傭者側を愛と理性を以て人格的に遇するならば問題は起りようがないのであった。ルターが「貴族」に要望した点は正にそこにあった。「貴

族」の信仰的道徳的在り方、社会主義を問うルターの烈火の如き言辞が農民にとっては直ちに農民の解放を勧める檄と響いたのであったから、彼らは一つの偶然事を導火線として蹶起するに至ったわけである。

農民は団結凝議して六十二箇条の歎願書を提訴した。それは過激なものではなく理性的な要求であった。時に一五二四年六月。それが理性的に受諾されれば問題はないのであったが、理性はその奥に信仰と愛との地盤がないとき真に理性的たり得ないということはここにも実証された。即ち貴族側にはそういう理性すらなかった。と同時に折角一応理性的であった農民も、不当な対応を受けたので、自らの理性を失って暴動への道に踏み入った。そこに農民の少なくも福音を踏み越えた態度があり、これはそれ自体責められるべきことである。しかしこの場合客観的に孰れに社会的混乱への責めがあるかを即時的に問うならば、貴族側であると言わざるを得ない。

農民たちは一五二四年八月二十四日、ワルツフート（Waldshut）の町に集合し、町の同志をも糾合し、素と傭兵であったハンス・ミュラー（Hans Müller）を指導者とした。翩翻とひるがえる赤黒黄の三色旗の下に群れ集る者三千五百を算した。農民戦争への狼煙は揚がったのである。南はライン上流、西はモーゼル河流域、東はドナウの上流地域、北はテューリンゲンの森へと農民解放運動の暴風は拡がっていった。

この農民解放運動の進行中は、時あたかも独帝カルル五世が仏王フランシス一世とイタリヤ北

部で交戦中であったため、諸侯の軍隊もこれに加わり、農民の動きを抑える余力を有たなかったのである。そこで南ドイツ治安の帝国機関たるシュワーベン同盟は農民解放運動の首謀者たちと協定しなければならないことになった。しかし同盟側は誠意なく徒らに遷延策を弄していた。このような不誠意に対しては、農民感情も激化せざるを得ない。運動は益々拡大して一五二五年の春には、全独乙は大方解放運動の暴風帯に包まれるに至った。

農民が提訴した「シュワーベン要求十二箇条」というのは、その骨子およそ次の如きものであり、穏当要求であると言わねばならない。

一　一教区（ゲマインデ）は一人の牧師を選挙し且つ之を任免する権能を有つべきである。選定された牧師は福音を純粋に平明に説くべきである。

二　穀類の十分の一税は牧師のみでなく、貧民にも支給さるべきである。草類・家畜類の十分の一税は廃止すべきである。

三　キリストに贖われた者が農奴であることは不当である。我々は聖書の教うる如く然るべき権威には従うけれども。

四　狩猟及び漁業の自由を与え野獣の害を除去すること。

五　森林は共有財産たるべきこと。

六　過重にされつつある賦役を然るべく制限すること。

七　領主と農民との相互契約に拠らざる使役を領主は農民から要求してはならない。

八　小作料・地祖の現況は農民を没落せしめるほど高価であるから、正当なる値下げを要する。

九　任意な刑罰や新奇な附則は裁判の厳正に反するから、是を廃すべきである。

一〇　町村の所有地にして購買によらずして私有地となっている牧草地、畑地は返却さるべきである。

一一　相続税は撤廃さるべきである。

一二　これらの農民権は福音的でなければならない。それゆえ聖書に照して不当な場合にはいつにても是を撤回する。

以上の「シュワーベン要求十二箇条」は如何にも正当な、理性的な、民主的な要求である。第十二条において「聖書に照して不当な場合にはいつにても是を撤回する」といって、福音を土台にして考えた立派な態度のものである。そしてこの精神はルターの『九十五箇条提題』の精神と相通ずるものである。

この「シュワーベン要求十二箇条」はビラとなってドイツ山野の農民の手に舞い拡まった。問題は先ず当局たるシュワーベンのケムプテン司教侯がこの要求を容れるかに在ったが、極めて封建的な無慈悲な司教侯は却ってこれに対して弾圧手段に出たので、シュワーベン農民は遂に忍従の綱を断ち切って蹶起した。一五二五年早春、南独の一角に起ちのぼった春雷の雲は既にその機

運を孕んでいたドイツ諸地方に同じ雷雲を呼び起した。剣を先に執った者は実に支配者側であって農民ではなかったのである。

黒林地方（Schwarzwald）ではブルゲンバッハのハンス・ミュラーが「福音兄弟団」を指揮して行動を起した。封建制度に反対する農民の要求を一五〇二年の頃はやくも唱えたシュパイエル大司教領内の所謂ブンドシュー（Bundschuh）農民一揆の後輩たちもエルザス・ロートリンゲン地方で蜂起した。フランケンの族もゲオルク・メッツラー（Georg Metzler）を首領として動いた。彼の一団は「福音軍」と自称した。このように諸処に相呼応して蜂起した農民に、更に都邑の下層階級、鉱山地方の労働者が参加し合流した。彼らの暴動により、有産者は掠奪を享けた。酒庫、麦粉貯蔵所、諸侯・貴族の養魚池等、支配者側の目ぼしい財は襲われた。修道院の破壊、寺領の没収、そして諸侯の城・騎士の館の襲撃がこれに続いた。諸侯・騎士の農民軍に屈伏或は妥協する者が少なくなかった。擾乱のため流血の惨事が伴ったことは言うまでもない。

ローテンブルクにおけるカールシュタットの行動、ミュールハウゼンにおけるミュンツァーの言動などがヴィッテンベルクに報ぜられるや、ルターの憤激は頓に増大した。変動の情勢は次第に重大化してゆく。

ルターは、彼の友人とその後援者なるマンスフェルトのアルブレヒト伯がアイスレーベンに学校を創設するというので、旅にのぼった。それは一五二四年四月十六日のことであった。メラン

ヒトンとアグリコーラとが同道したが、後者が即ちその新設校の校長に任命されるわけであった。しかし変動の情勢のゆゆしきを感得したルターは故里なるアイスレーベンに着くや、時を移さずペンを執り、「シュワーベン農民階級の十二箇条に対する平和勧告」《Ermahnung zum Frieden auf die Zwölf Artikel der Bauernschaft in Schwaben》なる一文を草した。それはいかにもルターらしく、権門富貴に対しても、農民階級に対しても、忌憚なき批判警告を発している。その趣旨は次の如きものであった。それは私がさきに附加したのと同じ精神のものである。すなわち、

シュワーベンに結集した農民階級は重圧に耐えかねて政府に十二箇条を提訴した。その条項は聖句による基礎づけを顧慮している。就中私を喜ばせたのはその第十二条において、彼らの要求にして福音的ならざる場合は、欣んで自ら教示を受け、聖書の公明なる言の権威に従わんとの意志を表示していることである。神の言に教えられ従わんとすることを措いて他に、人の良心のとり得る公正な立場があり得ようか！

さて事態は神の国とこの世の国に関わる重大にして危険なものであるから、我々が自由に発言し忠告して何人(びと)をも憚らぬことは極めて必要である。

「諸侯貴族に寄す」（An die Fürsten und Herren）

先ずこんないかがわしい暴動叛乱の事態にたち至ったのは、貴殿らよ、侯伯貴族の責任でなく

て一体誰の責任であり得るか。特に諸賢、盲目なる司教、狂暴な僧侶や修道僧の責任である。諸賢は今日なお頑迷にも聖なる福音に反して荒れ狂うことをやめないでいるではないか。しかも貴殿らは世俗的行政に参じて民の皮を剝ぎ身を削り、自分たちは豪奢と驕慢な生活を営んでいる。憐むべき平民は最早これ以上耐えることができないのだ。剣は貴殿らの首頸に擬せられている。然るにも拘らず貴殿らは平然としている。そんな強情な思いあがりは刎頸に価する。貴殿らに反抗する者は農民ではないのだ。貴殿らの狂暴を懲らしめるのは神御自身である。貴殿らよ、福音が何であるかを知ろうとも思わぬ者は勝手に罪を犯すがいい。私は叛乱に対しては烈しく争い、平民は服従すべきを忠告したことを貴殿らは御存じないか。この暴動は私が煽動したのではなく、私にとっては貴殿らが敵であると同じように敵であるミュンツァー等の殺人預言者が、愚民と合流したからで、もう三年余りも共謀していたが、彼らに反対抗争して来た者は私だけであった。

それゆえに貴殿らが敵であろうとなかろうと、私の信実を侮るな。またこの暴動をも侮ってはならない。彼らが貴殿らにとって手強いから私が心配するのではない。神とその怒を畏れよ！というのである。仮令農民が百分の一であろうと、神は罰せんとし給うときには罰し給う。神は石をも農民となし得給うからである。

私が貴殿らになお言うべくば、宜しく農民を遇するに理性を以てせよ！　ということである。

そして誠意を以てこれを始めよ。さなくば全独乙が最早何びとも消し得ぬ火に燃やされないと誰が知るか。我らの罪は神の前にある。それゆえに我らは神の怒を畏れなければならない。

農民階級に寄す（An die Bauernschaft）

福音を宣べ伝えることを禁じ、民を困窮に陥れた諸侯貴族が神の譴責を蒙るに価すべきを私が述べたことは諸君の知るところである。しかし諸君としては自覚ある良心と公明なる態度で事に処すべきである。愛する兄弟たちよ、私は懇ろに言う、忌まわしきサタンが今や多くの強盗殺人の徒党を福音の名の下に起こして活躍させているが、そんな徒輩の言うことを信じてはならない。諸君は「福音的統合」を標榜しているけれども、神の名は徒らに用いられてはならない。神の言が語るところを聴け、「剣を執る者は剣によって滅びる」と。世界を洪水に浸し、ソドムを火で焼き払い給うた神が農民を絞めつけることは易々たるものである。然り、神こそは全能にして畏るべき者である。

私は答えざるを得ない、支配者が邪悪不正であっても、徒党を組み暴動を起こすことは正当づけられないと。邪悪を罰し得るのは、神に権威をゆだねられ、それ故に武力を用い得る支配階級であって庶民ではない。

キリストは言い給うた、「邪悪不正に抗するな。これを避けよ、忍べ、なすにまかせよ」。苦難、苦難、十字架、十字架、これがキリスト者の本領だ、その他の何ものも駄目だ。（„Leiden,

Leiden, Kreuz, Kreuz ist der Christen Recht, und kein anderes.“）

以上がルターの支配階級と農民階級の双方に寄せた忌憚ない諫告の大要である。ルターは叙上の如く両者を責め、福音的な在り方の何であるかを明示し、自らも責任ある者として自責し、すべてが神を畏れて義しきに還るべきを忌憚なく語っている。

しかしルターの諫言とその精神は両者のいずれにも理解されず、聴き容れられず、暴動の火に対して逆効果をもたらした。ルターは民衆の敵、偽預言者とされた。ミュンツァーの進軍ラッパは凄まじく鳴り響いた。鉱夫達の活動は目ざましくあった。擾乱は酣となる。ロマ書第十三章でパウロが支配階級に神権をみとめている考えをルターはそのまま踏襲して竟に農民反駁の激烈な――惜しむべし、彼は反理性的な言辞を吐いた――檄文を発表した。諸侯側の陣容が整うや、彼らの反撃戦によって、統率力なく武器劣弱な農民軍は壊滅するに至った。その殺戮は凄惨を極めた。死屍累々十五万を算したという。「独乙は血に漂うた」。

一五二五年晩夏になって、ようやく農民戦争の戦火は消えたが、煙の燻りは人心の中に痛ましくも残った。支配階級はむしろその権勢を増大したが、庶民階級の自由への意志、民主主義的精神は、福音を内的源泉として強められた。

二二　ルターの結婚

修道院への道は、必然独身への道であった。ひたすら神に仕え、人に奉仕する特別な道であった。修道院の中で福音を新たに把んだルターは、福音は結婚に対しても自由であることを知った。結婚もまたそれによって神の栄光を現わすならば、神聖なるものであることを悟った。その意味においてキリストは結婚を祝福されたのであった。

農民戦争の戦火を背景としながら、結婚に踏みきったルターの劇的な結婚をこれから観たいと思う。

ライプツィヒの南西、馬車で軽く一日路なるニンプシェンという村里に尼院があった。そこへは地方の貴族の娘たちが、大方は家庭の事情などから入れられる風習であった。彼女らは環境と運命の犠牲になっている者が多かったわけである。そういう尼院は勿論此処に限られていたので

はない。ところでこの尼院の院主は当時やはり婦人で、尼僧は五十余名であった。改革の嵐が吹き、この尼院の窓を揺り動かすまでは彼女らは日毎の勤行にいそしみ、中世的な敬虔にひたり、そこに信仰生活の純粋なものがあると考えられていた。しかし、なかには抑々自己の意志で尼僧となったのでない自分達の運命に疑念を起こし煩悶する者もあり、脱出を願う者もないではなかった。然るにルターの著書に接し、言説を伝え聞くに及んで、彼女らは結婚の神聖、家庭生活の祝福、職業と信仰生活の関係等につき聖書に基づく健全な思想を教えられ、殊に『修道僧の旧約に就て』なる小論は、彼らに行動の自由を悟らしめ、尼僧たるの運命に抗して新しい自由の天地で、真の信仰生活を営みたいという願望を燃やしたのであった。

一五二二年のことであった。この尼院から程遠からぬグリンマのアウグスティヌス派の修道院の院主が、数名の修道僧と共に自ら誓約を破棄して還俗したのである。この脱走院主の親戚関係にあたる婦人が二人もニムブシェンの僧尼の中に居たので、この敢行が僧尼たちに影響するところは大であったと思われる。しかし彼女らは独力でかかる行為に出ることが困難であるから救援をルターに求めたのであった。ルターはこれに対して責任を感じ、然るべき方途もがなと想いめぐらしていた。

一五二三年四月始めの或る晩のこと、月の出もおそい夜陰に、一つの僧房の窓からあやめもわかぬ紬衣をまとった影が一つ二つと数えて十二、相継いで庭さきに降り立った。彼女らは一人の

屈強な男に助けられて次ぎ次ぎと塀を乗り越えてしまった。この早業が終るや、塀の外に待ち構えていた田舎馬車は十二の空樽に文字通り鰊ならぬ人魚を満たして動き出した。夜はほのぼのと明けてゆく。彼女らは樽の中で不安と希望の脱走路を車輪の音を耳もとに聞きながら急ぐ。三日路の後にこの積みなれぬ荷を積んだ車はヴィッテンベルクに着いた。この車を迎えたのは誰あろうマルティン・ルターであり、商用にことよせて空樽を用意し、密かに尼僧たちを伴れ出したのはルターの依頼を受けたトルガウの町の商人で且つ評議員であるレオンハルト・コッペであった。墨染の衣の十二人の中にはマグダレーナ・フォン・シュタウピッツ（ルターの魂の苦悩の日に霊的な慰めと助けを与えた恩師シュタウピッツの姉妹）と、やがてルターの生涯の伴侶となるべきカタリーナ・フォン・ボーラ（Katharina von Bora）とが混っていたのである。勿論ルターは夢かかる女性を救い出したとは想っていなかった。

脱出尼僧十二名中三名はザクセンの親族へ復帰し、残る九名の中六名も程なく親戚知友の許に引きとられ更に三名の中二名は暫らくルターの親友の画家クラナッハの許に寄寓することになり、最後の一名カタリーナはフィリップ・ライヘンバッハという弁護士の家で世話になることになった。ルターがしかし十二名の尼僧の脱出を援助し、夫れ夫れ責任をもって然るべく面倒を見たことに対しては、やがて世間からの非難や兎角の風評を立てられもした。しかしそんなことはルターの歯牙にもかからぬつまらない非難でしかない。ルターは修道院における敬虔生活より

も、健全な市民の健全な家庭生活に移すために骨を折ったのであった。

ルターは司祭や修道僧にもすでに結婚を奨めてきた。リンク、ブーツァー、カールシュタットという連中はいずれもルターの勧告によって結婚したのである。彼自身は自分の結婚については未だ考える遑を有たなかった。カタリーナという女性はヴィッテンベルクでバウムゲルトナーというヴィッテンベルク大学出身の青年と相思の仲になったと言われる。しかしこの青年はニュルンベルクの名門の息子であって、多分カタリーナの如き脱出尼僧と結婚することを家族の者に反対されたので、一年半の月日はいたずらに不調の中に過ぎていった。ルターはこの二人の結婚を出来れば成就させたいと同情していた。それで、この青年に書き送って「貴兄がもしカタリーナ・フォン・ボーラをわが有にする意志がおありなら、急がれたら可いでしょう。でないと彼女はこの界隈の者に取られるおそれなきに非ずですよ。彼女は今もなお貴兄に対する愛を棄ててはいないと思われます。私は貴兄らが一体となられることを真にお慶びするのですが。」折角のルターの奨めも竟に果を結ばなかった。しかし清い友誼はルター夫妻とバウムゲルトナーの間に終生続いた。

ルターがこの友人にほのめかした求婚者はヴィッテンベルク大学教授カスペル・グラーツであった。しかしこれはカタリーナの方から断った。彼女はマグデブルク市の教会牧師ブルターの親友であるアムスドルフに無邪気な気持で、自分の意中を述べて、アムスドルフでもルターでも、

どちらから申し込まれても辞さない旨を告げた。アムスドルフは独身を貫こうとしていたので、このはなしをルターに伝えた。

ルターは正直のところあまりカタリーナに心を引かれなかった。彼女は少し高慢なように見えた。知性の勝った女性のように思われた。彼女は時に二十六歳。その輝かしい黒い瞳、秀でた白い額、端麗な容姿はしかし犯すべからざる気品を表わしていた。彼女は一四九九年にマイセン地方の一貧乏貴族の家に生れ、両親はその養育費に窮し、十歳の彼女を尼院へ送ったのであった。爾来二十四歳の春、出尼院まで十四年間の乙女時代を静かな尼院に明け暮れたのである。しかし尼院の壁は冷たくあった。その空気は宗教的ではあっても、福音的ではなかった。福音の性格は自由であり、生命に満ちている。人間性を徒らに拘束する宗教的なものが真の敬虔ではないことに彼女が目覚まされたとき、彼女の抑圧され、窒息しそうになっていた青春の生命は罪からの解放と同じく尼院の壁からの解放を願ったことは当然の勢であったといわねばならない。彼女は確かに優れた女性であった。ヴィッテンベルクにこのようにして滞留している間に彼女の存在はその上流社会に認められるようになってきた。彼女がクラナッハの家に寄寓していたとき、偶々(たまたま)デンマルク王クリスチャン二世がこの画家を訪ねたことがあったが、その時、カタリーナは金の指輪を贈られるほどであった。

ルターは一五二四年十一月にスパラティンにこんなことを書き送っている。「……私は神の聖

手の中にある。神は何度でも私の心を変えることができる。毎時間、否瞬間ごとに生殺与奪し給うことも神の聖旨のままである。しかし私が現在の気持を有ち続ける限りは結婚しないだろう。……私の心情は木石ではないが唯この場合どうしても結婚する心持ちになれないからである。それは私が日々、異端者として処刑され、殺されることを予期しているからである。私はこのこと〔結婚〕のために、私に委ねられている神の業に制限を加えることを希まないのである。……」

しかし一五二五年四月、農民戦争の戦火の燃えている頃、ルターはスパラティンにこう書いた、「貴君はなぜ結婚するように手筈を進めないだろうか。私は多くの論拠から他人に結婚を奨めている。私もようやく結婚を断行しようという気持になって来た。」それから数日経って、彼は彼一流のユーモアを交えてこう書いた、「……しかし貴君がもし私に例を示せと言われるならば、私は著しい例を示したように思う。それは私がすでに妻たるべき三人の女性を同時に有ったことがある。私は彼らを熱心に恋したが、そのうちの二人は他の良人に嫁したので、私は失恋の恨みを呑んだ。第三番目の者をやっとわが左腕に擁しているが多分またこれを失いそうだ。君はなかなか気の永い恋人であるから、ことによると、一人の妻の良人になることすら覚束ないようだ。だがねえ、結婚すまじと決心していた私が、貴君が思いがけなくも婚約することになろうと予言しているのだよ。神は実に人の夢想もしないことをしでかし給うのが常であるからね。……戯談はともかく、貴君が想って居られるところを実行されるように、貴君に勧めたくこう申した

のです。」

農民戦争の戦禍のおさまらぬ一五二五年六月十三日、火曜日の夕、ルターはカタリーナとヴィッテンベルクの修道院で突如結婚式を挙げた。式の参列者は極めて少数であった。すなわち城教会の執事、市の教会牧師、法科の同僚アベル、画家のルカス・クラナッハ夫妻のみであった。

この式後二週間、六月二十七日に、公開の儀式を市の教会で、祝宴を修道院で催した。この時は両親を招き、友人たちを呼んだ。その時の彼の招待状はよく彼の胸中を表わしているから、ここにその一部分ではあるが、紹介したいと思う。

マンスフェルト市参事会員ヨハン・リューヘル及び二名の評議員へ、

「敬愛する各位！　私が農民に反対した文書により如何に強硬な反対の叫びを惹き起したかは兄等の御存じの通りです。神が世界のために私を用いてなし給うた聖業は皆忘れ去られました。貴族も僧侶も農民も、誰も彼も今や挙って私に反対し、私を脅かすに死を以てしています。私はすべて覚悟しています。彼らがこれほどまでにもの狂ほしく、愚かであるから、私は死ぬ前に、神から命ぜられたままの生活に入ろうと決心しました。

また出来るだけ、教皇の支配下の旧い生活様式（修道僧的独身生活）を脱し、世人をして一層狂且つ愚たらしめようと心を決めました。これは私がこの世と訣別する置土産です。神がそのうちに私にその恩恵（召天）を与え給わんことを予知しているからです。それ故、私はわが愛する父

の願望に従って結婚しました。口八釜しい連中に妨害されないように、急いでこれを断行しました。来週の火曜日に小祝宴を催したいと思います。……国内は今擾乱の最中ですから、私は強いて貴君の御来臨を請がうことを敢てしませんが、もし貴君が自ら都合して御枉駕下され、且つわが愛する父母をも御同伴下さるなら、私は本当に有難いと思います。……こちらは貧しいけれども、もし貴兄が同道したいと思われる善き友人がおありでしたら、私は欣んでその人々にお目にかかりたいです。……」

アムスドルクに宛てたこの書状によって見るも、彼が結婚を一面には父から勧められたこと、そして彼は父の願いに従って親を欣ばせたかった心根もあったことが充分わかる。結婚は、彼にとってこの度は瞭かに神の意志であり、彼の福音に対する実践であり、父母の願望であった。

コッペに宛てた手紙の冒頭に彼は言う、「突然且つ意外にも神は私を聖なる婚姻の綱を以て捕え給うた。」

実に修道僧ルターと修道尼カタリーナとの結婚は福音の戦に花冠に添えたものであった。この福音的根拠に立つ実践実証なくしては、健全な社会を構成すべき健全な家庭の福音的顕揚は危いのであった。

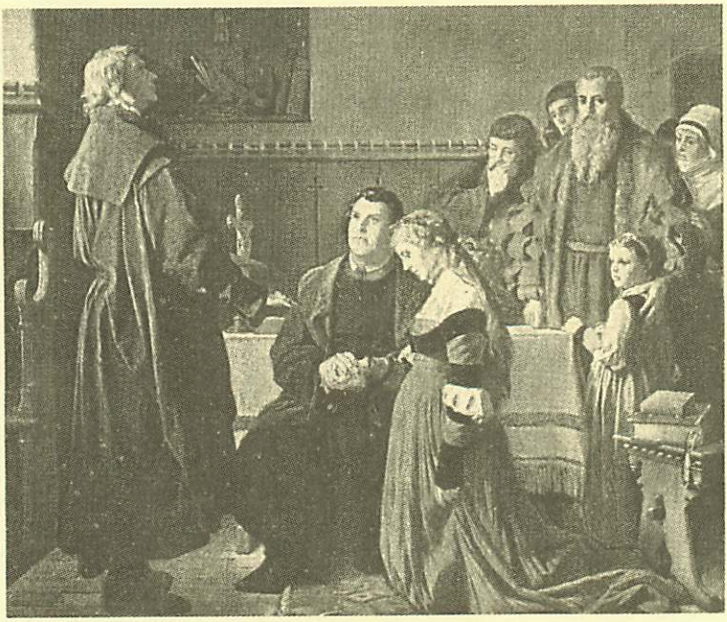
しかしルターのこのセンセイショナルな結婚は忽ち評判となり、敵側の悪宣伝の好資料となり、あらぬ忌まわしき風評が醸された。しかしルターの情廉はいうまでもないことであって、彼

らの風評は却て淫らな悪修道僧や尼僧の現実を自ら曝露するまでのことであった。唯だしかし彼が結婚した時期は常識的に考えると他人の非難を蒙るのも一応尤もらしく思われる。即ち農民戦争の深い関係者責任者という地位に在る人物と一般には見なされても仕方のない彼が、その戦乱の炎なお鎮らぬ折に、またルターにとっては恩愛の君主フリードリヒ選帝侯の薨じて後一カ月程なる悲しみの涙渇かぬ時に、突如結婚するが如きは、常軌を逸した仕打ちではないかと責められたわけである。然り、まことに常軌を逸している。しかも逸せざるを得なかったのである。農民戦争の惨澹たる現状を目撃し、その渦中に在って彼はいつ刺客に襲われぬとは限らないと覚悟していたことは明白である。そのことは彼に福音的な結婚の実証を迫る重大な契機であった。縦い彼が理論的にはそれほど意識的に跡づけなかったとしても。またかの十二人の尼僧の中、唯一人残ったカタリーナの始末について責任を感じていた彼として、彼女の運命が謂わば宿命的に、摂理的に自分に振りかかって来るのを感得した瞬間、彼の如き性格の人として即決断行する気になったのはむしろ自然であったと思われる。また両親の願望を一日もはやくそれによって満たし得ることも、血あり涙ある彼の喜悦であったに相違ない。また修道尼たちとルターとの間の兎角の風評を結婚によって吹き飛ばすと同時に、結婚によって更に嵐にまで吹き立てることも、彼の痛快と感じたことであろう。

さまざまな素因が相誘発して彼の心に迫って来たとき、彼はその最後的決意を福音という太い

線上でなしたことだけは疑う余地なきところである。神が突如自分を婚姻の綱で捕え給うたという上掲の告白はかかる消息を表現したものと信ずる。ルターの改革事業は、この結婚とこれに続く家庭生活を以て一つの美しい華を咲かせたと見てよいと思う。その名誉の一半は敬虔な妻カタリーナに帰すべきである。われらはすでに福音のためにめざましい戦を戦ったルターが、歓びの野辺、憩いの水辺、祈りの森、讃美の幕屋として与えられたこの婚姻に対して心から一つの聖句を贈りたいと思う。

「われエホバを大いに歓び、わが魂はわが神を楽しまん。
そは我に救の衣を着せ、義の外服をまとわせ、
新郎が冠を戴き、新婦が玉黄金の装飾をつくるが如くしたまえばなり。」（イザヤ六一・一〇）



マルティン・ルターとカタリーナ・フォン・ボーラとの結婚

二三　ルターの家庭生活

ワルトブルクの城からヴィッテンベルクの市に降りて来てルターの棲った処は修道院であったが、彼にとってこの修道院はそのまま家庭団欒の場所となった。四十人の修道僧を収容したこの僧院も還俗続出のため一五二三年には、院主ブリスガーと彼のみになった。ルターは結婚までは院則を遵り修道僧としてなすべきをなして来た。敵や味方の非難批評に対して彼が応えた態度は、飽くまで自己をいつわらざる真実と自由、神の聖旨に従う必然に拠らんとした。

パトス（情熱）なきロゴス（理念）の表現は形骸に堕し、ロゴスなきパトスの実現は幻想に浮く。ルターの修道院的敬虔の否定から、家庭生活を基体とした市民生活への移行は実にキリストのロゴスをキリストのパトスで生きることにあった。そこに福音的エトス（倫理）が実践されてゆく。然らばそのような現実への原動力は何であるか、聖霊である。聖霊なきところにこの構造

の実質は硬化し、パリサイ化する。ルターはその間の消息を体験をもってわきまえていたはずである。

彼は修道院という建物そのものに拘わることなく、建物をむしろそのまま福音的な家庭の在り方で謂わば曠野の幕屋となしていた、といったらいいだろう。フリードリヒ選帝侯はこの主屋をルターに贈与されたのであった。

修道僧としてのルターは結婚と共に終りを告げ、彼は大学教授としての公職とその俸給によって生活することになる。今までは俸給は受けていなかったのである。

ルターの著書を出版した者らは巨額の富を作りながら、ルターに印税を払うこと僅少で、著者は貧しいという奇現象であった。ヨハン選帝侯はルターの功績に報いるために贈物をしばしば恵与したが、ルターはむしろ心苦しく思い、恩寵を受くべき者が他にあると言って、過分なことは辞退したき旨をしばしば上書した。ルターが立派なものを身に着けることがある場合は、みな恩賜のものか、彼の敬慕者からの贈物であった。それは好意を全然無にしては済まないという気持からであって、彼自身は身なりを一向頓着しなかった。困る者があれば、金銭でも衣類でも器具でも惜しみなく与えた。ある時学生が病身の両親を見舞いに帰郷したかったが金がなくて困っていた。ところがルターにも金がない。ふと彼は友人が贈ってくれた銀盃に思いあたった。「君、銀盃があったよ。こんなので飲んだことがないから僕は要らない。これを金細工師へもってゆき

たまえ、買ってくれるだろう。そうすれば旅費は充分出来るよ。」といって、くれてしまった。それは実に立派な銀盃であった由。物質に淡々たるルターはこんな調子であった。もし彼が侯に乞うたものがあったとすれば、それは祝宴などで人々を歓ばせるための葡萄酒や鹿肉などの酒肴類であった。ものごとに屈託なく、人情に脆い彼は瞞され易く、しばしば馬鹿を見ることがあった。彼は自らそのことを嘆きつつも、欺かれることは光の子の幸として、この世の子らの如く賢くなろうとは夢想わなかった。ルターの貧乏性に外側から歯止めをかけて、家計をたてたのは賢妻ケーテ（カタリーナの愛称）であった。

彼の無頓着さはその書斎にも見られる。書籍と原稿用紙と書類とは狼藉と置き散らかされて、足の踏み場もない有様であるのは珍らしくない。独身時代には彼はいわゆる万年床の敷きっぱなしで、メランヒトンも眉を顰めざるを得ぬ無精振りであった。こんなことを曝露すると、読者の中には、わが意を得たりと思う青年があるだろう。善い哉！　ただしルターの如く真剣に生きよ。彼にとっては福音の真理が生活の一切で、これと取っ組んで明け暮れ、「醒めて想い寝ねて夢みる」ものは唯だこれ「神の国と神の義」であったし、敵はサタンとローマであったから、その他のことはどうでもいい問題であった。食事の不規則も結婚後と雖も必ずしもなおらなかった。仕事に熱中するときはしばしば眠らず、しばしば食べずに続行した。また、食べるとなると、暴飲暴食こそしなかったが、相当妻君をてこずらせた。彼は生粋のドイツっ子で、よく食べ

よく飲んだ。ビールも葡萄酒も彼は好きであった。しかし平常は粗食に甘んじ豊かにも乏しきにも彼は感謝した。いじけた律法的な敬虔でなく、自由な福音的敬虔の豊かさであった。

遊戯も運動も舞踏も結構であるとした。将棋も一廉の腕前があったという。彼はまた庭さきに薔薇と百合を栽培してこれを愛でた。この二つは特愛の花であった。しかし彼は楽しみを私しなかった。神において在る者らしく無邪気な清朗な歓喜を享受したのである。「私は庭さきに植木し、堀池をつくりました。両方ともうまくいきました。お訪ね下されば、私たちは薔薇と百合の花で貴兄に花環を編みましょう」とスパラティンに書いている。このような気持で人々と楽しみを共にしたのである。ルターは福音的な健全な家庭の実をおのずから証していた。

結婚についてルターはこんなことを『卓上談話』(《Tischreden》)の中で言っている、「婚姻は神の秩序である。もし結婚がなかったら、世界ははやくも荒れ果て、すべての被造物は無となり、神の創造も徒労に帰したであろう。アダムにエヴァが与えられたとき、アダムは聖霊に満たされ、彼女に美しい名を与えた。エヴァとはすべて生けるものの母という意味である。……彼女は生きとし生けるものの泉であり、根源である。エヴァという言は短い言だが、彼女への素晴らしい讃辞である。……われらの最初の父祖アダムによって語られたこの言葉は聖霊による。この聖霊の言は婚姻をかくも美しく定義し讃美しているではないか。……」

彼は音楽を特に愛した。シュパンベルクの有名な画が示してくれるように、彼は自作の歌曲を

家族の者たちと奏で歌った。彼のセレナーデは讃美歌であり、彼の恋人はキリストである。彼ほどイエス・キリストが力強い万軍の主であると同時に一切の罪と弱さをどん底から荷なう贖主であるとして、キリストに酔うた人が幾人あるだろう。彼にとってサタンは罪への誘惑者、ゲヘナの実在者であった。現代人にはこのような霊界の現実がわからないから、即ち信仰が観念的になっている場合が多いから、ルターが如何にサタンと戦ったかは解し難いのである。そのサタンと戦う武器として彼は神の音楽を最善のものとした。

最も福音的にイエスの降誕節を迎えたのは、従ってやはりルターであった。ルターのクリスマス讃歌はあまりにも有名である。ドイツにおけるヴァイナハテン（クリスマス）の福音的な祝祭は素朴で独特な佳趣をもっている。あれはルター気質に発しているからであろう。

開放的な彼は学生たちを宿泊させていた。遠近から彼を敬慕して訪ねてくる者も多かった。修道院時代と同じように、彼の家は旅人の、困って彼を訪ねる者たちのおやどであった。イギリスのゴルドン将軍もそうであったように、彼らは自分の家を神の幕屋としたのである。学生たちとはよく食卓を共にした。その『卓上談話』が遂にあの大部な語録を編み成すに至った。彼の自然の会話があのように福音的であり、色とりどりの真理の小花を撒き散らしたようであるのは、一種の驚異と言わねばならない。彼は本当に聖書の言を底の底まで自分の言にしていた人である。ルターを「聖書の人」と呼ぶとき最もよく彼の本質を表わすと思うので、この書の題名とした。

預言者エレミヤが告白しているように、彼も聖言に酔っている人であった。しかも聖書的、福音的ということと、人間らしさとドイツ的ということが渾然としていた彼である。福音的という神の普遍性は、独乙的という人間の特殊性を通して、真の人間、歴史的、地理的、民族的な具体的人間を創造し形成してゆくのであった。このことはあらゆる人種において真理である。我ら日本人の心臓も福音というX線を通して始めてかの日本刀の素晴らしさよりも、かの大和魂の美しさよりも、素晴らしく、また美しきいのちあるものとなるのである。

さて我々はルターの子らについて伝えられているところの一端を学ぼう。

一五二六年六月に長男ハンス（Hans）が与えられた。満四十三歳になって始めて子を有ったルターが、どんなにこの小さい子を喜び、感謝したかは、その後の書翰にハンス坊のことが頻りに出てくるところを見ても充分うなずける。

ところが結婚第三年の一五二七年に、ルターは重症に陥った。殆ど瀕死に近い病床で、ハンスとその母親ケーテの身の上を案じて彼が嘆いたときに、健気なケーテは応えて言った、「若しもその事〔召天〕が神さまの聖心なら、貴方は私と一緒にいらっしゃるよりも神さまのみ許にいらっしゃる方が宜しうございます。貴方に助けていただかなければならないのは、私やこの子よりもむしろ沢山のキリスト者たちなのでございます。どうか私のことは御心配下さらないで下さいまし。」神信頼のケーテのしっかりした心根とねんごろな愛の看護は重症のルターに大きな慰め

と励ましと力を与え、彼は再起することができた。

このような重症の試煉を通った同じ秋にこんどはペストがヴィッテンベルクの市をも襲った。選帝侯廷も大学もこの疫病の難をイエーナに避けた。ルターも避難するように侯の勧告を受けたが、彼は「私は羊達〔キリスト者たち〕が、一番私を必要とするときに、彼らを見棄てて逃げる雇傭人とはなりたくありません」といって、病魔が猖獗を極めて来てもなお町に踏み止まり、人々の救助のために力を尽した。ケーテも夫君と共に自分は身重でありながら、市の疫病と戦った。市長夫人まず斃れ、彼の知人たちの家族が幾人か相継いで仆れてゆく。彼は友人たちに難を彼の家に避けるようにしてやる。そのうちに彼の同じ屋根の下で感染した者が出て来た。このような疫病との戦のさなかで、長女エリーザベッ（Elisabeth）が生れた。それは一五二七年十二月であった。このような苦難の中で、ケーテはまことに頼母しい妻であり、母であった。ケーテがルターにとってどんなに頼母しい妻であったかは次のようなルター一流の卒直な言で充分察せられる。「私はケーテから離れたくない。然り、フランスとヴェニスをもらっても離れたくない」。「神の言の次に貴い財宝は聖なる結婚である。神の最上の賜物は敬虔にして快活で、神を畏れ、家を整う妻だ。このような妻とは平和に暮し得るし、財産も身体も生活もまかせることが出来る」。

折しも南独乙に信仰迫害の事件が起った。バイエルンの牧師レオンハルト・カイザー（Leon-

hard Kaiser）はその犠牲となり焚刑に処せられた。多分是らの病魔と迫害のあらしの中で詩第四十六に励まされつつ詠ったのが、かの「我らの神は堅き城なり」（《Ein' feste Burg ist unser Gott》）の讃美歌であったのであろう。この歌の背景として農民戦争のことも念頭にあったと思われる。〔別項「ルターの讃美歌」参照〕

翌一五二八年八月、疫病猖獗時の児として悪条件のもとで世に出たエリーザベツは早くも世を去った。そのときルターは父たる者の心の弱さと苦しさとを経験させられたことを告白している。一五二九年五月に次女マグダレーネ（Magdalene）が与えられた。彼女は姉に替って一家の花の如くであった。一五三一年には次男が与えられ、父と同じくマルティン（Martin）と名づけられた。ルターは三人の子供たちの父となって嬉しく、また彼らを「三王国」であると言っている。

子供らの醸し出すメルヒェンランド（お伽の国）はルター自身にとっても祝福された天国であった。神信頼の深いルターは童心の有ち主であった。ハンスがミルクの川が流れ、白いパンの成る樹の繁っている天国の歌を歌えば、ルターも一緒にその夢の現実に遊んだのである。ルターは幼児の世界を心から慕って言った、「幼児の生活は最も祝福された最も善いものだ。彼らにはこの世の憂きもなやみもない。彼らには教会によく見られる醜い恐るべき狂信や党派根性などがない。死や地獄の恐怖から来る苦しみも知らない。彼らの考えは純で、彼らの想いは楽しいことば

かりだ。」神が与えたもう窮極の世界が、美しきものである限り、それはメルヒェンの世界と相通ずるものを何らかの意味で具有していると思われる。子供の空想の世界がいたずらなる空想であるならば、神は何故かくも美しくつくり給うのであろうか。「幼児の如く神の国を受くる者ならでは」とのイエスの言は、幼児の純真な性格的美がとりもなおさず神の国の性格の一反映と見て支障なきを推断させるではないか。幼児が、与えられた現実の美から、空想する美の世界を単純に信じて、それを現実化する信頼深さ！　神の国は此の如き魂に今現じ来たり、後、終末の日に現ずるのである。神の国の門は「信頼」なき魂には残念ながら鎖されているのである。素晴らしい終末の世界の現実が、実は幼児の如き純なる心に、時空を越えて投影してくるのである。これはまた純なる祈りの世界に開示される消息の一端である。

かくも子らを愛したルターは、しかし、決して溺愛するような父ではなかった。その昔、厳格な父に育てられたように、また神が厳かな神である限り、ルターも義の一線を揺がすことが出来なかった。幼きハンスすら三日間も父の勘当に遭ったことがある。

一五三三年一月に三男が生れた。彼はこの子を彼の特愛の使徒パウロに因んでパウル（Paul）と名づけた。ルターは自分で勝手に、長男を自分の後継者にしてローマに対する戦士として神学者に、次男を自分が父親に期待されて成らなかった法律家に、三男は気丈者なのでワルトブルクの騎士の如く軍人に育てあげたいと希んでいた。しかし神のなし給うところはルターの註文通り

ではなかった。即ち長男のハンスはむしろ彼の如く法律科を専攻し、成人してプロイセンのアルブレヒト公に仕えた後、ワイマールの高等法院評定官となった。次男マルティンが父の如く神学を研究し、父の後を継ぐと思われたが、惜しむらく齢三十三で召天した。三男パウロは医学を修め、終りにはザクセン選帝侯の侍医となった。

一五三四年十二月に三女にして末子なるマルガレーテ（Margarete）が生れた。彼女は無事に育ってプロイセンの貴族と結婚した。

かつて「黒い修道院」であった建物が、今はこうしてルターの賑かな家族の家、学生や旅人や困窮者の宿屋、福音的なキリストの幕屋となった。ケーテ夫人の多忙と活躍は大変なものであった。またケーテを助けてくれた婦人にケーテの叔母にあたるマグダレーネ・フォン・ボーラがあった。彼女もかつてはケーテと同様ニンプシェンの尼僧であった。一五三七年他界するまでルター家のあたたかい援助者として尽してくれた。彼女はみんなから「ムーメ・レーネ！」（Muhme Lene!）（レーネ叔母さん）と呼ばれて親しまれた。

さて我々は最後に可憐な次女マグダレーネについて学ばねばならない。彼女は「レーンヒエン」（Lenchen）と愛称されていた。生い立って愛くるしい少女になった。ある時父親がこの子に、「天国へ往きたいかね。」とたずねると、彼女は「往きたいわ。お林檎やお砂糖や梨や杏が天国では沢山いただけるから。」と即答した。ルターは子供の単純な卒直な信頼感からは、いつ

も逆に信仰の相を学んでいた。ところがこの可愛いレーンヒェンが十三歳のとき、重い病気に罹ってしまった。ルターは日夜彼女のため熱禱を捧げた。彼岸の瀬戸ぎわのベッドに父は身を寄せて祈るが如くささやくが如く神と娘とに言った、「この子を本当に愛しているのです。でも神様、この娘をお召しになろうというのがあなたの御こころなのでしたら、私はよろこんでこの娘をあなたのみ許に在らせたいと思います。マグダレーネ！　可愛い娘よ！　おまえは此処でお父さんの傍にいつまでも居たいんだね！　でもまたあのお父さまのところへも欣んで往くのだね。」信仰と人情の渦の中からの熱い吐息のような父の言に応えて少女は言った、「ハイ、お父さん、神さまのお思いになる通りに！。」

„Ja, herzer Vater, wie Gott will!“

極めて自然に、純に、信頼深い言が発せられた。これを聴いたルターは深く感動した。間もなく彼女の息は絶えた。ルターはベッドの傍に跪いた。祈った。涙がしげく滴った、床の上に。父は娘を両腕に抱いた。マグダレーネは愛する父に抱かれながら、「天のお父さま」のみ許へ往った。埋葬のとき彼は言った、「私は霊においては確かに喜んでいます。けれども肉はそうさせません。あの娘と別れたことは限りなく私を苦しめます。あの娘はきっと平安の中にあるし、幸であると思うのですが、それでも私がこんなに悲しいのはなぜだかわかりません。」

このルターの切々たる言葉で、想い合せられるのは、内村鑑三先生がある人に贈られた次の三

十一文字である。

亡き娘を懐う
その霊は父の聖国に安しとは
知れども尽きぬ我が涙かな

June 29. 1926 15 years after she passed away.

内村ルツ子父　鑑三

内村先生も愛娘ルツ子さんを天に送って十五年経っても涙は尽きないと告白しておられる。信仰の告白も本当であり、人情の告白も本当である。信ずればこそ愛惜もし、愛惜もすればこそ信ずるのである。矛盾であって矛盾でない。人生は所詮そういう劇である。神を信ずる者には勝利の劇となるが、そうでない人にはどういう劇となるか。

（なおここに附言させていただくならば、右の内村鑑三先生の一枚の自筆の紙が信友今橋淳君の書斎に掲げられてあるのを見て私は感動し、これがどうして彼のところにあるかの由来を聞いた。彼は私にその後、これを写真版にして贈ってくれた。そこで私はその写真版を私の聖書集会所に掲げているわけである。）

ここに内村鑑三を想い合わせたのも自然なことである。それは内村鑑三はある意味で日本のルターであるからである。両者の精神史における地位や役割において、また人格的にも類似性があ

るからである。（第六巻『随想集』の「偉大な野人」「矛盾の偉大さ」参照）

厳に過ぎたルターの父の家庭に比してルター自身は暖かいホームを創った。それはイエス・キリストの愛を体受したからである。ルターは妻を愛し、子らを愛した。彼のパトスは妻の愛よりも深い熱いものであったであろう。父なる神のパトス——これをアガペー愛という——をキリスト・イエスに在って体受することが隣人愛の源泉である。これを知り、そこに生きることを体得し体現したルターは家庭生活そのものにおいても、大切な宗教改革の一環を身証した。いわゆるマイ・ホーム主義では断じてなく、家庭幕屋を旅人の曠野のオアシス（沃地）としたからである。「エホバ与え、エホバ取り給う、エホバの聖名は讃むべき哉」、ルターも乙女マグダレーネを取り去られてヨブと共にこう祈ったにちがいない。彼はおのが死に至るまでマグダレーネを深く憶えていた。彼にとって乙女の死がのこした瘡痕は地上では消えるよしもなかった。

十三歳を一期として天上の星と化した地上の花レーンヒェンは、全身的信頼の美しい魂であった。ここまで書いて筆者の眼にも天露が滲み出た。

「私も子供のとき死にたかったと思う。

そのためには此の世で有ち得る名誉などはすべて棄ててよい。」

マグダレーネを愛惜してやまぬルターのこの一言に、人生のやりきれない悲哀を感ずると共に、天国の虹が映ってくる。

二四　ルターとエラスムス

文芸復興（Renaissance）と人文主義（Humanismus）と宗教改革（Die Reformation）の異同について簡単に述べながら、ルターとエラスムスの比較と両者の論争に触れたいと思う。

文芸復興

文芸復興（ルネサンス）はあるがままの人間の自律的な生活感情の目醒めというわけで、商工業の発達を見たイタリアの市民階級の経済的興隆と共にギリシャ・ローマの古典への文芸方面の復興を契機として抬頭して来た十三世紀頃からの人本主義的文明の興隆であることは人の知る如くである。中世は宗教形態が教権制度（Hierarchie）であり、政治的には封建制度（Feudalismus）であって、市民の生活を他律的に（heteronomisch）律していたわけで、本来自由を欲す

る人間の根本衝動が、他律の下にいつまでも服しているわけにゆかないのは歴史が語るごとくである。自律的な（autonomisch）生活とその文明への精神的転向の機運が勃興したわけである。ルネサンスはそのように生活感情が自律的であり、現世的である。

人文主義

また一方、人文主義（ヒューマニズム）なるものは、社会生活が人本主義的な合理的秩序において、理性的に自律的に営まるべきものとして目醒めて来た十五世紀頃からの精神運動である。「人間自身がすべての事物の尺度である。」といった表現は人文主義の根本性格を表わすといってよいであろう。それはまた人間の価値と品位を重んずる思想で、ルネサンスは情感の面において、ヒューマニズムは意志と理性の面において人間そのものを尊重する精神的勃興であったといってよいわけである。いずれにせよ、楽天的であり、現世肯定的である。ではあるが、幾世紀に亘る宗教的なる因子が消え去ったわけではない。その中に宗教感情が本然のすがたで生かされたところに、あのイタリヤの文芸復興期の絢爛たる不滅の芸術が花咲いた。ダンテ（Dante 1265-1321）、ペトラルカ（Petrarca 1304-1374）、ボッカチオ（Boccaccio 1313-1375）、ミケランジェロ（Michelagniolo 1475-1564）、ラファエル（Raffaello 1483-1520）等はその代表的芸術家であった。〔ダンテについては第二巻『芸術のたましい』に詳論してあるので参考されたい〕同様に人文主

義においても宗教的要素が否定されたわけではない。この方面の第一人者が即ちオランダはロッテルダムのエラスムス（Desiderius Erasmus 1469-1536）である。

エラスムスとルター

そこで我々は今やエラスムスの人物とその思想に触れながらルターとの異同を見ようと思う。それはやがて人文主義と宗教改革の異同ということであろう。何となればエラスムスとルターはこの両面における代表的人物、双璧であるからである。

エラスムスは、史上の彗星的人物の一人——多分牧師による優れた私生児である。そのためであろう、彼は正に他律的に修道院生活をさせられた。ルターは人間的他律ではなく、天的他律によって修道院に入ったことは既に見た如くである。エラスムスは現実の修道院批判から人間的自律の方向へ意志的に動いた。ルターは天的他律に人間的自律を以て応じようとしたが、その不可能なことを知って天意に降参した。すると逆に本当の自由を得るに至った。同じく修道院に入りながら、その入り方とその中における体験の仕方に両者の相異が既にあらわれたと言ってもよいと思われる。

エラスムスは一四九五年以来パリ大学に学んだが、そのスコラ哲学と修道院的な厳格主義に対して批判的となった。彼の人文主義がパリ大学時代に確立したことはその時代の著作に明かであ

る。やがてイギリスのジョン・コレットの影響により、彼は美学的な文献研究から神学へ移行した。その頃の顕著な著作は『キリスト教軍人便覧（《Enchiridion militis christiani》）』という本である。実に立派な含蓄のあるラテン文で書かれている由である。その論旨とするところは、宗教祭儀、無味乾燥な教理などは、キリストの意に反するもので、隣人のためにおのれを棄ててかかる愛を以て生きることが大切で、イエスの精神に帰れ、というのである。キリスト者はキリストの兵士らしい服従と奉仕の精神で生きるべしというのである。

彼は勿論多くの著作をしているが、エラスムスの思想はおよそ次のようなものであると謂われている。即ち、彼はキリストの福音を実践せんとする実存的思惟に基づいて論じているのであって、思弁的、抽象的なものを嫌う。トーマス・ア・ケンピスの『イミタチオ・クリスティ』（『キリストに倣いて』）が神秘主義的情感による実存主義とするなら、エラスムスのはむしろトルストイが『山上の垂訓』を宗教的道徳の規準として実践せんと努力したように、キリスト信仰を土台とした自律的な自由意志を以て宗教道徳を実践せんとする宗教的実存主義といって可いようである。キリストは唯一の教師であり模範であり、敬虔の原体であり、生活の規準であり目的である。

エラスムスには、キリストの十字架は「私のための」犠牲的な愛ではあるが、パウロやルターの如き「私に代って」死んだ贖罪の愛にまで徹底していない。「神の似姿」（Imago Dei）として

の人間は、信仰を土台として自由なる意志を以て、「神の似姿」にふさわしい生き方をすべきであるという。「神の似姿」の本質を聖霊によって信受する使徒的信仰とはちがうのである。

エラスムスは宗教改革に対して接線的関係に位置してはいるが、人文主義の殻を突破しなかった。勿論現代の文化人よりはるかに宗教的ではある。

「自由意志論」と奴隷意志論

ルターとエラスムスの最も明瞭な差違は、「自由」をめぐっての論争においてあらわれた。エラスムスは一五二四年九月に『自由意志論』(De libero arbitrio) を発表して、「我々は先ずここにおいて思うに、自由意志とは、永遠の救いへと導いてくれる諸事態へと、おのれ自らを向けることのできる、またはそのような諸事態に対して背を向けることができる人間の意志の力 (Vis humanae voluntatis) である」と定義した。エラスムスの自由意志論に対して、ルターは翌一五二五年十二月に『奴隷意志論』(De servo arbitrio) を著して反論を展開した。彼は神の言葉、キリストの救いに対して応じたり、拒否したりする力を認めることの不可能なことを論じた。要するに神・キリストの恩恵の力によるのでなければ人間は何もできないこと、人間の意志からは何もまことに善なることのなし得ぬことを論じた。これはそれより以前アウグスティヌスが『自由意志論』において恩寵主義に立って論じた系統を嗣いで更に徹底したものである。アウグスティ

ヌスに反対の立場に立ったペラギウスの系統がエラスムスということになるわけである。

二五　シュパイエル国会

ニュルンベルク議会

一五二一年四月十七・十八日の歴史的なヴォルムス国会が終ると、ドイツ国皇帝カルル五世は、スペイン国王でもあるので、ドイツを去った。皇帝が不在となったので、諸侯が相議してニュルンベルクにライヒス・レギメント（帝国統制院）を形成した。時に一五二一年十一月であった。翌年このレギメントにおける議会に、ローマ教皇庁から使節が来て、ヴォルムスの勅令の命ずる如く、ルターを処刑せんことを提議した。時の教皇はレオ十世の後継者たるハドリアヌス六世であった。けれども諸侯はなかなかこれに肯んじなかった。それでルター処刑については諸侯の自由に任せることに定めてしまった。これがニュルンベルク議会の一応の決論であった。

第一回シュパイエル国会

前述の如く農民戦争が起こり、その結末はルターの意にそぐわぬ混乱に終ったので、皇帝はもとより、諸侯も福音主義に対して批判的なのが多くなった。このような状勢を見てとった皇帝カルル五世は一五二六年に、ライン河畔ヴォルムスの南方シュパイエル（Speyer）に国会を開いて新教を抑圧せんとした。ところが、ローマ教皇が図らずもフランス王フランシスと結盟してカルルに対立したので、カルルはルター処分を思いとどまった。それで国会は逆に新教側に有利となった。即ち、「諸侯は各自神と皇帝に対して忠と信ずる如く行動せよ」という議決となった。これが第一回シュパイエル国会であった。

第二回シュパイエル国会

その後政治情勢が変転して、皇帝と教皇の間に和議が成り立つや、皇帝はさきの議決を反古にせんと一五二九年に第二回シュパイエル国会を召集した。皇帝の傘下に立った旧教諸侯は俄然優位となり、議決文は新教側に不利となったので、ヘッセン方伯を筆頭に新教諸侯は憤懣やる瀬なく議場を退出した。

その後新教諸侯は協議して、第二回シュパイエル国会の議決に対して抗議文を作成し、各自署

名してこれを議場において朗読した。曰く、

「前国会で満場一致を以て決議された事項は、本国会でも満場一致を以てするのでなければ之をくつがえすことはできない。また縦いそのようなことがないとするも、神命か皇帝命か、二者択一の場合には、我らは前者を択らんのみである」。

プロテスタント

これに署名したのはザクセンの選挙侯ヨハン、ブランデンブルク方伯ゲオルク、ヘッセン方伯フィリップ、アンハルト侯ウォルフガング、及びブラウンシュヴァイク・リューネブルク公エルンストとフランツの五諸侯とその他十四都市の代表者たちであった。神かカイザルか——それは神か教皇かでもあった——の二者択一を宣したこの精神は特筆に値するものである。この抗議以来、新教徒はプロテスタント（抗争者）と呼ばれるに至ったのである。

二回に亘るシュパイエル国会は幕を閉じたが、そのままではおさまるべくもない。武力による紛争になりかねない状勢となった。時あたかもトルコの大軍がオーストリヤに侵入し来たり、首都ウィーンも刻々危険な戦況であるので、プロテスタント諸侯はルターの諫言に従い、外敵を邀撃することとなり、内乱は未然に解消のかたちとなった。

二六　ルターとツヴィングリ

ツヴィングリとエラスムス

ルターの誕生の翌年といっても五十日程あとに、即ち一四八四年の元日にスイス東部のトッゲンブルク地方にウルリヒ・ツヴィングリ（Ulrich Zwingli 1484–1531）という人物が生れた。彼は一五〇二年にはバーゼルに赴き、そこで人文主義者たちと交りを結んだが、神学の研究もした。一五一五年にはバーゼルに来ていたエラスムスを彼は訪ねた。それ以来しばらくはエラスムス流の考え方になった。しかし次第に彼自身の考え方に進展はして来たものの、未だ人文主義的な考え方と福音的な考え方の中間帯を脱するところまでは進んでいなかった。しかしエラスムスと同様、カトリック的な祭儀宗教、教権宗教に対しては批判的で、彼自らかなり急進的に改革的な集会の在り方を進めていた。

聖書に対しては、逐語霊感説的な見解を有し、ヨハネ的な神秘思想が強く、神の似姿としての神性を失ってはいないとなし、理性を以て神を認識する可能性もあるとなしていた。しかしルターの著書に接して、彼は人間の罪性を更に深刻に感ずるようになり、罪のゆるしをキリストの十字架の死に於て受けとる贖罪論を本格的に認めるようになる。従って理性の限界、道徳性の限界を告白する福音的な自覚が深められて来た。必然エラスムス的人文主義とは袂を分つことになった。カトリックの教皇権（Schlüsselgewalt）や告解（Beichte）に対して批判的となって来たから、いよいよ以て宗教改革者の面目が明白となって来た。その後の彼の著作と活動の中心はチューリヒであった。神学上、信仰上、細部についてはルターと相容れない面があった。それはむしろ当然であると申したい。キリストの弟子たちにしたところでそうであった。特にキリストの聖晩餐に発端をもつ聖餐（Abendmahl）についての見解において著しい対立が生じて来た。

フィリップ侯とルター

宗教改革の流れがルターとツヴィングリの二つの流れとして生じたわけだが、これが合流すれば力が増大すると見たヘッセン方伯フィリップは、カトリックに対する宗教的並びに新教諸侯との政治的な見解や顧慮から、この両者の融合をはかるべく、両雄をマールブルク（Marburg）城に招いて会見させ、何とか問題の解決をのぞんだわけであった。

ルターはこの会見を始めから快しとせず、彼は一五二九年六月二十三日にフィリップ侯に対し長文の書翰を奉呈し、その中で自分の説を曲げることは出来ないこと、相手が自説を譲歩する可能性があるかないかを侯がまず確かめて、もしない場合は、この会見は無駄骨折りばかりでなく、ややもすれば信仰上の確執のため剣による闘争となるやも知れぬこと、そんなことは極力避けたいことは自分の過去においてもお察しいただけること、ジッキンゲンの叛乱や、カールシュタット、ミュンツァーの騒動の如きは再び起したくなきことなどを述べている。

マールブルク会談

ルターの会見諫止の手紙にも拘らず、フィリップはルターとツヴィングリ両巨頭と夫々かなりの同行者を以てするマールブルク会談を一五二九年十月一日から四日まで開催した。ウィッテンベルクの代表者はルターを筆頭に、メランヒトン、ヨナス、アグリコーラ等、チューリヒの代表者はツヴィングリを先頭に、エコランパディウス（Oekolampadius）、ブッツァー、ヘディオ等であった。

化体説

会談ははじめは福音の同意事項に関わることで和やかに進められたが、論争の中心と予想され

ていた「最後の晩餐」による「聖餐」(Eucharistia) のことになるや俄然対立がハッキリあらわれたのである。そもそもカトリックにおいては、聖餐用のパンと葡萄酒は、聖餐式で祈るとき、そこに奇蹟が生じ、それがキリストの肉と血に化するという信仰である。しかしこの「化する」とは信仰的内実であって科学的な事実ではない、というのがカトリックの立場である。これを化体 (Transsubstantia) 説という。

象徴説

ツヴィングリはこれは信じられないとなし、キリストがパンを裂いて弟子たちにわかち与えて食べさせたとき、「これはわが体なり」と言われたのは、霊的な意味で言われたので、「これはわが体の譬喩なり」という意味であると解した。即ちツヴィングリのは象徴 (Symbol) 説である。ツヴィングリは「わが肉」「わが血」と強く言われたキリストの言葉を、やがて十字架で裂かれる肉、流される血を思っての贖罪の象徴と解した。

最後の晩餐の真義、霊受説

しかしここに思いあわされるのは、ユダヤ人に対してイエスはかつて、「わが肉をくらい、わが血を飲む者は永遠の生命をもつ。われ終の日にこれを甦えらすべし。それわが肉は真の食物、

わが血は真の飲物なり。わが肉をくらい、わが血を飲む者は、我に居り、われもまた彼に居る」（ヨハネ六・五四―五六）と言った著しい言葉は正に霊的内実のものである。その霊的内実をハッキリ霊的に信受させるためにイエスが「最後の晩餐」で具体的にパンを裂き葡萄酒を注いで弟子たちに具象的にあづからせたと見ることが最も自然と思われる。贖罪の十字架を土台とした復活のキリストの生命にあづかるという霊的内実をもったものと体受すべきであると思う。これを霊受説と言っておこう。

合体説

ルターは、パンはパンであり、葡萄酒は葡萄酒であって、どちらも変化するわけではない。しかし、信仰によってパンをくらい葡萄酒を飲むとき、キリストがそこに共在、内在し給うのである、と解した。ルターのこの考え方は、カトリックとツヴィングリの中間をとった感がある。これを合体（Consubstantia）説という。

頑固なルター

聖餐論の公開的な論戦は第二日に展開されたのであった。両雄とも自説を固持して譲らず、白熱戦となった。ルターは白墨を手に執って机上に Hoc est corpus meum.「これはわが体なり」

（マタイ二六・二六）を書いて、「これは神言である。われらはこれを文字通りに解すべきである」と言い放った。これに対してすかさずエコランパディウスは反問した。「それなら、イエスが我は真の葡萄の樹なりと言われたが、イエスは葡萄の樹なのか」と。ルターはこれに対して、「あれは譬だ、しかし、これは譬ではない」と答えた。更にツヴィングリは斬りこんだ、「活かすものは霊なり。肉は益するところなし、というヨハネ六・六三の言葉こそ聖餐に関するよき註解である。だから、これはわが体なり、と言い給うたのは、これはわが体を意味するのだ、と言われたわけだ」と。「否、エスト（なり）と書いてある以上エスト（なり）である。神の言葉である限り、私は糞でも何でも食べる」。ルターは逸脱した。彼のもち前の頑固さと毒舌が爆発した。パウロの「儀文は殺し、霊は活かす」の言葉に反している。この点どう見てもルターはいただけない。ツヴィングリの方がましである。しかし、ツヴィングリの象徴説はやや観念的であり、ルターの合体説は儀文的であり、カトリックの化体説は神秘に過ぎる。私がさきに述べたのが最も自然であり、霊然であると思う。即ち、口はパンを食い、葡萄酒を飲みながら、同時にたましいが祈りごこちでみ霊に在ってキリストを喰い、キリストを飲むのである。

第三日目、論戦はついにものわかれとなった。ツヴィングリは、小異を超え、大同に即いて握手を以て快く和解しようとした。しかし、ルターはなお批判的な言葉を吐いて、キリストに在る兄弟と認められないとなした。これはあきらかにルターの負けである。ルターにパリサイ根性が

ある。聖霊が宿っているなら、そういう態度は執ることができないはずである。ツヴィングリに寛容の愛があった。コリント前書第十三章の証者であった。

マールブルク信条

第四日目に、方伯フィリップは饗宴を催して、和解の雰囲気をつくった。方伯の依頼によって作製されたルター案の「マールブルク信条」十五箇条の中一箇条をのぞく全信条にツヴィングリは賛同し、署名した。マールブルク会談は大略このようであったが、ルターはその後もツヴィングリを悪魔の味方のような表現を以て誹謗している。性格の烈しい人物にありがちな欠点をルターも有っていた。

ツヴィングリの戦死

ツヴィングリはその後、一五三一年に旧教徒との剣の闘争をなし、四十八歳の壮年を以て戦場に斃れた。ツヴィングリの戦死を神の審判なりとルターは批判した。宗教戦争は確かにあるべからざることである。しかし、ルターの死者に対してまでもなお追い討ちをかけるような信仰的批判は、キリストから「審くなかれ」と言われはしないか。

プロテスタントの二大潮流

ツヴィングリに後れること四半世紀にして、更に大物がスイスに出現した。カルヴィン（Jean Calvin 1509-1564）その人である。ツヴィングリ、カルヴィンによるスイス系新教は改革派（die Reformierten）と呼ばれ、ルター派（die Lutheraner）と共に新教、プロテスタントの二大潮流となって旧教、カトリックの流れと共にその後の教会史を形成してゆく。

二七　コーブルク城・アウグスブルク国会

一五三〇年二月二十四日、ボロニアで、ドイツ皇帝カルル五世は教皇クレメンス七世から戴冠式を受けた。この儀式で、皇帝は頭と胸に聖油をそそがれ、教皇の足に接吻をなし、教皇が乗馬の際に鐙を捧げ、且つ馬方の如く先導したという。これがドイツ皇帝がローマ教皇からさずけられた戴冠式の最終のものであった。

要するにカルルは教皇の威をかりて宗教的には新教を抑え、政治的にはフランスを屈せしめようという魂胆であった。

そんなわけで同じ年の六月二十日、カルル五世はアウグスブルクに国会を召集した。これよりさきこの召集令を受けたザクセン選挙侯ヨーハンは、言うまでもなく新教の代表ルターを始めメランヒトン、ヨナス、ブーゲンハーゲン、シュパラティン等を糾合して、新教側の信仰告白（信

条）を作成して国会に備える段取りをとった。久方振りにドイツに帰還したカルル五世を歓迎したのは教皇側の諸侯であったが、福音主義の諸侯も一応皇帝を迎えた。ところが皇帝曰く、「シュパイエル国会以来、今日まで認めてきた信仰上のすべての特権は、これをとりやめとする。また諸侯は、明日挙行する聖体行列に参加し、余と共に市中を巡行されたし」。新教諸侯はこれを拒絶し、逆に神学論をせんとヘッセン方伯フィリップが抗議したが、カルルはこれに応じなかったので、ブランデンブルク老侯ゲオルクは手で首を叩きながら、「神と神の国の福音とを棄てるくらいなら、自分はむしろ陛下の前に跪いて、この首を刎ねていただきます」と言い放った。カルル五世は狼狽して、「首ではない。侯よ、首ではない」と言った由。

はなしはもどるが、選挙侯ヨーハンの命を受けて、ルターとメランヒトンとヨナスとは、一五三〇年四月三日牙城ヴィッテンベルクを出発して、はるか南方のコーブルクへ向った。コーブルクは、更に南方アウグスブルクへの途上半ばに位する地点にある。ときあたかも受難週にあたっていたので、ルターは「十字架と受難について」と題して礼拝説教をなした。これは実に力にあふれた説教であったという。

選挙侯ヨーハンは、カルル皇帝の召集によるアウグスブルク国会にルターを同道させることは、ヴォルムス国会の殷鑑遠からず、不可なることを直覚してルターをコーブルク城に独り残して出発することにした。草案中の信条は主としてメランヒトンに托して完結させることにした。

ルターはワルトブルク城の場合の如く、再び城に幽閉という状況に置かれた。即ち一五三〇年の四月二十四日から十月一日まで半年の籠城生活をおくることになった。

コーブルク城はドイツ語ではフェステ・コーブルク（Veste Coburg）と称われている。森林に囲まれた丘陵のただ中に聳えている城である。北方テューリンゲンの森林地帯をさしはさんでワルトブルク城に対しているのも奇しき今昔である。ルターは城の中の鍵を全部渡されたので自由に城中を歩くことができた。勿論城門は閉鎖され、衛兵三十人に護られていた。ワルトブルクでは新約聖書を訳したが、コーブルクでは旧約聖書の翻訳を進める好機をつかんだわけである。彼はいたるところで祈り、いたるところで読書をなし、いたるところで著作をなし、いたるところで福音を語った、といって過言でないほどエネルギッシュな生活をした。フェステ・コーブルクでは孤独で、語る相手も殆どなかったから半年で手紙を百余通も書いている。

親友メランヒトンにこんな手紙を書いている、

「最愛のフィリップ君！　我々は遂にわれらのシナイ山に着いた。しかしこのシナイ山を変じてシオン山にしたい。そしてここに三つの草庵を建てる。一つは詩篇の作者のために、一つは預言者たちのために、そしてもう一つはイソップのために。……当地はまことに快適だ。勉学のために至極便利です。貴君が此処に居られないだけがわるい。閑静な生活を営むには、何ら不足な点がない。山頂に建っているこの大建築が全く私の使用に供されている。どの室の鍵も私の所有と

いうわけだ。この城内には毎日食事をとる者が三十余名いる。その中の十二名は夜警に当っている。どの城塔にも二名ずつの見張人が置かれている。」

彼はまたヴィッテンベルクの自宅に寄宿している学生諸君にあてて諧謔と皮肉をふくんだ面白い手紙を書いた、

「ヴィッテンベルクにあるわが親愛なる諸君！……願くはイエス・キリストより恩恵と平安を受けよ。私はアウグスブルクの国会には赴かなかったが、そのかわりに他の議会に出頭しているよ。

私たちがこの頃起臥している城内の楼閣の窓の直ぐ下は森林である。……大鳥や小鳥の中で一番小柄で人真似の上手な鳥が、この森に集ってきて議会を開いている。彼らは昼夜をわかたず喧躁を極めている。まるで酔漢の会議のようだ。声と息がよく続くものだと私は驚いている。……さながら饒舌の侍どもが世界の各方面から集合してきたようだ。

私はまだ彼らの皇帝に拝謁していない。だが貴族や大官は私たちの眼前に飛び廻ったり徘徊したりしている。服装は極めて質素、色は一色、黒づくめである。目も一様に灰色だ。彼らはみな同じ歌をうたう。……彼らの大広間の円天井は美しい蒼空で、その床は綺麗な緑の枝で布いてあり、その周囲の壁は世界一杯にひろがっている。……狩猟者は彼らの大敵で、その姿を見ると、羽翼製の戦車に乗って一目散に逃げてしまう。彼らは高位高官の権勢ある貴族等だが、何ごとを

決議しようとしているのやら、拙者にはさっぱり分らぬ。私が通訳者から聞き及んだところによると、彼らは小麦・大麦・燕麦・麦芽その他各種の穀物に対して大戦争を起そうと計画しているそうだ。彼らの中にその戦に勇名を轟かせ、また剛毅な振舞をする者もあろう。

王侯貴族たちが帝国内の他の司権者と共に、愉快そうに謡ったり、餐応したりするうちに、われらはこの議会に列座してその議事を傍聴し、且つその模様を目撃して愉快至極である。殊に面白く感ずるのは、彼らがいかにも士らしく横行濶歩し、悠然と彼らの嘴を磨き、折々は議会を体裁よく退いて穀物や麦芽畑を急襲することである。我らは彼らの健康と幸福を願う。これやがて彼らを一緒に金串に刺さんがためである。

私は思う、彼らは説教したり、論文を草したりしている詭弁家や教皇党の徒輩に外ならないのだ。……見給え、彼らはなかなか重宝な一部落だ。彼らは地球上の諸物を破滅しようとしている。無聊を慰めるため、気晴らしに饒舌しているのだ。

今日初めて夜啼鳥（ナハティガル、ナイティンゲール）の歌を聞いた。……神諸君を祝し給わんことを！　家の世話をよろしく頼む。

一五三〇年四月二十八日　麦芽盗賊の議会より、

博士　マルティン・ルター　」

この手紙は勿論騒がしい鳥ども囁りに託けてアウグスブルク国会を揶揄したものである。ルタ

ーの一面が躍如としている。

彼が手紙の中で「私たち」といっているのは、彼の妹の子、即ち甥のキリアック・カウフマン（Cyriack Kaufman）やファイト・ディートリヒ（Veit Dietrich）という青年がいたためである。これらの青年たちやマテジウス（Matthesius）等が後にルターの卓上談話（Tischreden）を編纂したのである。

ルターの心は城の中からアウグスブルクにしばしば飛んでいた、鳥の翼に乗って。さきに触れた「信仰告白」はその後アウグスブルクでメランヒトンの手によって完結されたので、ヨーハン侯は時を移さずこれをコーブルク城に送達した。ルターはこれを閲読して侯に次のように返信を書いた、「私はフィリップ君の告白書をよみました。大いにわが意を得ております。別に訂正したいことも、変更したい箇処もありません。また私がそういうことを致しますのは宜しくありません。私はフィリップのように静かに穏かに歩むことのできぬ性分でありますから」と。実はルターには多少もの足りなかったのである。が大綱は認めた。これが有名な『アウグスブルク告白』であった。

国会は六月二十日に幕が開けた。二十五日にザクセン侯の宰相が「信仰告白」を朗読した。二時間を要した。メランヒトンの公正穏和な「告白」に対してローマ側は弁駁書の作成にとりかかった。二十名ほどの神学者によって作られ、八月三日に再び国会が開かれ、議場で弁駁書が朗読

された。皇帝は新教側がこれを認めて従うように迫った。ヘッセン方伯は憤然と座を蹴り、護衛兵をひき伴れて帰国した。平穏を願うメランヒトンは妥協的態度を示した。ローマ側は却て強く推して来た。メランヒトンは「信仰義認」と「教皇至上権」とを承認の交換条件としてもちだした。これらの情報をコーブルク城で聞き及んでルターは憤激して次のように書いた。

「諸君は教皇とルターとを一致せしめんとの驚き入った企てをしているとのことであるが、教皇もこれを欲しないであろう。ルターもこれを拒む。諸君がもしこれを成し遂げるなら、私はキリストと悪魔とを和解して見せよう。……諸君が鷲を袋の中に閉じこめようとするなら、ルターは鷲を自由に解放させるぞ。

……要之、教理上のことで妥協するは私の最も不快とするところである。教皇がその教皇制度を全廃しない限り、和合は不可能である。」と。鷲とは勿論福音主義たる新教のことである。いかにもルターらしい断然たる警告である。

メランヒトンはルターの警告により、妥協を断念した。国会は決裂となる。一五三〇年九月二十二日に次のような一方的な決議がなされた、

「新教徒は来年四月十五日までの猶予期間内に旧教に復帰すべし。それ以後は強制的に棄教せしむ。但し一箇年以内に宗教会議を開催して現教会の弊害をのぞくものとす」。

こんな決議を新教側が受け入れるはずはなく、新教諸侯と十四の自由市の代表者たちは、直ち

にこれへのプロテストを宣言、袂をつらねて席を蹴って退場。各々自国に帰った。

この報に接してコーブルクのルターは、「神のものは神に、カイザルのものはカイザルに帰した」と言って悦んだ。

これより前、春も酣（たけなわ）の五月二十九日に父ハンスがマンスフェルトで世を去った。父の死の床に侍ることも出来なかったルターは、訃報に接するや、詩篇を手にとって寝室に閉じ籠り、こころゆくまで独り涙を流し、深い悲しみと祈りに浸った。

彼はまた四歳の幼児ハンス坊に、よく祈り、よく勉強する子供が楽しいもので恵まれることなどをおとぎ話のように構成した手紙を書いたりしている。

彼は詩篇百十八篇十七節の

„Ich werde nicht sterben, sondern leben
Und des Herrn Werke verkündigen.“ -Psalm 118, 17.

「われは死ぬことあらじ、ながらえて
　主のみわざを言いあらわさん」

という句に曲調をつけて壁に貼り、病床を自ら慰めた日々もあった。この句は私もコーブルク城を訪ねたとき親しく見て、ルターの昔をしみじみと偲んだ。彼は手紙に「鳥の里より」とか「鴉の国より」などとよく書いたりした。ニュールンベルクの若い教師ファイト・ディートリヒ

は城中で、或は学僕として手伝い、或は看護人として病床に侍って、よくルターに仕えた。

ディートリヒはメランヒトンにルターのコーブルク城における生活の一端を次のように報告している。

「こういう恐怖と苦難の時代に、この人が平素と何ら異る様子が見えないのは、まことに彼のみがもっている心境でしょう。彼が実に快活で、信仰と希望に満ちあふれていることは正に驚異であります。ルターは少なくとも三時間を祈りに費さない日は一日もありません。その時が彼にとって極めて好い研究時間のようです。偶然にも、私は彼の祈りの最中に彼のところへ行ったことがありました。その時、彼は大いなる敬虔と、熱烈なる信仰と希望に満たされて、あたかも父が友人に語りかけているかのように、彼の愛する神に祈願していました。『あなたはわれらの神であり、また父であり給います。それゆえ、あなたはあなたの子らを攻める者を辱しめ給うにちがいありません。あなたがそうなさらなければ、あなたは我らと同じ危険の中に立ち給うのです。国家との交渉は一切あなたのものであります。我らはこれをやむを得ずして始めました。ですから、あなたはこれを護って下さると思います』

こんな言葉で、彼は立ったままで、澄んだ声で高らかに祈っていました。それを私は離れたところで聞いていたのです。このように彼は信頼深く、真剣に、敬虔に、神と語り、そして祈ることは、必ずすべて成就すると確信していました。祈りの中で、詩篇に録されている神の約束を固

く信じていました。私の心は、この時、力強く燃え立ちました。」

この手紙を見ても、ルターが如何に祈りの人であったかを知る。キリストが祈りにおいて神のみ霊を深く受けて伝道しておられた消息をルターはよく習得しつつあった。またこの祈りの力で彼はコーブルク城にいながらにしてアウグスブルク国会の新教側を助けたわけであった。

アウグスブルクでは、ヴォルムスの勅令の如く、ルター処刑の実施方針、寺領の返還等が確認されて十一月十九日に閉会となった。そのときは、既にルターはコーブルク城には居なかった。

二八　シュマルカルデン同盟・ニュルンベルク和議

一五三〇年の暮に、プロテスタント派の諸侯と自由都市の代表者たちは相互防衛の必要上、シュマルカルデン市に集って凝議した。これは勿論皇帝とカトリック派の諸侯の武力に対して抗争せんがための結合であった。ルターはしかし皇帝に対する武力闘争に対しては反対していた。彼はローマ書のパウロの言、「凡ての人、上にある権威に服うべし。そは神によらぬ権威なく、あらゆる権威は神によって立てらる」（ロマ一三・一）を遵ろうと思っていたからに相違ない。しかしこの言は権力者にとっては何よりの楯となる。封建制度の権力者にこれほど都合のよい言はない。ユダヤ的神政政治は本来そういう理念を土台にしていたであろうが、武力闘争によって覇権を握った王侯たちにこの言を当てはめたら民衆は時に塗炭の苦しみを味わねばならないことになる。権勢の絶対性のために史上いかに無数の人民が涙と血の中で死滅していったことであろう。

黙示録は一面そういう人たちのための聖なる復讐の文字ですらある。

ルターは外敵トルコの東方からの侵攻に対しては断乎戦わんとの意志を示した。それはともかく、選帝侯の顧問法律家たちは、皇帝王侯と雖も、事情によっては武力抵抗をするのは適法であることを説いた。かのアウグスブルクの国会のあとで、ついにルターをも説き伏せてしまった。プロテスタント諸侯の中、ヘッセンのフィリップの如きは急先鋒の人であった。ルターもこと政治方面のことになると現実問題は理論ではわりきれぬものもあることをつぶさに知ってやむを得ないとした。

一五三一年の春には天下の状勢が変ってきた。カルル帝はアウグスブルク国会の一方的な決議を実行に移してプロテスタント諸侯を服従させることの困難を感じた。福音主義諸侯の団結はシュマルカルデン同盟によって強固である。これに反して旧教側は案外統一がとれてない。あまつさえ東方からのトルコ軍の襲来がある。オーストリアの君主フェルディナンドはカルル帝の弟であるので、カルルはこれを助けねばならない。また一方西方には旧敵フランシスが対陣している。そのような状況を見てカルルはドイツ国内統一の必要性を痛感し、プロテスタントとの闘争の不利を感ずるに至った。それで一五三二年の夏にニュルンベルクで旧新両派の宗教的和議を締結することにした。旧新両教徒の間の懸案たる諸々の論争を決定するまでは、あらゆる敵対行動を中止し、プロテスタントに信教と宣教の自由を許すという主旨の和議である。これはシュマル

カルデン同盟が功を奏した新教側の勝利と言えよう。しかしこの和議も条件づきであるので、プロテスタント諸侯の中には、これが永久的な和議でないので承服し難しとする者もあった。

ルターはしかし、むしろ調停者の立場に立って、ヨハン選帝侯に献言して曰く、

「皇帝陛下はすでに充分であります。もし我らがこの和議の申込みを拒むならば、その罪過と恥辱とは我らに帰しましょう。神は恩恵を以て我らを祝してあり給います。もし我らが神に感謝しなければ、その罪や大、悔ゆるとも及ばず、我らは幸運を享受することができなくなるでしょう」。

ルターはヨハン・フリードリヒ殿下にも呈言して曰く、

「もし我々がこのような和議の好機を空しく逸するならば、その機会の再来を期し得ぬことを恐れています。諺言にもあるように、〈機会は前頭部に多くの毛髪をもっているが、後頭部は全く禿げている〉と……」

ニュルンベルク和議を大乗的に欣んで受けたルターは正しかった。その後カトリック側からプロテスタント側に改宗する者が次第に増加して来た。

二九　ルターの晩年

一五三〇年の出コーブルクと共にルターは晩年を迎えたといって可いであろう。「私はキリストを拒否するよりは、むしろ妻と共に国から追放されることをえらぶ」――これは新教をえらんだ弟ハインリヒの、旧教を固執して新教徒を迫害していた兄なるザクセン公ゲオルクに対する返答であった。このゲオルクの歿後、ザクセン公国は弟ハインリヒの即位と共に新教国となった。ルターはその即位式の主役として招かれて古戦場（エックとの論戦）ライプツィッヒに赴いた。時に一五三九年五月二十四日ペンテコステ祭のときであった。

ザクセンのゲオルクと同じく、ブランデンブルクの選挙侯ヨアヒム一世も旧教支持者であったが、彼の死後その子ヨアヒム二世は新教徒で、一五三九年に断乎改革を実施した。そしてシュマルカルデン同盟に参加した。

ケルンの大司教兼選挙侯ヘルマン・フォン・ヴィートは、かつてルター破門の令書発布の際、従行して来て、ルターの著書を焼いたつまらぬ行為をした人間であるが、今や新教に改宗して一五四三年にブッツァーとメランヒトンを招いたため、教皇から破門された。

マインツの大司教兼選挙侯アルブレヒトは別荘をハッレ（Halle）にもっているのだが、免罪符問題の頃から既にルターの仇敵であったが、この度福音派になった市民に斥けられ、市民は新たにユストス・ヨナスを牧師として迎えた。ルターは福音化したハッレの故に大いに喜んだ。

一五三〇年にコーブルクを出たルターにとって、これらの新教化現象は何より喜ばしいことであった。そしてまた同じ年に、デンマークの王フリードリヒ治下の国会は福音主義を宣言した。その子クリスチャン三世もルター主義をその国政に顕揚した。

スエーデンの独立を成し遂げたのはグスターフ・ヴァザであったが、旧新両教の紛糾を一挙に解決すべく、新教を国教とするのでなければ、自分は王位を即がぬと宣したので、一五二七年にスエーデンは新教国たる旗を掲げることになった。

このようにして北ドイツ及び北欧の大勢はプロテスタントとなった。

＊　＊　＊

実に内外多事多端、力戦奮闘の劇的生活のさなかにあって、大学における講義を続け、聖書翻訳の大業を続けていたルターは、新約聖書完訳の一五二二年から十二年にして旧約聖書を完訳し

てしまった。驚くべき精力である。実に彼は祈りにおいて体受する天来の力によってこれを果した。彼ほど神の言に酔い、神の言が化身する如くして生きた男は教会史上稀有である。否、実にその第一人者といって過言でないであろう。その後のどんなドイツ語訳聖書も、その霊的な迫力、詩的な格調、真理的内実性において、ルター訳聖書に匹敵するものはない。即ちルター訳ドイツ語聖書全巻の初版が出版されたのが実に一五三四年で、その原本の一つはライプツィッヒ大学にあるのだが、その写本（限定版）を不思議にも私は手に入れた。

＊　＊　＊

これは晩年のことではないが、ルターがいかに教育のことを考えたかを瞥見しておくこととする。

彼の宗教改革の三大著作といわれるものは、『キリスト者の自由に就いて』（十一月）と『教会のバビロン補囚に就いて』（十月）及び『独乙貴族に与うるの書』（八月）でこれらは一五二〇年に八月、十月、十一月と相前後して出版されている。

この『独乙貴族に与うるの書』の中で、彼が教育の土台としたのは聖書である。

「上級の学校でも、下級の学校でも、第一に、最も一般的な勉強課目は聖書でなければならない。特に少年にとっては福音でなければならない。また聖旨により、各都市は女学校を設け、そこで一時間ずつ、ドイツ語かラテン語で少女たちに福音が教えられることを望む。実際、諸学

校、修道院、尼僧院はその昔、この目的で開始されたものである。そしてそれはまことに賞讃すべき目的であったことは、我々が聖アグネスやその他の聖徒たちの物語から学び知る通りである。……今やこれら男女修業院は唯だ祈禱と唱歌の場所と化してしまった。すべてのキリスト者は、九歳か十歳でキリスト者という名と生命の源なる全聖書を知るべきではなかろうか。織女や針女は幼き娘に職業的教育をやっている。それなのに今や大いなる学識ある司教や監督が福音を知っていない。」

欧米の学校では「聖書授業」がこちらでいう「修身」とか「道徳」のむしろ根底として歴史的に伝統的に持続されている源泉は、実にルターの根本方針、理念から発しているものであった。文化文明の根底に福音を置き、教育が宗教を土台としなければ本当でないと洞察したことはルターにとってはあまりにも当然なことであった。しかしわが国ではこの土台が欠けているところに、教育のいろいろな問題に解決をもたらし得ない原因がある。そして問題中の問題は教育者自身の魂が宗教的解決をしていない点である。

ルターはその後、一五二四年に、『ドイツ国全市の参事会員に宛てて、キリスト教諸学校の設立及び維持のこと』という論説を、一五三〇年に、コーブルク城で『児童就学に関する説教』を書いている。この二論説は、宗教改革時代に据えられた国民教育の土台づくりであり、人生登山の道標を形成したものと言えよう。ルターは信仰問題ではエラスムスやロイヒリンと軌を同じう

することは出来なかったが、教育の面で人文主義的なものや文芸復興的なもの、即ちギリシャ・ローマの古典を重んずるに吝かでなかった。宗教を土台として学芸を大いに重んじ、正しい調和を構成するのでなければ健全な教育はないことを充分考えていたのである。信仰と道徳と学問の正しい関係における人間形成に教育の課題があることを洞察していた。そういう意味において普通教育がなさるべきことを主張した。

ルターは学校教育のシステムとして、国民は誰でも先づ小学校（国民学校、基礎学校）で学ぶこと。次ぎには中・高校程度の学校で普通教育を受けること。第三には自分の専門を定め、これを中心として自主的に大学教育を受けること。即ち大学は専門的知識を諸々の研究によって修得し、他日学問的分野でか、または社会の指導的地位を以て、世に貢献せんとするところに大学教育の使命があるとなした。この三段階の学校施設は、国や都市がその経営をはかるべきものとなした。即ちすべて官公立であって、私立というものは考えない。封建社会の王侯がすでに大学をいくつも建てていたが、ルターの宗教改革を以て展開されてきた民主主義社会においては次第に王侯の手から都市の手に移るべき方向が定まってきた。ドイツの教育及学校制度の基礎づくりはルターによってうち建てられた。歴史的にドイツは、教育の内容及び教育の制度において、健全な発展を遂げて来たから、世界の学問水準において概して最高の地歩を占めている。これを思うとわが国の教育制度は大改革を要する。こんな試験地獄と大学過剰の現象はどう考えても不可で

ある。

＊　＊　＊

さてルターの晩年に一つの不祥事件が起きてしまった。それはヘッセンのフィリップ伯の二重結婚という事件である。伯は福音の布教に力を尽したのであったが、彼の妻ザクセンのゲオルク侯の娘クリスティーナの性格が彼と合わなかったこと、病身がちであったこと、フィリップの多情であること等が原因と思われるが、伯の妹の侍女の一人であった美女マルガレーテ・フォン・デア・ザーレという女性と関係を結び、これを同じく夫人として娶ったという事件である。

この重婚のため、シュマルカルデン同盟の結束にゆるみが生じ、新教の改革運動に旧教の側から批判を受けるという公的なマイナスを刈り獲るような結果となり、一五四六年、ルターの歿後、新教軍は大敗を喫することとなる。

この重婚は次のような経緯で行われたという。即ち、マルガレーテという女性の母が、ザクセン選帝侯の承認と第一流のプロテスタント神学者らの是認を受けるのでなければ、このような異例の結婚を許すわけにはゆかぬと抗議したので、フィリップはこれをルターとメランヒトンに内々で認めてもらいたい旨を告げた。ルターは、このときフィリップの性格とマルガレーテとの関係を察して、むしろクリスティーナに対する離婚をまず勧告して、しかる後このマルガレーテとの結婚を正式に認めてやったら事なきを得たであろうのに、離婚を聖書は認めないという形式

的な判断から、旧約の族長時代のアブラハムやヤコブ等の重婚的現象に多少気をゆるしたのであろう、このフィリップの重婚を内密に認めるということを敢えてした。メランヒトンもやむなくこれに同意したが、メランヒトンは内心苦しんだため不眠症に罹かった。ルターは、古代の一夫多妻的な現象、特にイスラエル十二支派を与えられたヤコブの四重結婚の現象などがおそらくその根拠となっていると思われるが、重婚は離婚に優ると考えられていたのである。一五三一年にイギリスのヘンリー八世がその后アラゴンのカザリンを離婚しようとして、ルターに認可を求めたとき、彼はこれを拒んだのであった。勿論ルターも、この重婚を是認したわけではなく、秘密裏に認めるという苦しい立場をとったのである。しかし、それはルターらしい態度でなかったことは明かで、彼のために惜しむべきことであったし、新教の改革運動に汚点をのこしたことは事実である。

男女の問題は歴史の始めから歴史の終りまで、多種多様、尽くるところを知らないであろう。歴史のドラマの隠れた因子には、いかに多くの男女関係が、或は善因となり、或は悪因となってはたらいているか。フィリップの重婚事件もその一つに過ぎない。問題はフィリップがのちにそれを真に悔い改めたか。ルターが、複雑な事情はともあれ、キリストにみ許を乞うたかである。私は、ルターがこの事件のあとで、祈りにおいてキリストのみ前に平伏したと信じたい。あれほど罪の問題を真剣に問題とし、深刻な内的苦闘を体験したルターであるから。

三〇　ルターの凱旋死

抜山蓋世の信仰の英雄ルターも、多年の超人的な激務多端と劇的な悪戦苦闘が、彼の肉体を蝕まぬわけはなかった。腎臓病になやまされること久しきにわたった。時に頭痛に苦しみ、眩暈に倒れかかり、時に喘息の現象にも襲われた。ビールやワインのため肥大となることはルターにも起きていた。強烈な性格の人にありがちな主角も彼にあって、不如意な事件に遭うと、そのため自分の神経が逆に苛ら立ち、そのため不眠症や憂鬱症におちいったりした。彼はその他に結石病に罹って、ひどく苦んだこともある。

彼はしかし、これらの病の現象にも拘らず、愚痴をこぼさず、病をものともせず、福音に生き、キリストの聖名を呼んで戦い抜いた。ヴィッテンベルク大学での講義や日曜と平日の説教や、著作や書翰など、実に死して後なおやまずの勢であった。体力は零に近づいて来ても、気力

は逆に旺勢であった、少なくともたましいの内側においては。「力より力に進み、おのおのシオンに到りて神に見みゆ！」という詩篇第八十四篇の詩句はルターのすがたであった。

一五四五年も暮れに近い十一月十七日に、彼は大学での最終講義をやった。それは創世記講義の最終でもあった。「これで私は愛すべき創世記の講義を終ります。われらの主なる神が、他の人を立てて、更に善き講義をなさしめ給わんことを！　私はこれまでです。私は衰えました。君たちは、神が私に祝福された最期を与え給わんことを祈ってくれたまえ！」

親鸞の「南無阿弥陀仏」という他力本願をはきちがえて勝手なふるまいが横行したことがあったように、ルターの「信行義認」を楯にあやまった自由が市民や学生間に跋扈するありさまに彼はヴィッテンベルクを「ソドム」と呼んで、市を去って托鉢の行脚をしようとまで思った。しかしそれは友人らの諫止によって思いとどまりはした。だが彼は吐くように言った、「私はもうこの世に倦きている。私は今は旅人が一夜の宿を立ち去る思いでこの世を去ろうと思う」と。このルターの言葉で、思いあわせられるのは、内村鑑三が、この世を去る日の近づいたとき、吐いた捨台詞、「こんな日本に愛想をつかせた」である。愛国の至情から発した信仰の勇者たちの嘆きである。

一五四五年の暮、マンスフェルトの貴族間にある論議が起きた。その調停のためルターは旅に出なければならなくなった。病身を推しての旅路であった。寒風吹きすさむ一五四六年の一月、

アイスレーベン、彼の故里へ赴いた。その故里から愛妻にこう書いた、

アイスレーベンにて　　一五四六年二月七日

「おまえ、愛するケーテ（Käthe）よ！　ヨハネ書翰と小教理問答をよく読んでおくれ。おまえがいつかこれについてこう言ったね、『私について一切はこの書に書かれてあります』と。というのは、おまえは神さまのことを心配して、もしも唯一人の老ルターがザール川〔モーゼル河の支流〕で溺れたら、または炉の火口に落ちこんだら、または狼の囮場に置かれたら、神さまは十人のルター博士を創造するほど全能ではないかの如く思っている。おまえの心配は御無用にしておくれ。私にはおまえやすべての天使よりも好い守護者がおられる。彼は馬槽に横たわっているし、乙女マリヤの乳頭に吸いついているが、それにも拘らず全能の父なる神の右手に座っておられる。だから平安でいなさい、アーメン！

私はこう思っている、地獄と全世界には今すべての悪魔が空っぽになっているにちがいないこと。というのはおそらく悪魔がみんな、私のためにこのアイスレーベンに集っているからだ。事態はそんなにぎりぎりのきびしいところに立ち至っている。みんなで祈って、祈って、祈って、私たちが安泰になるように助けてもらいたい。……　おまえの愛なるM・ルター」

アイスレーベンでの調停のことも片づいてルターは帰路に就こうとしたが、もう彼にはその体力がなかった。生涯の終りが迫って来た。彼は手紙や文章をよくラテン語でも書いたが、地上の

絶筆はラテン語の大文字であった。曰く、

「少なくとも五年間羊牧者たりし者ならでは、ヴィルギリウスの牧歌は解すべからず。少なくとも五年間農夫たらずんば、ヴィルギリウスの農民歌は解すべからず。二十五年間国事のために国内を遍歴せし者ならではキケロの書翰集は解すべからず。

エリヤ、エリシヤ、バプテスマのヨハネ、基督及びその使徒らと百年間、業をともにせずして聖書は決して解し得べからず。この神の聖詩を試みるなかれ。敬虔の真情をもてこれを拝せよ。我らは乞食なり。これは真なること也。

一五四六年二月十六日記之。」

これは実に驚くべき文字である。キリストを中心に預言者と使徒を友として百年を苦闘せよ！と言わんばかりの大告白である。肉体の力が絶無的なるルターの烈々たる気魄の文字である。信仰を絶叫したルターの信仰とは、生涯をキリスト一天張りで生き抜くことの他の何ものでもないことであった。聖書を「神の聖詩」と呼んだ。聖書は実に神の劇詩である。「我らは乞食なり」と。然り、何ものも無い無的乞食である。ただキリストの生命をのみ要する乞食である。またヴィルギリウスやキケロの古典を愛したルターのゆたかな教養を思えば、我らも和漢の古典に親しまざるべからずである。

右の大文字は実に彼の臨終の凱歌である。たましいの戦士の勝利の証言である。

二月十七日、即ちこの大文字を記した翌日は劇痛を胸部に感じた。夢か現か、眠られぬ夜は明けて十八日の晨を迎えた。ルターは祈った、

「ああ主イエスよ！　あわれなるわが魂を汝にゆだねまつります。在天の神よ！　わたくしはこの世を去りますが、汝のみ許に永遠に住ましめ給うを知っております。貴神はその生み給いし独子を世に賜う程に世を愛し給いました。これは主を信ずる者の亡ぶることなくして永遠の生命を得しめんためであります。アーメン。」

詩篇やヨハネ福音書の聖句を最後の祈りとして彼はキリストのもとに召された。原始の福音へと信仰の還元――宗教改革――を果したドイツの魂ルター、聖書の人ルターはこのようにして一五四六年二月十八日に、生れ故里のアイスレーベンで天界へ天翔った。まことに凱旋死であった！　地上の生涯は六十三年であった。

ルター召天の報は四方に飛んだ。訃報に接した親友メランヒトンは悲しみの中から叫んだ！

「嗚呼　神よ、イスラエルの戦車と騎士は逝けり」と。

エリヤの昇天の如きルターの凱旋を直覚したのであろう。アイスレーベンからヴィッテンベルクまで柩車の列は進んでいった。沿道の町や村で鐘声が迎えまた送るのであった。

二月二十二日、彼の遺骸は、約三十年前、九十五箇条の提題が掲げられた門扉のある城教会の近くに埋葬された。

我々は、神の歴史の鉄の如き一環をその劇的生涯を以て叩き出したルターを思うとき、彼のドイツ語聖書は、単なる翻訳ではなく、ドイツ語聖書そのものがルターのからだのような感じさえもつ。彼のドイツ語を読むと、中からキリストに溶けこんだルターの声を聞く思いである。信仰の極致においては「われはキリストなり」であると言ったルターであるから、「われは聖書なり」と、ドイツ語の聖書の中からルターが告白している。それほどまでに彼の血が通っている。まことに彼は聖書の人ルターであった。

第二部　ルターの言

一　ルターの讃美歌

ルターの神学と音楽

「音楽は神の美しい素晴らしい賜で、神学に近い。私は私の貧しい音楽をあまり問題としないけれども、若い人達はいつもこの芸術に親しむべきだ。」「サタンは音楽が非常に嫌いだから、音楽で多くの誘惑や邪悪な想いを追い出すに如くはない。」ルターの卓上談話の中にこんな言葉がこぼれている。

神学と音楽はルターには姉妹であった。何故であろうか。「エホバとその聖言のために我は酔える人の如く酒に勝たるる人の如し」と預言者エレミヤは言ったが、ルターもそのように神の言に捕えられた人で、彼の神学の性格は、脈々とパトス（熱情）が躍流している活きた樫の木の如きもので、パウロの生まの神学に最も近い。そこがカルビンのロゴス的な、謂わば大建築の如き

性格の神学と対照的なわけである。ルターが、神学することと、パトス的な芸術である音楽を愛することとの間にむしろ深い内的連関をもち得た所以であると想う。

ルターはその揺籃時代に、母の讃美歌を子守唄として育った。ルターは幼少年時代から歌が好きであった。母の故里アイゼナハの高等学校時代に、学資の一部を稼ぐために街から街へ歩いて小銭をめぐんでもらうようなことまでした「貧乏書生」であった。かのウルズラ・コッタ夫人が少年ルターを迎え入れたのも、彼の心をこめた歌い方と祈りとに感動したからであった。彼はまたエルフルト大学時代に、かの奇禍のため永い病床に就いた折にも琵琶(ラウテ)を奏でることを学び覚えて自ら慰めた。かの修道院に隠れる前夜には友人たちと素人音楽会を催した。かのヴォルムス国会への途上でも、フランクフルトの旅舎で琵琶を力強く奏で、福音の勝利の前奏をしたりした。

彼はこのように疑いもなく、楽人の素質を有っていた。彼がしかしもっと本質的にもっていたのは詩才であった。彼は天性の詩人であった。その楽才も詩才も彼の魂のパトスにその本質があった。誰か聖書に躍動している神のパトスをルターほどに体感し把握し得た人があろうか。独乙讃美歌がルターに於て最も力強い表現を見出だしているのも、神のパトスに迫られた彼が、その詩才楽才を以てたましいの底から讃美の歌を詠わざるを得なかったからに他ならない。またルター訳独乙語聖書がその散文においても詩文においても、一貫して妙なる内的律動をもっているのも、ルターのこのようなたましいの性格に由る。

最初の讃美歌

ハンス・ザックス（Hans Sachs）はルターを「ヴィッテンベルクの小夜啼鳥」と呼んだが、この大きな小夜啼鳥をして最初に讃美歌を作らしめたのは、一五二三年七月一日、アウグスティン派の、その名をフェース（Voes）及びエッシュ（Esch）と称う二人の若き修道僧が、福音的信仰告白のために、火刑に処せられた事件であった。ルターはこの報に接するや、殉道者たちのため痛く泣き悲しんで言った、「私こそこの聖なる福音のために殉道の死を遂ぐべき最初の人であると思っていたのに。私にそれが許されなかったのか。」

「新しき歌を我らは始めん」

„Ein neues Lied wir heben an“ の頭句に始まる全十二節（一節九行）の歌を、彼がこの両殉道者のために、而も宗教改革の最初の讃美歌として詠ったことは我らも心に銘記すべきことである。その第十節で殉道者の屍灰の勝利を謳って曰く、

屍灰は徒（あ）だに消え去らず、
屍灰は四囲（よも）に飛び散らん。
小川も穴も堀も墓場も何かせん、
敵こそために恥を得ん。

生けるがままに火刑に処して、
沈黙にぞ敵は強いたる。
されど死に在りて到る処に、
声と言の限りを尽し歓びて
殉道の徒は勝歌うたう。

第十二節でこれらの殉道者のゆえにルターは更に感謝と勝利の祈りを捧げて結んでいる。

彼らをして偽るにまかせよ、
彼らは何ら益することなし。
我らは神にかく感謝せん、
「神の聖言還り来れり。
夏は扉口に迫り来れり、
冬は早くも過ぎ去れり。
優しき花は咲き出でぬ。
*このことを始め給いし神こそは
必ずや完成し給うべし。」

〔註〕*「このこと」とは宗教改革の意。

宗教改革とその讃美歌集

独乙讃美歌がルターにおいて最高の表現を見出だしているのは、聖霊の力に迫られた彼が、詩篇作者たちのようにおのずからその詩才、楽才を通してコラール（讃美歌）を詠い出でたからである。彼はその大部分の素材を聖句や詩篇やラテン及びドイツの古い讃歌から採用しているが、一度びルターという熔鉱炉を通ると、それが一般の平信徒が礼拝に家庭に野外に自由に唱える極めて福音的な、平民的なドイツ語のコラール（讃美歌）に創作されているのである。

一五二三年に彼は福音的な内的救済を最初のコラールとして詠った。「いざ歓べ、キリスト者よ、相共に」（„Nu freut euch, lieben Christen g'mein.“）の歌がそれである。これに続いて同じ年に夫々詩篇第十二、第十四、第百三十を素材として豊かに創作したのは、「噫、み空の神よ、覧（みそな）わせ給え」（„Ach Gott vom Himmel, sieh darein.“）「愚かなる者の口は斯く語れども」（„Es spricht der Unweisen Mund wohl.“）、「苦難（なやみ）の渕より汝に叫ぶ」（„Aus tiefer Not schrei ich zu dir.“）の三歌であるが、この「苦難の渕より」は日本語の現行讃美歌集第二五八番「貴きみ神よ、悩みの渕より」に抄訳されている。この一五二三年は、ドイツ語新約聖書完訳の翌年に当る。

この翌年一五二四年には所謂『八歌集』（Achtliederbuch）なるプロテスタント最初の讃美歌集が刊行された。その半数の四篇が即ちルターの作であったが、ルターは一五二四年に更に二十歌

のコラールをものしたので、彼の作は二十四歌となった。この年にザクセン選帝侯聖歌隊指揮者ヨーハン・ヴァルター（Johann Walther）が編集した小讃美歌集三十二篇中にはルターのこの二十四篇が悉く収められてある。これにルターは序文を寄せているが、その中で曰く、「讃美歌をよく歌い、神の欣びとなることはどのキリスト者にも隠れなきことであると想う。……然り、聖パウロもこのことをコリント前書第十四章で定め〔第十五節「然らば如何にすべきか、我は霊をもて祈り、また心をもて祈らん。我は霊をもて謳ひ、また心をもて謳はん」〕、またコロサイ人にも命じているように〔三・一六「キリストの言をして豊かに汝らの衷に住ましめ、凡ての智慧によりて、詩と讃美と霊の歌とをもて、互に教へ、互に訓戒し、恩恵に感じて心のうちに神を讃美せよ」〕、讃美歌や詩篇を主に対して心から歌い、そうすることによって神の言とキリストの教えがあらゆる仕方で追求され体得されなければならない。……似而非僧侶たちは福音によってあらゆる芸術が紛砕されるべきだと揚言しているが、私はそんな意見では毛頭なく、あらゆる芸術を、特に音楽を、これらのすべての能力を我らに与え且つ創り給うた神に仕えるために、用いたいと思う。……」。

その讃美歌集からルター作を二、三訳してみよう。

„Nu freut euch, lieben Christen g'mein."

一、いざ歓べ、キリスト者よ、相共に。

われら躍らん欣び勇みて、
心おきなく心を合わせ、
たのしく愛しく歌わなん、
神が我らに施し給いし
その美しき奇しきみ業を。——
*げに生命を代価に勝ち得給いし。

〔註〕＊キリストの贖罪死のこと

二、悪魔に捕われて我は伏し、
失われ、死にてありし。
わが罪は夜も昼も我をなやます、
われは罪の中に生れてありき。
げにいよいよ深く罪に落ちたり、
何ら善きものわが生になく、
罪はわれを占領したり。

三、
わが善き業も値打ちなかりき、
わざと共に我は滅びぬ。
自由意志は神の審判を厭い、
自由意志は善に対して死にたりき。
憂苦は我を絶望に駆りたて、
死のほか何も我に残らず、
地獄落ちこそ必定なれ。

四、
かくて永遠の神、
わが惨めさをいたく悲しみ、
あわれみに想いをいたし、
我を助けしめんとし、
その親心を寄せ給いたり。
まことに彼には何の戯れもなく
神は最善の代価を払い給えり。

五、神はその愛子に宣えり、
「めぐみの時はここに来れり、
往け、わが意の貴き冠よ、
罪びとの救済となれよ！
罪の苦悩より人を助けよ。
苛酷な死を締めつけよ、
汝と共に人を活かせよ。」

六、聖子は御父に聴き順いて
現世の我に来たり給えり、
純き優しき処女より出でて、
彼はわが兄弟と成り給えり。
彼はその威力を秘かにいとなみ、
わが惨めなる姿に身をやつし、
悪魔を捕えんとし給いしぞ。

七、主は宣えり、「汝我れにすがれよ！
今や勝利あらしめん。
我はわが身を与えたり、全く汝に。
我は汝がために戦わん。
そは我は汝が有、汝はわが有、
わが止まる処に汝も在らしむ、
敵は我らをひき裂く能わず。

八、神はわが血潮を濺ぎ、
しかもわが生命を奪い給う。
汝がためにこのすべてを我は忍受せり、
このことを汝は確かと信受せよ！
わが生命は死を呑めり、
罪なき我は汝が罪を荷いたり。
かくて汝は救われしなり。

九、み空の父のみ許に往く、
我はこの世を立ち出でて。
かくて我は汝が主なるぞ。
み霊を汝にわれは与えん、
み霊は汝をなやみの時になぐさめん。
み霊は我をよく知らしめ、
真理(まこと)に在りて導かん。

一〇、われが行じて教えしことを
汝も行じて教えよ。
かくて神の国は増大し、
神の讃美と栄光となる。
人の世の人文に心せよ、
崇(け)高き聖文を害う勿れ。
離別(わかれ)に臨み、これを汝にまかすなり。」

„Aus tiefer Not schrei ich zu dir.“

一、深き渕より汝に叫ぶ、
神よ、わが叫びに耳傾け給え、
汝がめぐみ深き耳を我に向け、
わが願いに耳を開き給え、
そは犯せし罪と不義とに
汝目を止め給わば、
主よ、誰かみ前に留まるを得ん。

二、罪をゆるす恩恵と慈悲のほか
汝にふさわしきことはなし。
最善の生きざまにおいてすら、
われらのわざは徒だなるぞ。
み前に何びとも誇り得ず、
何びとも汝を畏れざるを得ず、
汝の恩恵に生きざるを得ず。

三、それゆえ神に依り頼まん、
おのが功績(いさお)をあてにせず。
わが心は彼に信頼し、
彼の善意に信頼す。
その善意は彼の貴き聖言の約束にして、
これはわが慰め、わが貴き城ぞ。
これを常に我は待ち望む。

四、待望がたとい夜に及び、
しかもなお晨にまで及ぶとも、
わが心神の力に
希望(のぞみ)を絶たず、憂いもせじ。
み霊より生(あ)れ出でし
まことのイスラエルよ、待ち望め、
汝の神を待ち望め。

五、
われらの罪は多くとも、
神のめぐみははるかに大なり。
聖手の救に限りなし、
禍害はいかに大いなるとも。
彼のみは善き牧人にして、
イスラエルを贖わん、
そのすべての罪より。

"Nu bitten wir den heiligen Geist."
一、
今や聖霊にわれらは願う、
何はさて措き義しき信仰を。
さらばみ霊は護らん生涯の果てに、
現世を出でて魂の故里に還らんときに。
主よ、あわれみ給え。

二、
汝貴き光よ、汝が光輝を我らに与えよ。
ただイエス・キリストを知らしめよ、
信実なる救主の許に留まらんためなり。
まことの祖国に彼は我らを伴れ来れり。
主よ、あわれみ給え。

三、
汝甘美しき愛よ、汝が恵みを与えよ。
み霊の熱愛を感ぜしめよ、
我ら互に心より愛せんがためなり、
平安に在って一つ心に留まらんためなり。
主よ、あわれみ給え。

四、
汝あらゆる艱難における最高の慰め手よ、
助けよ、我ら恥も死も怖れざらんため。
我らの恩念うちに崩おれざらんため、
敵が生命を告訴するとき。

主よ、あわれみ給え。

宗教改革の凱歌

ルターの傑作であると同時に、プロテスタント讃美歌の代表作であり、宗教改革の進軍の凱歌である。„Ein' feste Burg ist unser Gott.“「われらの神は堅き城なり」（日本語現行讃美歌集第二六七番「神はわがやぐら」抄訳）が、いつ作られたかはあとづけ難いのであるが、クルークの讃美歌集（Klugs Gesangbuch）が刊行された一五二九年より少し前、一五二六年から二八年の間と見るのが妥当と思われる。一五二九年四月二十日にシュパイエル議会が召集され、ドイツの福音的諸侯が、自由のためにプロテスト（抗議）したので、ルターに与する新教徒は「プロテスタント」なる名称を以て呼ばれるようになった。そのときは既にこの歌は出来ていたと思われる。

EIN' FESTE BURG IST UNSER GOTT

1. Ein' feste Burg ist unser Gott,
Ein' gute Wehr und Waffen,
Er hilft uns frei aus aller Not,
Die uns jetzt hat betroffen.

我らの神は堅き城なり

一、我らの神は堅き城なり。
攻防自在の武器なるぞ。
今や我らは苦難に遭えど、
神は一切の助けなり。

Der alt' böse Feind
Mit Ernst er's jetzt meint ;
Groβ' Macht und viel' List
Sein' grausam' Rüstung ist ;
Auf Erd' ist nicht seinsgleichen.

かの古(いにしえ)よりの悪しき仇(あだ)敵(がたき)
今や真剣に抗(あらが)い来たる。
大なる権力(ちから)多くの謀略(たくみ)は
その強梁(おごそ)しき武器にして
現世(うつしよ)に彼の敵なし。

2. Mit unsrer Macht ist nichts getan,
Wir sind gar bald verloren ;
Es streit't für uns der rechte Mann,
Den Gott selbst hat erkoren.
Fragst du, wer der ist ?
Er heiβt Jesus Christ,
Der Herr Zebaoth,
Und ist kein andrer Gott ;
Das Feld muβ er behalten.

二、我らの力何をか為(な)し得ん、
我ら忽ち失わるべし。
我らのために戦う義人(ひと)あり、
神自らの撰びの人ぞ。
たづぬるか、かは誰れと。
その人はイェス・キリスト、
万軍の主なる御神(おんかみ)ぞ。
いかなるあだし神にも非ず。
戦場(いくさば)はその聖手(みて)にあり。

3. Und wenn die Welt voll Teufel wär'
Und wollt' uns gar verschlingen,
So fürchten wir uns nicht so sehr,
Es soll uns doch gelingen.
Der Fürst dieser Welt,
Wie sau'r er sich stellt',
Tut er uns doch nicht;
Das macht: er ist gericht't,
Ein Wörtlein kann ihn fällen.

三、縦いこの世は悪魔に満ちて
我らを全く呑まんとすとも、
我らいたくは戦の懼かじ。
勝利なお我らにぞある。
此の世の君主はいかばかり、
立腹に立ちはだかるも、
何ごとも我らになし得ず。
彼はすでに審判かれてあり。
聖言の一言、彼をば倒す。

4. Das Wort sie sollen lassen stahn
Und kein Dank dazu haben;
Er ist bei uns wohl auf dem Plan
Mit seinem Geist und Gaben.
Nehmen sie den Leib,
Gut, Ehr, Kind und Weib:

四、その徒輩聖言を空しうす、
これに一念の感謝あらなく。
聖子は戦の場にて我らに与ず、
彼れの聖霊と恩恵もて。
敵どもは取らば取れわが生命、
財も誉も子も妻も。

Laβ fahren dahin,
Sie haben's kein Gewinn,
Das Reich muβ uns doch bleiben.

—*Luthers Hymnus.*

すべてのものを奪い去れ！
彼ら何をか勝ち得んや。
神の国こそ我らには在れ。

二　詩篇序文（一五三四年）

ルター（小池訳）

多くの教父たちが詩篇を聖書の中の他の諸々の書よりも特に褒め、また愛した。成るほどこの作品自体がその作者たる神を充分讃美してはいるが、我々もまたわれわれの称揚と感謝を詩篇に示さねばならない。

過ぎた幾年か聖徒らの非常に多くの宗教的伝説や聖徒の模範例書や歴史書などが宣伝され、世の中はこれらで充満したので、その間詩篇はベンチの下やそのような暗いところに放置されていた。それで人々は殆ど一篇の詩篇をも正しく理解しなかった。ではあるが一方、詩篇そのものは非常に卓越した崇高な薫香を自ら放っているので、あらゆる敬虔な心の人々が未知の聖句から祈りと力を体受してこの小冊子を愛したのである。

ところで私は謂うに、地上でいかなる範例書や聖徒らの伝説書も詩篇に優るものは出て来なか

ったし、これからも出ないであろう。すべての範例、宗教伝説、史実の中から最善のものを撰び出し、収集し、最善の方法で編集するように仮令希んでみるとしても、現に在る詩篇とならざるを得ないであろう。というわけは、此処には一人や二人の聖徒がなしたことばかりではなく、すべての聖徒の長〔ダビデ〕自身がなしたこと及びすべての聖徒らがなおこれからもなすことが見出だされるからである。即ち彼らが如何に神に対し、味方に対し、敵に対して立ち向うか、また彼らが如何にあらゆる危険や苦悩の中で身を処するか、そして如何に順応するかが見出だされるのである。しかもこの中には、このことを越えてあらゆる神的な救済の教説や誡命があるのである。

詩篇は非常に明かにキリストの死と復活を約束し、聖国と全キリスト教界の地位と本質を映し出だしているので、詩篇は小聖書と謂うことができよう。この中には全聖書に述べられていることがすべて極めて美しく極めて簡潔に要約され、美事な綱要に作り成され備えられている。まことにこの故にこそ詩篇は我々にとって貴重であり、愛読されている。それで私は謂うに、聖霊が自ら労をひきうけて小聖書と全キリスト教界やすべての聖徒の範例書を収集しようと思った。それでまた全聖書を読み得ない人が、この詩篇に於て聖書の殆ど全内実が小さな冊子に編集されてあるのを所有するようにしたわけである。

ところでこれらのすべてを立ち越えて詩篇の崇高な徳性と様式は、他の諸書が聖徒らの業績を

大袈裟に言揚げしながら、聖徒の言を伝えるところ極めて少ないという点にある。詩篇がその様式に於て独一である所以はそこにある。即ち詩篇は、これを読むと聖徒らの行為のみでなく、彼らが如何に神と語り、祈り、今もなお語り祈っているか、そういう言葉を伝えている。詩篇はこういう在り方で我々に甘美な香りを感ぜしめるのである。他の宗教伝説や範例は、これらを詩篇と比較してみると、彼らはまさしくもの言わぬ聖徒らを我々の眼前につきつけるのは確かで、詩篇はこれに反して非常に活き活きとした真正な聖徒らを我々に印象づけるのである。

然りもの言わぬ人間は語る人間に較べると殆ど半ば死せる人間と見なされ得る。人間に於ては語ることほど力強き崇高なる行為はない。人間は他の動物とその姿やその他のことによるよりも語ることによって最も強く区別されるからである。というのは例えば、木材も彫刻で人間の姿となることが出来るし、動物も人間と同じように見、聞き、嗅ぎ、唱い、歩き、立ち、食べ、飲み、断食し、渇き、飢え、凍え、辛い臥床に耐え得る。

その上詩篇はこれ以上のことを果す、即ち詩篇は我々に聖徒らの単純な普通の語らいを再現するのではなく、彼らが極めて重要なことがらに於て真剣に神自身と語った最善の語らいを再現してくれる。斯くして詩篇は我々に彼らの行為についての彼らの言葉ばかりでなく、彼らの心と彼らの魂の宝の根本を眼前に齎らす。斯くして我々は彼らの言と業の根底と源泉の中、即ち彼らの心の中を見ることができる。即ち彼らがどんな考えをもっていたか、彼らの心がさまざまな事

態、危険、苦難においてどのような態度をとり、どのように振舞ったかを見得るのである。このようなことは宗教伝説や範例の凡そなし得るところではない。伝説や範例はただ聖徒らの業や奇蹟を称揚するのみである。というのは、私はたとい或る人の極めて素晴らしいわざを見ようと聞こうと、その人の心がどのような状態であるかを私は知ることができないからである。

そして私はある聖徒が語るのを聴くのは、その人の業を見ようとするに優ること数等であると同様に、その人の心とその魂の宝を見るのはその人の言葉を聞こうとするに優ること数等である。ところでこの事態を詩篇はその聖徒らに於て極めて豊かに我々に与えてくれている。即ち神に対し、いかなる人に対しても聖徒らの心がいかにあったか、彼らの言がいかに語り出でられたかを確かと受けとることができるのである。

というのも、人間の心というものは世界の東西南北の四方から吹き巻く暴風に追い廻される荒海の舟のようなものであるからである。此処で未来の不幸に対する恐怖と不安がぶつかって来るかと思えば、彼処で現在の禍害からの怨恨と悲痛が襲ってくる。此処で将来の幸福からの希望と大胆が吹き寄せるかと思えば、彼処で現在の財宝の安泰と歓喜が囁くのである。

そのような暴風は真剣に語り且つ心を開き、心底を注ぎ出すことを教える。というのは、恐れとなやみにある者は歓びに漂うている人とは不幸に就て全くちがった見解を語るからである。また歓喜に漂っている人は、恐怖に嵌まり込んでいる人とは全く別な具合に歓喜に就て語りまた歌

うのである。悲しんでいる人が笑い、歓んでいる人が泣かねばならない場合にたとい語ったとしても、それは心からはできない。ということはその人の心のどん底が開いていないから、現わでないわけである。

ところで詩篇の中の大方のものは、そのようなさまざまな暴風のただ中に於ける真剣な言説のほかの何ものであるか。歓喜の精緻な言として讃美の詩篇や感謝の詩篇がもっている以上のものが何処に見出だされようか。そこでは総ての聖徒の心の中を君はまともに見ること、あたかも美しい楽園を見るが如くであり、然り天国に見入るが如くであろう。その中には神に対して、その御恩寵のゆえに、さまざまな美しい歓ばしい恩念（おもい）の何たる精緻な衷心からの甘美な花が咲き出でているではないか。

これに反して哀訴悲嘆の詩篇がもっている以上に深刻な哀れな、痛ましい悲哀の言を君はどこに見出だし得ようか。そこでは君はこんどはすべての聖徒の心の中をまともに見ることあたかも死を見るが如くであり、然り地獄を見入るが如くであろう。そこでは神の怒のさまざまな暗い情景によって何と暗黒なことであるか。彼らが恐怖や希望について語るところでは、いかなる画家も恐怖や希望を描写し得ず、いかなるキケロの如き能弁家も君に刻印し得ないような言葉を彼らは用いている。

既述の如く、彼らが神に向ってまた神と共に語っている言葉は最善のものである。ということ

はその他の場合にそのようなことがらに於て人間と語らっているときは、言がそれほど心から発せられず、それほど燃えもせず、活きてもおらず、迸ばしりもしないからである。それゆえ詩篇はすべての聖徒の小冊子であることがわかる。そして誰でもが、どんな情況にあろうとも、自分の事態に符号し適合している詩篇や詩句を見出だす。即ち自分ではこれ以上によくは語り得ず、言も見出だし得ず、また願いもできないほどに詩篇や詩句が全く自分のために語られているかの如く思うのである。

このことは、ある人に詩篇のそのような言が気に入り彼に符合する場合に役立つ。その場合彼は聖徒らの仲間入りができたこと、そしてすべての聖徒も彼と同じ在り方であったのだと確信するに至る。何となれば彼らすべては彼と共に詩篇の歌を唱うからである。特に彼ら聖徒が語ったように彼も神に同じ言葉を語ることができた場合にである。こういうことは信仰に於て起らざるを得ないのである。それというのも不信の人には聖句は味わえないからである。

最後に言いたいのは、詩篇には誰でも詩篇のすべての聖徒に何ら危険なく従ってゆくことが出来るという確かさと護りの堅い道案内があるということである。というのはもの言わぬ聖徒らの範例や宗教伝説はそれに見習うことのできないわざをいくつも提供しているからである。むしろ見習っては危いわざを多く提供している。しかもそれらのわざは概して宗派や徒党をつくり聖徒の仲間から誘い出し拉致し去るのである。けれども詩篇は君を徒党から遠ざけて聖徒の仲間に保

ってくれる。詩篇は君に教えて喜びに怖れに希望に悲嘆に於て詩篇のすべての聖徒が思い語ったと同じ思いと語らいをさせるからである。

総括すれば、君が聖なるキリスト教会を活き活きした色彩と相貌を以て小さな相にまとめられて描かれてあるのを見たいならば、この詩篇を眼前に採るが可い。そうすれば、君はキリスト教界がどんなものであるかを君に示すところの精緻にして明朗にして純粋なる鏡を有つわけである。然り、君はまたこの詩篇の中に自分自身と正しい自己認識を、更には神自身とあらゆる被造物を見出だすであろう。

それ故に我々は次のことを念としようではないか、即ち我々が神にそのような、言にも表わしきれない霊的財宝に感謝し、勤勉に真剣にこれらの財宝を体受し、活用し、練磨し、神に讃美と栄光を帰し奉ることを。斯くて我々が忘恩を以て何らかの御怒りに価することのないようにしたい。何となれば、嘗て暗黒の時代に、何たる宝として詩篇が注目されるべきであったか。誰が一篇の詩篇をも正しく理解し解り易いドイツ語で読み且つ聞くことができたであろうか。残念ながらそういう一篇をも有たなかったからである。今や我らが見るものを見る眼は幸なるかな、我らが聞くものを聞く耳は幸なるかな。ところで私はそれでも憂える。然り、残念ながら我々は見ている、我々も荒野におけるユダヤ人の如くになっているのを（民数紀略二一・五）。彼らは彼処で天来の糧〔マナ〕についてこう言った、「この見栄ない食物に我々の魂は嫌悪を催す」と。けれど

も我々は自覚すべきである、我々がその場所に居合わせた場合に、彼らが苦しんで死んだようには我々もなるまいことを。

すべての恩恵と慈愛の神が我らの主イエス・キリストによって、我々をこのことに於て助け給わんことを。このドイツ語の詩篇とキリストのすべての無数の表現し難き恩恵のわざに対して、永遠に主なるキリストに讃美と感謝と栄光と称讃が帰せられんことを、アーメン、アーメン。

三　ロマ書序文（一五二二年）

ルター（小池訳）

この手紙は新約聖書の真正な主要部であり、最も純正な福音であって、キリスト者が啻に言々句々暗記するのみでなく、日々これと交ることあたかも魂にとっての日常の糧の如くするに充分品格あり価値あるものである。というのはこの手紙は決して読み過ぎることも、考察し過ぎることもあり得ないからである。しかも是れにたづさわればたづさわるほど、いよいよこの手紙の高貴さは増し、その含蓄の滋味は深まるのである。それ故私は神が私に与え給うた限りを尽してこの手紙に対する私の任務を果たし、この手紙への入門をこの序文によって備えたいと思う。それは誰でもがこの手紙をそれだけよく把握せんがためである。というのもロマ書は今日までいろいろな註解やさまざまの饒舌で甚だしく曇らされているからである。ところがロマ書はそれ自体昭々たる光であって全聖書を照明解悟せしむるに全く充分である。

先づ第一にその用語を熟知しなければならない。そしてパウロが、律法、罪、恩恵、信仰、義、肉、霊、といったようなこれらの言に於て何を意味していたかを知らなければならない。そうでないとロマ書を読んでも徒らである。

「律法」という小さな言もここでは人間的に解して、どんな行為（業）をなすべきか、なさざるべきかといった教説と解してはならない。人間的な律法は、たとい心がそこになくとも行為で律法をみたすようなわけであるが。神は心のどん底の如何に従って審き給う。それゆえに神の律法は心のどん底をこそ要め給う、だから行為では満足され得ない。心のどん底からなされていない行為をむしろ偽善や虚偽として罰し給う。それゆえにあらゆる人間は偽り者と呼ばれる、詩篇一一六・一一。それはなにびとも心のどん底から神の律法を遵らないし遵り得ないからである。そのわけは如何なる人も善への不快と悪への快を自分自身に見出だすからである。さて善への自由な快感のないところには心のどん底は神の律法の許にはいない。そこには確かにまた罪があり、神の怒を受けるに価するものがある。たとい外的には多くの善き行為があり、尊敬すべき生活があるように見えようとも。

それ故パウロは第二章九節以下に於て、ユダヤ人はすべて罪びとであると論断し、そして律法の実践者のみが神に義とされると語っている。彼は斯くて、何びとも行為のみによっては律法を満たさないと言おうとしている。彼らにむしろこう言うのである、君は姦淫すべからずと教示し

ながら姦淫している。それは全くこうである、君は他人を審くそのことに於て君自身を断罪している。君が審く正にそのことを君自身がなしているからである。それはパウロが次のように言おうとしているかの如くである。即ち、君は律法の行為に於て外側には結構な生活振りである。それで君はそのように生活していない者たちを審き、そして誰をも教えるすべを知っている。君は他人の眼の中の塵を見て、しかも君の眼の中の梁木（うつばり）に気付かないと。何となれば君がたとい律法を罰に対する恐れからか、報酬に対する愛好から行為を以て遵るとしても、君はその一切を律法に対する自由な快感と愛なしに、律法に対する不快と強制のもとに行っているのであって、もし律法がないとすれば、むしろ別なふるまいをしようとするわけである。このような事態から、君は心のどん底から律法に対して敵意がある、ということが結論される。君自身が心の中では盗人であって、もしも君が盗むことを敢てするような状況下に於ては外的に欣んで盗人であり得る君が、他人に盗む勿れと教えたところで、それが一体何であるか。そのような偽善者に於ては外的な行為がいつまでも起らないではいないのである。君が他人に教え、しかも君自身を教えないならば、君は君が教えていることを自ら知らないのである。また君は律法を断じて義しく理解していなかったのである。然り、しかのみならず律法は罪を増すのである。パウロが五章二〇節で言っているように。律法は人間が律法のどれも実行し得ないのに、律法がいよいよ要求すればするだけ人間は律法に対して益々敵意を抱くようになるからである。

それゆえパウロは七章一四節で、「律法は霊なるものである」、と言っている。これはどういうことであるか。もしも律法が肉なるものであるならば、律法にとっては行為で充分である。ところで律法は霊なるものであるから、君がなすところのすべてが心のどん底からでなければ、誰も律法を充たすことはない。けれどもそのような心を与えるものは神の御霊の他に何者もない。み霊は人間を律法と同然たらしめる。それで人間は心から律法への快感を得るので爾来一切を恐怖や強制からなすようなことはなく、自由な心から行うに至る。それゆえに律法は霊的なもので、そのような霊的な心に愛され、満たされたいものであり、そのような霊を要めるのである。み霊が心の中にないときは、善にして義にして聖なる律法に対して罪と不快と敵意がのこる。

それで今や君は、律法の行為をなすことと律法を満たすこととは、全然別なことである。という教説をわきまえることを常とせよ。律法の行為は人間が自分の自由意志と固有の諸能力で律法になしまたなし得るすべてである。だがそのような行為のもとに、そしてそのような行為に伴って心の中には律法への不快と強制がのこるので、これらの行為のすべては失われてしまい、また無益である。このことはパウロが第三章第二十節で思惟し、彼はこう語っている、「律法の行為によってはいかなる人も神の前に義とされない」。それゆえに、学派のうるさがた（スコラ神学者）や詭弁論者たちが、行為を以て恩恵への備えをするのだなどと教えているならば、彼らは文字通りの邪道への導き手であるということが今やおわかりなわけだ。心の中に不快と不本意なし

には、いかなる善き行為もしない人間が、どうして行為を以て善への備えをなし得ようか。不快なまた嫌悪の心から発した行為がどうして神の嘉し給うところとなるか。

之に反して、律法を満たす、とはこういうことである、おのが行為を楽しさ（快）と愛を以て行い、自由に、律法の強制なしに神的に義しく、あたかも律法も罰もないかの如く生きるということである。自由な愛からのこのような楽しさを心の中に与えるものは聖霊である。それはパウロが第五章第五節で語っている通りだ。み霊はところで、イエス・キリストへの信仰に在って、信仰と共に、信仰を通してのみでなければ与えられない。これはパウロが序言で語っているように。そのように信仰も、如何にしてキリストが神の子であり、人であり、我らのために死して復活したか、それはパウロが第三、第四、第十章で語っているところであるが、（三・二五、四・二五、一〇・六以下）このキリストを告知している神の言乃至福音によってのみでなければ臨んで来ない。

それゆえに、信仰のみが義を受けさせる、そして信仰のみが律法を満たす、ということになる。それは信仰がキリストの功績〔贖罪のこと〕からみ霊を齎らすのであり、み霊は自発的な自由な心をつくる、それは律法が要めるところのものである。このようにして信仰自身から善き行為が生ずるのである。これはパウロが信仰によって律法を止揚しようとするかの如く響くまでに律法の行為を非難したあとで、第三章第三十一節で意味しているものである。即ち、彼はこう語

る、否！　我々は信仰によって律法を立てる。換言すれば、我々は信仰によって律法を満たす（成就する）のである。

罪とは聖書に於て単に身体の外的な行為を謂うのみでなく、外的行為がなされるときに、共に起こり且つ動くところのあらゆるいとなみ、即ちあらゆる衝動力をもった心のどん底のことで、人間が全く罪に没落転入するときに「犯す」（tun）と言われるべきものなのである。人間が全く身体も魂もこれ〔罪〕に関与するのでなければ、罪の外側行為は起きないからである。そして聖書は特に心の中を、罪の根と源泉を見るのである。それは心のどん底における不信仰である。それだから、信仰のみが義とし、み霊と快感を齎らして善き外側な行為をさせるように、不信仰のみが罪を犯させ、肉を育て、肉に快感を作り、悪しき外的行為をさせる、それは楽園に於てアダムとエバに起きたように。創世記第三章二節以下。

それゆえキリストは不信仰のみを罪と呼んでおられる。彼はヨハネ福音書一六・九でこう語り給う、「み霊は、この世界が私を信じないその罪のゆえにこの世界を罰するであろう」と。それゆえ、善き果、悪しき果としての善き行為か悪しき行為がなされるに先んじて心の中には信仰があるか、それとも不信仰があらゆる罪の根や果汁や主力とし存在しているにちがいない。この不信仰は聖書にそれゆえ蛇の首（かしら）、旧き龍の頭とも謂われ、この頭首を女の裔なるキリストが砕かねばならない。それはアダムに約束されたところである（創世記三・一五）。

恩恵（グナーデ）と賜物（ガーベ）には区別がある。恩恵（めぐみ）は本来神の恩愛（フルド）とか恩寵（グンスト）とかの意味で、神は恩恵を我々のために御自身のもとに抱いておられるもので、この恩恵から神はキリストを即ちみ霊をその賜物（たまもの）と共に我々の中に注ぎ入れようと心を傾けておられる。このことは五・一五から瞭かである。即ちパウロはこう語っている、「恩恵と賜物は唯一人のイエス・キリストの恩恵によって多くの人々にゆたかに与えられている」。さて賜物とみ霊は我々の中で日々に増し加わりながら、それでも完全ではない、というのは悪い欲情と罪が我々の中に残っており、これらがみ霊と戦っているにも拘らず、そのことはパウロが七・五以下、ガラテヤ書五・一六以下で述べており、且つ創世記三・一五に女の裔と蛇の裔の戦いが約束されているようなわけだが、このような事態にも拘らず、恩恵は我々が全く、しかも神の前に全く義とされたものと見做されるだけのことを果して下さる。何となれば神の恩恵は賜物のように分裂されるものでもなく、部分的なものでもなく、我らの代表者にして仲保者たるキリストのゆえに、そしてまた我らの中に賜物が分与され始めているがゆえに、我らを全的にその恩愛の中に包み入れ給うのである。

それ故に君は第七章に於てパウロがおのれをなお罪びととして罪責を負いながら、第八章に於てキリストの中に在る者は、不完全な賜物と霊のゆえに何ら罪に定められることはないと告白しているのがわかろう。未だ死んでない肉のゆえに我々はなお罪びとである。しかし我々はキリストを信じみ霊の始めの果を有っているので、神は我々に好意を寄せて恵み深くあって、神はその

ような罪を意とせず、審きもしないで、罪が殺されるまでキリストに在っての信仰に従って我らを取り扱うつもりであられる。

信仰は人間的な妄想や夢想ではない。ある人々はそんなものを信仰と思っているが。そして彼らが、信仰に従って何ら生活の改善も善き行為も伴って来ないのに、なお信仰について多くを聞きまた語り得るのを見ると、彼らは誤謬に陥り、信仰では充分でなく、義とされ、祝福されるためには行為もなされねばならないと言うのである。その結果、彼らが福音を聞くと、性急にふるまい、性来の諸能力からある考えを心の中に作り、こう言うのである「私は信じている」と。それを彼らは義しい信仰と思い込んでいる。けれどもそんな考えは人間的な想いつきであり観念であって、決して心のどん底にまで透徹しないものであるから、そのような信仰は何らなすところなく、それにつづいて何ら改善も起きて来ないのである。

ところが（まことの）信仰は我々の中に於ける神の行為であって、この行為は我々を変革し、新たに神から生れしめる。それはヨハネ福音書一・一三にあるように。そして旧きアダム〔性来の我れ〕を殺し、我々を心に於て、情緒に於て、思惟に於て、またあらゆる能力に於て全く別人にする、しかも聖霊を自分と共に齎らすものである。噫、信仰とは何と生き生きとした能動的な、活動的な、有力なことがらではないか。であるので間断なく善きことを実現しないではいられないのである。信仰は善き行為がなされ得るか否かを問わない。そんな問いを発しないうちに

信仰は善き行為をなしてしまっている、そして絶えず行動している。だがそのような行為をしない者は、信仰なき人である。彼は信仰や善き行為を求めて身辺をまさぐり、見まわり、しかも信仰や善き行為が何であるかがわからないのに、信仰や善き行為に就て多くの言を口やかましく語るのである。

「信仰」は神の恩恵に対する活き活きとした不動の信頼である。極めて確かなものであるから、信仰は信仰のためなら千度死んでもかまわぬのである。神の恩恵に対するこのような信頼と認識とは、神に対しあらゆる被造物に対して欣然、堅忍、爽快たらしめる。このような事態を聖霊が信仰に在って惹起させる力をもっている。それゆえ、信仰は拘束されることなく自発的に心備えして、誰に対しても善きことをなし、誰にでも奉仕し、さまざまのことに耐え忍ぶのである。信仰にこのような恩恵を示し給うた神を讃え、神を愛する。であるから行為を信仰から分けることの不可能さは、火から燃焼や光輝を分離することの不可能なのと正に同然である。それゆえ、君自身の間違った考えと、信仰及び善き行為を批判するために賢かろうとしていながら実は大馬鹿者である無益な饒舌者に注意せよ。神が君の中に信仰を起こして下さるように神に祈願せよ。そうでないと、君が欲し、或は可能ないかなることを作り出し、しでかそうとも、君はおそらく永遠に信仰なしに留まることになる。

今やこのような信仰をこそ**義**と謂う。これは「神の義」即ち「神の前に適合する義」である。

そのわけは、神がこの義をわれらに与え、われらの仲保者たるキリストの故にこれをわれらの義と認め、またこれを賜った人をして、誰にでも与うべきものを与えしめ給うからである。何となれば、人は信仰によって罪なきものとなり、神の誡命に対して楽しみの心を得、それによって彼は神に栄光を帰し、神に対して為すべきことをなし、しかも人に対して彼がなし得る限り自発的に奉仕し、かくして誰にでも報いるからである。このような義は、性来の我も自由意志もわれらの諸々の能力もこれを達成することができない。何となれば、誰も自分自身に信仰を与えることが出来ないと同様に、誰も不信仰を自分から取り去ることもできないからである。いったい唯一つのいとも小さい罪をすら人はどのようにして取り去ろうとするのか。それゆえ、信仰以外に於てか不信仰に於て起きることはすべて、それがどんなによく見せかけの光を放っていようとも、誤謬であり、偽善であり、罪である。ロマ書一四・二三。「肉」と「霊」という言葉を君はここに於て、みだらなことに関わることのみが「肉」であり、心の内的なことが「霊」と解してはならない。そうではなく、パウロは、キリストがヨハネ福音書三・六で言っておられる如く、肉から生れたものはすべて「肉」と呼んでいる。即ち体と魂、理性とあらゆる感性をもった全人のことである。それはこの全人における一切が「肉」を追求しているからである。そういうわけだから君は、恩恵や高き霊的な事がらを所有しないで多くを作り出し、教え、饒舌する人を「肉的」と呼ぶことを知ってもらいたい。それで君は以上のことを「肉の行為」から（ガラテヤ書五・一九以

下）よく学び知ることができる。パウロはそこでは異端や憎悪も「肉の行為」と呼んでいる。またロマ書八・三に於て、肉によって律法が弱められると言っている。肉とはみだらなことを言っているのではなく、あらゆる罪のことで、しかも「最も霊的な」悪徳であるところの不信を主眼として言っているのである。これに反してパウロは最も外的な行為に関わっている人をも霊的といっている。例えば弟子どもの脚を洗ったキリストや舟を漕いで漁るペテロの如きを。それゆえ、それが内的であろうと外的であろうと、肉の益や現世生活に役立つことのために生活し活動する人はすべて「肉」である。けれども霊と来世生活に奉仕するために、内的にせよ外的にせよ、生き且つ動く人は「霊」と謂わるべきである。これらの語意に対するこのような理解がないならば君はパウロのこの手紙も聖書のどの巻をも凡そ理解できないであろう。それゆえこれらの言葉を別様に用いるすべての教師に気をつけよ。彼らがどんな人々であろうと。仮令彼らがヒエロニムス、アウグスティヌス、アムブロシウス、オリゲネス、更には彼らと同類の人たちや更にはより高貴な人々であろうと。

さて我らはロマ書自身にとりかかろう。

福音伝道者に相応しいことは、み霊とキリスト信仰に基づいて生活がいとなまれていない一切を、先ず第一に律法と罪を明かにすることによって罰し且つ罪として押印することである。かく

の如くして人間は自分自身とおのれの悲嘆さの認識に導かれ、謙虚になり、助けを要めるに至る。正にそのようにパウロもこのことを果たした。彼は第一章に於て次の如く始めている。神は神の恩恵なしに生活していたそして今も生活している異邦人たちの公然と現われている粗大な罪や不信仰を罰し給うということ、及び神の怒が天からすべての人々に彼らの神なき在り方と彼らの不義のゆえに福音を通して顕われると語っている。というのは彼らは神在りと知り且つ日々そのことを認めながら、恩恵から外れたその性格が生れながら邪悪であるので、神に感謝もせず神を畏敬もせず、自ら眼が暗み絶えずいよいよ邪しまなふるまいに陥り、(遂には)諸々の偶像崇拝にならって恥らうこともなくあらゆる不道徳と共に恥ずべき罪を犯し、更には何ら罰せられることなしに他人に於てもゆるされている。

第二章に於てパウロは外側は敬虔に見えているが秘かに罪を犯している者に同様な罰を更に及ぼしている。ユダヤ人がそうであったし、今もなおすべての偽善者がそうである。即ち彼らは悦楽も愛もなしに無事に暮しているが心の中は神の律法に敵している。しかも他の人々を非難するのをこととしている。彼らは自分自身を潔しと自負しているが実は貪欲と憎悪と驕慢とあらゆる不潔が一杯固着している。これが偽善者の様式というものだ(マタイ福音書二三・二七、二八)。これらの人々は神の仁慈をないがしろにし、その頑なさのために神の怒の宝を積む正にそういう徒輩である。このようなわけでパウロは律法の義しい解明者として何びとも罪なしに留めず、性来

または自由意志から発して義しく生きようと欲うすべての人に神の怒を宣告している。しかもパウロは彼らをあらわな罪びとより何らましなものとはしない。然り、彼は称う、彼らは頑冥固陋、悔悛不能な者であると。

第三章に於てはパウロは彼ら両者〔ユダヤ人と異邦人〕のすべてをひっくるめて、こう語る、どっちもどっちだ、神の前には同じ罪びとだ、ただユダヤ人は神の言を賜っていたことだけがちがう。ユダヤ人の多くは神の言を信じなかったけれども、さりとて神の信実と誠実が終りを告げたのではない（ついで彼はここで詩篇第五十一篇第六節の神が語り給うとき神はつねに義しい、という言を引用している）。そのあとでパウロは再び本すじに帰り聖書を通して論証する、即ち彼らすべては罪びとであること、そして律法の行為によっては何びとも義とされないこと、律法は罪を認識するためにのみ与えられていることを。次に彼は、いかに人は敬虔で祝福にあずからねばならぬかを語り始める。即ち人々はすべて罪びとで、神のもとでは何ら栄誉なきものであるが、キリストを信ずることによって何ら功績なくして義とされねばならない。キリストは彼の血によってわれらのために義を獲得し、われらのために神の「恩恵の座」となり給うた。キリストは我らの過去の罪をすべてゆるし、かくてキリストは、信仰に於て与え給う彼の義のみが我らを救うことを証し給う。（これが信仰の義で）この義は当時福音によって啓示されたがあらかじめ律法と預言者によって証言されていた。このようにして律法は信仰によって（まことに本来的に）建てられた

が、律法の行為はその行為の栄誉と共に信仰によって没落したのである。

第四章に於て――始めの三章を通して今や罪が瞭かにされ、義への信仰の道が示されたので――パウロはいくつかの抗議や異論に応じ始める。そして第一に、信仰が行為なくして義とするという信仰を聞くすべての人が一般になすところの反論、即ち「それでは何ら善き行為をしなくても可いのか」という反論をとりあげる。それゆえパウロはここで自らにアブラハムを持ち出して言う、アブラハムは一体彼の行為で何をしたのだろうか。そのすべては徒らであったろうか。彼の行為は無益であったか。そしてアブラハムはいかなる行為なくとも信仰によってのみ義とされた、然り、彼は彼の割礼の行為の前に、彼の信仰のゆえにのみ義とされたものとして聖書によって讃えられていると結論している、創世記一五・六。神がアブラハムに命じ、しかも従順のよき行為であった割礼の行為は、彼の義に何らなすところがなかったとするなら、たしかにいかなる他の善き行為も義のために果たすところはないであろう。むしろアブラハムの割礼はそれをもって信仰における義を証しした外的な徴であったように、あらゆる善き行為は、信仰から結果し善き果として、人間は既に神の前に内的に義とされているという外的な徴にすぎないのである。

このようにして今やパウロには、何と聖書からの強力な範例を以て、彼の信仰のそもそもの教説（第三章第二八節）を確証していることか。そして之に加えて更にある証者をもち出している。

それはダビデで、詩篇三二・一以下からの引用であるが、ダビデの語るところによれば、人は義とされたときも、行為なしに居るわけではないが、人は行為なしに義とされる、と。それから彼はこの例を律法のいろいろな他の行為に適用して、次の如く結論している、即ちユダヤ人はその血のゆえにのみアブラハムの世嗣とはなり得ない、況んや律法の行為の故に於てをや。もし彼らがまことの世嗣たらんと欲するならば、アブラハムの信仰を嗣がなければならない。特にアブラハムは律法以前に、（モーセの律法、割礼の律法の前に）信仰によって義とされ、あらゆる信仰者の父と呼ばれたからである、と。更には律法は恩恵よりもむしろ大いに怒を招来するものである。というのは何びとも律法を愛と快感を以て行じない、それゆえ律法の行為によっては恩恵よりもむしろ無慈悲が臨んでくると。それゆえ信仰のみがアブラハムに約束された恩恵を獲ち得る。というのも我々が信仰を有つべきであるという我々のためにこのような例証が述べられているのである。

第五章に於てパウロは信仰の果たる行為にとりかかっている。即ちそこには平安、歓喜、神と隣人に対する愛、更には悲嘆や苦悩の中での安泰、信頼、勇気、希望がある。というのは、これらすべては信仰が正しい場合に結果するものであるから。正しい信仰とは我らが神に願うすべも知り得ないうちに、然り未だ我らが神の敵であったときに、神がキリストを我らのために死なしめたというキリストに於て神が示し給う圧倒的な善意の故のものである。それゆえ我らは次のこ

とを知るのである。信仰はあらゆる行為なしに義とするものであるが、そうだといって、それ故にいかなる善き行為をすべきではないなどという結果が生ずるのではない。それどころか義しい行為がなされないでは居られない。このような行為は、行為で天国を獲得せんとする聖者の何ら知らぬところで、彼らは自ら自分の行為を作り出すのである。そこには平安も喜悦も安泰も愛も希望も慰安もいかなる正しいキリスト者らしい行為や信仰の気質もない。

それからパウロは然るべき主題離れを試みて語る。罪と義、死と生の二者の由って来たるところは何処かと。かくて彼はアダムとキリストの二者を美事に対照させている。それゆえ彼はこう言おうとしている。だからキリストは第二のアダムとして来臨しなければならなかった。キリストは彼の義を我々に対して信仰に在っての新しい霊的な誕生を通して与え給うた。あたかもかのアダムが旧き肉の誕生を通してわれらに罪を受け継がせたように。このようにして、何びとも罪から義へと行為を以て自らを助け出すことができない。況んや人が身体をもって生れることを防ぎ得ないに於てをや。このことはまた次のことで証明される、凡そ義へと助け得るものがあるとするなら、正しく助けるはずの神の律法が、助けを齎らすことなく与えられたのみでなく、罪をいや増すことになった。何となれば悪しき本性は、律法が禁ずれば禁ずるほど、いよいよもって律法に敵するようになり、益々性来の欲求を満足させようとする。そういうわけで律法はキリストを更に必要とさせ、本性を変革させる恩恵がいよいよ要求されることになる。

第六章に於てパウロは信仰の特別な行為をとりあげる。即ち義とされた後にもなお残存している残りの罪や情慾を全く殺さんとする霊肉の戦である。かくて、信仰によって罪から解放されたといっても、我々が怠惰、無精、安佚であって可いなどと教えているのではない。事実罪が最早ないなど言えるはなしではない。罪は現存しているが、罪と戦う信仰のゆえに、罪は劫罪とは見做されない。それゆえに我々は自分自身と取っ組んで為すべきことが生涯を通してある。即ちわれらの身体を馴致し、その情慾を殺し、その肢体を制御して、情慾にではなくみ霊に順わしめんことである。かくして我々がキリストの死と復活に等しくなり、我らのバプテスマを以て始まったことが全うされんことを希む。バプテスマは罪の死と恩恵による新生を意味するものであって、終には我々が罪から全く潔められて肉体もキリストと共に復活し永遠に生きることになる。

そしてこのことを我々はなし能う、とパウロは言う。というのは我々は恩恵の中にいるのであって律法の中にいるのではないからである。このことを彼自身次のように解説する、「律法がない」ということは律法を有たないで誰でもが欲求することは何でもすることができるというのではなく、また「律法の下にある」ということは、もしも我々が恩恵がなければ、律法の行為でことをはこんでゆくということを説いている。然らば何びとも律法に性来心をひかれるわけではないから、罪は律法によって支配することは確かである。しかしこれは大きな罪である。恩恵はしかし律法を我々に愛すべきものにする、それで最早罪はなくなる。そうなると律法は最早我々に

敵対するものではなく、我々と一如となる。

ところでこれこそ罪と律法からの本当の自由であって、このことについてパウロはこの章の終りまで、善きことをのみ快感を以てなし、律法の束縛なしに義しく生活する、ということが自由であると述べている。それゆえにこの自由は霊的自由である。この自由は律法を破棄するのではなく、律法が要求するものを即ち快感と愛とを以て提供する。かくして律法は満たされ、もはや駆りたてたり、要求したりしない。これはあたかも君が債権者に負債を負い、それを支払い得ない時と同じである。このことから君は二通りの法式で免れることができよう。一つの方途は彼が君から何ら受けずその証書を破棄することであり、他の方途は、ある敬虔な人が君のために支払ってくれて、君が彼の証書に充分応じ得るものを君にあたえる、という二つの方途である。この後者の方途でキリストは我々を律法から解放して下さった。それゆえに、何ごともしないような粗野な肉的な自由ではなく、多くのさまざまなことをなし、しかも律法の要求や負い目から解放されている自由なのである。

第七章に於てパウロは以上のようなことを結婚生活からの譬で確かめている。例えば夫が死ぬと妻は自由となるわけで、どちらにせよ一方は他方から解放されて自由になる。その自由は妻が他の男を受け得ないとか受けてはならないといったものではなく、言うならば彼女がさきの夫から自由になる以前には、なし得なかったこと、即ち他の男を受けるということが今やはじめて正

しく自由であるというわけである。そのようにわれらの良心は、律法の下では、罪の旧き人間に結びついているが、この旧き人間が、み霊によって殺されると、良心は自由になり、一方（律法）が（良心）から互に解放されたわけで、良心は何らなすべからずというのではなく、今や始めて第二の男たるキリストにしがみついて生命の実を結ぶことができるようになる。

そこでパウロはさらに罪と律法の様相を敷延して如何に律法によって罪がよく活動して力強くなるかを語る。そのわけは、旧き性来の人間は、律法が要めているものに応ずることが出来ないが故に、ますます以て律法に対して敵となる。罪は人間の本来の性であるので、人間は自分自身から何ら変ることができない。それゆえ律法は人間に死を齎らし全く人間の拷問である。それは律法が悪いというのではなく、律法が善を人間から要めているのに、人間の悪性がその善に耐え得ないからである。それはあたかもある病人にランニングやスプリングや健康者の他の行為を求めても、その病者はこれに耐え得ないように。

それゆえパウロは、律法が正しく認識され、極めて善く理解されたならば、そのことは我々をして我々の罪を想い出さしめ、我々を罪によって殺し、我々を永遠の神の怒を受けるに価する者となすほかは最早なすことはない。もし良心が律法に義しく打たれた場合には、これらすべては良心に充分に学ばれ感ぜしめられるものである。それで人間を敬虔にし祝福するためには律法より他のもので律法以上のものを有たねばならない。だが、律法を義しく認識しない人々は盲目で

不遜な道を往き、律法の要求を行為で満たして往こうと思っている。彼らは律法がどんなに深く要求するものであるか、即ち自由な自発的な熱意ある心を要求しているかを知らない。それゆえ彼らはモーセをまともに見ることをしない。面帕が彼らの前に置かれ、蔽われている（コリント後書三・一三以下）。

その後でパウロは、一人の人間の中で如何に霊と肉が戦うかを示し、そして自分自身を例に挙げて、我々が（罪を自分自身の中で殺す）行為を正しく認識するのを学ぶようにしている。ところで彼は霊と肉の両者を律法と呼んでいる。しかもそれは律法が神的律法の質であって、律法は駆り立て要求するものであると同様、肉は霊に逆って駆り立て要求し荒れ狂って自分の欲求を達しようとしている。この戦は我々が生活している限り我々の中で持続する。その戦は人によって長短がある、霊か肉かの強さに従って。しかも全的な人間自身は霊肉の両者一切をもっている。この両者は人が全く霊的になるまで自分自身との戦をいとなむ。

第八章に於て、そのような肉が彼らを断罪することはないといってそのような罪との戦士を慰めている。そして肉と霊の種類はどんなものか、我々に聖書を与え給い、我々を霊的になし、肉を鎮め、且つ罪が我らの中で如何ほど烈しく暴れ狂うとも、我々がみ霊に従い罪と戦ってこれを殺そうとしている限り、我々はそれでもなお神の子らであるということを我々に保証して下さるキリストからみ霊は如何にして来臨するかを、更に示している。肉を無感覚にするものとして十

字架と苦難に優るものがないので、キリストはみ霊や愛や被造物すべての助力によって我々を苦難において慰め給う。それは即ちわれらの中なるみ霊が呻き、被造物が我々と共に、我らが肉と罪から解放されることをあこがれることである。かくの如くであるので、この三つの章が信仰の独特の行為を目的としていることを見た。その行為とは旧きアダムを殺し、肉を抑制することを意味している。

第九章、第十章、第十一章に於て、パウロは神の永遠の予定について教えている。誰が信じ誰が信じないことになるか、誰が罪から解放され得るか、誰が解放され得ないか、ということが本源的に流れ出るところ、我々が義とされるのが全く我らの手から取り去られ、因って以てただ神の手に置かれるところのもの、それが神の予定である。そしてこれは極めて必至のことである。というのは我々は余りに弱く余りに不確かであって、もし救われることが我々の側にあるとするなら、勿論一人の人も救われないで、悪魔が彼らすべてを確かに打倒してしまうであろう。しかし、神は彼が予定していることを過まることがないし、誰も神を妨げ得ないことは確かであるので、我々になお罪に打ち勝つ希望がある。

しかし此処で放埒にして高慢な徒輩に制限を加える必要がある。彼らは彼らの理解をまず予定説へ導き出し、それを以てあらかじめ神的な予定の深渕を探求し始め、斯くして彼らが果して予定されているか否やを徒らに思い煩っているのである。彼らは実は自分自身に躓いて、断念する

か成りゆきにまかせるかというわけである。君はしかしこの手紙の順序に従って跡づけよ。まづキリストとその福音にうちこめ。それは君が君の罪とキリストの恩恵を認識せんがためである。それから罪と戦え。それは第一、第二、第三、第四、第五、第六、第七及びこの第八章がここで教えているように。そのあとで君が第八章に到りつくと、それは十字架と苦難の下にであるが、第八章は、第九章、第十章、第十一章の予定が如何になぐさめであるかを正しく理解するように教えてくれる。というわけは、苦難、十字架、死の苦しみなしには、予定を取りあつかうことは出来ない。そうでないと害を蒙り、神に対する秘かな怒をもつことになる。古きアダムは、この事態に耐え強烈な酒〔予定〕を飲む前に、まずたしかに死んでいなければならない。それゆえ君がまだ乳児であるなら、酒を飲まぬように警戒せよ。どの教説にしたところでそれを受ける節度と時期と年齢とがあるものだ。

第十二章に於てパウロは正しい礼拝を教えている、そしてすべてのキリスト者を祭司にしている。即ち、律法に規定しているような金銭や家畜を捧げるのではなく、慾情を殺して自分自身の体を捧げるべき祭司である。そのあとで彼はキリスト教界におけるキリスト者の外的な行状について述べている。即ちキリスト者は友人に対し、敵に対し、あらゆる人に対して、どのように教え、説き、治め、仕え、与え、忍び、愛し、生き、為すべきであるかを。これらはキリスト者がなすべきわざである。何となれば既に言われている如く信仰は休まないからである。

第十三章に於て、パウロは世俗の支配権に敬意を表し、これに服従するように説いている。俗権はその（敬意と服従）ために神によって定められているものである。俗権は人々を神の前に義とするものではないにせよ、それでも信徒が外的に平和と保護とを有つだけのことは果してくれる。しかも悪人が恐怖なしにまたは妨げられずに安らかに自由に禍害を為し得ないだけのことも果してくれる。それゆえ、信徒は俗権を必要としなくとも、俗権に敬意は表すべきである。ところで最後にパウロは一切を愛の中に総括し、キリストが我々のために為し給うたキリストの模範の中にこの事態を結論づけている。そのように我々も行動してキリストに従うべきである。

第十四節に於て、パウロは弱い心根の人々を信仰に於て慎重に導き、彼らを愛護して、キリスト者の自由を人を害するためにではなく弱者を助成するために用うべきことを教えている。なぜならこのことがなされないと、その結果、福音の分裂や侮蔑となり、これはあらゆる危険の基となる。信仰の弱い人々が、信仰に於て強くなるまで少しく彼らに譲歩する方が可い。そうでないと福音の教えが全く消滅することになるからである。このようなやり方は愛の特別なわざであって、今日もなおたしかに必要なことである。というのは肉食とかその他の「自由」を振舞って、何ら必要もなく、弱い心根の人たちを速かにひどく害えば、彼らは福音の真理を全く認識しなくなってしまうからである。

第十五章に於てパウロは、キリストをわれらの模範として、我らも、公的な罪や不潔な風習の

ためにいつも破れがちな人々を棄てないで荷ってやり、彼らの善くなるのを待たねばならないとしている。というのも正にキリストが我々に対してそのようになさったし、今も日々キリストは我々に於ける多くの不徳や悪習をあらゆる不完全の傍ら荷って下さり、我々を間断なく助けておられるからである。

そのあとでパウロはこの章末で彼らローマ教会の信徒のために祈願をなし、彼らを称揚し、彼らを神に委ね、彼の職務と教説を示し、エルサレムの貧者のための施与を鄭重に懇願している。施与は純粋な愛である。このことをパウロは語り且つ取りあつかっている。斯くて我々はこの手紙ロマ書に於て、キリスト者が知るべきことを極めてゆたかに見出だすのである。即ち律法、福音、罪、罰、恩恵、信仰、義、キリスト、神、善き行為、愛、希望、十字架とは何であるかということ、そして我々が如何にあらゆる人に対してふるまうべきか、その人が敬虔であろうと罪びとであろうと、強者であろうと弱者であろうと、味方であろうと敵であろうと、そして我々自身に対していかにふるまうべきかをこのロマ書は極めてゆたかに示してくれている。加之、これらすべては聖書の聖句で適切に基礎づけられており、自分自身や預言者たちの例証によって示されているので、ここにこれ以上何ら附加することは望み得ないのである。それゆえパウロはこのロマ書に於て全キリスト教の、福音の教説を一度に簡潔に把握し、そして全旧約聖書への通路を備えようとしたと思われる。何となればロマ書を心中に蔵めている人は、疑いもなく旧約聖書を見

る光と力とを身につけている人であるからである。それゆえにどのキリスト者もロマ書に親しみ、絶えず熟練躬行せよ。その際に神が御恩恵を与えたまわんことを、アーメン。

第十六章、最終章は、挨拶の章である。しかしその中にパウロは、人間的教師たちに対する崇高な警告をよく交えている。人間的教師たちは福音の教えの傍ら他の教説をとり入れて躓きを招いている。だからパウロはローマからまたローマ人によって人を迷わし、躓かせる教皇の法規や人間的な法令や誡命の全体的な腫物や毒虫がやって来るのを予知していたかの如くである。これらの人間的法令や誡命のすべては今や世の中をすべて呑み込み、またこのロマ書も全聖書もみ霊や信仰諸共に根こそぎにしたので、腹という偶像のほか最早何ものも残っていない。この腹の神に仕える僕たちである彼らを（一六・一八）パウロは叱責しているのである。神が我らを彼らから救い出して下さるように。アーメン。

四　ルターの卓上談話（ティツシュレーデン）から——神の言

神の言は最大の慰めである

あるとき博士ルターが語った、神の言を眼前にもっていることは、何と貴い崇高いことではないか！　というのは、神の言をもっている者はつねに堅実で、歓ばしく、平安であることができるからである。彼はまた、彼がみ言を正しく且つ純粋にもっているように注視するであろう。神の言をもたない別な者は、絶望におちいる。というのはその人には天の声や慰めが欠けているからである。そして彼は彼の心の空しさと無益な思想を追い求める。これらのものはその人を絶望へと駆りたてる。それゆえに詩一一九・二一にこう言っている。『汝の誡めから迷い出る者は咀われたる哉』それは神の言以外では、彼らがよくやってゆくことは出来ないからである。

地上におけるキリストの顕現

キリストはひと度地上に現われて、奇蹟や徴や説教を見せ、また聞かせた。それゆえ、彼は再び来られないであろう。彼が天使を送って下さることを、私は敢てのぞまない。たとい天使が私のところへやって来て、目に見えるすがたで現われようとも、私は彼を信じようとは思わない。私はただ神の言のもとに止まっていようと欲う。神が私に聖言を預言者や使徒を通して啓示し、附与し給うた通りに私は止まって、いかなる外の言を聞こうとも受け入れようとも欲わない。

熱狂者と無頼の徒は神の言に注目しない

み霊を誇り、特殊啓示や夢を追う者は、そのことの故に不信であり、神の侮蔑者である。彼らは神の言に満足しないからである。私は宗教的な事態においては、いかなる啓示も夢も欲求しない。私は明瞭な聖言をもっている。その聖言のもとにのみ私は止まる。それはパウロが警告し、また教示している通りなのである、すなわち、たとい天使が天界から、ガラテヤ*一・八に言われているのと別な具合に教えようとも、我々はパウロの言を遵り、これに依存しなければならない。この世的な外的なことがらにおいては、私は預言者たちにまかせることができる。すなわち、これからどうなるとか神の怒がどうであるとか等々、将来の事態について預言者たちは語り

また預言しているわけであるが。けれども、祝福に関する霊的なことがらについては、私はただ馬槽のもとにとどまる。すなわち処女から生れ、私のために苦難を忍び、十字架に懸けられて死して云々というイエス・キリストを信じているのである。これについてひとは他人の忠言を容れるに及ぶまい。そして我々はこの信条を確かと堅持して動かないから、我々はすべての霊どもを追放することができるであろう。また他の信条についても何であれ、祝福と勝利の中に彼ら霊どもと論議するであろうし、彼らに対して充分男らしく対処するであろう！

＊ガラテヤ一・八、「しかし、たといわたしたちであろうと、天からの御使であろうと、わたしたちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら、その人はのろわるべきである。」

神は我々を口づからの言に結びつけた

ドクトル・マルティヌス・ルターは、あるとき暴徒や分派の連中が神の言をないがしろにしているので嘆息して言った、「ああ、私が一廉の詩人ならいいのになぁ。そうすれば、神の言がいかに有益で力があり、実を結ぶものであるかを貴重な祝祭歌や歌謡や詩に書いたり作ったりしたいのになぁ。神の言なしには、すべては虚無であり、徒労であるからだ、とくに信仰のことがらにおいて企てまた行うことにおいては。それゆえに神は我々を彼の口づからの言に結びつけた。

それでルカ一〇・一六ではこう言っておられる、「おまえたちに聴く者は私に聴く者である。」そこでは彼は、ある人の口から出て他人の耳に響く口づからの言について語っているのであって、天からの霊的な言についてではなく、人間の口を通して響く言について語っているのである。このことに対して悪魔は世の始めから反駁してきた。そしてこれに反抗して身構え、これを根こそぎにしようとかかっている。それゆえ我々はこの途にとどまり、み言を尊敬しようではないか。

まことに私は数年この方聖書を一年に二回読破してきた。もしも聖書が力強い大木であるとすれば、しかもすべての言葉が枝や小枝であればと思う。それで私は小枝をノックしてみた。それはその枝や小枝に何があるのか、また小枝に何が出来るかを知りたいからであった。そしていつもなお若干のリンゴの実や梨の実を叩き落とした。

聖書が神の言であるという論証

マルティヌス・ルター博士はあるとき聖書が神の言であり、神の本であることを論証した。すなわち、凡そあるところの一切、またそれが世界でどのようにあるか、またその動きまたある在り方、それはすべて創造に関わる創世紀に書いてあるということ。神が万物を創造し給うたように今もなお万物は動きまた在るということ。そのようなわけで、アレクサンダー大王、エジプト王国、バビロン帝国、ペルシヤ、ギリシヤ、及びローマの諸専政君主国、即ちユーリウス・ケー

ザルやアウグストス等はこの本を抹殺し、根こそぎにしたかったこと、最も烈しくこの本に反抗したこと、しかし彼らはそれができなかったこと、抹殺もできなかったこと、彼らはみな立ち去り、この本は書かれた通りに徴動だになく永遠に全く完全に遺っていること等を論証した。ところで誰がこれを保持するのか。あるいは、誰があのような大きな権力に抗して守ったのか。まことに巨匠であるところの神自身のほかの何者でもない。神がこの本をかくも永く保持し保護したということは大なる奇蹟である。悪魔と現世は神に対して非常な敵であるからである。私は、悪魔が教会における多くの良書を抹殺したと充分信じている。その他にも悪魔は今や我らの知るよしもない多くの聖者を殺したり抹殺したりしているように。けれども悪魔は聖書をどうしようもなかった。同様に洗礼、祭壇のサクラメント、キリストのまことの体と血のサクラメント、及び教師職はかくも多くの暴君や異端者に抗して遺った。このようなものをわれらの主なる神は特別なみ力をもって保持し給うた。それは洗礼もサクラメントも説教も行われねばならないからである。このようなものは何者もこれを妨害することができなかったのである。ホーマー、ヴァージル、及び同様な偉大な立派な有益な本は古典的な本である、が、どれも聖書には匹敵しない。

聖書と他の本との差異

M・ルター博士は次の如く言った。聖書は神的な賜物と徳にみちているが、すべての異邦人の

本は信・望・愛について何ら教えていない。然り彼らはこれらについて何ら知らないのである。異邦人の本は感じたり、理性でつかまえたり理解したりすることのできる現在的なことばかりを注視している。これに反して神に信頼したり主を待ち望んでいたりすることについては何も本に載っていない。そのようなことはただ詩篇やヨブ記の中から読みとるべきである。しかもこの両書は信仰、希望、忍耐、祈禱について取りあつかっている。総体として聖書は神の最高にして最善の本であって、あらゆる試練において慰めにみちている。それは、聖書は信・望・愛について、理性が見たり感じたり把握したり経験したりし得るよりはるかに別な具合に教えるからである。また事態が悪くなった場合にも聖書はいかにこれらの徳がその事態に対して輝くことになるかを教える。そしてまた別な永遠の生活がこの現世のみじめな生活を越えて存在するかを教える。〔以上のように彼は語った。〕

良書は、特にその若干は、しばしば読むべきである

M・ルター博士は、どんな学術であろうと、およそ勉強しているすべての人に忠告をした。すなわち彼らがあるいくつかの本をとり、それらの本を熱心に読むように。そして自分を一廉の著者にするまでに読むことを。そして本には大いに親しんで、度々繰りかえして読んで、本が間もなく自分の肉となり血となるほどにまで。それでそれを同じ種類のものを語りまた書くことが生

れつき具わっているかの如くなるほどに読むことを。

というのは、いろいろな種類の本を読むことは、ある確実な堅実な本を学ぶよりも混乱を招くからである。そういう読み方をする人は次のような人に似ている。およそ往くところ、どこでも住まい、一定の場所に止まらない人は、何処にも住んでいないというもので、安住の地なき者であるが、丁度そのようなものである。それからまた、我々は社交において、あらゆる善き友の友垣を日々必要とせず、若干の選ばれた友を要するが、丁度そのようなものである。それゆえ、最善の本に親しみ、これを熟知し、その内容に熟達すべきである。

ルター博士は本の多さを嘆き、聖書熟読の要を説く

ドクトル・ルターはあるとき、書物を書くことには涯てもなく制限もない、誰でもが本を作りたがる、といって本の多きを嘆いていた。そして語った、ある一部の者は、自分たちも有名になって名声を獲得しようという名誉慾から本を書く。またある者たちは、享楽と金儲けのためにやる。そのようにして害毒を促進する。このようにして多くの註解書や参考書で、愛すべき聖書が埋もれ隠されてしまい、テクストそのものが全く顧られなくなっている。本当にあらゆる善き芸術部や学部の中で最善のものは、テクストをよくこなし、テクストにしっかり基礎を置いている部ではないか。

私が若かったとき、私は聖書に親しんだ。聖書を頻繁に読んだ。そしてテクストを熟知した。それで私は聖書に通暁し、どの聖句がどこにあるかを知っており、聖句について語られるとき、それがどこに見出されるかを知っているほどになった。それから初めて他の著作を読んだのである。けれども私はついにこれらの著作をすべて眼から離してしまわざるを得なかった。というのは私は正直のところこれらのものに満足することができなかったからである。それで私は再び聖書と取っ組まざるを得なかった。というのは他人の眼をもってするより自分の眼で聖書を見る方がはるかに善いからである。それゆえ、私は私の本などすべて、悪い範例を遺さないために、二の腕九本ほども深く地中に埋められることを願いたい。そうでないと誰でもが私のあとを継いで沢山の本を書こうとするからである。そんなことをして有名になろうとするのはもっての他である。否、キリストは我々が名声を博するといった虚栄のために死んだのではない。彼はただ彼の聖名が聖としてあがめられんために死に給うたのである。

聖書のテクストを精読し、テクストを唯一の真正な基礎として、これに止まるべきこと

よき基礎を置き、よきテクスト通暁者となるほどにテクストに密着している人は、彼がその上に確実に立場をもち、また基礎を置き得るほどにこれを所有しているわけである。彼はまた軽率に悪く走り出したり、まよったりしない。しかもこのようなことは神学者にとって極めて必要な

ことである。というのは、私はテクストをもって、また聖書の基礎から、私のすべての反対者の声を封じてしまったし、ねじ伏せてしまったからである。というのは、彼らはただねぼけ顔でぶらつき歩き、すべてを彼らの考えからまた理性に従って教えたり、書いたりして、聖書は言うに足らないたやすいものだと思っているからである。あのパリサイ人が思ったと正に同じような事態がやがて起きて来よう。すなわち主キリストがルカ一〇・二八で、あのパリサイ人に、「それをなせ、そうすれば生きようぞ」と言いなさったわけであるから。何となれば、浮薄な人間や熱狂的な人たちは、聖書がちっともわかっていないのみか、一方彼らがでっちあげたあやふやな、かわり易い不確かな本で誤謬の歩みをしている。

これを要するに、テクストをよく把握している者が正しい教師である、井泉または源泉から水を掬むべきである、というのが私の最善の、最もキリスト教的な忠告である。それは聖書を精読せよ、ということである。テクストにしっかりと根拠を置き、テクストに練達である人は、よきまた優れた神学者となる。それは、聖書からの一言一句は、力もなく完全でもない文筆家たちの確実性のない多弁や註解、傍註のたぐいよりも価値があるからである。

「神の造られたものは、みな良いものであって、感謝して受けるなら、何ひとつ捨てるべきものはない」（第一テモテ四・四）というパウロの言を眼前にもつ心地である。このテクストは、およそ神の創造にかかるものは善いものであることを示している。今や食べること、飲むこと、求婚

すること、または婚姻すること等々これはみな良い、ということである。神の被造物はそれゆえに善いのである。註解はこれに反対している。というのは、S・ベルンハルドゥス、バシリウス、ドミニクス、ヒエロニムス、更にほかの聖なる神父や教師たちは、これらのことに関して非常にちがって書き、また行っている。けれどもテクストははるかにこれに先んじて、あらゆる註解を越えている。それにも拘らず、教皇庁のもとにある教父たちは、かれらの註解で聖書の明朗な言よりも大きな名声を獲得している。それゆえ、これは聖書に対して暫く大きな不正を行ったというものである。しかもアンブロシウス、バシリウス、グレゴリウスの如き教父たちがしばしば冷淡なことを書いているではないか。

聖書は探究し尽すことも研究し尽すこともできない

ユストゥス・ヨナス博士がマルティヌス・ルター博士の卓上談話について、聖書には誰も研究し尽すことも学びつくすこともできないような智恵があるものだと言ったとき、マルティヌス・ルター博士はこう語った、「我々は聖書においてはいつまでも生徒であるのがよい。というのは聖書の唯だ一語といえども充分に探究しつくすことは出来ないからである。我々は初心者であり、ただ初心者でありつづける。我々が聖書のことで大いになし得、理解し得ても、我々は殆ど聖書のA・B・Cもできない。しかも正しいとはいえない。

誰が自分自身を認識することができるか。また人間の心がどれほど悪く、損われ、毒せられているか。原罪がかくも深く我々の心の中に根を張っているからだ。ところがそれが見えていない。そのようにまた神の意志は、我々が五感をもって把握し理解し得るよりはるかに高い。「キリストの苦難にあづかればあづかるほど喜べ」という第一ペテロ四・一三の唯だ一つの聖句をだけでも誰が正しく把握し得るか。

言の宝玉

ヨハネ八・五一「よくよく言っておく。もし人がわたしの言葉を守るならば、その人はいつまでも死を見ることがないであろう。」

——ああ、主なる神よ、これを信じ得たら、その人に聖書はどんなに素晴らしく慕わしいものとなるでしょう！　熱病にせよ、疫病にせよ、それを駆逐できる医術を人々はいかばかり尊重するかを考えてみるがいい。このためには誰でも東奔西走して求めるではないか。ところが、どんな病気も、悲嘆も、困窮も、そして死をさえも取り除くこの財宝、この宝玉を誰もが注目しない、或はあっても、まことに残念なことに、極めて僅かの人だけが。人々は宝玉たるこの神の言を信ずること極めて弱い。ところがこの神の言は神自身の崇高な永遠の真理である。

み言におけるキリストの権威

キリストが何か語り、約束し、おびやかすと、それは天地のみならず、十方世界にあてはまる。神の言の権威とはこのように偉大である。

聖言のなぐさめ

神の言を、どんな仕事をしていても、眼のあたりもっているということは、なんと貴いことではないか！　そのような男は心配がない、たといどれほど試みを受けようとも。聖言をもたない男はついにはどうにもならなくなって絶望に陥る。彼には天からの呼びかけがないからである。彼はただ自分の心の虚妄に駆りたてられているばかりである。それゆえ、詩篇第百十九篇〔二一節〕が神の言を次のように讃えている、「あなたの誡命から迷い出る者は呪われている」と。その意味はこうである、神の言を抜きにしては、どんな幸福も永続きはしない。「私〔キリスト〕の天の父が植えなかったすべての樹は根こそぎにされる」からである。

聖言の伝播

福音はキリスト在世の時代よりも使徒時代や現代〔宗教改革時代〕において、より力強く、より広く伝えられている。それゆえキリストは言ったのである、「おまえたちは〔私より〕大きな

業（わざ）をなすであろう」（ヨハネ一四・一二）。「私は芥種子にすぎない、だがおまえたちは小枝、大枝となり、そこにはもろもろの鳥が巣をつくるほどになろう。私は室の片隅みで宣べたようなものだ、だがおまえたちは屋根の上で、街頭で、そして全地に向ってあまねく道を伝え、生長してゆくであろう。」（マタイ一三・三一、三二、マタイ一〇・二七参照）

口づからの聖言

噫、モーゼが申命記第三十三章で書いているような好い詩人になりたいものだ。そうすれば聖言によって貴重な歌や詩を喜んで作りたい。聖言なくしては一切は空無である。それゆえ神は我々を彼の口づからの言に結びつけ、そしてこう言っておられる、「おまえたちに聞く者は、私に聞いているのだ」と（ルカ一〇・一六参照）。この場合、神は、ある人間の口からひびき出る口づからの聖言について語っておられるのだ。神は霊的な天的な言〔異言や天使の言〕について語っているのではなく、人間を通してひびき出る聖言のことを語っているのである。サタンは世界の創造以来この聖言と戦い、そしてこれを根絶させようとしてきた。それゆえ我々はこの遣り方にいつまでも踏みとどまろう、そして律法と福音の啓示に対して、神に感謝しようではないか。

聖言は悲哀にうち勝つ

神の言によって、また義認の信条*によって、人々は悲哀を駆逐しなければならない。その一例を教会史に読むことができる。ユリアン[1]は彼の敬虔な兵卒たちの毅然たる態度を試みようと思い、彼らの処刑を命令した。彼らが索き出だされると、そこに若者が一人扈従していた。この若者は、自分が最初の人として処刑されんことを願った。

さて彼が死刑執行人に対して欣ばし気に自分の頸をさし伸べると、彼は釈放された。すると彼は立ち上りながらこう言った、「噫、私は、そもそもわが主キリストのために死ぬ価値がなかったのだ。」このようにして悲哀も、更には死の驚怖すらもうち勝たれるのである。

*〔訳者註〕ルターは「義認の信条によって」といっているが、信条を観念的に受けとっても、それが力となるのではない。キリストの義認の信受が本ものであることが大切なのである。ルターの表現を誤解しないようにしなければならない。

1 ユリアン、三六一―三六三年の間、ローマ皇帝、キリスト教化した帝国と国民のギリシャ的異教への復帰を企てたが失敗に帰した。

聖言の効力

キリストの言は非常に効力がある。その言には手があり、脚がある。キリストの言は賢者のすべての智恵、忠言、策略に優っている。そのことは福音書で、キリストが極めて単純な言でどの

ようにパリサイ人の智恵を混乱におとし入れ、彼らを途方に暮れさせたかをみても明かである。

論難を通しての確心

私は私の神学を忽然として学び得たのではない。つねにいよいよ深く探究しなければならなかったのである。私がいろいろ論難攻撃されたことが、そこまで私を深めてくれた。まことに我々は鍛錬なくして何ごとも習得しない。このことは熱狂者や徒党のたぐいには欠けている。というのは、彼らには本当の反対者、悪魔がいないからである。悪魔にはそのようなわけで教えられるというものである。ほかの技術芸術も本当に練習なしに学び得るものではない。いつもただ学校にじっと滞留しているような医者は一体何であるか。けれども彼が実地訓練に踏み出し、いよいよ自然界をとりあつかえばあつかうほど、いよいよもって、自分が医術をマスターしていないことを彼は知るわけである。神が一人の他の反対者を与えておられる以上、聖書においてもどうして別な事態であり得ようか。それゆえ、ある人が一巻のテクストをもち、これは正しい、そのことを私は知っている、と言い得るとき、それは最高の恵みである。彼らは、ある説教について直ちにそれがなし得ると思っている。このことにおいてツヴィングリも間違った。すなわち彼はそれが確かに出来ると思ったからである。けれどもそれは惨めな行為（わざ）であった。私は、ところで、「主の祈り」も未だ出来ないことを知っている。実際の経験なしでは、何びとも学ある

人とはなり得ない。あの農夫がいみじくもこう言った、「ひとが甲冑を用うるすべを知っているなら、甲冑は結構なものである。」また聖書についてもそのようなことは、充分確かである。ところで私が然るべき箴言を摑むように神が助けて下さるように。それゆえ、神が私に対してたしかに恵み深くあるか、とサタンが私に挑戦した場合、私は次の格言を引用してはならない。すなわち、「神を愛する者は、神の国を有つであろう」と。というのは、彼は次のように言って私に対立するからである、「おまえは神を愛さなかった！」。これに対して私は、私が聖書の愛読者か聖書の伝道者であると、言挙げすることはできない。

神の言でサタンに抗する

私がぼんやりして聖書を省察することなしにいるのをサタンが見つけると、サタンは私に悪意を抱いて、あだかも私がよこしまに教え且つ国家組織をひき裂いたかの如くみなす。その結果私の教説によって、たくさんの顚きや不和がまき起されたかの如くみなすのである。けれども私がみ言につかみかかると、私は勝ってしまう。そのように私はみ言によってサタンを防ぐのである。この教えは私のではなく、神の聖子のである。更に言うなら、たとい世界が今の全世界より十倍も大きなものであるとしても、神は何でこれにわづらわされようぞ。神自身が聖子を王者として世界に君臨させた。世界が聖子を受け入れまいと、神は聖子を据えて不動ならしめたから、

世界が力と智恵と義の限りを尽しても聖子をくつがえすことはない。だが世界はそれをやってみるがいい、聖子は世界をくつがえすであろう。神は言い給う、「おまえたちは彼に聴かねばならない」（マタイ一七・五参照）。そして詩篇第二篇十節に、「それゆえ、もろもろの王よ、賢くあれ。さもないとあなたがたは道で滅びるであろう。」すなわち、「あなたがたはあなたがたの国や、法律や、武力もろともに滅びるであろう……」ということである。

み言と十字架

神がみ言を告げるときは、事実の裏づけをもってする。それはみ言が納得されるためにである。たとえば、神がみ言には十字架が従（つ）いていると告げ給うと、信徒たちはみ言を聞いたあとで直ちに十字架を負う経験をせざるを得ない。それゆえ、信仰とその結果としての良き果が宣べ伝えられると、信仰によって義とされながら、時をうつさず何ら善き業がなされないということはあり得ない。このことが起らないとすれば、それは誰もみ言を把握していないというわけである。何となれば事実こそみ言を本当に証しするものだからである。このことをキリストは次のみ言で語らんと欲しておられるわけだ、「わざによって君たちが信ずるように、そのようなことを私は君たちに言ったのである」（ヨハネ一六・四参照）。

信仰は経験に反する

信仰の言が経験に反すること、教会がサタンに最もひどくなやまされていること、キリストが「安心せよ、私は既に世に勝った」（ヨハネ一六・三三参照）といっておられるのに到るところ悲しみと十字架が絶えないということ等について、マルティン・ルター博士にコルダトス氏が訊（き）いた。するとルターは答えて「聖書にあるすべてのことがだまし*であるということを君たちは知らないのかね。神は弱きにおいて強くあらんとし、愚かさにおいて賢くあらんとしている。このことを信じ得る者は幸なるかな」と。

1　コンラッド・コルダトス（一四七六―一五四六）。オースタリー出身、しばしばウィッテンベルクに滞在。これよりさき、ハンガリーで福音宣教をしばしば試みたが挫折した。ルターの「卓上談話」の集収家の一人として知られた。晩年はシュテンダルにおける地方監督。

*〔訳者注〕「だまし。」現実が信仰をあざむき、だますように見立てることが多いから、ルターはこういった。しかし根源の現実では信ずる如く成っているのである。

み言を侮れば神の怒あり

神がみ言をとりあげてしまうか、それとも人間どもがみ言を侮蔑するのを神が放任するとき、神の怒は最大なものなのである。ギリシヤ人がみ言を侮ったとき、神は彼らからみ言をとりあげ

てしまった。そして彼らにトルコ人とマホメットを与えた。そして我々とイタリア人には、教皇及びこれと共に、まことに恐るべき惨禍と信仰の拒否と全教皇制を与えた。

み言の侮蔑は最大の打撃

私は殆ど最大のというべき災害を体験した。すなわちみ言の侮蔑であって、それは最悪の禍害であり、この世の不埒千万な禍害である。これからは、この世の最悪にして、最も畏怖すべき罰が結果するにちがいない。もしも私が、ある人を呪うとするなら、私はその人にみ言を侮ることを望みたい。そのとき、その人は内的なまた外的な不幸一切を忽ちかぶる。今や世界はたしかにそういうみ言の侮蔑の中を悠々と歩いている。この事態から何が起るかを、我々は見ていよう。

神学の総体

神学における最も崇高な講義内容は、キリストを知り得る、ということである。そこにおいては師が門弟から、門弟が師から学ぶことを互に恥づべきではない。キリストは我々よりも友情があつい。私が友に対して信実であり得るとすれば、キリストは我々に対してそれよりいかほどあつく信実であるか！　サタンが私を律法に導き入れたら、私は呪われている。けれども私が「キリストの」約束を把握し得るとき、私は自由である。ペテロは言った、「キリスト認識を増大せ

よ！」と。それは律法や討論術やまたは何らかほかの技術の認識とはちがったもので、キリストこそは最も義なる者、最もあわれみ深い者で、この人の中にのみ我々は住まうのである、という認識である。サタンは巧妙にも我々においてこの根本認識を曇らせ、我々がキリストよりも現世的な友に信頼をおくような結果を招来せしめる。

あらゆる討論の前提

福音書記者たちが神の言を書き記していることを是認する人とは、よろこんで会いたいと思う。だがこれを拒否する者とは、片言隻語も交したいとは思わない。というのは、キリスト教においても、次の命題は妥当するからである。すなわち、一定の諸前提を否む者とは、議論すべきではないということ。それなのに、すべてのユダヤ人、異邦人、トルコ人が、聖書は神聖な書であるといっている。というのは、この書は最も優れた証言をもっているからである。そして、〔モーセの〕五書はモーセが書いたものでないと主張する人が幾人かあろうとも、それは何ら害うものではない。それにも拘らず、五書はモーセの属（もの）である。

第三部　論説三篇

一　親鸞とルター
――『歎異鈔』と『キリスト者の自由』

一九七三年十一月二十三日
京都大学における講演（録音に基づいて）

東西の二珠玉篇

私は素人でありまして、ルターとか親鸞とかを専門に研究している者ではありません。ルターのほうは多少専門に近いのですが。けれども、キリスト教と仏教の各々の本質を、非常に小さな本で、ずばりと言っている本、珠玉のような、「芥子種一粒」のような本として、ルターの『キリスト者の自由』と親鸞の『歎異鈔』の二書、これを私は西と東の二つの星のように思うのです。

近ごろ火星と木星とが、輝いて見えますが、何か象徴のように思われます。

万人は宗教人

今の若い人々は、いわゆる文化、文明の方へは大いに気持ちを向けるのですが、宗教といいますと、まあ宗教はそっちのけでやるんだ、といった風潮です。また、なにか宗教を云々する人にしても、宗教を単なる文化現象のひとつくらいにしか思っていないようです。ところが、人間が信じると信じないとにかかわらず、この世界の歴史のどん底において人間を支えているものは、実は、宗教なのです。二十世紀はあと三十年もありませんが、人間がそのことに本当に気がつかなければ、人類は果して二十一世紀を無事に迎えられるだろうか、と思っています。現在、世界にいろいろな精神的あるいは物質的な公害現象がおきているのは、結局この宗教をないがしろにしているからなのであります。このことは、ほんとうにはっきりと申しておきます。

ところで、私はずっと以前から「万人は宗教人である。」と言っています。私が、大学で学生達に対して、「君たちのなかにたましいのない人がありますか。たましいのない人があるなら手をあげてみなさい。」と、言いますと、誰も手をあげません。そこで、「それみたことか。たましいはあるでしょう。どこにあるのですか。」と、重ねて聞くと、それもまた答えられないのです。どこにある、ということが言えないものが、実は、いちばん深く存在するのです。分析することも、対象化することも、いわゆる研究することもできないもの——いちばん根底のもの——

これなしに、これをないがしろにして、実際は、政治も経済もその他のもろもろの文化現象も、ほんとうの意味においては、どうにもならない暗礁にぶつかるのです。絶対次元の宗教なくしては相対次元の文化文明は非常に危いのです。すべての人間の営みの根底に、人間そのものがほんとうに生きていないかぎり、その営みは病めるものとなってしまうことは、火をみるよりも明らかなことなのです。「病める者医者を要す。我は罪びとを招かんとて来れり」とキリストは言いましたが、正に万人が罪びとである限り、万人は宗教を要す、それゆえ、「万人は宗教人なり」と申すわけです。今日来会の皆様は、ぜひとも、そのことの自覚を、深くしていただきたいのであります。

宗教は実存の問題

「弥陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、」

この自覚に、みなさんひとりひとりが立っていただきたいのです。これは、親鸞の『歎異鈔』の結論のところにある有名な句ですね。宗教の世界は、あの人がどうだから、この人がどうだから、という世界ではないのです。それは、自己の実存の問題なりであって、いちばんぎりぎりの、一対一の、自分がどうだ、という問題なのです。とにかく私はただ講演をしに来たんじゃないのです。あなた方が、今、親鸞の告白したこの一句を、ご自分の告白としてお帰りになるので

ないなら、何を聞いても空しい、というわけです。

親鸞の求道

親鸞の歴史的な事柄については、みなさん大体ご存知でしょうから簡単にしておきましょう。

親鸞は、高倉天皇の承安三年（一一七三年）四月一日に、山城国に生れた、とあります。幼名は松若丸。四、五人の兄弟のうち、おそらく長男であったようです。お父さんもお母さんも早くなくなってしまって孤児になり兄弟みなが出家させられています。養和元年（一一八一年）三月一五日に、九歳の少年松若丸は、おじさんの範綱に連れられて、知恩院の北、粟田口青蓮院にまいりまして、そこで得度剃髪させられ、法名範宴ということになりました。それから、そこの比叡山で研学修業しまして道を修めること二十年。ちなみに申しますが、だいたい山に籠もったり、曠野に出たり、ということは宗教の世界にひじょうにふさわしい環境であると思います。と言うことは、いちおうこの世と断絶するわけなのです。みなさんも、今、この時間、二時間くらい、ほかと断絶して、ここが深山幽谷あるいは曠野と思っていただきたいです。ほんとうの世界に入るには右顧左眄してたらだめなんです。比較研究なんかしてたらだめなんです。

さて、比叡山といえば、これはご承知のとおり、伝教大師以来の大道場でありますが、このころは保元平治の乱の後をうけて、山の坊さんたちもだいぶ信仰的に堕落していたとみえます。そ

れで彼は、山で学んでも、そういった先輩達からは、どうもあまりいいものは受けとることができないで、ときどき外に出ては、どこかに道を聞く人はいないものだろうか。とにかく、ひとごとではないんで、どうしてもほんとうの道を身につけたい、というわけですね。彼のことばにこういうのがあります。

「悪性さらに止め難し、心は蛇蝎の如くなり、」自分を見るというと、まるでこれは人間ではない。虫けらでもない。それどころか「蛇蝎」（ヘビやサソリ）などと言っている。深刻な罪悪感を彼はもっていました。また、人間が生きるには、いろんなものが犠牲になっている。肉体の一片も、血の一滴も、他の生命の犠牲なしには生きていられない。そういった苦しみもくるわけです。

「出願出離の道」。これがどうしても比叡山では満たされないので、彼は、ご承知のとおり、いわゆる六角堂に百日の日参を始めたのですね。夜な夜な「如意輪観世音」に祈りをこめた。そのために三里半の道、往復七里を歩いたそうです。今の若い人はたいてい乗り物に乗ってしまうのですが、……京都大学の教授もされた天野貞祐先生なんかは、一高時代、雨が降っても、風が吹いても、雪が降っても、内村鑑三先生の聖書講義を聴くために、本郷から柏木まで歩いて通われた、と聞いております。私のことを申しては恐縮ですが私も内村先生の高弟藤井武先生の日曜集会に五年間、先生の召天まで、全出席で通いました。とにかく道を求めるときには、いい加減な

気持ちではだめなのです。そうして、彼は、九五日目の夜に次のような声を聞いた。「末代出離の悪路は唯念仏に如くは無し。」

その後、彼が四条河原を歩いていると、安居院の聖覚上人にめぐり合った。そして、この人から吉水の法然上人という「善知識」を示された。こういうことから、法然と縁ができたわけですね。時に建仁元年（一二〇一年）三月一四日とあります。親鸞は、法然の吉水の庵に深い悩みをもって戸を叩いたわけですが、そのとき法然が六九歳、親鸞が二九歳でありました。法然は、温容なこと春の海のごとく、満月のごとくに円満な人でしたが、内面にはあるひとつの鋭いものをもっていた。そして彼と悩みを共にして、いろいろと聞いてくれたのです。

そして、「凡夫直入の信心、無条件無一物の救済、絶対他力の往生」といったようなことを論されるのです。

それで、いろいろと曲折はありますけれどもこの「信心」「念仏」ということが、だんだん「弥陀の賜物」である、あるいは、「もよほし」である。念仏そのことが阿弥陀仏のもよほしによって賜物である、ということになり、この「賜物」「もよほし」は、これは「本願」から来る、という絶対恩寵の消息を体得することになるのです。

『歎異鈔』

それでは、そろそろ「歎異鈔」の原文にあたることにしましょう。法然上人には「一枚起請文」という上人自身の書いた遺文がありますが、『歎異鈔』は、ご承知のとおり親鸞の弟子の唯円が伝えたという親鸞の信仰告白の内容であります。聖書の、たとえば「マタイが伝えたキリストの福音」を「マタイ伝」という呼び方をすれば、さしずめ「唯円伝」というところですね。

この序文は漢文で書いてあります。

「ひそかに愚案をめぐらして、ほゞ古今を勘ふるに、先師の口伝の真信に異なることを歎き、後学相続の疑惑あることを思ふ。幸に有縁の知識に依らずば、いかでか易行の一門に入ることを得んや。全く自見の覚悟を以て他力の宗旨を乱ることなかれ。よって故親鸞聖人の御物語のおもむき、耳の底に留まる所いささかこれをしるす。ひとへに同心行者の不審を散ぜんがためなりと。云云」

とまあ、こういう由来であります。

弥陀の誓願

『歎異鈔』は、全部で一八章あるのですが、そのなかの主なものをとりあげて読みながら、その本質に触れたいです。

まず、第一章から読みます。

「一、弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念仏まうさんとおもひたつこゝろのをこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり。弥陀の本願には、老少善悪のひとをえらばれず、たゞ信心を要とすとしるべし。そのゆへは、罪悪深重、煩悩熾盛の衆生ををたすけんがための願にてまします。しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆえに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆへにと、云々。」

これは実にすばらしい福音です。しかしこういうのは、若い人たちがとりちがえるととんだことになりかねます。ものすごい言葉というものは、いわば名刀の如きものですから、使い方によっては、自分も傷つくし、人も傷つけてしまいます。親鸞、ルターの言葉、いやイエス＝キリストの言葉、聖書の言葉はすごいですから。キリストの言葉は、そのなかのどれ一つもってきても、とてもやり切れないです。水を割らずにずばりと言いますから。たとえば「自分を憎まなければ私の弟子となることはできない。」と、キリストは言いました。

さて、

「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、」

いちばん先に、いちばん力づよい言葉がでてきていますね。昔、一高の哲学の先生が、「この有限をもって無限を抱く、これを哲学という。」と言ったそうですね。哲学の世界は、思惟で、

まあ限りなく展開してゆくでしょう。しかしながら、我々のように具体的なものは、「考え」では、ある方向は分り、そのことによって多少は動くかもしれないですが、魂の救いまでは来ないのです。

誓願の不思議によらなければ！

すなわち、絶対界の絶対の権威をもったところの事態から、こちらがわの知情意一切を乗り超えたところの不思議な力、不思議な法（のり）によらなければ、どうしても魂の救いはまいりません。不思議な法、不思議な力――これはみんな霊の世界なのです。霊法、霊生によらなければ我々人間は、実は、どうにもならないようにできているのです。しかし、それだけに、それに乗っかってきたら、これはもうほんとうにらくになるのです。私は昨晩、ちょっと目が覚めてから祈っていた。もうなんというか、全身に不思議なキリストの誓願の力が上から来て、寝ているのがいやになってしまいましてね。電気を点けて本を読んだりしました。そういうわけで、まあ三時間くらいしか寝ていないんですよ。私みたいなこんな貧弱な奴が、そろそろ七十歳になるというのに、なぜ元気か、というと、元気が上から来ているから――霊界から――なのです。「元気を出せ。」なんて言っても、出せるものじゃないですよ。元気ってのは、私のものじゃないのですよ。元気ってのは、読んで字の如しで、元（もと）の気なんです。元気、天気でもいいのです。（笑）天気晴朗なりなんて外側の天気のことを思っていても、我々のなかにほんとうの天来の霊気たる天気がこな

ければだめなのですよ。外が荒れていようが、曇っていようが、天気をうちにもっていないとだめなのです。すぐ「今日はうっとおしいいやな日だな。」などとつぶやいてしまう。あなた方のなかにほんとうの天気が来て、天気になっていないとだめですよ。ほんとうの天気が、元気であるのです。それが来たら、「日々是好日」ということですね。嵐となれば嵐となり、曇りとなれば曇りとなる。そんなふうに自由自在になるのです。こちらがわは、しょっちゅうお天気です。第一章冒頭の「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、」というのは、そういうような世界なのです。

次に

「往生をばとぐるなりと信じて、」

この「往生」というのは、すばらしい言葉です。「往きて生まれる」というのです。往きて生きる——死なないのですよ。生死を突破して、もうすでに、こっちでもって往生していなければだめなのです。「往生」という言葉は、だいぶ未来的な気持ちをもっていますが、この点は、もっと現在的にとっていいのです。

無名の世界

「弥陀の本願」——「本願」という言葉、私は大好きです。仏教にはすばらしい言葉があります

から、どしどしこれを使わせてもらいます。まあ、仏教とか、キリスト教とか、ひじょうに乱暴な言い方をしますと、あまり区別しないのです。と、いうと、おまえは曖昧か、というとそうではない。私はキリスト直結なので、そうすると、すばらしいものがみんなその中に入ってくるのです。絶対の世界ってものはね、対立を呑んでしまう世界ですよ。東だ、西だなんて言ってるうちはだめなんです。東もない、西もない、北も南もない四方八方をもっている。そういったようなことなのです。

そこで

「弥陀の本願には、老少善悪のひとをえらばれず、」

老いも若きも、善も悪もない。浄不浄、善悪、明暗などの対立している世界は、まだほんとうじゃないのです。対立の世界に生きていますと、浄を選ぼう、善を選ぼう、というようなことになります。それは、いわゆるエントヴェーダーオーダー「これかあれか」で、まだ選択的な判断の世界にとどまっているのです。ところが、もっと大きな世界は、これをみんな呑んでしまうのです。キリストの言葉にもありますね。

「そは天の父は
悪しき者の上にも善き者の上にも
その太陽を昇らせ、

正しき者にも正しからぬ者にも
雨を降らせ給えばなり。」

――マタイ伝第五章第四五節

超差別の一視同仁である。だいたい人間が善いの悪いの、きれいだのきれいでないだの、きよいのきよくないの、そんなものは、たかがしれているのですよ。そんなところには、ひとつも絶対なものはないのです。そのような差別相を突破し、乗り越えてしまうと、そういった概念でもって区別できない、なんとも無名の世界に入るのです。だから私は「無」という字はすばらしいと言うのです。そもそも「無」という字は、天蓋の下に「廿」と「廿」、二十と二十、四十の林がある、という構成の文字なのです。つまり「無」というのは、「無数」数えきれない、ということです。なにもない、というのではなくて「無数無限無量」ということです。法然、親鸞の教えの原典は、「観無量壽経」というのでしょう。これをほんとうに身に体しようというのですね。パウロも言っています。「キリストの教え、その愛は、その長さ、深さ、重さいかばかりか測り知れない。」と感嘆しているのです。要するに、年とっているとか、若いとか、男だとか女だとか、善いとか悪いとか言っている世界ではないぞ、ということであります。そして、

念仏が至高善

「たゞ信心を要すと知るべし。そのゆえは、罪悪深重、煩悩熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。」

というわけです。キリストは、「義しき者を招かんとにあらず、罪人を招かんとて来れり。」と。ほんとうは義しい人なんて一人もいやしないのです。パウロも言っているとおり「義人なし、一人だになし」なのです。「衆生をたすけんがための本願」！　この中に救いを要しない人がありますか。あったら手をあげてください。いないでしょう。みんな救いを要する。みんなS・O・Sなのです。そのくせに宗教はいらない、なんてね、それでは、もう地獄に入るつもりなのか、地獄なんてありゃしない、などと言っているうちに、どういうことになるか私は知りませんよ。

「しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なき故に。」

愉快ですね。念仏が至上善である、念仏することが最も善き善である、というのです。人間のなすことは、ただ念仏だけだ。ルターは信ずるだけだと言っている。キリストは神の御意（みこころ）だけだと言っていらっしゃる。念仏にまさる善はない。だから悪をもおそるべからず。どんな間違ったことをしてしまっても、それでこわがったり、絶望したり、落胆することはない。ということは、罪悪深重、煩悩熾盛という悩みはあるけれども、その悩みをいつまで見ていてどうなるか、ということなのです。パウロも言ったのです。「我は罪人の首なり」と、「あゝ悩める人なるかな、この死の身体より我を救わんものは誰ぞや」と。キリスト教の最大の使徒パウロ

は、そういう苦しみをもったのでした。最高善としての念仏「南無阿弥陀仏」、これを唱えることが最善のことである。最善のことは、いいかげんな気持ちではできない。じゃあ、どうしたらいいか。全身を投ずるんです。最善のことは全身的でなければならんのです。

全身投入！

だから念仏にまさるべき善なき故に悪をもおそるべからず、といって、もう本願がきて、すべっても、ころんでも、まちがっても、自分のそのままの自分を投げかけていけ、と。そこが念仏だ、と。そうしたら、そいつは突破してしまうぞ！　行きづまらないぞ！　と、こういう世界です。

「弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆへにと、云々。」

キリストの十字架で贖われない程の悪はない、というのと同じことです。ただし、キリストの十字架は非常に具体的な事実です。これに対して、弥陀の本願というのは、これは事実としては分らない。そこに仏教とキリスト教の宗教の性格的な違いがありますけれども、その霊的な内実においては非常に相等しいものがあるのです。「弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆへに」、それだけに阿弥陀仏に全託するのです。本願には間違いがない。俺がどんなであろうとも、今がどうであろうとも、そんなことは問題がない、といったら躍動するじゃあないですか！　そ

ういう受け方をしなかったら、いつまでたっても空念仏です。「一念多念」ということがありますね。南無阿弥陀仏を一念する、なむあみだぶつ、と何回となえるよりもただ一念する。法然は、一日に何万回も唱えたそうだが、唱えれば唱えるほどいい、というのではない。親鸞は、そのことをはっきりと言っています。たったいっぺんだけの「なむあみだぶつ」でも、もうそれでもって救われるから、嬉しくてしようがないから、また、なむあみだぶつ、と言うだけの話だ。たくさん唱えれば、それだけ良いというものでもない。問題は、質だ、と。

さて、私達は、「歎異鈔」のこの一章を一緒に読んでみただけで、なんかしらんが、もう親鸞と共感しているわけです。「弥陀の本願」であるから「摂取不捨」、決して捨てないよ、と言ってくれているのです。

第二章に入りましょう。

「親鸞にをきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。」

「よきひと」というのは、もちろん法然上人です。法然上人の言ったことを全身で受けとめたのです。今の学校では、先生方は、あんまり「お前はどう思うか。」なんて言いすぎるようです。まだ学ばないうちから小学生に対してまでそんなことを言っているから生半可なのができてしまって空転してしまうのですよ。

だから我々一人一人がそういう本願の不思議におけるところの無量の真理のなかに身を投入してごらんなさい。孔子が「千万人といえども我行かん」と言ったけれど、正直何人こようが絶対の権威でものが言えるようになるのです。

続いて、

「念仏は、まことに浄土にむまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり。」

すばらしいではないですか。いかに親鸞の信仰が、いわゆるご利益信仰とちがうか、ということがわかります。どこまでも本願本位であって、こちらがわの悲願とはちがうのです。極楽に行こうが、地獄に行こうが私は知りません。ただ、念仏せざるを得ない。これをもうひとつ言いかえると、念仏させられるのです。念仏は、もよほしであり賜物なのです。こっちから念仏しようなどというのは、まだ自力的な角度です。私達は、今、自然に呼吸していますね。呼吸しようと思って呼吸しているのではありませんね。いわば無意識に呼吸しています。そのように念仏せざるを得ない、ということなのです。たましいが念仏している。たましいが活きている。それが念仏させられているということです。あたかも大気が私達を包み、私達の中に入ってきてくれている。そのように仏の不思議な力がやって来て、たましいをして念仏せしめる。このように念仏せしめられている念仏がほんとうの念仏なのです。ですから、地獄に落ちようが極楽に行こうが存

知しない、というのです。全く全托しています。全く弥陀本位、弥陀一切であります。弥陀こそが一切でありまして、こちらの救いのためではないのであります。この点に関しては、ルターの宗教もまたその角度から言っております。よく安心立命などと言うけれども、ほんとうはそうではないのです。そういう親鸞の信仰の真骨頂とルターの信仰の本質をこの二時間でつかまえようというわけです。親鸞とルターと両方とも打って一丸としようというのです。

「たとひ法然聖人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。」

まあ師弟の関係で、これだけ先生を信頼している弟子は日本国中どこにありますか。「この先生のためには命を捨てても！」という学生が、どこにありますか。あの赤穂義士の精神は、なにも仇討ちがどうのこうの、というのではないのです。あの主君のためには、自分達は命を捨てる、というのが彼らのたましいではありませんか。法然のいっていること、それはとりもなおさず上から来ていることなのですが、それを彼は、はっきりとつかまえています。もしも、自分が念仏の外にあって極楽にでも行けるというのであるならば後悔する、ということもあるでしょう。しかし、親鸞は、ルターと同じように自分には、もうすっかり愛想をつかしているわけなのです。そのあとの方に出て来ますが、

「いづれの行もをよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。」

地獄へ行くのが自分の必然なのだ。自身の心からすると、むしろ地獄へ行くのが自然なのだ。それを、まかりまちがって極楽へ行くのは、これはありがたい話なんだ。そういうわけで、とにかく念仏せざるを得ないというわけです。

「弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教、虚言なるべからず。仏説まことにおはしまさば、善導の御釈、虚言したまふべからず。善導の御釈まことならば、法然のおほせそらごとならんや。法然のおほせまことならば、親鸞がまうすむね、またもてむなしかるべからずさふらふか。」

というわけで、ずっと貫いています。

往生の正因

第三章へまいります。

「一　善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。……（中略）……しかれども自力のこころをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり。煩悩具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるゝことあるべからざるをあはれみたまひて、願ををこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり。」

善人は往生をとげるが、悪人はなおさら往生をとげる、というのです。弥陀は、そのとおり、悪人を救済せんがために願っている本願なのであります。そのように私達が罪人であることが、救われる正因であるわけなのです。悪人であることが往生の正因である。ところで、悪人とは何ですか。福音的に見れば私達は、みんな悪人なのです。要するに、私達はみな我執をもっている罪びとですから。思うこと、為すこと、ことごとくが、この我執につらなり、我執がからまっているのです。なかなかほんとうに無私にはなれません。まあ瞬間的にはなれますが。こういうことで本質的に無私な人はお釈迦さんとキリストであります。けれどもキリストは、いつも我執にとらわれる危険にさらされていましたから、「我が心にあらず、汝の御意が成るように」と言って神様の御意をしょっちゅう聞いていましたし、自分をその中に入れて、「どうかこの私をとおしてあなたの御意を成してください。」と祈っていました。要するに、人間はみな「我執者」なのであります。我とは「我執者」なり、と言えましょう。このごろは、どうかしています。トイレットペーパーが乏しくなる、というとスーパーに殺到して買い集め、買いだめをやったりなんかしています。みな我執者じゃないか、と思わざるを得ない。現象を見ているとまことにやり切れないです。

「よて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、おほせさふらひき。」

有り難い限りであります。

第四章へ入って、

「……また浄土の慈悲といふは、念仏して、いそぎ仏になりて大慈大悲心をもて、おもふが如く衆生を利益するをいふべきなり。……」

第五章では、

「親鸞は、父母の孝養のためとて、一返にても念仏まうしたること、いまださふらはず。そのゆへは、一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり。いづれもいづれも、この順次生に仏になりてたすけさふらふべきなり。……（中略）……たゞ自力をすてて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道・四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも、神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなりと、云々。」

第六章、

「専修念仏のともがらの、わが弟子、ひとの弟子といふ相論のさふらふらんこと、もてのほかの子細なり。親鸞は弟子一人ももたずさふらふ。そのゆへは、わがはからひにて、ひとに念仏をまうさせさふらはばこそ、弟子にてもさふらはめ、ひとへに弥陀の御もよほしにあづかりて、念仏まうしさふらふひとを、わが弟子とまふすこと、きはめたる荒涼のことなり。」

それは、確かにきっかけにはなって、ということはあるでしょう。しかし、それは私を通してのきっかけであって、ほんとうは上から来ているところの摂理、本願がはたらいているのであり

ます。自分は、道具にすぎないのだ、とパウロも言っています。「アポロ何者ぞ、ペテロ何者ぞ。」パウロも、ルターもみんなキリストのもの。キリストだけなのだというわけです。そういうわけで、自分はきっかけはつくるけれども、本流は上から来ているのだというわけです。だけれども、本章のさいごでは、

「仏恩をも知り、また師の恩をも知るべきなりと、云々。」

とは言っております。

無礙の一道

第七章には、

「念仏者無礙の一道なり。」

というすばらしい言葉が冒頭に掲げてあります。これは全体を総合しているような言葉だ、といってもいいくらいです。

「信心の行者には天神・地祇も敬伏し、魔界・外道も障礙することなし。罪悪も業報を感ずることあたはず、諸善もをよぶことなきゆへに無礙の一道なりと、云々。」

つまり、どのような運命環境であろうともさまたげることはない。

「我は道なり、真理なり、生命なり。」

とキリストは言った。だいたい日本人は「道の民」であります。剣道、柔道、華道、というふうに「道」ということを重じます。むしろ芸術というのも、芸道なのですね。すなわち、身をもってあらわす、そんな全存在の告白となるものが「道」ということなのであります。でありますから、「念仏者無礙の一道なり。」ということは、これはもうほんとうにすばらしい。ここにいう念仏は、自分の念仏と思うような、そういった念仏ではないのです。そういった自分で力んだような念仏ではないのです。先程から言っていますように、念仏せしめられているような念仏、たましいが念仏せざるを得ないような念仏なのであります。

「風は吹かざるを得ず、雨は降らざるを得ず、雷は鳴らざるを得ず、これ至誠なり」

というような言葉が佐藤一斎の「言志録」のなかにありますが、そういった念仏者、それこそが無礙の一道なのです。弥陀の本願の劫力がかかっていますから。キリスト教のほうで言いますなら、御霊の祈り、聖霊による祈りが、ここで言うところの本願のかゝっている念仏なのです。本願念仏、本願念仏道なのであります。私は、もしキリスト教でなかったら浄土真宗になるでしょう。だいたい親鸞という人が、人間的に好きでしたからね。親鸞に比較すると、法然はかなり知的な方でした。道元も知的。日蓮は意志的。ルターは意志的。中世神秘家のエックハルトは、これは知的な人でした。ゾイゼやヤコブ・ベーメ就中ベルナールが一番親鸞と同じような情の深い人でした。

無義の義

さて、第八章、

「念仏は行者のために非行・非善なり。」

愉快な言葉ですね。自分の善ではない、というのです。キリストに対して、よき先生、と言ったら、「なぜ私のことを、よきというか、よき者は神様の他にはない。」と言われたでしょう。あれと同じ角度です。老子は、「無為の為」と言いました。なにもしないところのほんとうのところ。それは、みんな絶対界の交わりの世界は己れを否定するからです。親鸞のいわゆる「無義の義」というのは、キリスト教の「義」ではないのです。そうではなくて、これは、思いはかること、自分で思いはかってどうのこうのと詮索するのを捨ててしまう、ということであります。そうすると、ほんとうの弥陀の思いはかりがやってくるのです。それが「無義の義」ということなのです。ともすると、念仏だとか、あなたまかせだとか言いますと、ずいぶんだらしのないやつだ、男らしくないやつだ、と思うかもしれませんが、どっこいそうではないのです。いちばん力がやってくる世界、ものすごい世界なのです。相対的な自分の力などというものではなくて、そんなものがはずれてしまうと、ものすごいものが上から来るのです。

いよ〳〵往生は一定

第九章を読んでみましょう。

「念仏まうしさふらへども、踊躍歓喜（ゆやくかんぎ）のこゝろ、をろそかにさふらふこと、またいそぎ浄土へまいりたきこゝろのさふらはぬは、いかにとさふらふべきことにてさふらふやらんと、まうしいれてさふらひしかば、親鸞もこの不審（ふしん）ありつるに、唯円房（ゆゐゑんばう）おなじこゝろにてありけり。よく〳〵案じみれば、天におどり、地におどるほどに、よろこぶべきことをよろこばぬにて、いよ〳〵往生は一定とおもひたまふべきなり。」

ほんとうは念仏の世界は嬉しくてたまらないはずなのに、どうもあんまり嬉しくないから困ったものだ、と思って唯円は親鸞に尋ねたのです。ところが、親鸞が唯円に答えたことは、「私もそうだよ。」と。人間だから時々駄目になることもあるわけですね。だけど駄目になるからといって悲観することはないのです。駄目だからこそいよいよ往生できるぞ！　とこんどは逆に来たのです。

「いよいよ往生は一定と思ひたまふべきなり。」！

まあ、なんという信仰でしょう。これこそがほんとうの念仏なのです。こちらがわの念仏ではないのであります。念仏の度数とか、熱心さが問題ならば、念仏にくたびれてしまいますよ。そ

んなこちらがわの念仏の「波」にはかかわりがないのが本願であるぞ、ということなのです。この本願に気がついたら、この「波」が、また高潮になるのです。また時には「波」が高潮になっても、こちら側の「波」には関係ないわけです。「波」のある人があります。波があってもいいよ、だけれども、もうひとつ奥の波のない世界に、本願の波のない世界に入れてやるぞ、というこころであります。駄目だからこそ救われる。「悪人は往生の正因なり」と、さっきも言われたではありませんか。「私はこのごろ、信仰がちょっとおかしくて、先生のところへ行くのが敷居が高くて遠慮しています。」などと言う人がいるのですが、そんな時こそいらっしゃい、と言うのであります。信仰がうすいのあついの、熱心だの不熱心だの考えないのです。要は、この本願だけを見ているのであります。この本願の波には、いつ、どこでも乗れるのです。こちらがわの運命環境の如何には絶対関係ないのです。

続いて、

「よろこぶべきこゝろををさへて、よろこばざるは煩悩の所為なり。しかるに仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫とおほせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときわれらがためなりとしられて、いよ〳〵たのもしくおぼゆるなり。」

はじめから煩悩具足の身、罪人と分っている。それを、いつまでも、罪だ、罪だ、と言っているのは、ほんとうの罪を知らないのだ。いわゆる罪意識の問題ではないのです。我そのものを罪

として投げ出しているこのあり方が、実はものすごい救いの世界に入るのです。ふつうは相対的判断でもって、これだけならいいじゃないか、こうじゃないか、ああじゃないか、と言ってうろうろしているのですが、「こういう場合は」などと言わないのです。キリストも、断言命法で、ずばり、ずばり、とものを言われるのであります。

「久遠劫よりいままで流転せる苦悩の舊里はすてがたく、いまだむまれざる安養の浄土はこひしからずさふらふこと、まことによく〳〵煩悩の興盛にさふらふにこそ。なごりおしくおもへども娑婆の縁つきて、ちからなくしてをはるときに、かの土へはまいるべきなり。いそぎまいりたきこゝろなきものを、ことにあはれみたまふなり。これにつけてこそ、いよいよ大悲大願はたのもしく、往生は決定と存じさふらへ。」

もの足りなさ

ここまでで、「歎異鈔」の全体を読んだことになるのです。「歎異鈔」のだいじなところは、だいたい前半で終わっているのです。ところで読んでいて、ちょっともの足りないところがあるように思われます。つまり、本願によって往生するけれども、どうも多少未来的な角度が強いですね。もっと、現在的に、本願の劫力が来ていて人を済度出来るということ、本願の力が来て、その力が横に流れて人を救うという角度がちょっとすくないように思うのです。もちろん親鸞は、そういうものをもっていたのですが、「歎異鈔」の言葉は、その点ですこしもの足りないよ

うに思うのです。

第一三章のなかに、

「故聖人のおほせには、卯毛羊毛（うのけひつじのけ）のさきにいるちりばかりもつくるつみの、宿業にあらずといふことなしとしるべしとさふらひき。」

ということがあって、聖人は、それほどまでに強い罪意識をもっていたのです。けっして罪をいいかげんにしているのではなくて、そうではないからこそいよいよ本願のありがたさにすがっていって、それが消えてゆく。消えてすすんでゆく、という喜びを、なんとかして人に伝えてゆこうという角度の言葉が足りないのです。いわゆる縦の関係は強くて、このことは、はっきりと言っています。本願によって念仏させられている事態、これがなんといってもグルントで、いちばん大事なことなのです。これはほんとうに現在ただちに往生の世界であって、これをなんとかして人に伝えてゆこう、ということになるのです。現実に親鸞は、方々流浪し伝道をしました。彼は、ものすごい働きをした人であります。たゞ「歎異鈔」においてその告白が足りない、ということを申し上げているのであります。親鸞において、それが欠けているというのではありません。

『キリスト者の自由』

親鸞のことは、いちおうこのくらいにしまして、次にルターの方へまいりましょう。ルターのことを詳しく言いだしたら、きりがないのでやめますが、このルターの『キリスト者の自由』は、一五二〇年十二月に出版されたものであります。これが出版された直後の、一二月にルターは教皇に破門されております。しかし彼はその破門状を公然と焚いたという有名な事件があります。

その前の一五一七年一〇月三一日には、例の有名な九十五箇条の提題を、ヴィッテンベルク城教会の門扉に掲げて、免罪符に対するところの信仰のあり方を学問的に問うたということがあるわけですね。その第一条だけは、引用しておきましょう。

第一条「我らの主にして師なるイエス・キリストが『汝ら悔改めよ』と言い給うとき、彼は信徒の全生涯が悔改めであるべきを意味し給う。」

これが全提題の根本であることは、今やあきらかであります。この「悔改めよ」というのは、メタノエイテというギリシャ語ですが、これはマタイ伝四章一七節にあります。この「汝ら悔改めよ」をルターはラテン文で transmentamini と書いた。すなわち、これは心をめぐらす、心をかえる、回心することです。「悔改め」ということばは、確かに「悔いて改める」という面もありますが、それよりももっと積極的に、前向きに、心をキリストのほうへ翻す、キリストに向ける、というわけです。目を常に天に向けよ！　全生涯が前向きどころか、神向きであれ！　とい

うことです。

そこで、どういうわけで彼が、この「キリスト者の自由」を書いたか、ということについては詳しくは申しませんが、東京の南江堂から私の編注した《Von der Freiheit eines Christenmenschen》（キリスト者の自由について）という本に、原文と詳しい「註」とがでていますから御覧になってください。

二つの命題

この書物の最初の文句、これは非常に大事な文句であります。すなわち、

Ein Christenmensch ist ein freier Herr über alle Dinge und niemand untertan.

Ein Christenmensch ist ein dienstbarer Knecht aller Dinge und jedermann untertan.

「キリスト者は万物を越える自主の者であって、何人にも隷属しない。

キリスト者は万物に仕える僕であって、何人にも隷属する。」

二律背反みたいな言葉です。

これは、パウロがコリント前書第九章第一九節で、「われ凡ての人に対して自主の者なれど更に多くの人を得んために、自ら凡ての人の奴隷となれり。」といったなかの「自主の者なれど奴隷となれり」というこの二つを、ルターが二つに分けたものなのです。パウロは、ここで「自主

の者なれど」と言っておりますが、実は、もっと神学的にいうと、これは「自主の者なるが故に」なのです。それと、もうひとつ、ロマ書第一三章八節に、「汝等たがひに愛を負ふのほか何をも人に負ふな。人を愛する者は律法を全うするなり。」というパウロの言葉があります。この二つのパウロの句をとおして、ルターはこれを二つの命題にして掲げたのであります。

最初のほうの命題をみてみましょう。

あらゆるものに対して自主自由であって、何人にも依存しないというのです。いいですか、あなたがたひとりびとりが、ですよ。相手が大臣であろうとなんであろうとね。どうしてこういうことが言えるのでしょう。

この「自由」、ルッターの「自由」からして近世の曙光が生じてきた、と言われるくらいなのですが、この「自由」を、こんどは私してしまったわけですね。自由、自主、主体性だとか一所懸命でやっていますね。民主主義の原則だというわけで。しかしながら、今の民主主義というのは、ずいぶん間違った面があるのです。

「自由」の大前提

この「自由」という言葉自身は、いったいどこから来ているのか。なぜ「自主」「自由」でありうるのか、を考えてみましょう。この点については、実は、もうひとつ、第一の命題の大前提

である言葉がなくてはいけないのです。

すなわち、

Ein Christenmensch ist ein Knecht Gottes.

「キリスト者は神の僕である。」

ということがなくてはなりません。「神の僕」、神の僕であるから、ということが、まずなければ、ほんとうは、この「自主」「自由」ということは言えないのです。キリストは、「神の僕」といいます。旧約聖書のイザヤ書第五三章がその源泉です、「エベド・ヤーウェー」即ち「エホバの僕」です。ついでですが、いったいヨーロッパや東洋の文化の底流をなしているキリスト教、仏教を学ばないで行われている教育が間違っている、と言いたいです。そして、教える者が、ほんとうの宗教心をもたなければほんとうの教育はできないのです。私は全国高校長会議でそのことを三度び唱えました。真理のためにはルターと同じ気魄を賜っています。さて、この「神の僕」というのは、イエス・キリストが、

dein Wille geschehe!

汝の聖意を成さしめ給へ！

と言って提身しておられたあの姿であります。

それをイエスが「この私を通して」と言外に言われたと思わねばなりません。

durch mich!

我を貫いて！

という言葉を！　自分を提身、挺身しなくてはだめなのです。どうぞ私をとおしてなして下さい、なのです。身を提するためには、汝の意志を肯定しているのだから、自分の意志を否定するわけです。汝をプラスとし、こっちをマイナスとする。電気と同じなのです。だから火花が散るのです。プラス、マイナスでこれが放電するのです。ものすごく！　キリストは、まさにいつもこの霊的放電を全的に起こしていた人です。いつも「汝の意志を」といって自分をゼロにしていたから、ゼロイコール無限大となった。人でありながら神を一〇〇％に生きていた。一〇〇％に神の中に生き動き在った人です。これが「義人」というのです。神を義としたのです。自分を無としたのです。キリストは、ロマ書第八章第二節、第三節に書いてあるとおり、罪の下に自分を置いて、弱き肉の世界に自分を置いて、私達と同じ弱きのもとにおいて律法（おきて）をまっとうしたのです。神の意志、この神の意志を成文化したのを律法（おきて）という。神の意志は、これをしも本願という。神の本願を、どうぞならしてください！　――本願成就ということを、彼は提身してやったわけなのです。なにもむつかしくはない。だから申し上げたでしょう、東西融合、打って一丸とする、とね。いわゆる比較研究ではないのです。ルターよし、親鸞よし、キリストに在ると両方が呑めるのです。私は、小さな人間ですがこの二人に親しめるのです。情的には親鸞に、意志的

にはルターに親しめるのです。

キリストは神の中にほんとうに入っちゃった。自分を何者ともしていないんです。そうすると無即無限大になった。だから、私は、キリストのことを「無者」と申し上げるのです。無義、無教、無言、無信なんです。キリストを「無信」というのは、これは、ずい分乱暴な言葉ですね。でもキリストは、自分の信仰なんかもってないです。神様の信に貫かれているだけなんです。「我汝を信ず」が即身即神の一如だったのです。あなた方の友情関係でもそうですよ。あいつは俺を一〇〇%に信じている、俺は疑っていたけれども悪かった、といって遂に信じている友に救われるのです。神様の信に気がつくと、こちらは平伏して、「信なき我をあわれみ給え」となり、「無信の信」を賜わるのです。ものすごい信仰になります。キリストの信仰は、この「無信の信」なのであります。念仏の世界でしたら「無念の念」といってもいいのですよ。禅宗の白隠もそんなことを言ったでしょう。法然親鸞は念仏させられていました。キリストは信ぜしめられている。とにかくですね、神に、キリストに圧倒されなきゃあだめですよ。分るの分らないの、なんて世界じゃないんですから。今日は、京都大学の十一月祭とかいって、ここに学生が何人いるのか知らないけれど、せっかくのこの機会、千載一遇のこの瞬間をつかまえなくてはだめですよ。そういうふうに、キリストにあっては、無信の信、無即無限無量者なのです。私みたいな奴のなかに、そういうものが入って来るんだからどうにもならんです。私の信仰なんてものもない。こ

のように、神様に然り、といって己れを否、といっている世界、それがほんとうの世界なのです。ご利益じゃありません、絶対に！　こっちが救われるためでもなんでもないです。神様のほうを立てている。そうすると、この神様の世界がみな入ってきちゃうんです。地獄陰府に行くの天国極楽に行くの、という相対的判断がいらなくなってしまう。たとい地獄に落ちたとしても、落ちた他の人を救ってしまうのです。

だから、こうなってきたら、自分が小さい自由を捨てたら大自由が来た、大自由自在が来た、というわけです。私は、これを霊然というのです。霊的自然です。霊然の事態に入ってしまうのです。ああ、天然はいい、自然はいい、と言っても霊然こそは最高の世界です。天衣無縫の世界なんです。

だから、そのようにキリスト者の本質は、全能の神に同時にキリストに完全に依存している投身的存在である、とでも言ったらいいです。シュライエルマッヘルが、宗教の本質を Schlechthiniges Abhängigkeitsgefühl「絶対依存の感情」と言ったけれども、単なる感情ではありません。ほんとうの依存とは投身です。これが、なんといっても大前提なので、こういう点が大前提にあって、はじめて、この第一の命題がでてくるのです。そのことをルターは述べていませんが、このようにして完全に神の僕となるから、完全に自由となるのです。もし、そうでないなら、über alle Dinge und niemand untertan（すべてのものの上にあり、そして何人にも依存し

ない）などとは言えないのです。

十字架

ところが、私達は、さきほど「歎異鈔」でみたように「罪悪深重、煩悩熾盛の衆生」であるところの罪人でありますから、どうしても、いきなり神様の自由（フライハイト）はもらえないのです。そこに、キリストの「十字架」があるわけです。キリストの「十字架」のこころは、「おまえの罪は全部背負（しょ）ったぞ、無罪放免だ。」ということです。罪は、ほんとうは死に値するものですから神様に審かれたらおしまいなのです。そういう人間の罪をしょったのが贖罪（しょくざい）、あがないでキリストの「十字架」は、贖罪死であります。もちろん、「十字架」は、たゞ贖罪死ばかりではありません。いわゆる「最後の暁餐」のこころも入っています。キリストは、「我が血を飲め、我が肉を食え。」と言った。これは、もちろん霊的な意味で言っているのですよ。ユダヤ人は、それをとりそこなって、「あの人はえらいことを言うな、そんなことができるのか。」なんてばかな問答をやっています。我を食え、我を飲め、キリストの霊的ないのちを受けとれという、そういう気持ちもこの「十字架」のなかにはあるのです。それはキリストの霊血霊肉は永遠の生命だからです。そのことを実証しているのがその背後から来る復活の事実です。ですから十字架と復活は不可離の関係にあります。

この贖罪というグルントがあって、罪から解放された者、キリストによって完全に解放された者は、「わが救い主」「わが主」と呼ぶわけです。あるがままでもって、救われているのですから、すでに往生しているのですから。あいかわらず駄目だけれども駄目な奥に、駄目でない世界が来ているんです。それが絶対的な恵みというものです。「恵み」というと、なにかそのうちに恵まれるだろうと思う。しかしながら、そういうのは恵みではないのです。「恵み」というのは、存在的に救われている、という現実であります。「十字架」という、贖罪の「恵み」にあずかって完全にキリストを「主よ！」と告白できるのです。キリストは、「父よ」と祈れ、と言われたけれども、それよりも私を救ってくださったあなたであるキリストに、「主よ」と言って祈るほうがまづ先です。「父」と「子」とは、勿論重っていて切りはなすことはできないのですから、「父よ」と祈ることができるのです。キリストも、「自分に来ないものに救いはないぞ。」とはっきり言っていらっしゃるのです。

無者キリスト

そこで、「自由」とは、「キリスト、神における自由」、「キリストの中における自由」なのです。今の人達は、この「神、キリストの中における」「絶対者の中における」というのが抜けているのです。それ抜きにして、手ばなしにして「自由」だなんて、とんでもない話です。みんな

「自由だ」と言いながら、ほんとうは不自由なんです。みんな欲に捕われている。我執の奴隷なんです。我欲の奴隷になっているから、世界は混乱また混乱、しょっちゅう問題また問題、いつまでたってもはじまらないのです。

義と愛

神とキリストと我という、この縦の関係、親鸞の言ったように「救いは我ひとりのためにあった」というこの一の関係、貫きの関係、これが立っているとき、これを「平安」というんです。「平安」神宮なんです。我々自身が、ほんとうの平安神宮にならなけりゃいけない。そうしたら、こんどは横の「平和」が来るのです。ルターはそういう言葉の分け方はしていませんが、縦の「平安」が来ると、横の「平和」が来ますよ。それでないのに、いつまでも平和運動だのなんだのとやっているから、悪くはないけれども、他の因子が混在して来てまやかしものとなり、複雑怪奇なことになったりします。まず、ひとりびとりが、縦の関係で、神、キリストに直結する。これが大事なのです。

「あなたはプロテスタントですか。」

「いいえ。」

「カトリックデすか。」

「いいえ。」

「それじゃなんですか。」

「キリスト直結。使徒的信仰でございます。」

と、私ははっきり言いますよ。カトリックでも、プロテスタントでも、無教会でもなんでもないんですよ、この私は、そして、日本仏教の一流のお坊さんたちは、みんな私の友達なんです。私よりは、はるかに偉い友達なんですけどね。そういうわけで、このような直結の事態に「平安」が来て、これをなんとかして人に伝えようとして隣人へと流れていく、これを「平和」という。「運動」なんて言わなくても自然にそうなってゆくのです。だから、この横に流れてゆくのは何か、「愛」という。縦に流れているのは何か、これを「義」というのです。「義人」というのは、神、キリストを立てて、「はい。」「然り。」と言っている罪びとのことです。神、キリストに対して然りと言っているときに、神はこれを義とし給うという。ルター、パウロの、「信仰によって義とされる。」「義人は信仰によって生きる。」というのはそのことなのです。もっとも「義人は信仰によって生きる。」ではなくて、これは「ほんとうに信仰にあって生きる者が義人である。」というのであって、はじめに「義人」というものがあるのではないのです。神、キリストを一〇〇%で、自分を否といって生きているものが義人とされる。「アブラハム、エホバを信ず」とは「アブラハムはエホバにアーメンと言いました。エホバは、これを彼の義(セデク)としました。」

（創世記第一五章第六節）、このアブラハムの信が、パウロの「義人は信仰によって生きる」の歴史的土台でした。

であります から、この罪と死とから解放されて自由（フライ）となった。そうすると、これは、なんとかして人に伝えなきゃいられない、というよろこびの世界なのです。横へ向かって、このよろこびを、いのちを、伝えようという自由なのです。これが、即ち愛という。ですから、この自由は、とりもなおさず、愛への自由なのです。仏教的に言うとこれが還相です。

そういうわけで、このルターの揚げた二つの命題のうちでも、第一の命題が大事なことで、ここに第二の命題をちゃんと含んでいるのです。決して、二律背反でも、矛盾でもなんでもないのです。第一の命題が、ほんとうなら、必ず第二の命題が実現するのです。ほんとうは、第二の命題のほうは、言わなくてもいいのです。「歎異鈔」では、第一命題、すなわち往相のことばかりを言っています。これに対して、ルターは、第一命題、第二命題の両方を言っています。そして、とくに第一のほうを「王者」にたとえて申しており、第二のほうを「祭司」といっています。王者的なものと、とりなすところの祭司的なものと、この二つをキリスト者はもっていなくてはいけない。いや、必ずもつようになるのです。この自由が、ほんとうの自由であるならば。必ず dienstbarer Knecht（奉仕しうる僕）であるのです。ほんとうの僕でなければ、この自由は、ほんものではないのです。キリストは、ほんとうに自由な人です。彼は万人を救済したじゃ

ないですか。その自由が、ほんとうの自由であることがわかるじゃないですか。キリストは、何ものにもとらわれず、神様に完全に僕となったら、万人の僕となったじゃないですか。

聖霊

愛弟子テモテへの手紙の中で「我は罪人のかしらなり」、とパウロが言ったけれども、実は罪人のかしらはキリストがなったのです。そうして、一切を救ってしまった。ものすごい力じゃないですか。彼の十字架の贖罪のいのち、どうしてその力がくるのですか。

約束していたところの聖霊なのです。

ルターは、ここでは余り聖霊のことは言ってないのです。言ってないけれども、この聖霊が非常にだいじです。彼がこの「キリスト者の自由」をドイツ語で書いたあとで、ラテン語で補足して書いているのですが、その見出しのところに「クリスチャンの自由であって、それは聖霊によるところの……」ということが出ているのです。だから、彼はそこのところは、よく分っているのです。もっともルターにも文句を言いたいところがあるのですけれどね。ルターは、この次の第二節のところで、「霊的な人、内なる人、新しき人＝自主、自由」、これに対して「肉的な人、外なる人、古き人＝僕」というふうに、内なる人、外なる人と二つに分けて論じているのですが、これはどうも、いくら考えても神学的な論理に合わないところがあります。矛盾していま

す。どうしてルターが、そういう間違いをしているか、ということは、こういうわけです。内なる人、外なる人、それはパウロも言っているのです。霊的な者、肉的な者――パウロの言っている霊的な者、肉的な者というのはこういうことです。すなわち、生まれつきの自分を中心として生きているということで、どんなに精神的であろうとも、どんなに精神的に高尚なこと、理想主義的、浪漫的なものをも、パウロは肉なる者と言っているのです。いわゆるヒューマニズムだなんていうものも肉なる者であります。この点については、ルターも、エラスムスには、はっきりと言っているのです。ここでは、ちょっとゴタゴタとしているけれどもね。このパウロの言う自己中心の、人本主義的なあり方――この奥には、どうしても神本、神主というものが根底になくてはいけないです。宗教は、決してどうでもいいことじゃないのです。いちばん根底になければならないことなのです。牧師さんに委しとけばいい、というものではないのです。まさに万人の関心事なのです、Religein is the chiefest concern of man.（宗教は人類の最重要な関心事なり。）とミルトンが言っている由。今、ルターがこゝで言おうとしている「肉」というのは、身体（からだ）のことを言っているのです。しかしながら、身体と霊的なものとを分けているところに彼のこの場合における混乱があったのです。実際は、身体はなくてはなりません。人間が存在している限り、肉体のなすことも神中心ならみな霊的であると言うべきでしょう。そのことは勿論ルターもわかっているのですが。神中心に生きているならば、例えば、どんなものを食べても、お茶

を飲んでも、それは霊的なのです。これは神様の身体である、と言って自分が栄養を摂っているならば霊的な生き方なのです。だから、そういう意味において、身体をけなすようなことをしてはいけないのです。大事なことなのですよ、身体は。ほんとうに霊的な絶対的な世界に関わることを相対界において実現するためには、いわゆる心も身も魂もみな必要なのです。キリストは霊界から受肉しましたね。ナザレのイエスに現われた。このナザレのイエスにおいて、「我を見しものは神を見しなり。」と、相対的な存在において絶対的なものが現われているのがほんものなのです。ですから、キリストにおいて、神様の事態を見ないものは、いつまでたっても神は分らないのです。絶対界をいくら瞑想したってだめです。

神の言葉

旧約で預言者を通し、新約でキリストを通し、使徒達を通して与えられているところの神の言葉（Gottes Wort）、これをルターは非常に強調しました。だけどプロテスタントは、こんどは「言葉」、「言葉」、と言い出して、ルターの強調した言葉には、実は「霊」がかかっていることを忘れています。これは Geist = Wort 霊言と言ってもいいのです。このことに気づいて論文を書いたデンマークの神学者プレンターの《SPIRTUS CREATOR》という本がありますが、ルター神学研究にとって不可欠の名著と思います（日本訳『ルターの聖霊論』岸千年訳）。いった

いルターにおいて定冠詞をつけて das Wort と言ったら、これはキリストのことなのです。das Wort Gottes とは「神の言葉」です。「我は言葉なり」、というわけです。「太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。」ヨハネ伝第一章、劈頭の句は勿論キリストです。あれと同じようにルターにおいては、das Wort, die Worte（神から啓示されたもろもろの言葉）は、キリストが言ったように「霊（Geist）なり、命（Leben）なり。」であって、その霊なり、命なりという中心であるところの主体は、すなわちキリストである、との認識をルターはもっているのです。ですからキリストの発している言葉は、みな聖霊の言、（Geistes Wort, Geist = Wort）なのです。そういうわけで、ルターにとっては、言葉はものすごい力をもっています。決して「儀文は殺し、霊は生かす」というあの「儀文」的な言葉ではないのです。活言であるのです。我々を活かす言なのです。

「彼、キリストの言葉には、神がそこにさしはさまっていて、神全体がそこにある。」

神、キリストの言葉には、神全体がさしはさまっている。そういったことをルターは言っているのです。

ですから、この書の第七節のところに書いてありますが、

「すべてのキリスト者の当然なすべきただ一つの業、訓練は、彼らが神の言葉及びキリストを、しっかり自分のうちで形成するということ。そして、そのような信仰を常に訓練し強め

なくてはいけない。」

そのくらい、彼は神の言葉ということを言っているのです。だから、彼にあっては「聖書が一切」なのです。「聖書のみ（sola scriptum）」なのです。聖書のみ、ということは、神の活言としての聖書が絶対の権威をもっていて、教皇が言ったり、ローマ、カトリックの制度なり、信仰箇条などというものに権威があるのではない、というのです。プロテスタントといったってそうなのです。そのルターの精神がプロテスタントでまた枯渇してきた。使徒達は、キリストの弟子達は、聖霊で立ち上がったのですよ。聖霊のバプテスマを受けないで、何がキリスト者かとパウロも証言しているのです。彼はローマ書第八章第九節で、「キリストの御霊なき者はキリストに属するものにあらず」と。御霊を上から受けとらなければ、「人あらたに生る」と言うわけにはいかないことはキリストがヨハネ伝第三章で語っておられるわけです。

信仰は神業（かみわざ）

ところで、ちょっと横道になりますけれど、ルターは信仰とは何であるか、ということを「ローマ書への序言」（一五二二年）で言っていますからご紹介しておきましょう。

彼ははっきりと言っています。

「ほんとうの信仰とは、我々の中における神の業（わざ）である。」

神の業であって、自分が信じて信仰しているなんて、そんなものじゃありませんよ、と言うのです。自分の信仰に絶してくださいよ。すべて「私（わたくし）」することは、どんないいものでもだめなのです。だから、キリストは、「なぜ私のことをいいというか。」と言った。あの善人、神の子が神様のほかにいいものはない、とはっきり言っています。私は何も教えない、何も言えない、と言っているんです。神様が言へ、ということを言っているだけだ。なんにもできない。みな神様がさせているだけだ。このように、この「絶信の信」というこの信、ほんとうの信仰は、我々の中の神の業なのです。

そこで信仰とは何ぞやの言をつづけて、

「我々をかえて、あたらしくキリストから生まれさせて、古き生来の自分を殺してしまって、我々を全く別の人間に、心において、心情において、おもいにおいて、あらゆる力において、全く別の人間とする。そして聖霊をもたらしてくれるところのものである。」

ですから、ほんとうの信には聖霊がやってくるのです。十字架のキリストに自分がすっかり十字架されて、パウロの言ったように「ああ我もはや生くるにあらず、キリストわがうちにありて生き給うなり。」と言うことになるのです。「キリストわがうちに生き給う」とは、どういうことか。キリストの御霊が来て生きている、ということです。キリストは天界にいるのだから、そのキリストを甲がとってしまった、それじゃ乙はどうなるんだ、なんてそんなものではありませ

ん。キリストは一〇〇%に誰にでもやってくるのです。満月は、一〇〇%葉末の露に光もろともに宿ります。それと同じです。そんなように、「心において、精神において、おもいにおいて、あらゆる力において」ひっくりかえってしまって、そこに聖霊をくだしてくださる。――これがほんとうの信であり、神の業である、というのです。こっちが信じましたなんて力んだり、得意になっている世界ではありません。自分の信仰なんてのはあてにならないですよ。まだ信仰を、えらく威勢よくやっている青年なんて私はあてにしないのです。信仰なんかありません、と言って、のさっとしてて、ところがどっこいというのがあてになるのです。

そこで、次に、

「ああ信仰とはなんと生き生きとした、活動的にして行為的にして力強いことがらではありませんか！」

とルターは、感嘆しているのです。

「なぜなら、間断なく善きことをしないではいられない、というようなことになりますよ。」（別項「ロマ書の序言」参照）

とね。

すなわち信が真ならば、当然そこに行が発してくるのです。それでもなお、人間は駄目だからそこにズレがある。あっても心配はいらない。来ているものがほんものなら、こっちがどんなに

ずれていても、そこには本質的なものが動いているぞ、というのです。造り花は、どんなに美しくても造り花でしかないけれども、ほんとうの花は、どんなに虫に喰われていてもほんとうの花である、というのと同じです。この信、この信が、即、行であると言っているのです。実はいちばんはげしい行は、信ずるということである。信ぜしめられている、と言って自分を投げかけているところの姿が、いちばんはげしい世界。これは、いちばん静かだけれども、このものすごい静かさは動をうちにもっている静かさです。静動一如の姿が、この信の世界です。すなわち、それは発しては動となり、そして動の奥には深い静けさがある。だから、それは嵐のようなものです。嵐の目は静かだ。無風である。けれども嵐の目のまわりは、ものすごい回転をもっている。あの嵐の目と嵐のような関係が、信と行との関係なのです。無風体、無信なのです。そういうのが、ルターが、はっきりと信仰をつかまえている事態なのです。ですから、ルターの言うところの、Glauben（信）もGottes Wort（神の言）も、信は信ぜしめられている信で、神の言葉は力をもっているのです。ルターは、それほど、はっきりとは言ってませんよ。けれども彼の気持ちを、ほんとうに酌んで、私はものを言っているのです。プロテスタントは信仰信仰　Glauben, Geauben, というものだから、凝り固ったような信仰になってしまって困りますね。またみ言、み言（Gottes Wort）というから、この言葉はどういう意味だ、とかいって解釈の詮索にあたまをなやましている。言葉は謂わば暗号ですから、つかまねばダメなのです。

ひとつにする（vereinigen）

次にまいります。大事なところだけを読んでゆきましょう。

「我々はいかにほんとうの善に対して無力であるかを知ると、平伏しになる。そうすると、キリストの贖いの業が、どんなにありがたいことがわかる。」

これは、「歎異鈔」で言えば、恵みと如来の世界も同じことです。

第一〇節。これはだいじなところです。

「いかなるよきわざも、神の言葉に信仰ほどに結びついているものはない。」

信仰は、いちばん神の言葉に近い、いな密着しているものです。だから、神の言葉（ゴッテスヴォルト）と信仰（グラウベン）とは離すことができない。神の言葉、と言ったら、もう信ずるか、信じないか、のどっちかで、分るか、分らないか、そういう問題じゃないぞ、と言うわけです。

「言葉と信仰は、魂のなかで支配するものである。」

だから言葉と信仰とは絶対に離すことができない。

「神の言葉が言葉であるように、そのように神の言葉によって、たましいは神の言葉となる。」

すなわち、言葉（ヴォルト）とたましい（ゼーレ）はひとつになってしまうのです。

「それは、ちょうど鉄が火のように燃えて赤くなるようにたましいが神の言葉といっしょになって神の言葉のようになる。」

神の言葉をほんとうにくらってなければそうならないのです。ですから私は、意味じゃありませんよ、解釈なんかじゃありませんよ、単なる神学でもありませんよ、と言うのです。聖書を読めば力がくるのです。おなかがすいて何も食べるものがなかったら聖書を読んでください。力が来ますから。あとは水を飲んでりゃいい。ほんとうですよ。「人の生くるはパンのみによるにあらず、神の口により出るすべての言葉による。」とキリストも言ったではありませんか。神の言葉こそは霊であり、命であるという受け方をしなかったらはじまらないのです。

第一二節を読んでみましょう。

「信仰というものは、それだけのものを与えてくれるばかりではなくて、魂が神の言葉と同じようになる。それは、あらゆる恵みに満ち自由になり、また祝福されるばかりでなくて、たましいとキリストとをひとつにしてしまう（vereinigen）。それは花嫁が花婿とひとつになるように、その続婚の結果としてパウロが言ったように、キリストとたましいがひとつの体になる、ということが生ずる」

若い人には非常にいい言葉です。よく覚えておいてください。ドイツ語の vereinigen とは、ひとつにする、ということです。だから、わたし達はキリストとひとつの体になる。わがうちな

るキリストを見よ、このいのちをなんとするか、というのです。それは、ちょうど花嫁と花婿とがひとつの体になってしまうのと同じように。ついでですが、そういう結婚でない結婚は、しちやだめです。人格的にひとつになるような結婚をしなくてはいけません。ちなみに親鸞は女犯（「妻を娶る」）ということをした。けれども親鸞は坊さんでも、ちゃんと妻を娶って立派にゆこうということでやったのです。とにかく、彼は、いわゆる肉情的なものを、ただ排斥することが清い、という人ではなかったということです。ルターは、使いに命じて、修道院から夜陰に乗じて修道尼一二人を逃げさせた。ルターは外で待っていたのですが、そのなかの一人がルターと結婚することになったのです。まさか、そのなかに自分の妻になるひとがいようとは、ルターは思わなかったのですが。そういうことで、人間の自然性を神本位に生きることは、みんな祝福されるので、人間本位だったらだめなのです。神本位のあり方が霊、人間本位の在り方が肉で、この肉は肉情ではありません。ルターも親鸞も人間の自然性を否定した禁欲を清いとする考え方には反対したわけです。

いのり

そのように、キリストとたましいとがひとつになる。それでは、どうしてひとつになるのか。ここには双方に共通なものがなければなりません。それが、すなわち聖霊（Heiliger Geist）な

のです。もう、これで分ったような顔をしてもだめですよ。聖霊が共通項であるということが構造的に分ってどうしますか。これがいったいどうしてそうなるのか、ということは、Gebet（ゲベート）祈りなのです。祈らなければ聖霊は来ません。この「祈らなければ」という言い方も、まだほんとうではないのです。実は、「祈らせられる」んです。キリストに祈らせられるんです。聖霊のとりなしによって祈らせられるんです。祈らざるを得なくなるんです。「ざるを得なくなる」ということは、なにかはたらいているからです。この「ざるを得ない」ということが大事なのです。今は、聞かざるを得ない、今は語らざるを得ない、という世界。そういう「ざるを得ない」という祈りによって、たましい（Seele）に聖霊（Heiliger Geist）がやって来る。キリストのGeistとSeeleとがひとつになるのです。ここのところは、さきほどの親鸞の「念仏は念仏にまさるところのわざはない。」ということ、念仏させられる、ということに似通っております。ルターは、「キリスト者の自由」においては、この祈りのことは言ってないのです。だから、なぜそれをはっきり言ってくれないか、と思うのです。私には、もうそこが、ちゃんと見えてくるのです。こういうすばらしいことを言っているのですが、いかにしてそこにくるか、という問題にもうひとつ触れなくちゃいけないです。

そうして御霊が入ってくれば、こんどは、ほんとうの祈りになります。そうすると、もう無色透明の世界、——すべてほんとうのものが、みんな見えてくる。ですから、私は、仏教であろう

と、フイフイ教であろうと、孔子であろうと、孟子であろうと、なんでも読みますよ。そこにある真理がちゃんと見えてきて、限界が見えてきましてね。それらをみんな包摂してしまうんです。ものすごい広い世界なのです。決して人を切らないのです。いつわりのものはみな捨ててしまうが、まことのあるものはみな入ってくる。そして曲ったものは直くするのです。だから、私ではないのですよ。キリストの霊が、最高のキリストの霊が、これを一切をなすのです。聖霊なくしてなぜほんとうのことがありうるか。信仰、信仰なんたってだめですよ。ついでに申しときますが、「信念」という言葉がありますね。たとえば、あの人は信念がある、というような、いわゆる「信念」という概念、それは決して感心しません。あくまで「信仰」でなくてはだめですが、「信念」という言葉のほんとうの意味を探ると、これはルターの「信」と親鸞の「念」とがひとつになっている言葉ですよね。してみると、ほんとうの「信念」という言葉は、現在の用法と違って、もっと深い意味をもっていることがわかりますね。もっとも、こういう意味での使い方はできませんが。

絶対界に迫られて

さて、「本願」「霊願」によるところの、御霊の祈りによるところの、キリストの御意によるところの、というとき、これは申すまでもなく本願がはたらいている事態なのであります。聖意

体現、と申します。聖なる意思（本願）を体でもって現ずる、ということです。聖意の世界は絶対界、体現の世界は相対界でありまして、絶対界が相対界においてあらわれるときに、これがほんとうの実存となるのです。そうでないときは、どんなにどうのこうのといったところで、それは観念でしかありません。具体的な体でもって動いていかなかったら、どんなに信仰が立派であっても、それは観念の信仰です。身をもってあかしとするのでなければ、信仰はほんものでないのです。身証は、あかしして現ずることと、あかしして言葉をだすことです。こう語っている私の胸のうちに異言があってやりきれないです。絶対界がくいこんできますからね。みなさん、もしそうなったら、何がどうなったっていいですよ。

「命もいらず、名もいらず、金もいらず。」

とか、あの西郷南洲が天を相手にして言ったでしょう。それは「始末のわるい人間」と言いますが、「始末のわるい人間」でないと、ほんとうのことはできないのですよ。私は西郷南洲が大好きなんです。彼の書いたもののなかに、「自己を愛することは最大の悪である。」というのがあります。彼もすこし聖書を読んだのではないだろうか、あんまり偉すぎる、と思ってしまうくらいです。これは冗談ですが、西郷さんは、ほんとに偉い人です。明治初年のあのころの佐久間象山、吉田松陰、渡辺崋山、高野長英といったあゝした人達は、みんな真理のために命を捨てたんでしょう。しかし、真理は生きています。あゝいうたましいが、ほんとに神の国を築いているん

です。みんな棄石となったものです。

「棄てられたる石は隅のおや石となれり」と聖書にもありますね。

もう私は、この日本を見ていると、この日本には希望はありませんですよ、天来の希望をいたゞかない限り。もう仕方ないです。私は棄石でいくより仕方がないです。だけれど、「たゞこれ親鸞ひとりのためであった」という受け方をする人は、私の気持ち継いでくださるでありましょう。

力強い流れ

そこで第二七節を読みます。

「かくキリスト者は、かしらのキリストのように、彼の信仰において、自己を腹いっぱいに満足せしめねばならぬ。いつも彼の信仰を増さねばならぬ。その信仰は、彼の生命であり、敬虔であり、また祝福であって、キリスト及び神が有し給うものを彼に与えるものだ。」

これは、我国におけるルター神学の権威である故佐藤繁彦先生の訳なのですが、この「ねばならぬ」というルターの言い方が気に入りません。むしろ、「そうなるぞ！」と言ってもらいたいところです。

「また、聖パウロは、ガラテア書第二章でもって『今、我肉体にありて生くるは神の子キリ

ストを信ずるによりて生くるなり。』と記している。

そして彼は、いまや全く自由ではあるが、自己の隣人を助けるため、神がキリストをとおして彼をとり扱われたように、隣人を遇するため、彼は喜んで自己を僕としなければならぬ。」

ここでも、また「ならぬ。」です。なぜ「ならぬ。」と言うか。「僕とならざるを得ない。」と言ってほしいです。御霊が上から来てキリストに救われたら、御霊における愛の力は隣人を救わざるを得ない。助けざるを得ないのであります。「……ねばならぬ。」と言ったら、それは掟になってしまう。そんなこと言ったらほんものじゃないのです。縦の関係がほんものなら、それが必ず横に流れるのです。そうでなければ、力も業もでてきませんです。ですから「……ねばならぬ。」と訳されちゃ困るのです。「……できるぞ！」と訳してもらいたいです。ほんとうにそうなのですから。そうでないといつわりなのですから。私という人間は、そういうところにこなければ承知しないのです。

「しかもその奉仕は無報酬ですべきである。神に気に入ること以外なにもその奉仕の中に求められてはならぬ。」

奉仕は無報酬ですべきである。神の気に入ればなんにもいりませんよ、というわけです。この点、ルターには、もうひとつもっと肩の抜けたような言い方をしてもらいたかったと思います。

そういうわけで縦から横に動いているのです。はっきり！　その点では、「歎異鈔」よりは、やはり福音の世界は力強いものがあります。それは聖霊がする力だ、ということをもういちど言ってもらいたかったです。聖霊というと、ふつうのクリスチャンは、なにか異った世界だとおもって、ちょっとおあずけにしておこうとするのですが、そうではなくて、聖霊の事態は、実存の面に力強く展開してくる世界なのです。ですから、この御霊の愛にしても、もちろん私達人間をとおして動くのです。私達の知情意をも、私達の体をも、全部をとおして働くのです。決して観念されている世界ではないのです。

第三〇節の最後のところ、ここは有名なところです。

「これまで述べてきたことから、次の結論が生ずる。

キリスト者は自分自身に生きないで愛によってキリストと隣人に生きる、ということである。信仰によってキリストに生き、愛によって隣人に生きるということだ。信仰によって、キリスト者は、みずからを超えて神のうちに入る。」

「神のうちに入る。」これはけっこうです。私は、あたらしいドイツ語をつくってやろう、と思うのです。ein-glauben という言葉です。信仰の世界を神学的に言ってもこの言葉がほしいのです。「信入する」――信じ入るのです。ギリシャ語の信ずるには、そういう表現法があるのです。信じ入らなければ！　神、キリストの中へ！　信じ入らしめられるのです。むこうから吸引力が

はたらいて磁石みたいですからね。太陽の引力みたいに引っぱりまわされますからね。それでドイツ語にない、この einglauben という言葉を言いたくなるのです。信入する、そうすると、聖霊が侵入してくるのです。

最後の三十節全文は、

「上述のすべてから次の結論となる。即ちキリスト者に自己自身の中に生きるのではなく、キリストの中で生き、隣人に対しては愛によって生きる。信仰によって彼におのれを超えて神の中に往き神から彼はまた愛によって自分の許に来る。それでもいつも神と神の愛の中に止まっている。それはキリストが言われるとおりだ。即ち、ヨハネ伝第一章五十一節に、『天ひらけて、人の子のうへに神の使たちの昇り降りするを汝ら見るべし。』と。見よ、それがキリスト者の真の霊的な自由であって、すべての罪や律法や掟より心を自由にし、天が地を超えているように、すべての自由にまさる自由であることを。この自由を正しく解し、また保つことを神が可能にし給はんことを。アーメン。」

こう言って、この論文全体が結んであるのであります。

荷いあげる自由

Freiheit im Geist——「御霊のあるところに自由あり。」とパウロは言いました。この「自由」

は、御霊を抜きにしてはないのです。聖霊なしの自由なんてものはないのです。この「自由」は、ほんとうに人を荷いあげるところの力をもった自由なのです。そして、人を愛する、とは、人を荷いあげることであります。人を助けあげること、だから敵をも荷いあげるのがほんとうの愛なのです。「汝の敵を愛せよ。」というのは、感情的にはなかなか愛せないですよ。けれども敵を荷いあげてやるのです。倒すのではない、倒れたときに起してやる。殺すんじゃない、起こして介抱してやる。これはキリストを受けとれば、私達の第二の天性となるのです。天性！　私は、この「天」という字が好きです。好きですから、この「天」という字をつかって、いろいろ号もつくっています。天鏡、天韻、天震、天晨。

この「キリスト者の自由」は、そういう意味において、ほんとうにキリストの僕となるところに、はじめて即ちおのれの自由に死んではじめて元来の自由人となるのであって、即ちキリストに在る僕が自由自主なる人で、人々の僕となる。「我は国家第一の僕なり」と、あのフリードリッヒ大王、自主なる王者が自主なる僕たることを自覚していました。このような人が自由な奉仕者で人を助け担う愛の人というわけです。

〔付記〕

小池先生の福音には――その御講筵にいちどでも接した方なら分っていただけると思うが――まことの生の息吹きがかよっている。そこには、ほんとうの「自由」があるのである。〔中略〕小池先生の福音の響きには、生命そのもののようなしなやかさとうねりがある。ほんとうに有機的な生命の流れがある。ここにおいては、もう地上を絶したところの、あの「聖なるもの」と「有機的なるもの」との希有な合一が実現されているのである。〔中略〕読者は、文字ではなく、その背後にある根源現象（Urphänomenon）あるいは根源現実（Urwirklichkait）をおしはかり、その奇跡の前に平伏し、ただ堂々として鳴り響く根源の言葉（Urworte）に耳をかたむけていただきたいと思う。先生のうちなる聖霊のうめきに圧倒され、突き抜けた、やすらかなよろこびの世界に突入し、まことの力ある平安に浴していただきたいと思う。そしてそこから、また静かにしておのずからなる熱き祈りが立ちのぼることを願うものである。本論説は、京大法学部長奥田昌道先生の当日のメモ、広瀬末子姉の録音筆写をも土台として実現したものである。おふたりに心からなる感謝を捧げたい。

小池先生をとおして働かれた主イエス・キリストを讃美するとともに、最後に、かの福音的天才ヨーハン・セバスチャン・バッハがしたように、この「楽譜」のおわりにも、そっと一語を添えておこう。

Soli Deo Gloria

栄光(さかえ)はただ神のみに！

（土屋文昭）

二　ルターとシラー

自由をめぐりて

まえがき

人間は「自由」を呼吸し、自然は「必然」を生命としている。ドイツは二人の「自由」の使徒を生んだ。改革者ルターと詩人シラーである。この二巨星は奇しくも生まれた月日十一月十日を共にしている。

ルターは近世以降の独乙精神史に「自由」の光を投じた。彼はその光源を旧新約聖書に発見した。それゆえ、この論説においてわれわれは聖書における「自由」にまづ触れなければならな

い。そしてその光質光芒が彼を通してどのように現われ展開しているかを見よう。

シラーは、その「群盗」から「テル」に至るまで、ある一貫したひびきを以て貫いている。それは「自由」の基調である。人格の尊厳への自覚、芸術的情感における美、人間の全的形成への悲願、そのような内実に関わる「自由」が、彼の美学論、思想詩、訳詩、戯曲に種々の花を咲かせている。

ルターの宗教的「自由」とシラーの美的「自由」は、どのような関連、アナロギア、また展開性をもっているか、「自然」とはどんな関係にあるだろうか。素描的ながらたずねてみたいと思う。

一　旧約聖書における「自由」

旧約における「自由」はどのような内実をもつものであったか。それはまず民族的解放を意味するものであった。第三父祖ヤコブ（即ちイスラエルの子ヨセフ）の族がエジプトのゴセンの地に、エジプトの第十七王朝の治下に隷属の民として生活することになって三百余年、学問的な計算によると紀前一二九〇～一二六〇の間に、モーセによって「出エジプト」といわれる民族的大移動

がなされた。

この壮挙はモーセに顕現した神ヤハウエー（Jahweh）の啓示に由った。出エジプト記（2. Mose）第三章によれば、ホレブの山でモーセに霊火現象を伴って自現した神が、モーセに次の如く語り出でた。

「我は汝の父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神なり、我れまことにエジプトにおるわが民の苦難を視、また彼らがその駆使者ゆえをもて叫ぶところの声を聞けり。我彼らの憂苦を知るなり。われ降りて彼らをエジプト人の手より救い出だし、之を彼の地より導きのぼりて善き広き地、乳と蜜との流れる地に至らしめんとす。……今イスラエルの子孫の号叫われに達る。我またエジプト人が彼らを苦しむるその暴虐を見たり」（出エジプト三・六―九）と神はモーセに告げ、彼にその救出の大任を負わせた。モーセはその任に非ずとて辞退したが、神は「我必ず汝と共にあるべし、これが汝を遣わす証拠なり」（出三・一―二）と確言したので、モーセは神の力強い共在を信じて、この大任に当たる決意をした。

即ちイスラエル民族が、エジプトの奴隷生活から解放されること、エジプトの桎梏から自由になること、そういう民族の死活に関わる困窮から、**苦難からの「解放」**ということに「自由」の内実があった。しからばこの自由はどのようにして与えられたか。「自由」という事態の内実を見る必要がある。

ヤハウエーの啓示の言がこう宣している。「イスラエルの子孫に言え、我はヤハウエーなり。我汝らをエジプト人の重荷の下より引き出だし、その使役をまぬがれしめ、また腕をのべ大なる罰をほどこして汝らを贖わん」（出六・六）。この「贖う」（erlösen）という語が正に「自由にする」「解放する」（befreien）の本質的な内実を表わす語なのである「汝はその贖いし民を恩恵をもて導き、汝の力をもて彼らを汝の聖き居所に引きたまう」（出一五・一三）。イスラエル民族がエジプトから贖い出された方途は出エジプト記第十二章に記されてある。

「此月（アビブ）の十日に家の父たる者おのおの小羊を取るべし。……汝らの小羊は傷なき当才の牡なるべし。……此月の十四日まで之を守りおき、イスラエルの会衆みな薄暮に之を屠り、その血をとりてその之を食う家の門口の両側の柱と鴨居に塗るべし。……この夜われエジプトの国を巡りて人と家畜とを論わずエジプトの国の中の長子たる者を尽く撃ち殺し、またエジプトの諸々の神に罰をこうむらせん、我はヤハウエーなり。その血汝らが居るところの家にありて汝らのために記号とならん、我血を見る時汝らを過越すべし」（出一二・三―一三）。即ち、イスラエル民族に対するエジプトの迫害に対して、神の罰がエジプトにのぞむことの告知である。具体的にはエジプト人の長子殺害という血なまぐさい罰である。それはかつてイスラエルの男子を殺害したエジプト王の行為（出一・一六、二二）に対する報復の意に発したもので、ユダヤ人の過越祭（すぎこしのまつり、（Passahfest）はこれに由来するものである。

すなわち、イスラエル民族は戸毎にその門口の両側の柱と鴨居に塗られた小羊の血のゆえに、神はイスラエル人の門前を過ぎ越して彼らを救った。これが血によるところの「あがない」の事態である。即ち、「解放」「自由」と申しても、それは**報復観念**（Vergeltungsgedanke）を土台とした「あがない」であることを見損なってはならないのである。悪も罪も、罰を当然の結果として受けなければならない。それはイスラエル人の道徳的秩序であり、法則である。あの有名な：So soll er lassen um Seele, Auge um Auge, Zahn um Zahn, Hand um Hand, Fuß, Brand um Brand, Wunde um Wunde, Beule um Beule“（2. Mose 21, 23-25）〔ドイツ語聖書の引用は原則として Luther-Bibel による〕「生命にて生命を、目にて目を、歯にて歯を、手にて手を、足にて足を、烙にて烙を、傷にて傷を、打傷にて打傷を償うべし」（出二一・二三―二五）という律法がある所以である。これを復讐律（Lex Talionis）という

そして神のこの「あがない」の行為がどのような心根においてなされたかを語る句をここに引用しておく必要があろう、「ただエホバ汝らを愛するに因り、また汝らの先祖等に誓ひし誓を保たんとするに因りてエホバ強き手をもて汝らを導きいだし汝らを其の奴隷たりし家よりエジプトの王パロの手より贖ひいだしたまへるなり」（申命記七・八）即ち、出エジプトの「あがない」の行為は、神のイスラエルへの愛と父祖たちへの誓約履行という心根においてなされたということ、そして「あがない」には上述の如く因果応報的な神罰の裏付けがあり、その実行には神の力

が確実に現われていた、ということである。

このような「あがない」(erlösen) をヘブライ語で Gāal (ガーアル) と言い、erlösen, auslösen; los machen, was gebunden, gefesselt war; retten, befreien の意である。「贖う者」(gōēl) には、「仇を打つ者」(民数紀略三五・一九) の意もあるわけである。苦難をどん底まで味わったヨブの告白、「われ知る、我を贖う者は活く、後の日に彼かなざず地の上に立たん」(ヨブ一九・二五) は最も有名な句の一つである。

また pādāh (パーダー) という語もある。abscheiden, ausscheiden; loskaufen (aus der Knechtshaft); auslösen, befreien, erretten (分離する、除去する、身のしろ金で買いもどす (奴隷の身分から)、解き放つ、自由にする、救い出す) の意である。「汝記憶すべし、汝はエジプトの国に奴隷たりしが、汝の神ヤハウエー汝を贖い出だしたまえり」(申命記一五・一五)、の如き句は明白に出エジプトの本義を語るものである。

イスラエルの歴史においてもう一度大きな民族解放の出来ごとがあった。北王国イスラエル (九三二―七二一) が紀前七二一年にアッシリアのサルゴン二世に亡ぼされ、やがて南王国ユダ (九三二―五八六) がバビロニア王ネブカドネザル (Nebukadnezar) に亡ぼされて、南王国の首都エルサレムの住民の主要な部分がバビロン (Babel) へ捕われの身として伴われてゆかれた。これをバビロン捕囚 (Die babylonische Gefangenschaft) という。その後約半世紀にして紀前五三九

年にペルシヤ王キロス（König Kyrus, 539-528）がバビロニアを滅ぼした。キロス王は五三六年、イスラエルの民をエルサレムに帰還させた。バビロン捕囚正に五〇年、あたかもヨベルの年を迎える如くイスラエルの民は、出バビロニアというべき第二の解放を与えられた。

このバビロン捕囚は、イスラエル民族（南北両王国の民）のヤハウエー神への不信仰とそれから結果した政治と社会の紊乱に対するヤハウエー神の神罰であることは、予言者たちが入りかわり立ちかわり、且つは警告し、且つは審判し、或は怒り、或は嘆いた消息によって明らかである。即ちアッシリアもバビロニアもヤハウエー神の審判の手となって、或はイスラエル王国の首都サマリヤを、或はユダ王国の首都エルサレムを撃ったのであった。両王国はかく神に撃ちのめされ、敵に蹂躙されて、惨澹たるありさまと化したのではあったが、神はいたずらに罰しているのではない。厳かな審判（さばき）の神は同時に深い免罪（ゆるし）の神である。神の怒りの奥には神の憐みが秘められてあった。義の神は同時に愛の神であった。ペルシヤ王キロスによる解放の奥に神の救贖「（あがない）の消息を洞察したのが Der große Unbekannte（偉大なる知られざる人）といわれる予言者第二イザヤ（イザヤ書四〇・五五）である。

「汝らの神いひ給はく、慰めよ汝らわが民をなぐさめよ、ねんごろにエルサレムに語り、これに呼ばはり告げよ、その服役の期すでに終り、その咎すでに赦されたり、そのもろもろの罪によりてエホバの手より受けしところは倍したりと」（イザヤ四〇・一、二）即ち第二イザヤは神の言を受

けて、なぐさめのおとずれを告げ知らせたのである。不信の罪に対する神罰の服役（バビロン捕囚）の期が満ち、罪の代償たる苦難、苦服は倍ほどに充分払ったから、今や神のゆるしは臨んだ。解放、帰還の期は来た。「汝らなぐさめよ、わが民をなぐさめよ！」と神は宣う、と予言者は告げている。

この予言者を通して語る神の救贖の言葉は深い。

„Fürchte dich nicht, denn ich habe dich erlöst; ich habe dich bei deinem Namen gerufen; du bist mein!“（Jesaja 43, 1）。「おそるるなかれ我れ汝を贖へり、我れ汝の名を呼べり、汝はわが有なり」（イザヤ四三・一）

„Ich vertilge deine Missetaten wie eine Wolke und deine Sünden wie den Nebel. Kehre dich zu mir; denn ich erlöse dich.“（Jesaja 44, 22）。「我れ汝のとがを雲の如くに消し汝の罪を霧の如くに散らせり、汝われに帰れ、我れ汝を贖いたればなり」（イザヤ四四・二二）

〔Luther がここで Ich verilge と現在形に訳しているのは、Ich habe……vertilgt とすべきであり、denn ich erlöse dich. も denn ich habe dich erlöst. と訳すべきである。〕

「汝イスラエルの罪過を雲散霧消させてしまった。汝を既に贖ってしまった（gealtika）！　だから安心して我に帰れよ！」というのが、神の救贖の実力に裏づけられた帰還への勧告誘致なのである。エルサレムへの帰還は、神のふところへの立ち還りを意味する愛の抱擁である。放蕩息子

の帰還をよろこぶ父の心を描いたキリストの譬話（ルカ福音書第十五章参照）と同軌である。

かつては、イスラエルが蒙ったエジプトにおける苦役迫害からの解放――それはエジプト側の血の代償によって、この度はイスラエル自らの不信の罪が刈りとった罰としての国の滅亡とバビロン捕囚からの解放――それはイスラエル自身の服役の期が満ちたことによって。

約言すれば、**出エジプト**は苦難からの解放、**出バビロニア**は、罪過からの釈放！　この民族的歴史的なこの解放を Erlösung, Befreiung という。即ち、旧約においては、自由を与えることは、**くるしみからの「あがない」**、**罪からの「あがない」**で、これらのあがないの事実が自由の内実であった。その他社会的事象における「あがない」の事態が種々あることは、ここには省略するが、帰するところは苦役、苦難、罪過からの「あがない」であることに変わりはない。そこに何らかの代償が問われている。そしてこの「あがない」の代償の事態を、とある罪なき「神の僕」（Ebed Jahweh）が、罪ある者たちの代贖をなして救済する事態として語っているのが、有名なイザヤ書第五三章を頂点とする："Die Lieder des Knechtes Gottes"**「神の僕の歌」**といわれる一連の詩（イザヤ四二・一―七、四九・一―七、五〇・四―一一、五二・一三―五三・一二）である。これらにおいて謳われている内実はあだかも、イエスその人を知るものの如き文字で、予言者自らが深い祈りと体験から告知されている天来の言である。その二、三をここに掲げてみよう。「わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人を見よ、我れわが霊を彼に与へたり」（イザヤ四二・一）

「まことに彼は我らの病患を負ひわれらの悲しみを担へり、然るにわれら思へらく彼は責められ神に打たれ苦しめらるることなりと彼はわれらのとがのために傷つけられ、われらの不義のために砕かれ、自ら懲罰を受けてわれらに平安を与ふ、そのうたれし痍によりてわれらは癒されたり」（イザヤ五三・四、五）

この「神の僕 Ebed Jahweh」は、何はさて措き、「神霊を受けた人」Begeisterter である。それを祭儀的表現でいうならば「油そそがれれたる者」Gesalbter で、そのヘブライ語が、すなわち Mäschiach（メシア）であり、ギリシヤ語が Christos（キリスト）である。神はこのような受霊者を「心から歓ぶ」といっている。イエスがヨルダンで受洗したときに、聖霊がのぞんだが、そのとき同様な神の言が天上から聞こえてきた。「汝はわが愛しむ子、我汝を歓ぶ」と。イエスは特別な意味で der Gesalbte! 即ち固有名詞的なメシア、キリストとなったのであった。

この「神の僕」は他人の病患を負い、悲痛を荷う人であった。しかし人々は彼が神罰を受けて病み、悲しんでいるものと思っていた。神に苦しめられ、砕かれているものとみなしていた。しかし彼は人々の罪科のために傷つけられ、打たれているのであった。彼は人々の罰をひき受け、人々に平安を与え、傷を負って人々に平癒を与える不思議な人であった。

第二イザヤはこのような不思議な人物を記して、その「人々」は実は「我々」であり、その未知の人はやがて地上に出現する神の人イエスであることを知らずして預言したわけである。イエ

スはこのイザヤ書を愛読し、そこに自分への預言を見た。そして彼はこれを身証した。即ち「あがない」の内実はここに極まったのである。罪なき者が罪ある人の罪をのこりなく荷って、罪から解放し自由にするという事態がこれである。罰なき無条件の赦罪、免罪が、「あがない」を一身に負う神人によって全うされるのである。イザヤ書五三章はその意味で、旧約を新約につなぐ「あがない」の橋である。自由は正にこの「あがない」の現実において与えられるものである。

二　新約における「自由」

まづ福音書の中、ヨハネ福音書八・三一―三六のイエスの言が最も端的にこの問題に光を投じている。

即ちイエスは「**真理は汝らに自由を得させる**」と言ったが、彼らユダヤ人はその意味がわからないので、自分たちはアブラハムの子孫だから社会的に自由をもっている。それなのにあなたは何で自由を得させる、などとおっしゃるか、と的はずれの反問をしている。イエスのこれに対する応答が決定的なポイントを衝いている。「罪を犯すものが罪の奴隷である」と。即ち罪に対するものは真理（義）であり、奴隷に対するものは自由（自主）である。社会的な自由人か奴隷か

の問題ではなく、実存の問題として自由か奴隷かの問題で、真理に即するか、罪になずむかの問題である。「真理は汝らに自由を得さすべし」のギリシャ語は、hē alētheia eleutherōsei humās. であるが、イエスはヨハネ一四・六で「われは道なり、真理なり、生命なり」„Ich bin der Weg und die Wahrheit und das Leben." egō eimi hē hodos kai hē alētheia kai hē zōē. と明言している如く、真理(die Wathrheit)の主体はキリスト・イエスその人である。この定冠詞をもった力強い断言命法的表現は「私は真理そのものである」「**我即真理**」といった語調である。真理の体現者でなければ、このような断言はできない。イエスにとっては、我も真理も道も生命も皆「**即**」の字を以て連なっている。それであるから彼が „So ihr bleiben werdet an meiner Rede"「汝らもし常にわが言に居らば」と言っているのに注目しなければならない。このギリシャ語原典を直訳すると、「もしも君たちが私の言(ロゴス)の中にとどまっているなら」というのであって、それも en tō logō tō emō「私というロゴスの中に」といった根源的なひびきを感じさせられる表現である。イエスは神のロゴスの化体者(Verkörpertes Sein)である。それゆえにイエスの言にとどまる、ということは結局イエスの言にあって、イエスその者に即していつまでもいるなら、ということになり、「真理は汝らに自由を得させる」とは、イエスという真理に即して実存するなら自由が得られる、という意となる。ここでは罪からの解放という問題よりも、もう一歩突っ込んで真理に即する事態そのものに自由がある、という消息である。何となれ

ば、イエスという生きた真理そのものが自由であるからである。この辺にヨハネ福音書の深さがある。

こういった「即」的な真理の消息が、イエスに愚問を発するユダヤ人どもにわかるはずがない。福音書をよんで、そこに展開されているイエスとユダヤ人との dramatisch な問答を見ると、どれもこれもこういった次元の相違を曝露している。それほどまでに一方イエスはそのものずばりの人間であるのに、他方律法をひねくりまわしたり、律法を儀文化したり、律法に誇っている法教師、祭司、パリサイ人等は律法の奴隷となっているのを見る。ここでもイエスから逆に、彼らが虚言、殺人の元祖たる悪魔の子らたるを自証するに過ぎないとの結論に追いこまれてしまう„Ihr seid von dem Vater, dem Teufel, und nach eures Vaters Lust wollt ihr tun.“ (Joh. 8, 44)。「汝らはおのが父、悪魔より出でておのが父の欲を行はんことを望む」（ヨハネ八・四四）。

さてわれわれはパウロにおいて「自由」はどのような内実をもっているかを見ようと思うのであるが、これは同時にルターの福音把握の問題と最も深く関わることである。パウロは「ガラテヤ人への手紙」の中で„So bestehet nun in der Freiheit, zu der uns Christus befreit hat“ (Gal. 5, 1)「それゆえキリストがわれらを自由にし給へるその自由の中に確かと止まれ」（ガラテヤ五・一原文私訳）といって罪の桎梏からキリストが解放してくれたその自由の中に存続しておれ、と叫んでいる。ところでこの「自由」が罪からの解放という事態ではあるが、どのようにして然

らばキリストは人間、罪びと、(Sünder) を罪から解放したのであるか。それは彼が人間の死に値する罪をひきうけて十字架にかかり、贖罪をしたという啓示的事実による。彼自身があの旧約の出エジプトの過越の小羊となったがゆえに、神は人間の罪をキリストの血のゆえに過越すというわけである。我らの罪を直視せず、キリストの十字架において見る即ち我らの罪はそのまま無条件にゆるされてしまった。これがさきのイザヤ書第五三章の罪なき「神の僕」の「あがない」の成就である。我らは罪びとでありながら、**十字架の贖罪**を信受することによって、何の行為もなく義と認められる。即ち無罪とされる。罪から解放される。自由になった、という信仰的現実が生ずる。これを十字架の絶対恩恵というのであるが、実はこれだけではまだ真理の半面であって、自由はまだ無力である。

自由が自由たる実力をもつためには十字架と表裏する他の半面の事実がそこに現じなければならない。そのことを端的にあらわしている言がある。それはパウロが「コリント人への第二の手紙」の中で語っている言葉である。„**Der Herr** (Christus) **ist der Geist; wo der Geist des Herrn ist, da ist Freiheit.**“ (2, Korinther3, 17)「主は即ち御霊(みたま)なり、主の御霊のある所に自由あり」(コリント約書三・一七)。キリストは der Geist (to pneuma) 霊である。この霊は特に**聖霊**(みたま)と言われる霊である。そしてこの聖霊のあるところにこそ**自由** (eleutheria) がある。即ち十字架の贖罪を信受した現実は、あるがままの自分であるにも拘らず、自我からはづされた

無私の場が、無我の現実が、自由にされた現実がそこにある。それは喜悦の現実ではあるが、未だ空白な現実である。何ものかを信受しなければいられない空白である。そこで祈り求めて受けとる内実が聖霊である。それゆえ十字架のキリストと復活昇天して聖霊を与えるキリストとをばらばらにしてはならない。否、十字架を本当に信受すれば必然これに伴って信受されるものは聖霊なのである。

この二者は**不可離**な事態なのである。ところが現今のキリスト教界には、この**十字架・復活・聖霊**の事態を実存的にのっぴきならない恩恵の現実として信受していない場合が多いようである。問題の焦点はそれゆえに聖霊のバプテスマを使徒たちのように本当に受けるか否かにかかっている。それゆえ、私は「**使徒的信仰に帰れ！**」と叫ばざるを得ないのである。真の「自由」は正に聖霊信受の内実において存する積極的な現実であって、単に罪からの解放だけではないのである。ここに旧約の解放的自由と新約の充満的自由の差がある。「**あがない**」**の自由**から「**みたま**」**の自由**へと必然展開しなければならないのである。かくて「自由」は今や聖霊の実力によって裏づけられた力ある自由である。

しかし人間が人間である限り、つねにサタンの力ある罪の誘惑に曝されている危機的存在である。これにうち克つためには、聖霊の内住を必要とする。そのためには祈りという魂の在り方が恆常的になっていなければならない。パウロは更にガラテヤ人に次の如く勧めている！「兄弟

よ、汝らの召されたるは自由を与へられんためなり。ただその自由を肉に従ふ機会となさず、反って愛をもて互に事へよ」（ガラテヤ五・一三）。

即ちガラテヤ人たちがキリストの召命を受けたのは、自由を与えられるためであった。けれども彼らが律法からの自由を身勝手な自由気ままとはきちがえて「肉」（Fleisch, Sarks）即ち自己中心的な在り方を促進させるようなことをしないで、愛（Liebe, Agapē）によって互に奉仕するように勧告している。自由が愛と相即する事態は、聖霊が神の愛の霊であるから、聖霊による自由は当然愛の実力をそこにもつことになる。トーマス・アクイナスも „Amor est proprium nomen spiritus sancti“（聖霊の最初の名は愛である）といっている。かくてみ霊の力ある自由こそ愛としてはたらく人間実存の極致をそこに現ずるのである。

以上が旧新約聖書における自由の根本性格と内実の骨子である。そしてルターはこの事態をとらえて、彼の有名な „Von der Freiheit eines Christenmenschen“ を書いた。我らはかくて次にルターにおける「自由」を研討してみる段取りとなった。

〔註〕この『キリスト者の自由に就て』の原文（独文）に詳註をほどこしたテクストを筆者は南江堂書店から編著として出版した。その五四―一一二頁の注を参照されたし。

三　ルターにおける「自由」

罪の問題

ルター（一四八三―一五四六）の少年時代に受けた宗教教育によると、キリストは Richter（審判者）であるという印象が強かった。罪ほろぼしは自分たちの善行によって果たすのであって、執成す者は聖徒たちである。というのがスコラ神学にもとづく当時のカトリック信仰の教えるところであったので、キリストの福音は大方把握されておらず、最後の審判者キリストは、現にいつも審判者としてのぞむといった考え方であった。それで彼が苦しんだ問題は必然、自分がどのようにしたら神の前に義たり得るか、審判のキリストに義と認められるには、どのように生きねばならぬかのたましいの在り方の問題であった。

周知の如く、彼はアウグステイヌス修道院生活において、模範的修道僧とはなったが、神の律法を彼は心の奥底から喜んで実践しているのではない自分に苦しんだ。神を求めているときも、実は神の意志を求めず、自分の幸福を求めている自分に気がつくのであった。神を愛するときも、自分のためにという衝動をいつわることが出来なかった。アウグステイヌスの有名な言：

「われらの心は汝の中に安らうまでは安きを得ない」は真理ではあるが、もしこの言が単に魂の安心のためであるならば、それはやはり幸福主義である。ルターはそのようなわがうちなる幸福主義的衝動と戦って良心的ほりさげをしてみると、人間は宗教的なときも我執的（selbstsüchtig）であることを知った。彼の信仰の在り方が「良心宗教」（Gewissensreligion）といわれる所以である。これがやがてカントの実践哲学の性格に深い関係をもつことになるのである。ルターは人間の ego-zentrisch（自己中心的）な衝動がいかに根深いものかを知った。「おのれを憎むのでなければ私の弟子とはなれない」とのキリストの言は大なる躓きの石でどうにもならない。そこに人間の罪性の深さがある。おのれを「縛する罪の法」（ロマ書七・二三）とパウロが言っている事態である。パウロのロマ書第七章の告白と同じくるしみを彼も苦しんだ。「噫、われ悩める人なるかな、此の死の体より我を救わん者は誰ぞ」„Ich elender Mensch! wer wird mich erlösen vou dem Leibe dieses Todes?“（Röm. 7, 23）であった。そのため彼は独房に悶倒した。そのような経験についてルターは後日、一五八一年に、かの（九五条提題）に対する Resolutiones（解明）の中でこう述懐した：„Ich kenne einen Menschen, der von sich weiß, daß er solche Strafen öfters erlitten hat, die zwar kurze Zeit dauerten, aber so groß und höllisch waren, daß keine Zunge sie glauben kann, so daß, wenn sie wirklich ihr Ende erreichen oder eine halbe Stunde, ja, den zehnten Teil einer Stunde dauerten, es mit ihm gar aus gewesen

wäre und alle sein Gebein sich zu Asche gewandelt hätte“「私は一人の人を知っている。その人はなるほど短時間ではあるが、いかなる舌もそれを信ずることの出来ないほどの非常に大きな、地獄的な懲しめをしばしば蒙った自覚のある人である。それはその懲しめが実際終りに到達するか又は半時間、然り、一時間の十分の一でも続いたならば、彼は全く壊滅してしまい、彼の骨格全体が灰に化してしまったであろう。」

彼の罪意識の深刻さは、地獄の苦痛ともいうべきものであって、もう少しで悶死するばかりであったほどの体験をしている。我々は彼の Seelenkampf の内的経験を辿る必要はないが、以上のような魂の苦悩を表現している彼の詩句をここに掲げよう。この詩は一五二三年に、ちらし（fliegendes Blatt）として印刷されたものである（全詩は魂の苦悩とそこからの救いを感謝している詩ではあるが）。

標題：„Ein Danklied für die höchsten Wohltaten, so uns Gott in Christo erzeigt hat.“「神がキリストに於て我々に示されたいと高き恩恵の業に対する感謝の歌」起句は „Nu freut euch, lieben Christen g'mein,“「いざ歓べ、愛するキリスト者たちよ、相共に」に始まっているが、その第二、第三節をここに掲げる（Luther-Deutsch のまま）。

2) „Dem Teufel ich gefangen lag,　「私は悪魔に捕われて倒れていた、

Im Tod war ich verloren,	私は失われて死の中にいた。
Mein Sünd mich quälet Nacht und Tag,	私の罪は日夜私を苦しめた、
Darin ich war geboren;	私は罪の中に生まれたのだ。
Ich fiel auch immer tiefer drein,	私はいよいよ深く罪に陥って、
Es war kein Guts am Leben mein,	私の生活には何の善もなかった、
Die Sünd hatt mich besessen.	罪が私を占領していた。
3) Mein gute Werk, die golten nicht,	私の善き業などは何の値もなかった、
Es war mit ihn[1] verdorben,	それらは罪にけがれたものだった。
Der frei Will hasses Gotts Gericht,	自由意志は神の審判を憎み、
Er war zum Gut[2] erstorben.	自由意志は善に対して死んでいた。
Die Angst mich zu verzwefeln treib[3],	苦悩が私を駆って絶望に陥れたので、
Daβ nichts dem Sterben bei mir bleib[4],	死の外何ものも残っていなかった、
Zur Höllen muβt' ich sinken."	私は地獄に沈淪せざるを得なかった。」

1) ihnen 2) zum Guten 3) trieb 4) blieb

彼は人間の自由意志をもって罪や悪と戦ったが、自由意志の無力、自由意志がいかに das Ich（自我）、Selbstsucht（我執）に囚らわれているものであるか、自己の意志そのものに罪を発見してくるしんだのである。この詩でも「自由意志は善に対して死んでいた」と告白し、それは地獄の苦痛であると叫んでいる。これはパウロのロマ書第七章における罪との苦闘の叫びと相照応するものである。Ordensoberer 修道院長である Staupitz シュタウピッツの助言が導火線となって、キリストの十字架の贖罪が、教理としてでなく、事実ルター自身の罪のゆるしとして体験されるにいたって多年ルターを苦しめていた „meine Sünde“「わが罪」の嘆き、罪の重荷から解放された。永年躓きの石となっていたロマ書第一章第十八節の

罪からの自由

„ Sintemal darin（in dem Evangelium Christi）offenbart wird die Gerechtigkeit, die vor Gott gilt, welche kommt aus Glauben in Glauben; wie denn geschrieben steht:“ Der Gerechte wird seines Glaubens leben.“（Röm. 1, 17）

「神の義はその福音のうちに顕れ、信仰より出でて信仰に進ましむ。録して『義人は信仰により て生くべし』とある如し」（ロマ一・一七）が逆に彼の信仰の土台となった。「神の義」はルターにとって永いこと人間の良心を審判する義として響いていたが、「神の義がキリストの福音のうち

にあらわれた」とは、キリストが神の義を全うした。それゆえ贖罪のキリストを信受することによって、無条件に神の義が与えられて、罪びとのまま義とされるという消息が身について来た。「義人は信仰によって生きる」とは、そのような罪のゆるしという絶対恩恵のゆえに神の義をうけた人を義人というのであるから、この命題は逆に信仰によって生きる者を義人という、といった方がわかり易い。この命題はLXX（ギリシャ語旧約聖書）によると、*Ο δε δικαιος εκ πιστεως μου Ζησεται* とあって、独訳してみれば、„der Gerechte aber lebt durch meinen Glauben" という神自身の言となっている。神（から）の信（頼）、仏教的な言でいえば、**神の本願**である。そして神の本願、霊願を受けとめたのがキリストであったから、キリストは、神の本願、即ち神の意志を erfüllen（成就）した。神の意志が啓示史の上で成文としてあらわれたのが Gesetz（律法）であるから、キリストは律法を完全に成就し、律法を aufheben（止揚）した。義を満たしたキリストは律法の Telos（終局）となった。それは彼を信じる者を義するためであった（ロマ書一〇・四）。それゆえ律法、「すべし、すべからず」の法則に縛られている人間を律法の桎梏から解放し、自由にした。だから律法を満たし、律法を止揚した義人キリストを信受することによって、人間は律法の世界を超克することになる。即ち自由となる。これがルターの、特にパウロのロマ書やガラテヤ書を通してつかんだ福音の本質である。

ルターが „Vorrede zum Brief des Paulus an die Römer"『パウロのロマ人への手紙の序文』

の中で信仰とは何であるかを簡潔に語っている語句を引用しなければならない。

„**Der wahre Glaube** aber ist ein göttliches Werk in uns, das uns wandelt und neu gebiert aus Gott, Joh. 1, 13, und den alten Adam tötet, uns zum anderen Menschen an Herz, Gemüt, Sinn und allen Kräften macht, und den heiligen Geist mit bringet. O, es ist ein lebendig, wirkend tätig, mächtig Ding um den Glauben, sodaß es unmöglich ist, daß er nicht ohne Unterlaß Gutes wirken sollte."

「まことの信仰というものは、神のわざであって、我々を変化させ、神から新生させ、旧きアダム即ち旧き従来の自我を殺し、心、情緒、意向そして人間の諸力において全く別人となし、聖霊を共にもたらすものである。おお信仰とは何と生き生きした、活動的な、力強い事態ではないか。それだから間断なく善きことをはたらかないではいられないものなのである」。

即ち信仰は、こういうルターの表現をみても、決して何か信念といったことではなく、神のわざであって、こちらから言えばキリストという霊的実存体を信受することである。キリストの十字架による贖罪の故に、旧き我の罪が亡ぼされ、換言するなら旧き我という罪の根源体がキリストの十字架と共に十字架せられ、無条件に聖霊を受けることによって新しい我が生まれる。これが聖霊によるバプテスマである。かくて新しき我は聖霊の源動力によって喜々として動き、人のため尽くさねばいられないたましいと化してゆく。信仰と行為というものを二段がまえに考える

余地のないような霊的生命の事態であることをルターは述べている。自己に絶望してキリストに活路を見出だした新生である。

自由の主

以上の前提のもとに、われわれはルターの „Von der Freiheit eines Christenmenschen“（一五二〇）『キリスト者の自由に就いて』に即して、ルターの「自由」を明らかにしたいと思う（詳細は南江堂版のテクスに附した私の解説を参照されたい）。ラテン文のテクストを見ると、その書き出しに、ルターの問題としているのは „de libertate et servitute spiritus「霊の自由と霊の服従について」とあるように、「自由」も「服従」も霊的な意味であることをしっかりつかまねばならない。「**霊的**」というのは、キリストの聖霊を主体とした事態であることを銘記しなければならない。冒頭の二つの命題は次の如くである：(Luther-Deutsch で)

„Eyn Christen mensch ist eyn freyer Herr über alle ding und niemandt vnterthan.

Eyn Christen mensch ist eyn dienstpar knecht aller ding und yderman vnterthan.“

「キリスト者は、万物の上に**自由の主**でたって、どの人にも隷属していない。

キリスト者は、万物に**仕える僕**であって、どの人にも隷属している。」

この二命題はルター自ら指示している如く、パウロの1 kor. 9, 19: „Denn wiewohl ich frei

bin von jedermann, habe ich doch mich selbst jedermann zum Knechte gemacht, auf daß ich ihrer viele gewinne.“ と Röm, 13, 8: „Seid niemand nichts schuldig, daß ihr euch untereinander liebet; denn wer den andern liebt, der hat das Gesetz erfüllt.“「われ凡ての人に対して自主の者なれど、更に多くの人を得んために、自ら凡ての人の奴隷となれり。」（コリント前書九・一九）と「汝らたがひに愛を負ふほか何をも人に負ふな。人を愛する者は、律法を全うするなり」（ロマ一三・八）の二つの句のもつ根本精神からひき出された命題である。キリスト者とは、キリスト全托の信を以て生きる者であるから、キリストの僕である。僕とは主人の意志を行ずる者である。神とかキリストは絶対者であるから、絶対者に全的に依存するということは、その他の何ものにも、即ち地上の何者にも、然り自分自身の固有の意志にも属しない者、キリスト、神が自分の意志の主体となり、絶対性がそこに生ずるから絶対的自由の主（自主）である。しかしここに誤解されてはならないことは、この絶対性が私されてはならないことである。もし私されれば、それは自我にとらわれることになるから、それは霊的、信仰的、自主ではなく、相対界の人間的、常識的自主に堕してしまう。それは結局罪の奴隷に陥る。キリスト・イエスがつねに神に向かって：**Dein Wille geschehe!**“「聖意をなし給へ」を念じていたのはこのことである。「わが意志」を否定して「汝の意志」を肯定する。そういう実存を私は無的実存と申しているが、万物に自主の自由を有つということは、この無的実存において現実となるのである。無的とは無

私的ということである。以上が第一命題の本義である。

自由の僕

次に第二の命題において、その自主自由なキリスト者が万物の僕であって、どの人にも隷属する、とはどういうことか。それは同じくパウロが語っているように、「多くの人々を得るため」である。「多くの人々を得るため」とは、多くの人のたましいを福音の救いにあずからしめるため、ということである。然らば自主自由のキリスト者がどうしてそういう他者救済の願いをもつかといえば、どうにもならない自分を、十字架を以て贖罪してくれたキリストの愛を身に受けて、たましいが自由になり、歓喜をおぼえ、更に、聖霊を注がれてキリストの愛の力が実存の原動力となるから、その愛の力で他者のためにつくし、いかにしてもこの救いのよろこびをわかたねばいられない悲願が生ずるのである。聖霊に在る現実は正に力ある愛のあらわれる現実であるから、この自由は愛にはたらく自由なのである。おのれを求めず、他者を同じく力あるキリストの愛の生命にあずからしめんと作用せざるを得なくなる。パウロが「福音を伝道せざれば我は禍なるかな」といい、伝道は「やむを得ざるなり」といっているのは、皆このような**内面から発する必然性**であって、これがまことの自由の衝動である。それゆえに福音的な**自由と愛とは不可離**の事態である。それが僕となって他者のために自主的に仕えることなのである。「どの人にも隷

属している」という表現が、何か屈従的なひびきをもった表現であるので、誤解をまねきやすいが、自ら進んで欣んで他者のために仕える。これが、福音的な愛（アガペー）というものである。それゆえに、み霊にあるこの実存こそ自由であり、且つそのような霊的な自由は、同時に僕のすがたを以て**隣人愛**として活動する。ここに自由がそのような霊的な愛と相即するのである。かくして二つの相反した命題が実は二車輪の輪が二つでありながら一つの車轍しかのこされないように相即しているわけである。真理はしばしば矛盾の相における一如の事態である。

キリスト自身、神の僕であったから、全き自由人であった。そして神の僕であったから神の愛の意志を体現して万人に仕えた。そして十字架の死を以て万人の罪を荷った。これが愛の極致であった。しかも復活のキリストは、昇天して、やがて更に聖霊を降して、使徒たちを真に霊的によみがえらせた。その事実がペンテコステに注がれた聖霊であって、これがキリスト者の愛と義の生命的内実なのである。自由の主であると言い、万物の奴隷である、即ち万物に奉仕の愛をそそぐと言う事態は、聖霊の内実と実力なくしては空言にひとしい。それで、このルターのいう自由が全く福音的な自由で、自由は愛の行為に展開せざるを得ない**愛への自由**であるということが瞭らかである。キリストはそのとき**自由の僕**である。

ルターが同書第一五節、第一六節で「**王者**」（**König**）といっているのはキリスト者の「自由の主」の側を指し、「**祭司**」（**Priester**）といっているのは、他者のためにいろいろな愛の執り成

しをなす「僕」の側といっているのである。

同書第二〇章でルターは次の如くいっている：„**Der innerliche Mensch ist mit Gott eins, fröhlich und lustig um Christus willen, der ihm so viel getan hat, und besteht alle seine Lust darin, daß er wiederum möchte Gott auch umsonst dienen in freier Liebe.**“「内なる人は、彼のためにかくも多くをなし給うたキリストのゆえに喜ばしく楽しいので神と**一如**である。「内なる人」とはキリストの十字架の贖罪と聖霊によって新生した「新しき我」のことである。キリストと同質の霊が宿っているから、律法から自由で、**fröhlich und lustig**「喜ばしく楽しい」であり、神と合一しているということが根源現実（信仰の現実）において言えるのである。この神人合一は決していわゆる直接的神秘主義的なものではなく、どこまでもキリストという媒介者によるところの福音的神秘である。

であるから„**in freier Liebe**“「自由なる愛を以て」何ら「求むるところなく」（umsonst）神につかえる、というのが、かかる「内なる人」、自由人の„**alle Lust**“「全的な快」の本質である、と言っている。いわば第二の天性がこのような霊的な自由の性格で、ルターは大胆にそれを**Lust**と呼んだ。Lustは、日本語では「快」か「楽」か、「快よさ」、「楽しさ」である。全心全霊的なよろこびであるから、**Freude**ともいっている。それはキリストのもたらすたましいの「自由」とは、そのような快であるから、イエスは die Botschaft der Freude「よろこびのおと

づれ」福音といったのである。だからLutherは„das Gesetz erfüllen“「律法をみたす」ことを、すなわち道徳的実践の事態を、ロマ書の序文において、次のように言っている。

„**Mit Lust und Liebe** sein Werk tun und frei, ohne des Gesetzes Zwang göttlich und rechtschaffen leben, als wäre kein Gesetz oder Strafe. **Solche Lust aus freier Liebe gibt der heilige Geist ins Herz,** wie er（Paulus）Kap. 5, 5, sagt.（Die liebe Gottes ist ausgegossen in unser Herz durch den heiligen Geist, welcher uns gegeben ist.）Der Geist aber wird nicht außer allein **in, mit** und **durch** den Glauben an Jesus Christus.“

「おのが行為を楽しさ（快）と愛を以て行い、自由に、神法の強制なしに神的に義しく、あたかも律法も罰もないかの如く生きるということである。自由な愛からこのような楽しさを心の中に与えるものは聖霊である。それはパウロが第五章第五節で語っている通りだ。（「神の愛は我らに与えられた聖霊によってわれらの心に注がれた」）み霊はところで、イエス・キリストへの信仰に在って、信仰と共に、信仰を通してのみでなければ与えられない」

即ち「自由である」ということは「快と愛をもって行動する」ということと不可離の実存態である。そしてその源泉は、原動力はキリストを信受して得た聖霊にある。聖霊は神、キリスト、我という縦の関係をして空言たらしめざる実体であるからである。因みに言うが、現代キリスト教界の信仰における一般の気薄さはこのGeist（霊）が風の如く自由に吹き通っていないという

ことにある。**Geist** はギリシャ語の Pneuma、〈ブライ語の Ruach で、**Hauch, Wind, Luit** 息、風、気（大気）を意味するから面白い。

ルターは、第二七章で „Siehe, also fließet aus dem Glauben die Liebe vnd Lust zu Gott und aus der Liebe ein frei, willig, fröhlich leben, dem Nächsten zu dienen umsonst.“「見よ、このように信仰から神への愛と楽しさが流れる、そして愛からは隣人に無償で奉仕する自由な自発的な楽しい生活が湧いてくる。」とも言っている。そしてこの「キリスト者の自由」の最後の章、第三〇章において、

„Durch den Glauben fähret er über sich in Gott, aus Gott fähret er wieder unter sich durch die Liebe, und bleibt doch immer in Gott und göttlicher Liebe, gleich wie Christus sagt, Johannes 1, 51:, Ihr werdet noch sehen den Himmel offen und die Engel auf- und absteigen über den Sohn des Menschen.‘ Siehe, das ist die rechte, geistliche, christliche Freiheit, die das Herz frei macht von allen Sünden, Gesetzen und Geboten, welche alle andere Freiheit übertrifft wie der Himmel die Erde.“

「キリスト者は信仰によっておのれを立ち超えて神の中に入って往く。また彼は愛によって神からおのれの下に降りて往く。しかもつねに神の中に神の愛の中にとどまっている。正にキリストが言い給うたように、即ちヨハネ一・一五『天開けて人の子の上に天使たちの昇り降りすると汝

ら見るべし』見よ、これこそあらゆる罪、律法は、誡命から心を自由にする正しい、霊的な、キリスト者の自由であって、この自由は天の地を超えている如くあらゆる他の自由に優るものである。」

このようなルターの表現をよむと、それはあだかも天然現象にも似ている思いがする。即ち水は天から降りそそぎ、地に滲透し、地下水となり、源泉として噴水し、激流となり、滝と落下し、川と流れて原野をうるおし、人里に不可欠の恩沢をあたえ、大海に流れ入り、再び大空に上昇して、天地間を環流してそのすがたは、生命的な自由であり、愛であり、よろこびである。水は聖書においてしばしば聖霊にたとえられている。ヨハネ福音書第四章においてイエスがサマリヤの女として井泉のほとりで語った「活ける水」が正にそれである。

「奴隷意志論」

ルターの「自由」については、更に彼の有名な「ガラテヤ書」や「ロマ書」の解説をとりあげなければならないわけであるが、それは紙数の関係もあるから割愛して、ここには彼の "De servo arbitrio, **Vom unfreien Willen**"（一五二五）（奴隷意志論）から引用してみよう。この本は Erarmus の Διατριβη, sive collatio de libero arbitrio『評論「自由意志」について』（一五二四）に対する反駁論で、ルターがその論説に対して具体的に応答的に書いたものであるので、組織的

に論じたものではないから、なかなかよみづらい本である。しかしルターは一五三七年に、この書と彼の „Katechismus“ とが「自分の正当な書物」meum iustum librum と一書翰の中で語っているほどのものである。

エラスムスは周知の如く当時の Humanist 人文主義者の第一人者であった。彼の „de libero arbitrio“ 「自由意志論」をよむと、正に理性的判断をもって、聖書解釈のいろいろな場合を考えて一応公正と思われる論をすすめている。しかし結局彼の立場は、理性的であり、所与の自由意志の力を肯定しているものである。彼は、自由意志の力によって、永遠の救済へとみちびくような事態へと自分自身を適応させたり、そのような事態から身をひるがえしたりし得るものと考えているのである。しかしルターは「自由意志」そのものを何も否定しているではないが、自由意志はどんな優れたギリシヤ人であろうと、ローマ人であろうと、結局人間を救済へと導くことは出来ない。我執 Selbstsucht に克ち得ない「無」力なものであって、生来の人間の意志そのものが結局その「自由」の実質を失って、神意に即し得ない。それゆえに罪の奴隷意志となっている、という。ここにルターの反駁の一節（独訳）を引用していると、

„Ihr großer Meister, Petrus Lombardus〔eit 1159 Bischof von Paris. Verfasser eines vielbenutzten Lehrbuches der Theologie〕 nennt den freien Willen ein Vermögen der Unterscheidung und zugleich der Wahl. Wenn die Gnade（Christi）Beistand leiste, könne er

sich für das Gute, wenn sie den Beistand versage, müsse er sich für das Böse entscheiden, Er stimmt mit Augustinus darin völlig überein, daß der freie Wille aus eigener Kraft nur sündigen kann. Daher nennt Augustinus ihn im 2. Buch gegen Julian vielmehr einen unfreien als einen freien Willen.

Du aber läßt den freien Willen nach beiden Seiten gleich stark sein, so daß er aus eigner Kraft, ohne die Gnade, sich ebenso zum Guten wenden wie von ihm abwenden kann. Du bedenkst nicht, was alles du dem freien Willen zutraust, wenn du sagst, daß diese Kraft sich dem Guten zuwenden könne. **So schließt du den heiligen Geist mit all seiner Kraft aus als wäre er überflüssig und nicht notwendig.** (和訳省略)

即ちルターにとっては、自由意志はその自由を喪失して無力となっているから、聖霊の力を絶対に必要としているのに、それが要らぬとなしているエラスムスに、結局人文主義的理性の立場に立っていることを反駁しているわけである。ここに人間の意志と理性を直接肯定する人文主義的相対性の立場にあるエラスムスと、相対的自由意志を奴隷意志として断乎否定し、恩恵（即ち贖罪と聖霊）の力による相対的自由の立場にあるルターとの判然たる相違が見える。それはかつて絶対恩寵の立場に立ったアウグスティヌスとキリストの恩寵において神の啓示はみても人間の意志に実力を承認したペラギウスとの論争を、更に深化したものであった。

因みに frei は germanisch では frija, ahd. では fri. これは Freier 即ちうなじに奴隷のように輪をつけない自由人を意味した。althnordisch では fria といい、lieben の意味であった。frijonds は Freund の意であった。それで fria は今日の freien, werben, heiraten の意味に展開しているわけである。indogermanisch にさかのぼると pri で、gernhaben, schonen, Rücksichtnehnen の意味であった。Friede もこの語源から来ている。ゲルマン人の Stammesleben で同じ Stamm の者は frei で独立自由で且つ兄弟愛を以て結ばれている。それが frei であり、lieb であり、互に schonen したという言語史的背景をもっているのも面白い。

四　シラーにおける「自由」

自由の理念

ルターは人間の意志が我執的（selbstsüchtig）なものであって、自我の囚らわれが罪であって、この自我というものから自由であり得ない、自由は失われているという深刻な宗教体験をなした。彼はすなわち自由の否定の告白の場において贖罪の絶対恩恵を信受し、たましいの自由を与えられて、自由の肯定に転ずることを得た。それはどこまでもキリストを媒介としての神的自由

である。霊的自由である。

シラーにおいては、理性的存在としての人間の本質として自由が端的に肯定されていた。これは周知の如くカントの実践哲学によっていよいよ裏づけられた彼の確信であった。シラーも勿論人間の罪性を軽くみたわけではないが。

„Der Mensch ist frei geschaffen, ist frei, und würd in Ketten geboren."

「人間は自由なものに造られており、自由である、たとい鉄鎖の中に生まれたとしても。」

ルターにとって自由の実体は福音的な霊であったが、シラーにとっては自由の根拠は意志であり、理性であった。神的なものを追求することが出来る理想主義的楽観の立場であった。

„Und sollt'er auch straucheln überall,

Er kann nach der göttlichen streben."

「たとい人間は到るところで躓こうとも、

彼は神的な徳を追求することができる。」

彼はしかし理性的人間において Gemüt（心情）がいかに重要な要素を成しているかを自覚している詩人であった。と同時にいわゆる教会教義的信仰ではないが、神的意志の実在を信じて終生変わらざるものがあった。

„Und was kein Verstand der Verständigen sieht,

Das übet in Einfalt ein kindich Gemüt.
Und ein Gott ist, ein heiliger Will lebt,
Wie auch der menschliche wanke;
Hoch über der Zeit und dem Raume webt
Lebendig der höchste Gedanke.
Und ob alles in ewigem Wechsel kreist,
Es beharret im Wechsel ein ruhiger Geist."

この詩句の中で「たとい人間の意志は蹉跌たるものであろうとも、聖意志なる神は活きて在ます」と言い、「時空を越えて至高の思念が活き活きとはたらいている」と言い、「万事万象は永遠に流転していようとも、その変転の中で安泰の霊のみ不動である」という詩句にシラーのいわゆる理想主義といったイズムをも越えた信念のほどがうかがわれる。この詩句の中に „Gott ist", „Wille **lebt**", „Gedanke **webt**" という表現がおのずからあらわれているのも、使徒行伝一七・二八 „In ihm (Gott) leben, weben und sind wir." という句との内的関連を思わしめる。そして「神の中に生き、動き、在る」という即神的な意識乃至悲願は、シラーの若き日から貫いている底流であった。

以上引用した詩句は一七九七年の „Die Worte des Glaubens" の中のものであるが、この詩

の終りでも、„Euer Inres gibt davon Kunde.“といってこのような信念、即ち **Freiheit**（自由）と **Tugend**（徳）と **Gottes-Dasein**（神の存在）は何か外的証明によるものでも、研究や観察によるものでもなく、我々人間の内心、心奥が告知するではないか、というのである。自由と徳性と神信仰は理性的人間の存在に即した信念ではないか、というのである。問題はどの程度この信念が現実として実現し得るか、いかにしてそのような神的現実に到達し得るかにかかっている。それがとりもなおさず、詩人シラーの終生追求してやまない課題であった。もしこの三事態を失わんか、人間は人間としての価値を失うと彼は語っている。

さて彼は詩神 Muse に導かれている詩人として、芸術（Kunst）がいかに解放的、救済的な力をもっているものであるかを確信していた。哲学詩人として彼は情熱を傾けて且つ論じ、且つ詩作劇作を成して、芸術の本質の実証に努めた。シラーにとっては正に Kunst（芸術）が Religion（宗教）であったと申したい。Religion の証者としてルターが聖霊の力に動かされて聖書翻訳の大業に主力をそそいだように、**Kunst** の証者としてシラーは全生命を賭して、力ある戯曲や詩作を以て魂の告白をなした。詩の形態を以て告白した最も代表的なものは、長篇の思想詩 „**Die Künstler**“（芸術家一七八九）であった。芸術家の使命と芸術の本質を詠った思想詩にして、是に匹敵するものはおそらく世界文学にない。

芸術家の本領は何はさて措き、「自由」にあることは公理の如くである。創作にとって「自由」

は生命である。

„Der freisten Mutter freie Söhne,
Schwingt euch mit festem Angesicht
Zum Strahlensitz der höchsten Schöne!“（四五八―六〇）

「自由の最たる母の自由の子らよ
確乎たる面ざしをもて舞いあがれ、
至高美の光の御座に！」

「自由の最たる母」とはいうまでもなく芸術（私としては芸道と申したいのであるが）即美のことであり、「自由の子ら」とは Künsler（芸術家）をいう。「至高美の光の御座」という表現はきわめて宗教的表現であって、カントが Das höchste Gut「至高美」と呼んだ実在は、シラーは die höchste Schöne と称えたと見てさしつかえない。善（倫理）の世界と美（芸術）の世界を不可離の融合の内実において把握し体現せんとするところにシラーの生涯の悲願と精進があった。そしてかかる融合の可能な境地、次元は、宗教的次元であるが、シラーは宗教をあまり口にはしないが、彼の情熱（Herz）と理念（Vernunft）は実は無意識的にそのような宗教的素地から発しており、且つ宗教的な絶対境に向かっていたということを私は申したいのである。彼の一七八六年三月以降に書いた „Philosophische Briefe“（哲学的書翰）をよむと彼の魂は、いわゆる信仰よりも

echt（真正）な宗教的な質をもっていることがわかるからである。

彼は素晴らしい洞察力をもってこう語っている「宇宙の一切の完全性は神の内に統合されている。神は自然は二つの Größen（単元）ではあるが、しかも全く同じである。神的な実体（Substanz）と共在している、調和ある活動をいとなんでいる全実体は自然の中にある。……自然は無限に分かたれた神である……。白光がプリズムにおいて七色の彩光に分光されるように、神的な我は無数の感覚的な実体にわかれてしまった。七色の彩光が唯一の白光に融合するように、これらすべての実体を統合すれば、神的な存在が現ずるであろう。」

そこには汎神論的な傾きが見えはするが、„das göttliche Ich“（神的な我）というものを体感している事態は見のがせない。罪観念よりも神に遍照され、貫かれ、神性を内在させる積極的な把握と、万象の多様性とその **Harmonie**（調和）を考えた一即多、多即一的な、深い内在関係は宗教的に極めて重要な消息である。これと類似した観念を彼は Distichon: „Licht und Farbe“ 色と光（一七九六）でこう書いている。

„Wohne, du ewiglich Eines, dort bei dem ewiglich Einen!
Farbe, du wechselnde, komm freundlich zum Menschen herab.“

「汝永遠に一つなるものよ、永遠の一者のもとに住まえよかし！
汝変転する彩光よ、降り来たりて人間に親しめよ。」

即ち白光なる真理そのものは神のものであって不可見的であるが、彩光なる美、芸術は人間の親しき友である。ここでは神を一者としてはっきり意識し、その一者と一つである真理の認識は、多彩の美においてなし得るから、美・芸術を通してこそ人間は真理に近づき、神と交わるという観念が流れている。否、実に美という"Erscheinung"現象においてこそ真理を実は見ているのである。これが多即一の消息なのである。そしてそれはさきの詩の如く、das Göttliche（神的なるもの）と自ら自覚するところにおいてのみ内観し得る消息である。勿論この das göttliche Ich は Ebenbild Gottes（神の似姿、創世記一・二七）としての人間の本質を観入するところに信受されるものであって相対的現実としての das Ich（我）をそう思っているのではない。神そのものは不可見の霊的実在として信ぜられる。それはいかにして言い得るか。キリストが「我を見し者は父（Gott-Vater）を見しなり」といった証言によって信じ得られる。してみるとキリストが神の Erscheinung（現象）、神学的表現ではロゴスの incarnatio（受肉）であるということは、真理の現象としての美（芸術）とアナロギアとなる。キリストが「我は道なり、真理なり、生命なり」といったのは、キリストが神から人への道であり、また人から神への道であること、神の真理の現象体であること、神の生命の証体であることを意味する。然らば芸術を創作する人間そのものが真理の現象体的なものにならなければ、人間の告白としての芸術が真理の現象であるとはいえないわけである。そういうわけで、結局詩人、芸術家そのものが問われなければならない。

シラーはこの問題とどのように戦い、芸術家及び芸術の真義をつきとめようとしたか。その告白がさきにちょっとふれた：Die Künstler：になされているのを見る。同詩の三三五行で

：**Dem großen Künstler ahmt ihr nach.**“

「偉大なるかの芸術家に君らは見習う」

といって、神こそは最大の芸術家であって、芸術家はその神の芸術性に見習う者であると喝破した。神こそは最も自由なる創造者、創作家である。凡そ第一級の芸術家は皆そのような独創的な魂である。Genie 天才という語がそういう霊的な自由を以て創作する本質的な芸術家にふさわしい名称であるわけである。特にシラーは、この「自由」の白光を多彩にうち出した詩人といえるのであろう。

物理的自由と理念的自由

ところで、シラーの「自由」について、晩年のゲーテがエッカーマンに語った言葉に耳を傾けてみよう。（一八二七年一月十七日）：「シラーの本来の創作力（Produktivität）は理想（Ideal）というものにあった。そして彼の如きはドイツ文学にも、他国の文学にもその比を見ないと言ってよかろう。シラーのすべての作品を通じて自由の理念（die Idee von Freiheit）が貫かれている。そしてこの理念は、シラーがその教養において進展し、自身変わってゆくにつれて、別な形姿

(Gestalt) をとった。青年時代には肉体的（物理的、形而下的、外的、環境的）自由（die physische Freiheit）と、晩年には理念的自由（die ideelle Freiheit）と彼は取っ組んだ、そのことは詩作にあらわれた。さて、この肉体的自由がシラーをその青年時代にあんなにもひどくなやましたのは、なるほど一部には彼のたましいの性格（die Natur seines Geistes）にもよるが、しかしその大部分は彼が士官学校で耐えねばならなかった抑圧に由ったのである。それからさて彼が成熟した年輩になってからは、肉体的自由が充分得られたので、彼は理念的自由に移っていった。しかもこの理念が彼を殺したと、私は殆ど申したいくらいに思う。というのは、彼は理念的自由に没入することによって、彼の体力にはあまりにも強い要求をその肉体に課したからである」。

ゲーテのこれらの言葉は、シラーが「自由」に生き、「自由」に死んだ消息を端的に語っている。

„Die Räuber“「群盗」（一七八〇）の第一幕第二場で „Das Gesetz hat noch keinen großen Mann gebildet, aber die Freiheit brüet Kolosse und Extremitäten aus“ とか、„Mein Geist dürstet nach Taten, mein Atem nach Freiheit, —Mörder, Räuber! —mit diesem Wort war das Gesetz unter meine Füße gerollt.“ などと Moor をして言わしめているあたりは、権力社会の法規たる Gesetz に対する怒りをもった Freiheit の叫びを思わしめるが、しかし **„Mein Geist dürstet nach Taten, mein Atem nach Freiheit“** という一句はシラーの本質を語る名句

というべく、Geist と Atem はいずれも、聖書的には、ギリシャ語では πνευμα, ヘブライ語では rūach で、霊であり、気息であり、風である。„Die Räuber“ を作った頃のシラーは、もともと Theologe 神学者たらんことを志ざした彼のことであるから、用語や観念は聖書的なひびきがしばしば感ぜられるが、これもその一例である。そしてここに **Tat** 行為と **Freiheit** 自由が同義的に用いられるところに、Freiheit が単なる理念のものでなく、Tat をもって勝ち得られるべき現象であらねばならぬ迫力が感ぜられる。この場合 Goethe のいった **„physische Freiheit“** 物理的自由に関わりもしようが、彼のたましいがいかに geistige Freiheit を呼吸しないではいられないものであるかを示しているのであって、いかに彼の実存の本質が霊的な自由を求めていたかをあらわしていると思われる。

さてまた „Die Verschwörung des Fiesco“（一七八三）第五幕第十六場の中で Fiesco の潔白の士、共和制の熱望者 Verrina の言：

„Ist denn etwa die Freiheit in der Mode gesunken, daß man dem ersten dem besten Republiken um ein Schandengeld nachwirft?“ とか “Hat der Unterdrücker der Freiheit auch einen Kniff auf die Züge der römischen Tugend zurückbehalten? Ich schwör es beim lebendigen Gott. Ehe die Nachwelt meine Gebeine aus dem Kirchhof eines Herzogtums gräbt, soll sie sie auf dem Rade zusammenlesen?“ という表現には、専制政治的なものから脱

却せんとする若きシラーの実践的熱情がふくまれている。これこそは Physische Freiheit への求めである。

また „Wallenstein“ の Prolog の中の

„Und um der Menschheit große Gegenstände,
Um Herrschaft und um Feiheit wird gerungen“

は、同じく physisch ではあっても民族的、国家的なものである。

また „Tell“（一八〇四）第二幕第一場における Werner（Freiherr von Attinghausen）の台詞：

Bist du so weise?
Willst heller sehn, als deine edeln Väter,
Die um der Freiheit kostbarn Edelstein
Mit Gut und Blut und Heldenkraft gestritten? (879-82)
-Nein, wenn wir unser Blut dran setzen sollen,
So sei's *für uns*-wohlfeiler kaufen wir
Die Freiheit als die Knechtschaft ein! (892-4)

の如きもこれに類する自由である。

„Die Jungfrau von Orleans“（一八〇一）の Prolog 3, v. 349 で Johanna „王者は奴隷を解放

する者であるとなして

Der die Leibeignen in die Freiheit führt. といっているのは社会的な自由を語るものである。

Don Carlos（一七八七）第五幕第七場において、Graf Lerma が Carlos に

Retten Sie sich, Prinz.

Der König wütet gegen Sie, Ein Anschlag

Auf Ihre Freiheit-wo nicht auf Ihr Leben.

と忠告しているのは、自由か捕囚かという、やはり physisch なものである。

我々は、このような physische Freiheit の奥のもっと本質的な、根本的な Freiheit, 即ち **ideelle Freiheit** 理念的自由の問題に移ってゆかねばならない。そしてそれこそは Schiller の生涯を貫いての精神活動の Grundton 基調をなしているものなのである。それゆえゲーテのさきほどの言は、多少分析的に過ぎ、シラーの本質を必ずしも語っているとは思われない。

人間の個人的乃至社会的自由のテーマは、その精神的及び肉体的な両面において深刻の度を増し、歴史的にはついにフランス革命（一七八九）として爆発したのであった。そのような第十八世紀末葉の歴史的背景の中でシラーは、壮年時代には病身という肉体的制約のもとに、経済的な困苦とも戦うことを余儀なくされ、ついに人生の真昼時に惜しくも倒れた。

しかし彼の魂は Physische Freiheit を求むるときも ideelle Freiheit を中枢とした構造におい

てであって、彼が精神的なもの（Geistiges）を人間存在の第一義として肉体的なもの（Physisches）を第二義的に考えることは彼の根本性格であった。それは肉体的なものを単に軽視するのではなく、構造の秩序としてそうあるべきものとしたのである。

Karlsschule における彼の論文：„Über den Zusammenhang der tierischen Natur des Menschen mit seiner geistigen.“「人間の動物的性質と精神的なそれとの関係について」において、そのことは既に現われていた。その中で：「人間の完全性（**Vollkommenheit des Menschen**）は、世界計画を観察して自分の諸力を訓練することにある。そして自分の力量と、はたらきかける目的との間に極めて厳密な調和（Harmonie）がなければならないから、完全性は自分の諸力の最高度の活動とその諸力相互の従属関係に存するであろう」。この一節に実は、いみじくも彼の全生涯の課題がふくまれているのに驚くのである。即ち人間存在（今の言葉でいえば実存）の完全性の達成と、精神と肉体の主従関係と、飽くなき努力精進と人間諸力との厳密な調和である。完全性や調和というものは、精神が真に自由の境地に達しないでは得られるものでなく、精神の自由は何かを排除するのではなく、全人的完全性と大自然的調和をもたらすものであって、そうでない自由は、自由の真の名に値しない。

彼は同論文で更に言う：「人間は自分が Geist（精神、霊）であることを意識する前に動物であらねばならなかった。宇宙を Newton のように天翔けることを敢えてするまでは塵泥（ちりひ

じ）を這わねばならなかった。それゆえ肉体（Körper）は活動への最初の拍車であり、感性（Sinnlichkeit）は完全への最初の梯子であった。」

それゆえ彼は更に、肉体の活動は精神の活動に応ずるものであり、魂が怠慢になると肉体の運動も緩慢になる、といっている。そして我々は精神的活動が完全性をもっている場合には、そこに快感（Lust）が伴うものであり、不完全性の場合には不快（Unlust）と結びついている、と彼はいう。人間性を重んずる詩人シラーの面目がここに既にあらわれている。このことはルターが、さきにも見たように、真の信仰の現実は、mit Lust und Liebe で erfüllen するような行為に展開するものであることを語っているのとアナロギアを感せしめる消息なのである。

調和の世界

シラーが一七八六年三月以降に書いた „Philosophische Briefe“ は Kant の „Urteilskraft“「判断力」以前のものであるが、そこには実はシラーの人格の中核をなす最も本質的なものがおのずから告白されているのを見る。その „Die Welt und das denkende Wesen“「世界と思考する存在」において

「宇宙（Das Universum）は神の思想である。この理想的な精霊像（Geistesbild）が現実界（Wirklichkeit）に入り込み、そしてそこに生まれた世界がその創造者の割れ目をみたしたあとで

は――このような人間的表象をゆるしてもらえば――あらゆる思考者の役目は、この現存の全体において最初の図形（Zeichnung）を再発見することであり、機械における規則を、構成における統一を、現象における法則をさがし出すことであり、建築をその見取図に環元することである。それであるから、私にとっては自然には唯一つの現象（Erscheinung）しかない。即ち思考する存在（das denkende Wesen）である。…私の中、及び私の外の一切のものは、私に相似するある力の神秘的記号にすぎない（Alles in mir und außer mir ist nur Hieroglyphe einer Kraft, die mir ähnlich ist.）。

これを見ると、シラーが宇宙を神の思想と見、その思想は同時に理想的精霊像であり、これが現実界に入りこんだその一切は、ある力の神秘的記号であり、その森羅万象と自分とは相似的なものであるといっているところを見ると、シラーはプラトーンのイデア的というよりも、むしろヨハネのロゴス的な考え方乃至新プラトーン主義的な傾向をもっている。この Geistesbild が denkendes Wesen であるというところに、シラーが本質的に思惟の人間であることがうかがわれる。しかし、自分もある力の神秘的記号を自分の中にもっている、というわけで彼にとって思惟は単なる観念ではなかった。

彼は更に言う、「自然の法則は暗号（Ziffern）である。それをつづりあわせるものは思考存在である。この暗号によってあらゆる霊が相互に、そして最も完全な霊（神）と相語るのである。

……何と一切のものが私には不思議に思われてきたことか！……全自然には寂莫なものは私にとってもはやなくなった。一つの肉体（乃至物体）を発見すると、そこに私は霊を感ずる。一つの運動に気づくと、そこに私は思想を推測する。〈葬られた死者の横わるなく、人のよみがえるあるなきところ〉全能者は、そのみわざを通して私に語る。このようにして私は神の遍在（Allgegenwart Gottes）の教えをさとるのである」。彼の思念は、このような高次な霊想的な域に達することができた。

更に "Idee" の項において、「総ての霊は完全性に引きつけられている（Alle Geister werden angezogen von Vollkommenheit）。まよいはあろうとも例外なくすべての霊（的人物）は自分らの諸力の最高の自由な表現の状態を追求している。すべての霊は共通の衝動をもっている。即ち自分らの活動を展開せんとすること、一切を自分にひきつけようとすること、自分の中に集めようとすること、また自分らが善なるもの、優秀なるもの、魅力あるものと認めるものを身につけようとすること、これである」。

以上のシラーの言葉は、要するに完全ならんとする理想追求のエロースをもっている、ということである。それは霊性と感性の秩序と調和においてもとめられねばならない。換言せば **Einheit der menschlichen Natur, Freiheit des menschlichen Willens** 人間性の統一、人間の意志の自由という命題が彼の生涯の課題であった。

ところでシラーは，Über das Erhabene“「崇高なるものに就て」（一七九三）の中で「我々は美において自らを自世と感ずる、それは感性衝動（**die sinnlichen Triebe**）が理性の法則（**das Gesetz der Vernunft**）と調和する（**harmonieren**）からである。また我々は崇高なるもの（das Erhabene）において自らを自由と感ずる、それは感性的衝動が理性の立法に何らの影響を与えるものではないからであり、また精神（霊）はここでは、自分自身の法則以外の何ものの下にも立つものではないかの如く行為するからである」。

シラーのこのような美的自由と崇高な精神の自由という渾然たる人格を全人的に形成せんと突き進んでやまぬ魂であった。彼はこの論説のさきで更に言う、「美において理性と感性が和合する（zusammenstimmen）そしてこの和合のゆえにのみ、美はわれわれに魅力（Reiz）がある。崇高なるものにおいては理性と感性とは和合しない。そしてこの両者の矛盾においてこそ、崇高なるものがわれわれの心情（Gemüt）を捉える魔力（Zauber）をもっているのである」。更に彼の語るところを聴こう、「いかなる牢獄の如き書斎も、いかなる社交的な客間ももたらしめ得ない輝かしい思想（Lichtgedanken）や英雄的決意（Heldenentschluß）が、偉大な自然の精霊（Naturgeist）とこの心情（Gemüt）との間の勇ましい闘争によって、散歩の際に生み出だされなかったとは、誰が知ろうか。たむろする天幕の上なる天空のように、遊牧の民の心（der Sinn der Nomaden）がつねに公明で自由で（offen und frei）あるのに反して、都会人の性状がややもすれば、

卑小なるものに傾き、いじけ、しぼむのは、この偉大なる精霊（Genius）との交わりが稀にしか行なわれないことに一部分は帰因しているとみなし得るのではないかということを、誰が知ろうや。」このような言説は我々をして直ちにあの自然を媒介とする精神文化史をパノラマのように展開している„Der Spaziergang“「散歩」（一七九五）という偉大な思想詩を連想させる。その中に、

„Da gebieret das Glück dem Talente die göttlichen Kinder,
Von der Freiheit gesäugt wachsen die Künste der Lust.
Mit nachahmendem Leben erfreuet der Bildner die Augen,
Und vom Meißel beseelt, redet der fühlende Stein“

即ち、才能に恵まれた神童の如き芸術家たちは、自由の乳房を吸って歓喜の芸術を生む。たとえば彫刻家は、自然を師として、大理石から心魂こもり、情感溢るる如き人間をそこに創造する、といった内容のこの詩句の背景には、まさしくギリシヤ古典の彫刻が想われていよう。この長詩のひびきは、大自然に逆らう文明は滅び、大自然の精神を生かす文化は栄える、といったものである。

„Aber jugendlich immer, in immer veränderter Schöne
Ehrst du, fromme Natur, züchtig das alte Gesetz.“

大自然は偉大な法則のもとに動いている。法則は千古不変であるが、現象はつねに若々しく、つねに変転してやまない美のすがたである。しかも詩人にとって自然は単なる物理的存在ではなく、„fromme Natur!"「敬虔なる自然よ」と呼びかけられる相手であった。

「自由はそのあらゆる道徳的矛盾や肉体的、物理的悪害の中にあっても、崇高なる心情の人にとっては、羊が忍従を以て牧者のあとに従ってゆくが如き、また自主的な意志が時計の機械のような奉仕的一員となりさがった如き自由のない安寧と秩序とに比べれば、自由は無限に興趣ある観物である。この観点から、そしてこの観点からのみ観るときに、世界史は私にとって崇高なる対象となる」。即ち、シラーは矛盾を克服し、悪害に打ち勝ち、調和と完全へと精進してやまない「自由」のすがたを貴いものとした。

ただ、ここにちよっと注意しておきたいことは、シラーが牧者に従って従順に歩く羊の姿を自由のないものと観たことはそれ自体はまことにその通りではあるが、聖書において牧者と羊との関係は、有名な詩篇第二十三にある如く、またヨハネ福音書第十章でキリスト自ら語っている如く、そこにはヤハウエーとイスラエル、神と人間、キリスト者との関係が、牧者と羊との関係にたとえられてあることである。神の意志に従順に信頼を以て従う生活に、即ち神に自分の自由をたもろとも投入する態の棄身の生活に、自己の自由を棄てて、神の自由に全托したあり方に、実は天的な天衣無縫の自由の生活があるということである。まことの宗教的自由は、たましいの

真の自由は実はそういう境地にあるということ、そこに神を相手とした生活があるということを聖書は語っている。そしてその事態を完全に体現したのはキリスト・イエスのみであって、キリストこそ自由の体現者であった。そしてこれは、既に「ルターにおける自由」の項において詳述したものである。

このような意味における「自由」をシラーが知らないわけではない。彼は詩人として歴史の現実を直視して苦闘する人間の「自由」に関わるすがたを語ったわけである。彼自身悲劇的な運命を体験し、苦闘して生涯をつき進んできたシラーは、この「崇高なるもの」das Erhabene における「自由」の重要性を語っているわけである。シラー自身、かかる意味においての「自由」の権化の如き人であった。

「美なるもの（das Schöne）は単に人間のために役立つにすぎないが、崇高なるものは人間のうちの純粋な精霊（Dämon）のために役立つ、そしてあらゆる感性にも拘らず、純粋な霊の法典（Gesetzbuch reiner Geister）に則るのが我々の使命であるから、崇高なるものは美なるものに近づき、それによって美的教育（**die ästhetische Erziehung**）を完全な全体（**ein vollständiges Ganzes**）になし、人間の心の心情の感受能力を我々の使命の全領域にわたって、それゆえにまた感覚的世界を越えて拡大しなければならない」。

シラーがこの一段において das Erhabene が Dämon に深く関わりをもつ事態であり、純粋な

霊の法典に則るところに使命があるといっていることに注目したいと思う。即ち das Erhabene は我々の内なる世界の das Göttliche に最も深く関わりをもつもので、人間のたましい（Geist）に最も深い関わりをもつものである。しかも我々の使命が **Gesetzbuch reiner Geister** に則るところにあるというのは、Vernunft の極限としての Geist, Dämon, Genius という霊的世界の法則を指していると思われる。

そうなると、実はパウロがロマ書八・二で „Das Gesetz des Geistes, der da lebendig macht in Christo Jesu, hat mich frei gemacht von dem Gesetz der Sünde und des Todes." 即ち、「キリスト・イエスの内に在る生命を与えるところの（聖なる）霊の法則が私を罪と死の法則から自由にした」、といっているが、神の聖霊は力強い生命を与えるのであるから、罪にも死にも打ち勝つ。このことはキリストのみが実証した。それは彼がその聖霊の力で完全に罪に勝ち、死に勝って復活の霊体を以て現われたからである。それゆえに、神の霊法はキリストを信受した者を罪と死の法から自由にする。この自由は力ある自由で永遠の生命をその内実としている。このような神の霊にこそ自由があることは、さきにルターの場合に触れた通りであるが、シラーの場合は、人間における Das Göttliche の直接肯定において理念として語っていたのであるが、それは Glauben に接触してもいる。ただはっきりしていることは、キリストを媒介としていないということで、ここが福音的自由と、観念的自由との截然たるちがいである。それであるからといっ

て観念論者が直ちに観念論的現実にあるか否かは別問題で、シラーの如きは一見観念論的でありながら、決してそうではなく、芸術家的、詩人的、全人格的、霊的な思考と体験において、福音的自由の境地とアナロギアの心境に達している。そのことは彼の美学の諸論説や詩や劇の中の随所にひらめいている。一方福音的と称しながら、それが観念的である場合が案外に多いのがキリスト教界の事実でもあるので、古来哲人や詩人がこれに反旗をひるがえす場合が少なくなかったのである。キエルケゴール、ハーマンの如き、ゲーテ、ノヴアーリスの如きは却って福音的な要素を深くもっているわけである。

素朴と感傷

さて我々は「自由」をめぐってこの人間形成の問題をシラーと共に更に深くさぐろうと思う。シラーのあの有名な "Über naive und sentimentalische Dichtung"「素朴と感傷の文学に就て」(一七九五―九六)の中で、自然界の諸々の現象を見て、「我々は何を愛しているのだろう。対象(事象)そのものではなく、それらの対象(事象)を通して表現されている Idee である」と彼は言っているが、実は対象(事象)即ち理念という一如の洞察でありたい。ここにシラーがゲーテとずれを来たす角度がある。それがシラー自ら sentimentalish と自覚する所以がある。ではあるがその Idee がどういうものであるかを彼は次の如く言っている。

„Wir lieben in ihnen (den Gegenständen in der Natur) das still schaffende Leben, das ruhige Wirken aus sich selbst, das Dasein nach eignen Gesetzen, **die innere Notwendigkeit**, die ewige Einheit mit sich selbst."

「我々は自然に於ける諸々の対象に於て、静かな創造的生命、自己自身からの静かな作用、固有の法則に従う存在、内的必然性、自己自身との永遠の合一を愛する」「我々が愛する」これら一連の Idee は実に自然の本質を語るものである。一言をもってすれば das lebendige Naturgesetz と申したい消息である。そして我々は最後の言 **„ewige Einheit mit sich selbst"** 「自己自身との永遠の合一」という表現に特に注目しておこう。そしてシラーはこれらの自然現象という対象と人間とを想い合わせて次のように言っている。

„Sie sind, was wir waren; sie sind was wir wieder werden sollen. Wir waren **Natur** wie sie, und unsere **Kultur** soll uns, auf dem Wege der Vernunft und der Freiheit, zur Natur zurückführen. Sie sind also zugleich Darstellung unserer verlorenen **Kindheit**, die uns ewig das Teuerste bleibt; daher sie uns mit einer gewissen Wehmut erfüllen. Zugleich sind sie Darstellungen unserer höchsten Vollendung im Ideale, daher sie uns in eine erhabene Rührung versetzen."

即ち、自然界の現在のすがたは、我々の過去のすがたであった。そして我々は再びそのように

成らねばならないところのものである。これは聖書的に言えば、Paradise Lost 的現実の我々が Paradise Regained の現実に成らねばならない、という意であるが、古典的な角度でみるならば、シラーがかの重要な美学論 „Über Anmmut und Würde“「優美と品格に就て」の中で

„Natur und Sittlichkeit, Materie und Geist, Erde und Himmel fließen wunderbar schön in seinen Dichtungen zusammen. Er (der Grieche) führte die Freiheit, die nur im **Olympus** zu Hause ist, auch in die Geschäfte der Sinnlichkeit ein.“

といっているギリシヤのオリンプス的自由、即ち霊肉一如、自然と道徳の融合、天地一体的な境地である。Renaissance は古典精神への復帰であり、Reformation は原始キリスト教への復帰を叫んだのであり、**Religion** という語そのものが、神との「再結」を意味する如く、自己も世界も現在の現実において、その根源の相に帰入、帰一することが実は真に理想を実現するの道である。その道はシラーによれば、„Vernunft und Freiheit“ 理性と自由によるのである。その Ideal の本質は verlorene Kindheit 失われた幼年時代の中にあるところの我々にとって永遠に das Teuerste 最も貴重なものであると彼は言った。キリストの言葉「幼児の如くならねば天国に入れない」という消息とアナロギアである。それがこの美学論で „naiv“ ナイーヴ（素朴）という心境なのである。

Das Ideal への道をシラーは次の如く言っている。「我々は自由である、彼ら（自然現象）は必

然である。我々は変転する、彼らは常に同一である。ところで、我々と彼らが結合するときにのみ、即ち意志が必然の法則に自由に従うときのみ、また空想の千変万化にあってもなお理性のその法則をまもるときにのみ、das Göttliche や das Ideal 理想が生ずるのである」。

このような das Göttliche, das Ideal の性は素朴（naiv）である。「偶発の素朴 **das Naiv der Überraschung** において我々が尊敬するのはつねに Natur である。それは我々が実相、真実（die Wahrheit）を尊敬しないではいられないからである。これに対して志向の素朴（**das Naiv der Gesinnung**）において我々が尊敬するのは Person 人格である」。

ところで人間の中でその志向が素朴であるような人の最たる部類の人は即ち天才（Genie）である。素朴でない天才はない、と彼は言っている。シラーは自らを sentimentalisch とは自覚していても、彼の中にも naiv なものは充分あった。もしそうでないなら、彼の如き天才は自らの言に矛盾してしまう。これに反してゲーテこそは naiv な天才であった。しかしゲーテも大いに sentimentalisch な面もあった。大自然の Naivität も見習わんとして努力する魂、直観によって観入するのでなく、直観においてもなお考察的な把握へともってゆこうとする理性のはたらきをなす人は sentimentalisch である。古代人は概して naiv であるに反して近代人は概して sentimentalisch である。それは失われた現実から回復された現実へと復帰せんとするものの性格なのであるから。彼の詩 „Sehnsucht“「憧憬」（一八〇一）がそのことをあらわしている。

„Dort erblick ich schöne Hügel,
Ewig jung und ewig grün;
Hätt' ich Schwingen, hätt' ich Flügel,
Nach den Hügeln zög' ich hin.
Harmonien hör' ich klingen,
Töne süßer Himmelsruh',
Und die leichten Winde bringen
Mir der Düfte Balsam zu.
Doch mir wehrt des Stromes Toben,
Der ergrimmt dazwischen braust,
Einen Nachen seh' ich schwanken,
Aber ach!, der Fährmann befehlt.
Frisch hinein und ohne Wanken!
Seine Segel sind beseelt.
Du mußt glauben, du mußt wagen,

Denn die Götter leihn kein Pfand;
Nur ein Wunder kann dich tragen
In das schöne Wunderland."

〔註〕この詩の訳文は著作集第二巻『芸術のたましい』の三八三―四頁にあるので参照されたし。

天界、理想境の Harmonie の世界との間に河があって渡れない。小舟には舟人もいないが、敢えて乗りこめよ、天来の霊風を帆は孕んでいる。だから信じて、敢行しなければならない。奇蹟が汝を美の国へ渡すのだ、という詩意である。

天来の霊風を帆に孕むとは、人間が聖霊を無条件に Gabe として受けとることである、信仰とは実にかかる信受の事態であって、信念でもなければ信じ仰ぐことでもない。むしろ信交とこそ書きたいのである。それが一般に観念化しているのは残念な事実である。シラーがここで „Du mußt glauben" といったとき、「汝は信じなければならない」という意味なら、実はそれだけでは未だしなのである。„Du kannst nicht anders als glauben" の意であるなら、本ものとなる。「信じざるを得ない」という innere Notwendigkeit 内的必然性となったら、越ゆべからざる河を越えることが出来るのである。そのような innere Notwendigkeit の現実こそ **geistige Freiheit**（霊的自由）なのであって、それは kräftige Wirklichkeit（力強い現実）である。「信じなければならない」といって悲願的に追求し、精進し、憧憬する消息は sentimental-

iscsh である。**Nicht-anders-können,** innere Notwendigkeit は本願的な天来の迫力に迫られての事態であって、越在的なものが内在的な力に化体しての事態で、これが本当の自由である。これを naiv な現実 Naivität という。即ち信仰にも詩の場合とアナロギア的に **senimentalisch** なものと **naiv** なものと二種がある。前者は観念的な、また情感的な信仰であり、後者は素朴な霊的な信仰である。キリストの使徒たちの信仰は皆この naiv な霊的な信仰であった。現代は大方が sentimentalisch な信仰である。それゆえ **Re-reformation** 再宗教改革を必要とする期が来ている。新教徒たちが自らを evangelisch 福音的などといっても、真に evangelisch な者はあかつきの星の如しであろう。私は、その革新を目指して **Zurück zu dem apostolischen Glauben** 使徒的信仰への復帰！を叫ばざるを得ない。それは聖霊を宿すことによって天的な自由が動いている現実である。Vernunft を越えた Genie の魂における自由がこれとアナロギアである。

芸術と宗教

自然界は **müssen**（必然）の世界、道徳界は **sollen**（撰択 entweder=order）の世界、そして宗教会は **nicht-anders-können**（せざるを得ず）の世界、そのどれも法則（Gesetz）の世界である。面白いことに自然界と宗教界はアナロギアである。これがいずれも naiv の世界である。道徳界は sentimentalisch である。それは撰択の自由だからである。可能性（Möglichkeit）の世界であ

るからである。

自然が真理の現象界であるところから、自然を鏡とする美（芸術）の世界が、究極の真理（宗教）の世界と人間実存の道徳の世界との橋をなすものとシラーは見たわけである。そのことを詩の形で表現しているのが、さきにも触れた思想詩 „Die Künstler“ であり、美学論文 „Über die ästhetische Erziehung des Menschen“「人間の美的教育論」である。

美術家こそ、この美を身につけて、自然の如き芸術を創作して、真理、理想、完全、調和の世界へ人間を高める使命をもっている。このような芸術の道（芸道と申したいのだが）を論証し且つ実証せんとしたのがシラーの全美学論文であり、全創作であった。

„Die Künstler“（一七九八）の中から若干ここに引用しなければならない。

„Nur durch das Morgentor des Schönen
Drangst du in der Erkenntnis Land.“

„Was wir als Schönheit hier empfunden,
Wird einst als Wahrheit uns entgegengehn.“

の二句は明らかに美が現実から理想（真理・認識）への門であり、橋であることを語っている。

„Wie unter heilige Gewalt gegeben,
Empfangen sie (die Künstler) das reine Geisterleben,

Der Freiheit süßes Recht, zurück."

「聖なる（意志の）力の下に身をゆだねて
芸術家は純粋な霊的生命、
自由の美しき権能を受けもどす」

とは深い信仰の境地を語っている。こういう心境においてこそ、創造の力がはたらくのである。

„Lebendig regte sich des Wirkens süße Lust,
Die erste Schöpfung trat aus eurer Brust."

「活動のうましき欲求が活き活きと動いた、
汝らの胸から創造が初めて立ちあらわれた」。

„Mit euch, des Frühlings erster Pflanze,
Begann die seelenbildende Natur.
Mit euch, dem freud'gen Erntekranze,
Schließt die vollendende Natur."

芸術家は、その童話のおとずれを以て少年時代から人間を育み、美しい春の夢を展開してくれる。また芸術家は最高の真理を具体的に偉大な作品を以て表現して、あたかも秋の大収穫の如き

豊かな果をそこに提供して人間形成の最高段階を果たしてくれる。それは春秋の相を以て大自然が人間を育てているにも似ているから、シラーはこのように語ったのである。そのように美による教育を、かの「美的教育論」で論じた。

あそび

その中でシラーが強く語っている著しい箇所を次に引用して彼の最終的なねらいに耳をかたむけることにしよう。その第十四書簡に、「感性的衝動（**der sinnliche Trieb**）はその主観から、すべての自己活動と自由とを閉めだし、形式衝動（**Formtrieb**）はその主観から、すべての依存性を、すべての受動を閉め出す。だが自由の除外は物理的必然性であり、受動の除外は道徳的必然性である。それゆえ、この二様の衝動は心情（Gemüt）を強要する。前者は自然法則によって、後者は理性の法則によって、それゆえ遊戯衝動（**der Spieltrieb**）はその中に以上の二つの衝動が結合して、はたらいているので、心情を道徳的にと同時に物理的（肉体的）に強要するであろう。ところで、この遊戯衝動は、あらゆる偶然性を止揚するから、あらゆる強要をも止揚し、人間を物理的（肉体的）にも道徳的にも自由とならしめるであろう。」

これは実に興味ある言説で、Spiel という衝動が、physisch と moralisch との両面の必然性をもった衝動をうちにもちながら、これを aufheben（止揚）して、この両面を超克した自由の境

地のものであるという。このような Spieltrieb の相は、実は宗教的な無私の境地とアナロギア的なものである。それは天真な心の幼児のあそびのすがたと相通うものである。それは童心と申すもので、良寛和尚がそのような「あそび」の人であり、アッシジのフランシスがそのような托鉢僧であった。ゲーテの創作の Trieb がこの Spieltrieb であったのである。

彼は更にその第十五書簡の中で、感性的衝動の対象は生命であり、形式衝動の対象は形姿（Gestalt）である。それゆえ遊戯衝動の対象は「生ける形姿」（lebende Gestalt）である。そしてこのような遊戯衝動の対象こそ美である。という主旨のことを論じている。専ら肉体とか物質（Materie）であるのでもなく、専ら精神とか霊（Geist）でもない、両者の渾然たる人間の人間性の総和（Konsummation）としての美が、この遊戯衝動の対象である。理性はいう、「美は単なる生命でなく、また単なる形姿でもない、生ける形姿である」と。何となれば、美は人間に対して絶対的形式性（**Formalität**）と絶対的現実性（**Realität**）の二重の法則を書き与えるからである。以上のように、シラーは Spieltrieb の重要な性格をはっきりとうち出して、次の名言を吐いた。

„Der Mensch soll mit der Schönheit nur spielen,
Und er soll nur mit der Schönheit spielen."

人間は美を以て唯だあそぶべきである。
そして人間は美を以てのみあそぶべきである。

„Der Mensch spielt nur, wo er in voller Bedeutung des Wortes Mensch ist, Und er ist nur da ganz Mensch, wo er spielt."

「人間は、言葉の全き意味において人間であるときにおいてのみあそぶものである。そして人間はあそぶときにのみ全く人間である。」老子の大道とか無為の思想がこれに照応する。

人間がおのずから人間らしくある、たくまざるすがた、無目的にして合目的的であり、無為にして有為なる在り方。このような paradox な、ひびきをもった在り方。運命と義務の二重の真剣さに対しても無関心の如くして深く関わっているすがた。シラーの「美的教育論」という命題そのものがもつ逆説性。即ち教えずして教えとなる教育が美的教育なのであるから、このような境地は正に高次な宗教的境地とアナロギアである。文学的作品が、ある Idee を読者に吹きこもうとしたら、勧善懲悪を意図したら、それは第一級の作品ではない。例えばゲーテが全生涯を賭けて投げ出した Faust 全巻は、ゲーテ自らも言っているごとく、ある Idee をたくらんだような小さなものではない、美的現実である。あそびである。しかし、このあそびは、いわゆる遊戯ではない。全人をうち投じた態勢である。Idee や Ism に凝った真剣さよりも深い真実をもった全人的なすがたであり、全宇宙的な投影である。

無心に照らす太陽の光、無心に降る春雨、それは善人にも悪人にも一視同仁に与えられる陽光であり、慈雨である。これが自然界の「あそび」の相である。これを見てキリストにこう言っ

た！「天の父はその日を悪しき者のうえにも、善き者のうえにも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからぬ者にも降らせなさる。だから、おまえたちも天の父の完全なように、完全であれよ！」と。

宗教的な「あそび」の心がこれである。相対的な善意を超越して善悪を包み、これを絶対的な善に救済する力をもっている。キリストは、「自分は何も出来ない」といった。その無為者が一切を為した。それは、神のふところの中に「あそぶ」全的の在り方であったから、無即無限となり、無限の神的な力が、イエスの全存在からあふれて来たからである。これを私は**無的実存**といっている。さきにも触れたように。

かくてシラーは実はその短命の未完成的生涯において、「美」の世界において完成的心境に到達したのであった。彼の美学論は全体として有機体に驚くべき内容をもっている。彼の「自由」も、この「**あそび**」において極まったわけである。この「**あそび**」こそ即自然のすがたであって、いわゆる Nachahmung などではない。およそ真理は「**即**」という消息においてのみ把握され、体現されるのである。現象即本体、美即真という消息、„lebende Getalt“ が即ち Wahrheit なのである。イエスが「我を見し者は父を見たるなり」と喝破したとき、即身即神の宗教的真理の究極が示されたのであった。

かくて「あそび」は自由の真のすがたであり、「あそび」の美に真の人間形成の道がある。そ

の意味で美的自由が宗教的自由とアナロギアをもち、宗教的自由が愛と救済の力をもっている如く、美的自由は調和と完成の相を以て人を祝福の境涯へと誘うのである。

シラーはその Distichon,（二行詩）„Mein Glaube“（わが信仰）において

„Welche Religion ich bekenne?—Keine von allen,
Die du mir nennst —und warum keine? **Aus Religion.**“

「どの宗教を私は告白するか——君が私に名ざす総ての宗教のどれでもない——ではなぜどれでもないのか、**宗教本来のゆえに**」といっているが、とかく宗教の宗派的現状に飽き飽きしているシラーであったから、いわゆるキリスト教も御免だと思ったに相違ない。真の宗教は、そんなものでないはずだ。そこで、自分はどの現実の konfessionelle Religion 信条告白的宗教をも bekennen 告白するわけにはゆかぬ。何故かといえば、それは Aus echter Religion!（本当の宗教から）というのが、この Distichon の真意である。ゲーテの言葉を籍りれば Aus Ur-Religion（根源宗教）といった表現となろう。私に言わせれば Aus Ur-Evangelium（原始福音）と申したいところである。そのシラーがゲーテへの手紙の中でキリスト教を „die einzige ästhetische Religion“「唯一の美的宗教」といっているから、彼が彼らしいキリスト教把握をしていたことはいうまでもない。ケーベル博士もこう言っている：

„Das Spiel ist die erste und letzte Betätigung der menschlichen Freiheit: der heitere

Ernst und die ernste Heiterkeit des willenlosen Subjekts der Erkenntnis, die höchste Reife des Geistes…die spielende Religion ist demnach die auf Freiheit und Liebe beruhende, ein freundschaftliches, intimes, kindliches Verhältnis zu Gott.“

「あそびは人間的自由の始めにして終りになる活動である。認識の無意志的主体の明朗なまじめさであり、まじめな明朗さである。霊の最高の円熟である。…あそびの宗教はそれ故に自由と愛に根ざしている宗教で、神に対する友情あつい、親密な、子供らしい関係である」さすがはケーベルさんの言葉だ。

「あそび」がもたらす **Harmonie** や **Vollkommenheit** の境地は若きシラーが既に悲願としていたことは、彼の „philosophische Briefe“ や „Kallias-Briefe“ に告白されている。この拙論の紙数も既に限界を越えているので、それらを引用することが出来ないけれども、一、二を掲げれば、

„Vollkommenheit in der Natur ist keine Eigenschaft der Materie, sondern der Geister. Alle Geister sind glücklich durch ihre Vollkommenheit.“ „Das Vollkommene, dargestellt mit Freiheit, wird sogleich in das Schöne verwandelt. Vollkommen ist ein Gegenstand, wenn alles Mannigfaltige an ihm zur Einheit seines Begriffs übereinstimmt; schön ist er, wenn seine Vollkommenheit als Natur erscheint.“

「自然における完全性は物質の性質ではなく、霊的存在なのである。あらゆる霊的存在はその完全性によって幸である。」「自由を以て表現された完全なるものは直ちに美に化せられる。対象におけるあらゆる多様がその対象の概念の全一性と一致した場合に、その対象は完全である。その完全性が自然として現われた場合にその対象は美しい。」

そしてこのような完全性というものは「あそび」の自由を身につけたとき、いかなる現実の不完全な相の中にも完全性が内在し得るのである。不完全における完全という消息である。このような完全性は聖霊がもっている。それゆえ聖霊のあるところに自由あり、完全性ありなのである。そこで最後に引用したいのは、かの "Die Künstler" の最後の節の中の一連の句である。

" Was schöne Seelen schön empfangen,
Muß trefflich und volkommen sein.
Erhebet euch mit kühnem Flügel
Hoch über euren Zeitenlauf ;
Wie sich in sieben milden Strahlen
Der weiße Schimmer lieblich bricht,
Wie sieben Regenbogenstrahlen
Zerrinnen in das weiße Licht,

So spielt in tausendfacher Klarheit
Bezubernd um den trunk'nen Blick,
So fließt in einen Bund der Wahrheit,
In einen Strom des Lichts zurück."

七彩の虹霓も白光が分光して生じたように、また白光に帰一する彩光である。根源の真理も多種多様の美に現象するが、それが再び真理の国に還元してゆく。そのような相に Harmonie（調和）と Vollkommenheit（完全性）の消息がうかがわれるが、人間界における多様性をそのような Harmonie たらしめるためには、同質の宗教的、「自由」が「愛」となって交流していなければならない。その相が美的な「あそび」であり、「美」である。そこには歓喜があふれる。かの „An die Freude"（一七八五）の一句：

„Seid umschlungen, Millionen!
Diesen Kuß der ganzen Welt!
Brüder—überm Sternenzelt
Muß ein lieber Vater wohnen."

「幾百万の人々よ、相抱けよや！
この接吻を全世界に及ぼせよ！

同胞よ――星の幕屋の彼方には
愛の父神ぞ在ますなる」。
Schiller-Beethoven のたましいの祈りがこもる。この句は、Freiheit が完全に Liebe に花咲いた人類への熱愛の叫びである。

主な参考文献

Luther-Bibel
Biblia Hebraica (Rud. Kittel)
Septuaginta (LXX)
Novum Testamentum Graece (Eberhard Nestle)
Luther : Von der Freiheit eines Christenmenschen
Luther : Vorrede zum Brief des Paulus an die Römer
Luther : Vom unfreien Willen (Otto Schumcher)
Luther : Römerbriefvorlesung
Luther : Gestalt und Tat (Gerhard Ritter)
佐藤繁彦：「ルッターの根本思想」
Luther im Lichte der neueren Forschung (Boehmer)

Studien zu Luthers Theologie (Regin Prenter)
Luther, Einführung in sein Denken (Gerhard Ebeling)
Luther (Karl Holl)
Schillers sämsltiche Werke, 12 Bde (Reclam)
Friedrich Schiller, 3 Bde (Hanser)
Schiller, 4 Bde (Insel)
Friedrich Schillers Briefe (Hanser)
Schillers Gedichte (L. Bellermann)
Schiller als Philosoph (Kuno Fischer)
Schiller und sein Kreis (Fambach)
Schillers Geschichtsphilosophie (Arnold Littmann)
Schiller (Kühnemann)
Die Religion unserer Klassiker (Karl Sell)
Kleine Schriften (R. Koebel)
Der Dichter Friedrich Schiller (Gerhard Storz)
Kant: Kritik der Urteilskraft
新岡良三・「シラーと希臘悲劇」
Philosophie der Dichter (Käte Hamburger)
Die Philosophie unserer Klassiker (K. Vorländer)

——以　上——

三　ルターとゲーテ

京都会館に於ける講演の要旨　一九八三年六月四日

私のルターとゲーテ

ドイツが生んだ偉大な魂を二人挙げよと言われるならば、私は文句なしにルター（一四八三・一一・一〇―一五四六・二・一八）とゲーテ（一七四九・八・二八―一八三二・三・二二）を挙げます。個人的なおはなしをするなら、ルターに対する強い関心がよび起こされたのは、私が旧制水戸高校時代にわが国のルター研究の第一人者たる佐藤繁彦先生が水高の柔道場で、ルター講演をされた時に始まります。先生の真正面、最前列、最短距離に坐って拝聴しました。水戸の本屋で大判のルター訳独乙語聖書を買って親しみました。不思議なことにその買った日が十一月十日、ルターの誕生日でした。東大独文科の学生になってからは、特にカルル・ホルの名著『ルター』に喰いつきました。またその後佐藤先生の『ルターの根本思想』という神学論文を読んで、先生の情熱あ

ふるる神学に感激し、あたまの神学ではなく、たましいの神学への志を抱くに至りました。ルター自身が正にそれであったのです。

一方東大独乙文学科の木村謹治教授の『若きゲーテ』という講義に列席し、ゲーテの偉大さを知り、『ファウスト』を読み始めました。所謂正統的なキリスト者たちはゲーテに十字架の信仰がないというので気ぎらいしますが、そんな判断でゲーテという魂を見たのでは躓くわけです。

三位一体の神・キリスト・聖霊を観念的にではなくパウロと共に全存在を以て体感し、そこに生きていたルターを三角形を以て表わすとすれば、神・大自然・我を融合一如の体感に於て生きていたゲーテは三角形の三点を通る円形を以って表わすのが応わしいと思います。

「ルターとゲーテ」という本日の演題に於て、私はルターの本質とは何か、ゲーテの本質は何かということをたずねてみたいのです。そしてそれは実はどちらも言では言い難きものであること、それは無限無量な内実のものであること、それは何故であるかを問うてみて、しかもそれは我々と深い関わりのあることであるのを指摘し、現代のキリスト教界はルターの宗教改革の精神を以て更に新しく突き抜けるべきこと、現代の文化世界はゲーテの精神を以て大平和を来らすべき終末的なところに来ていることを警告したいのであります。その意味に於て、ルターとゲーテの両者は現代に極めて必要な二大精神で、この両者を渾然として把握することを要します。

ルターの生涯

ルターは一四八三年十一月十日、ドイツの中部テューリンゲン地方の一角アイスレーベンに農家の子として生まれました。今年は丁度生誕五百年に当りますので、私はこの間五月十七日から二十八日にかけて「ルターの跡を訪ねて」という旅行団の一員として、始めて主として東ドイツを旅し、ルターのアイスレーベン（生地にして死地）、マンスフェルト（幼年期）、アイゼナハ（少年期）、エルフルト（青年期）、ヴァルトブルク（新約聖書翻訳地）、ヴィッテンベルク（大学教授時代）等、更にゲーテのワイマール、バッハのライプッィヒ等を歴訪しました。ここに旅のはなしをするのではないですが、ルターは彼の劇的な旅路に於て真理探求と福音の戦を全存在的に貫き一五四六年に凱旋の死を遂げました。

信仰義認

神の前に如何にして自分は義たり得るかの問題をたましいの死生の問題として取っ組みました。彼は修道院生活に於て、逆説的にこの問題を解決しました。即ち、難行苦行の行為によって神に義とされるのではなく、義人キリストの十字架の贖罪を全存在を以て信受して、キリストの義を賜ることを発見したのでした。パウロのロマ書第三章二十一節から三十一節の信仰の本義をルターが全的に信受したところに宗教改革の土台が礎えられたのです。そしてロマ書一・一七の「神の義はその福音の中に顕れ、信仰より出でて信仰に進ましむ。録して『義人は信仰によりて生くべし』とあるが如し」が根本命題となったわけです。義とは何か。その歴史的な根拠はパウ

ロが指摘している如く、「アブラム、エホバを信ず、エホバこれを彼の義となし給へり」（創世記一五・六）で、アブラムが無条件にエホバの言に対して「アーメン」（然り、真なり）と応えたら、エホバはその全存在的な信仰を義としました。それでパウロはキリストを信ずる「信仰によって義とされる」ことを告白し、ロマ書、ガラテヤ書で徹底的に義の神学を展開しました。それを新たに体験して告白したのがルターで、その戦が宗教改革となったわけです。

「汝ら回帰せよ」

この短時間に多くを語ることはできませんので、九十五条提題の第一条と、『キリスト者の自由に就て』と『ロマ書の序文』のいくつかの言葉によってルターの本質に触れたいと思います。

ローマ教皇庁発売の免罪符売買の行列が一五一七年春ヴィッテンベルクをさわがしたので、ルターはついに十月三十一日に「免罪符の効力を明かにするための論争」と題してヴィッテンベルクの城教会の門扉に九十五ヶ条の提題を掲げました。その第一条は

「我らの主にして師なるイエス・キリストが『汝ら悔改めよ…』と言い給うとき、彼は信徒の全生涯が悔改めであるべきことを欲し給うた」

というのであった。これは千古の名言、人類の歴史の終末まで掲げられるべき警告であります。ただ「悔改め」という表現が、どうももの足りないのです。キリストはヘブライ語で「シューブー」と言われたに相違ないです。これは「汝ら立ち帰れ！」なのです。全存在で神・キリス

トに「立ち帰る」ことが本当の在り方と思います。ルターもドイツ語訳としては「ケーレット・ウム」とすべきでした。これは方向転換して帰ってゆく」という意味の原語ですから、「汝ら回帰せよ！」と訳すべきです。預言者たちもしきりにこの「シューブー」を唱えています。回帰してキリストの中に帰入することが一番本質的な福音的な在り方です。二十世紀末の現在、全世界の人々がこの警告に耳傾けるべきです。特に大国の為政者たちが。日本の為政者たちが！

キリスト者の自由

次に注目したいルターの言は、『キリスト者の自由に就て』（一五二〇）の冒頭の二命題です。

「キリスト者は万物の上に自由の主であって、何ぴとにも隷属しない。キリスト者は、万物に奉仕する僕であって、何ぴとにも隷属する」

二律背反の如きこの二命題は何を意味するかを簡単に説明します。第一命題は、神・キリスト、即ち絶対者には無条件に従う僕であるから、相対的人間には隷属しない。これはキリスト者の信仰的なすがたである。そうであればこそ第二命題が必然出てくる。即ち第一命題によってキリストの愛を信受しているから、その愛の力で万人に奉仕する。隣人を助ける。これが自主的な自由な僕のすがたである。二律背反ではなくして不可離の必然関係の二命題です。キリストの十字架で我執という罪から解放されているから聖霊の愛の力で隣人に奉仕する、いろいろな人々を助け救う。この二命題はパウロの「われ凡ての人に対して自主の者なれど、更に多くの人を得んため

に、自ら凡ての人の奴隷となれり」（コリント前書九・一九）に因ったものであることはルター自身註しているのです。

ただルターは今私が申したように十字架と聖霊に因ることを明記していないのが残念です。

キリストの義に貫かれ愛に燃える

第一命題は縦線、第二命題は横線、第一命題は義の人、第二命題は愛の人、第一は王者（預言者）、第二は祭司といった特質をもつわけです。この両面を兼備してこそまことのキリスト者というわけです。そしてルターは、この論説の中で次のように告白しているから、注目して下さい。「鉄が火と結合すると火の如く赫々と燃えるように、魂も神の言を受けると神の言の如く成る」「信仰は魂を神の言と同質のものにする」「信仰は魂をキリストと結合させる。それは恰も新婦が新郎と結婚によって一体となるように。換言すればキリストと魂は一体となるのだ」。ルターの信仰は決して今の一般のキリスト者のように観念的ではありません。

信仰は力あり

彼はまた『ロマ書への序言』に於て、「まことの信仰は、我々の中に於ける神の業であって、我々を変化させて神から新生させる。そして旧きアダム（生来の人間）を殺し、その心も、情感も、意思も、その他あらゆる能力に於て全く別人にする、しかも聖霊を伴うものである。おお、信仰とは何と活き活きとした、能動的な、活動的な、力強い事態ではないか。だから絶間なく善

きことを行わないではいられないのである。」信仰を強調したパウロがあれほど活動的であったと同様、ルターも「信仰のみ」と言いながら全く活動的な生涯を貫いた。ルターに於ては神の言と聖霊は不可分の事態であったことは、ルターが聖書の言から直ちに霊的な力を受けとっていたことによって瞭かです。

新宗教改革の焦点

要之、本当に十字架を体受すれば、必ず聖霊が臨むのに、十字架をただ観念的に強調してみたところで一向み霊のはたらきがありません。信仰が硬化してパリサイになるのは、み霊が内住していないからです。私は本当の意味で、ルターに回帰せよ、パウロに回帰せよ。と申したいです。それは言の最も深い意味でキリスト直結とならんためです。

「我キリストと偕に十字架せられたり、我れ最早生くるに非ず、〔み霊の〕キリストわが衷に生き給うなり」（ガラテヤ書二・二〇）。これこそが新宗教改革の焦点たるべき聖句であります。

キリストの聖霊の愛は最大の力なり

終りにルターが『キリスト者の自由』の終結で叫んでいる言に耳傾けていただきたい。

「キリスト者は自己自身の中に生きているのではない。キリストの中に生きているのだ。それゆえ愛によって隣人の中に生きている。また信仰によっておのれを越えて神の中に行き、彼は再び神から愛によっておのれの下にやってくる〔即ち僕のすがたになる〕。しかもつねに神の中に、神

の愛の中に留っている。それはキリストがヨハネ伝一・五一で、「汝らは天ひらけて人の子の上に神の使たちの昇り降りをするのを見ん」と言われた通りだ。見よ、これこそは義しい、霊的な、キリスト者の自由で、心をあらゆる罪、律法、誡命から自由にするもので、あらゆる他の自由を立ち越えたものであること、あたかも天が地より高いのと同じである。」

キリストと一体となって、天地を自由に馳せめぐり、人々に福音を頒ち、人々を愛を以て助ける炎の如き魂でルターはあった。実に旺なる哉である。現代の民主主義とその自由とか自主は、ルターのこの自主と自由に回帰しないならばまことに禍なる哉である。特に日本の教育界の現状を見るとき、まことに寒心に耐えない。この真理の炎が魂に点じたならば、各人が勇敢に実践、実証、体言するより他に道はない。

青年よ、キリストに在って、勇敢なれ！

ゲーテと聖書

さてこんどは、十八世紀の半から十九世紀にかけての黄金時代の中心人物たるゲーテの本質に触れることにします。

ルターは全生涯を聖書にうち込み、聖書を以て時代の宗教と劇的な戦をしました。そして彼の聖書翻訳は、祈りを以てする彼の全存在的告白でありました。ルターの心血を濺いだ聖書、聖霊のひびきの深いドイツ語の聖書、これをまた生涯の最愛の書として全存在を以て読み、これを自

由にわが有とし、おのが詩作の源泉としたのがゲーテであります。ゲーテは聖書を「あらゆる本の中の本」と言いました。「我らの表現する一切のものは告白である」とはゲーテの言ですが、ゲーテはあたまでものを言わず、からだで詩作しました。からだ、全存在でものを見、ものを考え、ものを聞き、からだで書きました。これを全人的在り方と言います。

『若きウェルテルのなやみ』の一くだり

彼の体験小説の処女作は、かの『若きウェルテルのなやみ』で、二十五歳の青年ゲーテはこれを一気呵成に、四週間で書きました。泉の迸るが如き筆致です。その五月十日の一節をまず紹介します。「茎の間の小さな世界のうごめきを、長虫や羽虫の無数の究め難い形相を心に身近に感じ、そして我々をその似姿に創りなさった全能者の現在を感じ、我々を永遠の歓喜の中に漂わせつつ荷い且つ保ち給う一切を愛する者の息吹を感ずる——わが友よ、さてそこで僕の眼のまわりが黄昏れて、周囲の世界も天空も全く僕のたましいの中に、恋人の姿のように憩ろうとき、僕はしばしばあこがれの念にかられて思う、ああ、これを再現できればいいなあ、紙面に息吹き込めればいいなあ、かくも満々とお前の中にあたたかく生きているものを！お前の魂が無限の神の鏡であるようにそれがお前の魂の鏡となるように再現したいと念う」（私訳）この一節の中に、全ゲーテの本質が双葉の姿で現われています。

神・自然・我の一如

彼は自然を愛し、おのがからだが自然の一部であるかの如く自然と融合することのできる魂であった。また創世紀第一章にある如く、全能者たる神の似姿に創造られている人間、即ち人間の本質は神と同質的であるという大乗的な自覚を彼は死に到るまで有っていた。幼児の如き信頼深い魂で彼はあった。それがつねにあやまりなき罪なき現実であるなどと楽観しているのでは勿論ないが、原型と原質はそうだと信じているゲーテでありました。その息吹が自然の中に浸透し、我々の存在を荷い、保つ力ある愛の実在者の息吹をゲーテは体感するたましいであった。これも全生涯に亘って易らぬ消息であったのです。また自然界と融合するやすらいを恋人の心の中へのやすらいと類比して感じている。また魂が神の鏡であるように芸術的表現が魂の鏡でありたいと願っている。要するに神―自然―女性―芸術的表現（詩作）―が生命的、有機体的、劇的な展開に於て連関しています。

体感が一切

それらはすべて体感という事態に於て体験され、告白的表現を以て創作活動がなされてゆくのでした。であるからゲーテは

"Gefühl ist alles"（3456）「体感が一切だ」と『ファウスト』の劇の中で、グレトヘンとの宗教問答のくだりで告白しているのです。所謂神学的な、信仰箇条的な、形式的礼拝の、宗派根性の、パリサイ的な、観念的な、そういった宗教的事態を嫌い、神・自然を現実に体感して生きる

在り方をこそ彼は宗教的となしていいました。

牧師の手紙

彼が二十四歳のとき書いた「牧師の手紙」という彼の信仰告白の中から引用すれば、「われらの牧師が最早直接的な啓示について何ら知るところのないのは悲しむべきであり、聖書を註解書から理解しようとするキリスト者は悲しむべきである。」「聖書の神聖さを感じ得ない者にそれを説明し得ようとは思えない」。「神と愛とは同義である」。「兄弟よ、わが信仰の確実性にも優して神に感謝すべき何ごともない」。「私が信ずるのは私の責任ではない」。

このような言を見ても、ゲーテという人はいかに全身で聖書を体受しているかがわかる。神の愛に圧倒され、浸透されているのでなければ、こんな言葉は吐けないのです。信仰も自分で信ずるといった信念的なものではない、神の愛を受けてやむにやまれずして信ぜざるを得ないというもの、神の愛への必然の応答であるから、自発でもなく責任でもない、という。このような告白は『ファウスト』の中にも出てくる。ルターが「信仰は神のわざである」と言ったのと相照応する。それ自体がドラマである聖書をゲーテは正に身読していたのでした。

聖書に限らず、あらゆる対象に即して、それを内観するものの見方、そういう「観る人」でゲーテはありました。本質へと観入し、直観する人、「根源現象」の見える人であって、科学のあらゆる分野に於て深い洞察をしています。

ミクロコスモス

であるので彼は大宇宙（マクロコスモス）を凝集的に投影している小宇宙（ミクロコスモス）といったたましいの人でした。彼の生涯的告白小説『ウィルヘルム・マイスター』も、全生涯的劇詩『ファウスト』に至っては、正に歴史と宇宙が、全生涯の体験の爐を通してくりひろげられ、終末の世界、神の国への預言のひびきをもっています。

根源の愛

「もしも神が鳥にその仔鳥たちに対してこの全能的本能（愛）を附与していないとするなら、また同じことが全自然の生きとし生けるものに行き通っていないとするなら、世界（宇宙）は存続し得ないであろう。そのように神の力はいたるところに浸透し、永遠の愛は到るところに作用しているのです」エッカーマン『ゲーテとの対話』（一八三一年五月二十九日、私訳）。

ゲーテに於ては、一切は神の根源的な愛に因る。それが恋愛であれ、兄弟姉妹愛であれ、親子愛であれ、夫婦愛であれ、友愛であれ、犠牲的な愛であれ、神の愛のメタモルフォーゼ（変貌）であるに過ぎない。ただ自己愛だけは一切の罪の根であるから、これとは戦わねばならないとした。『詩と真実』という自伝の中で、彼はこう告白している、「すべてのことにつけて無私であること、就中愛と友情に於て最も無私であること、これは私の最大の願いであり、主義であり、実践でもあった。だから『私が君を愛しても、君の知ったことではない』というあの大胆な後年

の言葉は、全く私の心の底からの言葉なのである」本当の愛（リーベ）は相手の愛（ゲーゲンリーベ）を求めない、とはスピノーザの心境でもあった。「鮑の片想い」が本ものということになる。神様はそのような愛で我々をゆるしておられるにちがいないのです。無者キリストは正にこのような神の愛で我々の罪、自我愛を十字架で贖われたのでした。

「神の愛に生き動き、在るなり」

「私は四福音書を全く真正（エヒト）なものと見なしている。なぜなら、これらの中にはキリストの人格から発し、凡そこの世に出現したいかなる神的なものも及ばないほどの神性の高貴な反照がはたらいているからである。私の本性にキリストを拝跪する畏敬の念ありやと問う人があるなら、私は全くその通り！　と答える。私はキリストを道徳の最高原理の神的啓示として、彼の前に拝跪する」（一八三二・三・一一）。ゲーテはこの言葉のあとで太陽に対しても同様な畏敬の念をもっていることを告白してこう言った、「私は太陽に於て、神の光と神の生産的な力に拝跪する。その光と力によってのみ我々は生き、動き、在るのだ、またあらゆる植物も我々と共にそうなのだ」と。ゲーテはこの言葉の中に「生き、動き、在るなり」（行伝一七・二八）を自分の告白として語り出でています。ゲーテは全くこのような魂でした。霊界の太陽たるキリストと自然界の太陽を心身の源泉とし源光としていました。ゲーテはこの言のすぐあとで、「パウロが、み霊を消すな、といったではないか。」とか、「ルターとその宗教改革に我々はどれほど恩恵を蒙っ

ているか知れない」と告白しています。

ゲーテが『ファウスト』の第二部の結句として連ねた「神秘の合唱」の詩句は萬代の名句ですからここに引用して終りとします。（一二一〇四―一二一一一、私訳）

「過ぎゆくものなべて　　名状しがたきもの
映像にすぎず。　　ここに成就せり。
満ち足らざりしもの　　永遠の女性
ここに円現し、　　我らを引きあぐ」

ゲーテはこの結句で地上の悲願が天界で成就する終末的現実、黙示録の新天新地の到来を唱っている。地上のものや出来ごとは、本体界、聖書の示す黙示録的天界及地獄界の映像に過ぎない。ところで真善美聖にしてすぎゆきしもの、未完成のもの、表現しきれないもの、それらが完成し、円現し、成就するのは新天新地の神の国に於てである。しかし、そのような預言的現実を地上で円現した人がある。それがナザレのイエスでありました。

であるので、このキリストの中に霊的に投身し、キリストと一如の境地に入ると、ルターをしてルターたらしめたもの、ゲーテをしてゲーテたらしめたものが、キリストの光で見えてくるのです。つかめてくるのです。キリストのみ霊、聖霊は、愛であり、光であり、生命であり、明智であるからであります。

ルターもゲーテも聖書を本当に、夫々の実存を以て自分のものにしました。聖書は無限無量な真理の世界を内包して、溢れさせているのです。だから、それがルターに於ては宗教改革と爆発し、真の自由の世界へと展開しました。何びとも聖書を全存在を以てわがものとすれば、その人らしき天下一品が出現するのです。体現するのです。それが学問であれ、経済であれ、家事であれ、教育であれ、その他何であっても可いのです。そのように聖書を喰べた人、そして体現したのがルターであり、ゲーテでありました。

『ファウスト』の結句に、「永遠の女性、われを引きあぐ」とはどこへ？　私は次の句をつけ加えました。

「愛と歓喜を以て、神聖な太陽へ」と。

神聖な太陽とは神のことです。ドイツ語の「ゾンネ」(太陽)を以て始まっているこの大劇詩の最後の語も「ゾンネ」にしたのです。ゲーテが天界でそうだ！…と。無限の余韻をのこしてこの講演を終ります。

〔附言〕　ゲーテについては拙著第二巻『芸術のたましい』を是非お読み下さい。

●著者略歴

一九〇四年東京生れ。高師付属小学・中学出身。旧制水戸高校、東大文学部独乙文学科卒（一九二九年春）。東幼・陸士・陸大教授歴任。終戦後一高・東大教授。その間断続的に昭和医専・医大、早大、東歯大等の講師。一九六一―六二年西独ハンブルク大学の日本学交換教授。東大停年退職後、独協大学教授兼独協中学・高校第十四代校長。一九七九年春、五十年間の教職を退く。西ドイツ政府から第一級功労十字章を授かる。現独協大学名誉教授。

内面史、水高・東大時代から内村鑑三・藤井武・塚本虎二の聖書集会に相前後して列席。一九四〇年秋から武蔵野市の自宅で日曜聖書講筵を開いて今日に至る。一九五〇年秋、十字架・聖霊の本格的体験以来、使徒的次元の原始キリスト道を唱道し、日本キリスト召団を結成し、その代表者となる。

著作活動、嘗て『旧約知識』誌、『キリスト教常識』誌の同人。後に『曠野の愛』誌、今は『曠愛新書』及び『エン・クリスト』誌の主筆。そしてこの『小池辰雄著作集』の著者。訳書は、白水社版の『眠られぬ夜のために』（ヒルティ著作集第四巻）、『神と人間の実存的弁証法』（ベルジャーエフ著作集第六巻）等。

©一九八三

小池辰雄著作集　第七巻

聖書の人ルター

初版印刷　一九八四年二月二十日
初版発行　一九八四年二月二十五日

著者　小池辰雄

発行　小池辰雄著作刊行会
東京都武蔵野市吉祥寺東町
四ノ一五ノ一九（〒一八〇）
TEL　〇四二二(21)三四三三
（振替）　東京五―六一三一八

（責任者）奥田昌道

印刷・製本　中央精版印刷株式会社

装幀　前野洋一

頒価　三五〇〇円（送料不要）

●小池辰雄著作集（全十二巻）

改正頒価、各巻三五〇〇円（送料不要）、分買自由。

＊印は既刊

＊第一巻　無者キリスト（一九七五）　（三版）
＊第二巻　芸術のたましい（一九七六）　（再版）
＊第三巻　無の神学（一九八二春）　（初版）
＊第四巻　詩篇珠玉集（一九八〇）　（再版）
＊第五巻　百世の師ヒルティー（一九七七）　（再版）
＊第六巻　随想集（一九八二暮）　（再刊）
＊第七巻　聖書の人ルター（一九八三）
第八巻　旧約聖書抜粋（一九八四）
第九巻　新約聖書抜粋（一九八五）
第十巻　随筆集（一九八六）
第十一巻　詩歌集（一九八七）
第十二巻　一日千年（一九八八）

口座番号	東京5―61318
加入者名	小池辰雄著作刊行会

●申込みは郵便振替にて